

広島市安佐南区山本七丁目所在

寺山遺跡 発掘調査報告

1997・3

監修 広島市歴史科学教育事業団



第1号住居跡屋根材出土状況



第3号古墳主体部内遺物出土状況

はしがき

太田川が形成したデルタ上にひろがる広島市旧市街地の北西部に隣接する安佐南区紙園地区は、その立地条件から他の周辺地域に先駆けて早くから団地など住宅地の造成が相次いで行われベッドタウンとして機能してきました。一方当地域は三角州の形成する以前には海岸線に近接する、良好な居住環境にあることから、埋蔵文化財の多い地域のひとつでもあります。そのため団地造成などとともに、これまで多くの遺跡が発見され、調査されてきました。

今回報告いたします寺山遺跡も、団地造成工事に伴って消滅することとなり、記録保存の措置をとることになったため、発掘調査を実施したものです。

調査の結果、弥生時代における住居跡、土坑、掘立柱建物跡、土器棺墓などと古墳時代における有力者の墓である古墳などが確認され、本遺跡は弥生時代には集落として、また古墳時代では墓地として利用された場所であったことが明らかになりました。また、土器・石器・鉄器などの遺物が出土し、弥生時代ならびに古墳時代におけるこの地域の人々の生活を知るうえで、貴重な資料を得ることができました。

この調査報告書が地域の歴史を学ぶための資料として活用されるとともに、また郷土にたい

する理解と愛着を深めていただくことに役立てば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を進めるにあたり、御指導・御助言をいただきました諸先生方ならびに御協力いただきました多くの方々、長期間発掘作業に従事していただいた調査補助員の皆様には心からお礼申し上げます。

平成9年3月

財團法人広島市歴史科学教育事業団

例　　言

1. 本報告書は、広島市安佐南区山本七丁目における祇園山本地区宅地造成計画事業に伴い、平成6年度から平成7年度に実施した寺山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、東亜地所株式会社から委託を受け、財團法人広島市歴史科学教育事業団文化財課が実施した。
3. 本報告書の執筆は、1, 3-2・3, 4-2を高下洋一が、2, 3-1, 4-1を村田亜紀夫がそれぞれ行い、高下が編集した。
4. 遺構の実測および写真撮影は、高下・村田・吉富紀子・三好愛が分担して行った。
5. 遺物の実測および写真撮影、また遺構・遺物の製図は、高下・村田・荒川正己・岡野孝子・吉富が分担して行った。
6. 本報告書の挿図等に使用した遺構表示記号は次のとおりである。
SB：掘立柱建物跡、SH：堅穴式住居跡、SP：土器棺墓、SK：土坑、SX：テラス状遺構、
SS：石敷状遺構、MT：古墳、ST：埋葬主体、SD：溝状遺構
7. 本報告書に掲載した航空写真的撮影は、スタジオ・ユニに委託した。
8. 炭化材の樹種同定及び炭化植物質の種類の同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
9. 第1図に使用した地図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1の地形図（広島）を使用した。
10. 第2図に使用した地図は、広島市発行の2,500分の1の広島市平面図（L-8）を使用した。
11. 本遺跡名は、平成2年3月広島市教育委員会発行の『広島市遺跡分布地図』によれば、光見寺裏遺跡として周知されているが、字名をとって寺山遺跡と改称して使用することをことわっておきたい。

目 次

1 はじめに	1
2 位置と環境	3
3 遺構と遺物	12
4まとめ	129

表 目 次

第1表 遺物観察表(1) 弥生土器	39
第2表 遺物観察表(2) 土師器・須恵器	107
第3表 遺物観察表(3) 鉄器	112
第4表 遺物観察表(4) ガラス小玉	115

揮 図 目 次

第1図 周辺主要遺跡分布図	4
第2図 遺跡周辺の地形図(1)	8
第3図 遺跡周辺の地形図(2)	9
第4図 遺構配置図	10
第5図 第1号住居跡実測図	13
第6図 第2号住居跡実測図	16
第7図 第3号・第4号住居跡実測図	19
第8図 掘立穴跡群実測図	21
第9図 第1号掘立柱建物跡実測図	22
第10図 第1号土坑実測図	23
第11図 第2号土坑実測図	24
第12図 第3号土坑実測図	24
第13図 第1号・第2号土器植墓実測図(1)	25
第14図 第1号・第2号土器植墓実測図(2)	26
第15図 第1号テラス状遺構実測図	27
第16図 第2号テラス状遺構実測図(1)	31
第17図 第2号テラス状遺構実測図(2)	30
第18図 第3号テラス状遺構実測図	33
第19図 第4号テラス状遺構実測図	35
第20図 石敷状遺構実測図	35
第21図 石敷状遺構土器群実測図	36
第22図 遺跡内出土遺物(1)	47
第23図 遺跡内出土遺物(2)	48
第24図 遺跡内出土遺物(3)	49
第25図 遺跡内出土遺物(4)	50
第26図 遺跡内出土遺物(5)	51
第27図 遺跡内出土遺物(6)	52
第28図 遺跡内出土遺物(7)	53
第29図 遺跡内出土遺物(8)	54
第30図 遺跡内出土遺物(9)	55
第31図 遺跡内出土遺物(10)	56
第32図 遺跡内出土遺物(11)	57
第33図 遺跡内出土遺物(12)	58
第34図 遺跡内出土遺物(13)	59
第35図 遺跡内出土遺物(14)	60
第36図 第1号古墳実測図(調査前)	61
第37図 第1号古墳実測図(調査後)	62
第38図 第1号古墳墳丘断面図	63
第39図 第1号古墳第1主体実測図	64
第40図 第1号古墳第2主体実測図	65
第41図 第2号古墳実測図(調査前・後)	67
第42図 第2号古墳墳丘断面図	68
第43図 第2号古墳主体部実測図	70
第44図 第3号古墳・ a主体実測図(調査前・後)	72
第45図 第3号古墳墳丘断面図・ a主体断面図	73
第46図 第3号古墳主体部実測図	75

第 47 図	第 3 号古墳主体部内遺物 出土状況実測図	76
第 48 図	第 4 号古墳實測図（調査前・後）	78
第 49 図	第 4 号古墳墳丘断面図	79
第 50 図	第 4 号古墳主体部実測図	80
第 51 図	第 5 号吉墳實測図（調査前・後）	82
第 52 図	第 5 号古墳墳丘断面図	83
第 53 図	第 5 号古墳周溝内土器 出土状況実測図	84
第 54 図	第 5 号古墳主体部実測図	85
第 55 図	第 6 号古墳實測図（調査前・後）	88
第 56 図	第 6 号古墳墳丘断面図	87
第 57 図	第 6 号吉墳平面及び立面実測図	89
第 58 図	a 主体実測図	92
第 59 図	b 主体実測図（調査前・後）	94
第 60 図	b 主体断面図	95
第 61 図	b 主体実測図	96
第 62 図	b 主体内小玉出土状況実測図	97
第 63 図	c 主体実測図及び墳丘断面図	99
第 64 図	c 主体実測図	100
第 65 図	d 主体実測図	102
第 66 図	e 主体実測図	104
第 67 図	溝状遺構内外土器出土状況実測図	105
第 68 図	遺跡内出土遺物（15）	117
第 69 図	遺跡内出土遺物（16）	118
第 70 図	遺跡内出土遺物（17）	119
第 71 図	遺跡内出土遺物（18）	120
第 72 図	遺跡内出土遺物（19）	121
第 73 図	遺跡内出土遺物（20）	122
第 74 図	遺跡内出土遺物（21）	123
第 75 図	遺跡内出土遺物（22）	124
第 76 図	遺跡内出土遺物（23）	125
第 77 図	遺跡内出土遺物（24）	126
第 78 図	遺跡内出土遺物（25）	127
第 79 図	遺跡内出土遺物（26）	128

図版目次

とびら遺跡航空写真	
1 - a	遺跡遠景
- b	遺跡航空写真（調査前）
2 - a	遺跡航空写真（調査後）
- b	遺跡航空写真遺跡南東部分（調査後）
3 - a	第 1 号住居跡炭化材検出歌混
- b	第 1 号住居跡完掘状況
4 - a	第 1 号住居跡遺物出土歌混
- b	第 1 号住居跡屋根材検出状況
5 - a	第 2 号住居跡完掘状況
- b	第 3 号・第 4 号住居跡完掘状況
6 - a	第 4 号住居跡完掘状況
- b	第 4 号住居跡土器出土状況
7 - a	掘立柱建跡完掘状況
- b	掘立柱建跡完掘状況
- c	柱穴内土器出土状況
8 - a	第 1 号：土坑検出状況
8 - b	第 2 号土坑検出状況
- c	第 3 号土坑検出状況
9 - a	第 1 号・第 2 号土器棺墓検出裁況
- b	第 2 号テラス状遺構西土器群検出状況
10 - a	第 1 号土器棺墓検出状況
- b	第 2 号土器棺墓検出状況
- c	第 2 号上器棺墓且張り除去後
11 - a	第 1 号テラス状遺構
- b	第 1 号テラス歌遺構
12 - a	第 2 号テラス状遺構
- b	第 2 号テラス歌遺構
13 - a	第 3 号テラス状遺構
- b	第 3 号テラス状遺構
14 - a	第 3 号テラス状遺構土器出土状況
- b	第 3 号テラス状遺構土器出土状況
15 - a	第 4 号テラス状遺構
- b	第 4 号テラス状遺構土器出土状況

16 - a	石敷状遺構	31 - a	e 主体検出状況
- b	石敷状遺構上土器出土状況	- b	溝状遺構内外遺物出土状況
17 - a	第1号古墳調査前近景	32	遺跡内出土遺物 (1)
- b	第1号古墳調査後	33	遺跡内出土遺物 (2)
18 - a	第1主体部完掘状況	34	遺跡内出土遺物 (3)
- b	第2主体部完掘状況	35	遺跡内出土遺物 (4)
19 - a	第2号古墳調査後	36	遺跡内出土遺物 (5)
- b	第2号古墳主体部完掘状況	37	遺跡内出土遺物 (6)
20 - a	第3号古墳調査前	38	遺跡内出土遺物 (7)
- b	第3号古墳調査後	39	遺跡内出土遺物 (8)
21 - a	第3号古墳主体部完掘状況	40	遺跡内出土遺物 (9)
- b	第3号古墳主体部完掘状況	41	遺跡内出土遺物 (10)
22 - a	第3号古墳主体部内遺物出土状況	42	遺跡内出土遺物 (11)
- b	第3号古墳主体部内遺物出土状況	43	遺跡内出土遺物 (12)
23 - a	第4号古墳主体部	44	遺跡内出土遺物 (13)
- b	第4号古墳主体部蓋石除去後	45	遺跡内出土遺物 (14)
24 - a	第5号古墳確認状況	46	遺跡内出土遺物 (15)
- b	第5号古墳完掘状況	47	遺跡内出土遺物 (16)
25 - a	第5号古墳主体部	48	遺跡内出土遺物 (17)
- b	第5号古墳主体部遺物検出状況	49	遺跡内出土遺物 (18)
26 - a	第6号古墳調査後	50	遺跡内出土遺物 (19)
- b	第6号古墳調査後	51	遺跡内出土遺物 (20)
27 - a	a 主体検出状況	52	遺跡内出土遺物 (21)
- b	a 主体蓋石検出状況	53	遺跡内出土遺物 (22)
- c	a 主体蓋石除去後	54	遺跡内出土遺物 (23)
28 - a	b 主体検出状況	55	遺跡内出土遺物 (24)
- b	b 主体検出状況	56	遺跡内出土遺物 (25)
29 - a	c 主体検出状況	57	炭化材 1
- b	c 主体直上須恵器溜まり検出状況	58	炭化材 2・植物珪酸体
30 - a	d 主体検出状況		
- b	d 主体遺物出土状況		

付 編 目 次

1 はじめに

広島市教育委員会（以下、市教委とする）では、平成元年（1989）12月に東亜地所株式会社（以下、東亜地所とする）から広島市安佐南区祇園山本地区の宅地造成計画事業地内の埋蔵文化財の有無並びに取り扱いについての照会を受けた。市教委では、平成2年（1990）に、周知の遺跡も含んでおり試掘調査の必要ありとの回答を提出し、翌平成3年（1991）に現地踏査及び試掘調査を行い、宅地造成区域のうち、進入道路の計画区域内に埋蔵文化財の存在を確認した。遺跡の取扱いについて市教委は東亜地所との間で協議を重ねたが、進入路部分に該当することから、計画の変更は無理ということになり、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。

これを受けて、平成6年（1994）6月13日に東亜地所から財團法人広島市歴史科学教育事業団（以下、事業団とする）に発掘調査の依頼があり、平成6年7月4日から平成7年（1995）8月11日まで調査を実施した。

なお、当遺跡は、平成2年に市教委が発行した『広島市遺跡分布地図』には光見寺裏遺跡として周知されているが、字名をとって寺山遺跡と改めて使用している。

調査実施に係る関係者は下記のとおりである。

調査委託者 東亜地所株式会社 代表取締役 西本昌弘

調査受託者 財團法人広島市歴史科学教育事業団

調査担当課 財團法人広島市歴史科学教育事業団文化財課

調査関係者 松原明二 常務理事（事務局長）

山出健志 文化財課長

若島一則 文化財課事業係長

稻葉瑞穂 文化財課事業係主査

宮田浩二 文化財課事業係指導主事（平成7年度～）

調査担当者 村田ア紀夫 文化財課事業係指導主事

高下洋一 文化財課事業係学芸員

調査補助員（50音順）

池田賢司 乾操子 植木真澄 梅田昭宏 岡野トヨ子 岡村せつ子 岡本利也 柿田美也子 久保田弘子 栗林隆幸 河野倫子 児玉淳子 近藤活弘 貞森真弓 佐藤信子 山王哲司 高本すがこ 宅見陽子 武本良広 津高ちゆき 筒尾俊宏 中村巖 平見美恵子 福原ひろみ 松浦雅夫 宮田政子 三好愛 宮積誠美 半田健二 森田伸枝 森田美恵子 山田逸二 山下ハツヨ 養祖昭 養祖エミ 横光美里 吉富紀子

整理作業員（50音順）

河合淳子 佐伯ひとみ 菅原彰子 住川香代子 橋本礼子 吉富紀子

また、東亜地所株式会社、同社高橋博開発部長、株式会社日野原富士コンサルタント、市教委の方々をはじめ、写測エンジニアリング株式会社、スタジオ・ユニット手三千男氏のほか多くの方々から、発掘調査を円滑に進めるために多大な御配慮、御援助をいただいた。また、調査期間中には、広島大学名誉教授潮見浩先

生をはじめ、広島大学文学部考古学研究室教授川越哲志先生、助教授河瀬正利先生、助教授古瀬清秀先生、広島県立廿日市西高等学校加藤光臣氏、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター篠原芳秀氏から貴重な御指導、御助言をいただいた。さらに報告書作成にあたっては、奈良大学文学部助手植野浩三氏、広島県立国泰寺高等学校新谷武夫氏、東広島市教育委員会妹尾周三氏のほか多くの方々から広範な御教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

2 位置と環境

寺山遺跡は広島市安佐南区山本七丁目（もと祇園町大字西山本）に所在する¹⁾。

広島市は広島県の西部に位置する中・四国地方最大の都市であり、その中心をなす市街地は太田川が広島湾に流れ込む際に形成した三角州上に発展している。このうち安佐南区はこの市街地に隣接した北西部に位置し、昭和46～48年に広島市に合併する以前からベッドタウンとして早くから開発が行われてきている。特に本遺跡が所在している山本地区を含む祇園町の一帯は市街地に隣接するというその位置関係から、昭和52年以降急速に宅地開発を中心に行われてきている。この山本地区は祇園町の西部に位置し、太田川西岸の武田山（標高410.9m）とその南に連なる火山（標高488.3m）を源とした山本川によって形成された小河谷と低丘陵および沖積地からなる。

ところで、中国山地を水源とし南東流してきた太田川は市北部の安佐北区可部町で三瀬川を合流してからは南に流路を変え、幅約2kmの河谷平野を形成しながら広島湾へ流れ込んでいる。この険峻な平野においては、太田川は幾度も氾濫を繰り返し流路を変えたため安定した耕作地となりえず、古くから比較的安全な支流が形成した小河谷が利用されてきた。山本地区もそのような小河谷のひとつであり、太田川西岸では最下流に位置しており、広島三角州上に広島城下町が形成される近世よりも以前の段階においては河口に臨む立地であったと考えられる。

寺山遺跡は火山から南に伸びた尾根の先端付近の標高約200mの位置から南東方向に派生した丘陵尾根上及び南東方向に下る丘陵斜面上に立地している。周辺の水田面や畑作地との比高は8～30mである。この地域周辺においてはやや奥まった場所に位置するものの、眼下に広がる山本川の形成した沖積地や祇園町域、また近世以前は広島湾頭にあたる広島市街地、さらには遠く高陽町、戸坂町にたいしても眺望が良好な場所に立地する。なお、この周辺は古くは浅い谷を挟んで同様な低丘陵が幾つも派生していたことが知られる。しかしながら戦後沖積地を中心に進められた宅地開発は、昭和50年以降標高50～100mの丘陵部までに及ぶようになり、既に造成され地形の変化がなされた箇所も少なくない。寺山遺跡が所在する尾根についても、調査区の南東側は団地造成によって削平されており、既に原地形が失われている状況にあった。

さて、ここでは寺山遺跡周辺の太田川下流域における主要な遺跡、特に発掘調査された遺跡を中心に述べてみたい。

旧石器・縄文時代の遺跡は極めて少なく、現段階では明確な遺構は確認されていない。これは当時海水面の上昇による瀬戸内海の形成など環境の急激な変化がみられ、人口が少なかったためと考えられている²⁾。しかし沿岸地域という地理的環境から気候の穏やかな時期は定着は見ないまでも、人々が生活した可能性も考えられる。本遺跡の調査において南東斜面の崩落土の堆積土層から縄文時代の遺物が出土しており、周辺に該当時期の遺跡・遺構が存在する可能性が指摘できる。

弥生時代前期・中期の遺跡も現在のところあまり多く確認されていない状況にある。西岸地域においては1962年（昭和37）に発見された太田川放水路固定堰遺跡が知られ、当該期の遺跡の数少ない事例である³⁾。この遺跡は広島三角州の起点に位置し、現水面下約4mの粘土混じり砂層中から前期から後期にかけての土器が数点出土している。また広島経済大学構内遺跡群⁴⁾の長う子遺跡・芳カ谷遺跡、高陽町弘住遺跡の出土遺物中には、それぞれ中期後半と中期中頃に位置付けられる土器が幾らか含まれている。これらが伴う遺構は未確認であるけれども、中期に遡る遺跡の存在する可能性があろう。

弥生時代後期以降は遺跡数が急増する状況にあり、水稻農耕の発展に適応してきたものと考えられる。こ



1. 寺山遺跡 2. 光見寺跡 3. 浄円寺古墳群 4. 上組古墳
 5. 部谷山古墳 6. 三王原古墳群 7. 広島経済大学構内遺跡群
 8. 大町矢ヶ谷遺跡 9. 空長古墳群 10. 池の内遺跡
 11. 文化女子大グラウンド遺跡 12. 杣地遺跡 13. 九郎林遺跡
 14. 太田川放水路固定堤遺跡 15. 中小田古墳群 16. 神宮山古墳群
 17. 毘沙門台遺跡 18. 毘沙門台東遺跡 19. 宇那木山古墳群

第1図 周辺主要遺跡分布図 (S = 1 : 50,000)

のうち東岸地域に位置する高陽町では住宅団地造成に伴う発掘調査が数多く実施されており、様相が明らかになりつつある⁵⁾。その成果によれば、ほとんどの集落は標高50～80mの丘陵尾根上に立地しており、「集落の規模も小さくせいぜい三～四戸を一単位とする小さな集団」が散在するという特色のある様相を呈している⁶⁾。これに対して西岸地域でも一部を除いて、山塊から派生する丘陵尾根上に同様な規模の集落跡が散在する状況にある。しかしその標高は50～160mまで及んでおり、東岸地域と比べて標高の高い位置まで集落が確認されている。ただ、この差異は東岸地域の西斜面に比べて西岸地域の山塊の東斜面が急峻であるという地理的特徴を反映しているためであり、いずれも付近の谷の水田面や畑作地からの比高は30m前後となっている。このことから両岸地域においては概して谷水田や畑作地を生活基盤とした小規模な集落が展開しているという点でほぼ共通した様相を呈しているといえる。また時期的には後期以降から古墳時代初頭まで存続するものもみられる状況である。さて、山本地区周辺の当該期の遺跡としては、矢ヶ谷遺跡⁷⁾、長う子遺跡、芳カ谷遺跡、大谷遺跡⁸⁾、池の内遺跡⁹⁾、九郎杖遺跡¹⁰⁾などがあげられる。矢ヶ谷遺跡は、隣接する2箇所の丘陵尾根上から住居跡3軒、土坑15基、土壙墓39基、土器棺2基などが確認されている。尾根上に立地する小規模集落の様相とともに、幾つかのグループに分かれる集団墓地の様相などが明らかになっている。また広島経済大学構内遺跡群内の長う子遺跡、芳カ谷遺跡、大谷遺跡の3遺跡では隣接する丘陵尾根上から計18軒の住居跡が確認された。ここでは谷の水源や水田を共有する小規模集落によって構成される共同体の姿が窺える。

古墳時代になると丘陵上の集落は徐々に姿を消し始め、それにかわって尾根上に古墳が造られるようになる。これは弥生時代に比して集落の立地条件及び可耕地の条件に大きな変化が生じたためと考えられる。

太田川下流域では東岸地域において西願寺遺跡C地点第1・2号竪穴式石室、同D地点第2号竪穴式石室¹¹⁾や弘住第3号古墳¹²⁾といった、埋葬施設に竪穴式石室を採用しているものの、全体的に弥生墳墓の特色を受け継いだ古墳が古墳時代初頭に出現する。4世紀後半になり、東西両岸において相前後して、東岸に中小田第1号古墳¹³⁾、西岸に宇那木山第2号古墳¹⁴⁾、神宮山第1号古墳¹⁵⁾といった、墳形が前方後円墳や前方後方墳を呈し、埋葬施設に竪穴式石室を採用し、中国製青銅鏡、鉄器、玉類などを伴う、いわゆる畿内型古墳が築造される。5世紀代になると古墳の数が増大する傾向を見せ、小河川を望む丘陵上に古墳が築造されるようになる。しかし、この傾向も古墳時代後半期になると変化を示し、太田川を若干北上した旧可部町域において横穴式石室を内部主体とする古墳が急激に増加し、その逆に太田川下流域においてはわずかに点在する程度となる。

山本地区周辺においては、現在のところ4世紀に遡る古墳はほとんど確認されておらず、5～6世紀代に築造された古墳が多く確認されている。山本川水系の池の内古墳群¹⁶⁾、空長古墳群¹⁷⁾、権地古墳¹⁸⁾、三王原古墳¹⁹⁾、文化女子短大グランド遺跡²⁰⁾、安川水系の芳カ谷古墳群²¹⁾、尾首古墳²²⁾などである。このうち池の内古墳群は5基の円墳と周辺の埋葬主体10基からなり、武器・農工具等の鉄器類、把手脚付壺等の陶質土器や初期須恵器などが出土している。5世紀初頭から6世紀初頭にかけての時期に比定される。特に第2号古墳は直径約28mの葺石・埴輪を配した円墳で、排水溝を有する竪穴式石室を採用した、規模・構造などからみてこの時期の太田川下流域でも傑出した古墳のひとつであろう。空長古墳群は4基の円墳から構成されており、竪穴式横口式石室と箱式石棺を内部主体とする5世紀後半から6世紀初頭の時期に築造された古墳群である。類例の少ない竪穴式横口式石室という埋葬主体を採用し、金銅製三輪玉、蛇行剣身などの鉄製品や玉類などの副葬品や初期須恵器が出土しており注目される。三王原古墳は標高約30m程度の沖積地に立地し、河原石積みの竪穴式石室と考えられる埋葬施設から獸形鏡・鉄鋤などの鉄器類・甲冑片・馬具などが出土しており、

5世紀中頃のものと考えられる。戦前における発見ではあるものの、その副葬品の豊富さでは注目される。芳賀谷第1号古墳は内部主体に割竹形木棺を採用し、珠文鏡・玉類・鉄器が出土し、土器が伴出してないため時期は明確でないものの鏡などから5世紀後半の築造と考えられる。このように山本川の形成した沖積地に向かって伸びる丘陵部には多くの古墳群が分布しており、時期的にも重なるものが多く、山本川流域の支配者層の系譜を考える上で貴重な資料を提供しているといえよう。今回の調査で確認された寺山古墳群も、これらの古墳群と同様の立地を呈し、埋葬施設の形式や副葬品などで共通点を持つものもあり、相互に密接な関係があつたことが看取される。

6世紀後半以降の後半期の古墳については上組古墳²³⁾、部谷山古墳²⁴⁾などが確認されている。上組古墳は全長5.7mの横穴式石室をもつ円墳で、石室内から須恵器などが出土している。部谷山古墳もほぼ同規模の横穴式石室をもつ円墳である。以上のように山本地区周辺においては、分布的には太田川下流域における他の地域と同様な傾向を見せつつも、割合狭隘な地域にあって時期的に重なって築造されている地域であることが指摘できる。このことは太田川下流域、特に河口付近という好立地を背景とした勢力が存在したことが想定される。

このことは、後の歴史時代になってもますますこの地域が重要な場所となってくることからも窺うことができる。少し歴史時代について触れてみよう。古代の遺跡としては光見寺跡²⁵⁾と權地古墓²⁶⁾が知られている。光見寺跡は寺山遺跡の立地する丘陵の尾根の東麓付近に位置し、奈良時代の瓦が採集され、塔石と推定される石も散在しております、奈良時代の寺院跡と考えられる。5・6例の該当期の寺院跡が知られる安芸国内において、このうち太田川下流域では安佐南区鍾井に所在する横林遺跡、安芸郡府中町に所在する伝道隆寺跡とともに数少ない事例である。一方權地古墓からは石帶が出土しており、被葬者は生前の地位が下級官人と推定される。出土した土器から平安時代前半の9世紀頃と推定されている。

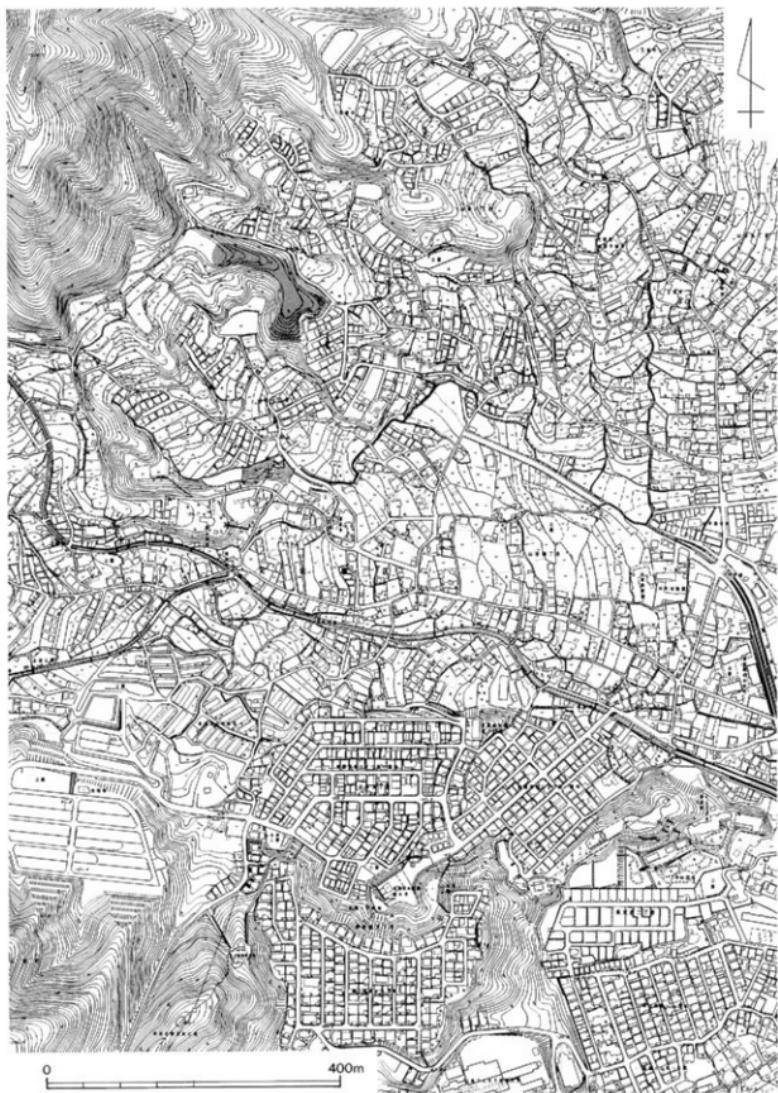
ところで旧祇園町付近には近年まで条里制のなごりを残す方格状の地割が残されており、この地域一帯は『倭名類聚抄』にみえる佐伯郡伊福郷、桑原郷にも比定されている²⁷⁾。また安芸国北部における諸莊園の年貢・物資の中継保管地として倉敷地が設置されていたとされる²⁸⁾。旧国道54号線付近の南下安には「帆立(堀立)」という地名がみられるように、この地が太田川河口付近に位置し、海・陸交通の接点という条件を備えた場所であることから選ばれたものと考えられる。

古代以降この山本地区は沖積地は狭隘ながらも湾岸地域に立地するという立地的好条件から安芸国中枢部と佐伯郡衙を結ぶ陸路の最短ルート上に位置し、さらに河口に臨む港湾地として安芸国の交通・経済の中心地のひとつとなっていた。その後も武田氏の銀山城の城下町が置かれるなど、海・陸両方の交通の要衝としての立地の優位性は引き続きみられ、太田川下流域における注目すべき地域のひとつであろう。

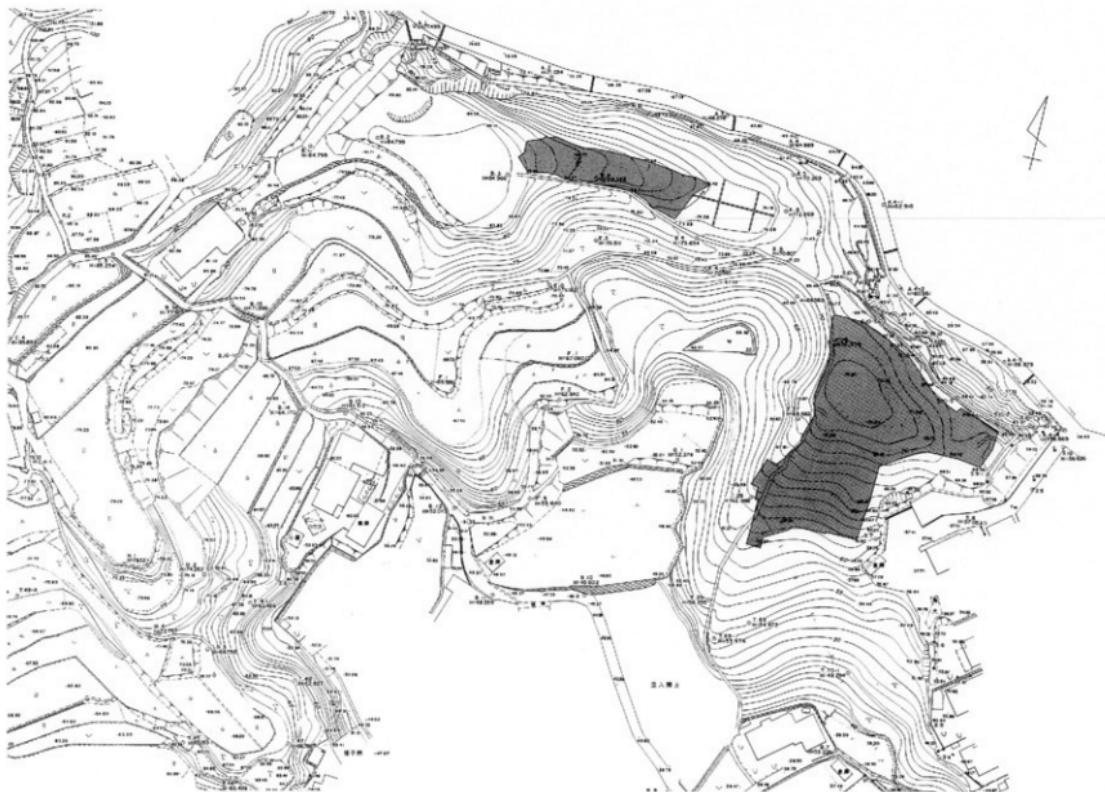
注

1. ここで使用している町名は広島市における住居表示変更にともない使用されていない町名が存在する。本来なら「もと」ないし「旧」を冠する必要があると考えるが、特別な理由がないかぎりはここではあえて付していないことをお断りしておく。
2. 河瀬正利 1979 「歴史のあけぼの」『高陽町史』 広島市
3. 藤田等 1965 「太田川放水路固定堰発見の弥生式土器」『広島考古研究』第4集 広島考古学会
4. 檜垣榮治 1984 「広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告」 広島市教育委員会
5. 金井亀喜編 1977 『高陽新住宅街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 広島県教育委員会など
6. 注2と同じ

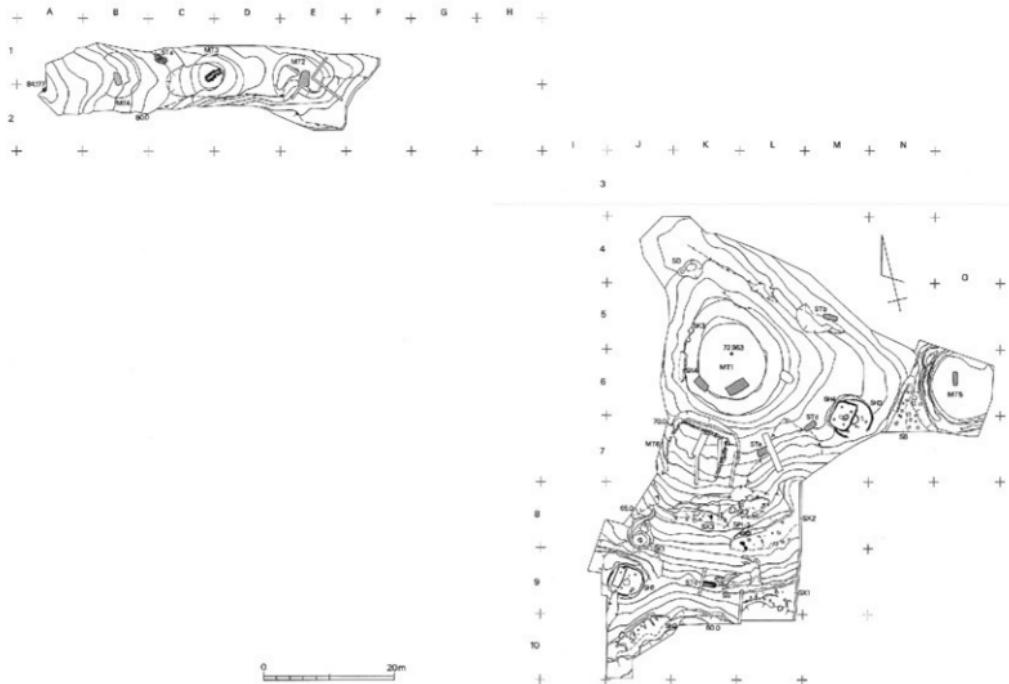
7. 中田昭 1984 「矢ヶ谷遺跡発掘調査報告」 矢ヶ谷遺跡発掘調査団
8. 注4と同じ
9. 若島一則・中村真哉 1985 「池の内遺跡発掘調査報告」 広島市教育委員会
10. 檜垣栄治 1984 「九郎秋遺跡・権地遺跡発掘調査報告」 広島市教育委員会
11. 金井亀吉編 1974 「西願寺遺跡群」 広島県教育委員会
12. 石田彰紀 1983 「弘佐遺跡発掘調査報告」 広島市教育委員会
13. 潮見浩編 1980 「中小田古墳群」 広島市教育委員会・広島大学文学部考古学研究室
14. 松崎寿和・潮見浩 1961 「先史時代の広島地方」「新修広島市史」第1巻 総説編 広島市
15. 注14と同じ
中摩浩太郎他 1986 「神宮寺山第1号古墳・第3号古墳の測量調査成果報告」「縦トレンチ」第6巻第4号 広島大学文学部考古学研究室縦トレンチ編集委員会
16. 注9と同じ
17. 石田彰紀 1978 「空長古墳群発掘調査報告」 広島市教育委員会
18. 注10と同じ
19. 玉井源作 1929 「山本村三王原古墳」「広島県史蹟名勝天然記念物調査報告」第1輯 広島県史蹟名勝天然記念物調査会
中田昭 1973 「広島市祇園町三王原古墳について」「芸術」第1集 芸術友の会
20. 福谷昭二 1969 「太田川下流域の古墳分布と二・三の問題点」「広島県立観音高校研究紀要」第6集
注17と同じ
21. 注4と同じ
22. 青山達・小部隆はか編 1984 「尾首城跡発掘調査報告」 広島県教育委員会
23. 祇園町誌編纂委員会 1970 「祇園町誌」 広島県安佐郡祇園町
24. 同上
25. 同上
注17と同じ
26. 注10と同じ
27. 注14と同じ
28. 坂本賞三編 1980 「広島県史」原始・古代編 広島県
佐竹昭 1989 「広島のあゆみ」原始・古代四 「図説広島市史」 広島市
藤原健蔵監修 1992 「古路・古道調査報告」 広島市教育委員会・財團法人広島市歴史科学教育事業団



第2図 遺跡周辺の地形図(1) ($S = 1 : 7,500$)



第3図 遺跡周辺の地形図(2) ($S = 1 : 1,500$)



第4回 造構配図 (S-1 : 600)

3 遺構と遺物

寺山遺跡は、火山から南へ派生する尾根の先端から、南東に伸びる丘陵の標高約85mから60mにかけての尾根上平坦面と、その南側に広がる斜面に位置する。

発掘調査は、調査区北半部の痩せた尾根線を基準線として、全域に10m×10mのグリッドを設定し、北西—南東方向にアルファベット、北東—南西方向に数字をつけ、調査区名とした。そして、調査区境界にトレントを入れ堆積状況を確認した後に、遺構面までの掘り下げをおこなった。なお、尾根の一部は、戦後に開墾され、畑地として利用されており、遺構への影響が予想された。

調査の結果、尾根上および南斜面において、竪穴式住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟、テラス状遺構4か所、土器棺墓2基、土坑3基、石敷状遺構1か所、古墳6基、埋葬主体5基、溝状遺構1条を確認した。遺物は、弥生時代の集落関係遺構やその周辺から弥生土器、鉄器、石器、土製品等が、古墳およびその周辺から須恵器、土師器、鉄器、玉類（ガラス小玉）等が出土している。

1. 集落跡

(1) 概 要

集落関係の遺構は、調査区の南東部尾根上および南側斜面で確認された。北西から南東方向へ下る尾根は調査区中央の鞍部から再び高まり、ピークを形成する。ここから尾根は南西方向と南東方向に分岐し、両者の間に広い斜面が広がっている。集落関係遺構は、尾根上および比高約10m、傾斜20~25度の斜面に散在している。なお、この斜面は調査区外へも広がり、南側は現水田面まで緩やかに下っている。また、調査区の南東側は閉地造成によって削平されているため詳細は不明であるが、旧地形では尾根は南東方向へのびていたと考えられる。

(2) 遺 構

A 竪穴式住居跡

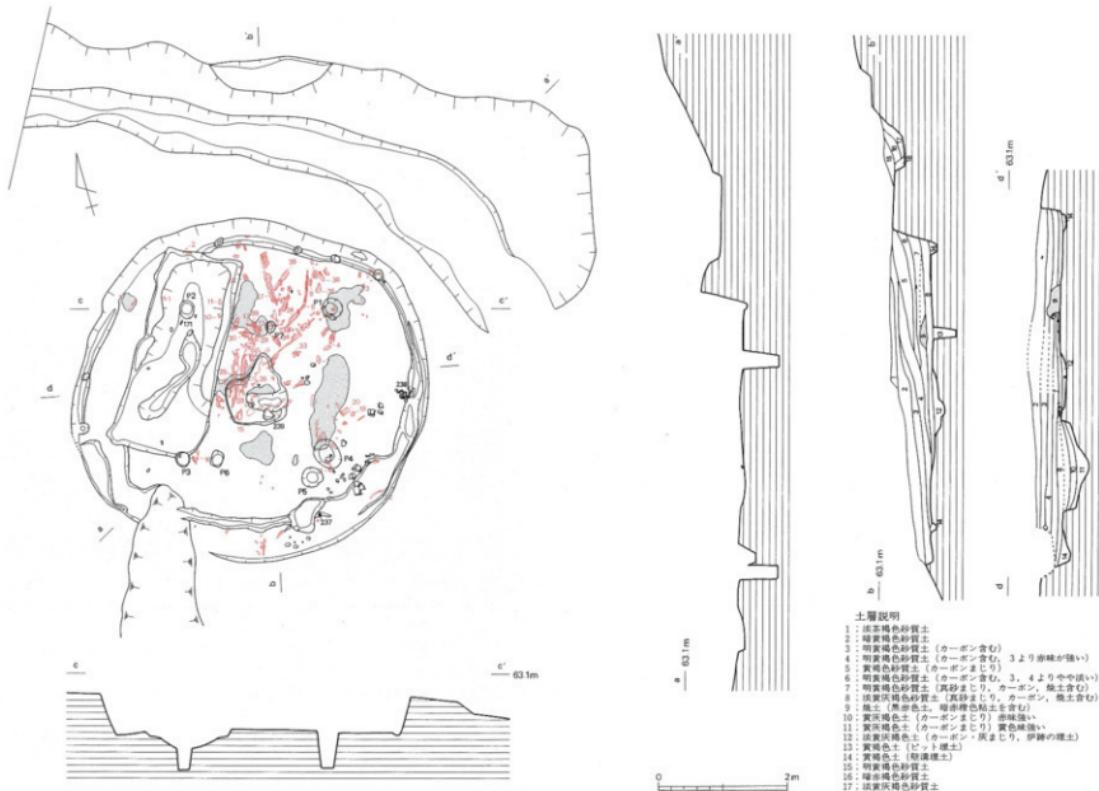
第1号住居跡（第5図・図版3・4）

第1号住居跡は、J10区に位置し、調査区南半部の最高所（標高約73m）から小谷に沿って南西へ分岐する枝尾根上に立地する。ここは、南側斜面の最西端にあたり、谷の水田面からの比高は約10mである。

本住居跡は、尾根を削平して造られた平坦面に掘り込まれている。平坦面の奥行きは現状で約7mである。丘陵斜面上方には、その斜面長軸線に直交し、下方側に緩やかに湾曲する溝がめぐっている。溝は幅50~135cm、深さ最大50cmで長さは約9mを確認したが、北西端はさらに調査区外にのびている。

住居跡の平面形は楕円形で、規模は床面で北東—南西4.15m、北西—南東4.8mである。壁は南西部を除いて確認され、壁高は北側で最高75cmである。壁溝は、北側の一部が切れ、全周していない。規模は幅約15cm、深さ5~10cmである。溝において径が10~15cmの小ピット6個を確認した。なお南側において壁溝の形状が乱れて幅が広がった箇所や二重になる箇所が見られる。これは床面を南に拡張したためと考えられる。

床面では柱穴と考えられるピット7個を確認したが、壁面との位置関係と径の規模や深さから、主柱穴と



第5図 第1号住居跡実測図 (S = 1 : 60)

網目：地土範囲、線：炭化材、直線：植物遺体
赤字番号は付箋の炭化材資料番号に対応する

考えられるピットは4個（P1～P4）である。各柱穴の規模は、P1が長径32cm×短径28cm、底面の標高61.67m、P2が長径27cm×短径22cm、底面の標高61.64m、P3が長径23cm×短径19cm、底面の標高61.66m、P4が長径34cm×短径30cm、底面の標高61.77mである。柱間距離は、P1～P2間が2.2m、P2～P3間が2.3m、P3～P4間が2.2m、P4～P1間が2.3mである。

また、床面中央には95cm×110cm、深さ約8cmの不整形の掘り込みがみられた。この中には55cm×25cm、深さ約8cmの楕円形の小さな掘り込みが存在している。その位置と掘り込み内や周辺に炭化物や焼土が見られることから、この掘り込みは炉跡と考えられる。

ところで、床面北西部には1.3m×3.15mの平面長方形、深さ約30cmの土坑が確認された。土坑の底面は不整形の舟底状を呈しており性格は不明である。また、主柱穴P2と重複しており、住居に伴う施設とは考えにくいが、土層観察によれば、住居と同時期かそれ以前の遺構と考えられる。

本住居跡の埋土は多量の焼土と炭化材を包含していた。焼土と炭化材は重なり合い、主柱穴の内側の床面を中心に厚さ10～20cmにわたって堆積していた。また、床面中央付近において床面から10～15cm上方ではカヤなどイネ科植物と考えられる植物遺体が炭化した状態で認められた。上屋材が土に埋まり、完全に燃え尽きずに炭化したものと考えられる。

なお、これら炭化材や炭化植物遺体については科学分析を実施している。この結果の詳細は別篇に譲るとして、結論を示せば住居構築材と考えられる炭化材の分析ではクリを中心、コナラ・アカガシ・マツが認められた。また上屋材と考えられるカヤと想定した植物遺体は、タケア科などに類似する群部と同定された（種類は特定できていない）。さらに灰が含まれる土壤からはススキ属の組織片や珪酸体が認められた。上屋材の構築材については、タケア科とともにススキ属も利用されていたと考えられる。ところで建築材については遺跡周辺から確認したのであれば、周辺の植生を反映していると考えられる。

本住居跡の床面上からは、土器（1）や土製小玉（237）、砥石（238）が、炉跡内からは石皿片（239）が出土した。また、土坑内埋土からは土器片のはか鉄器片（171）が出土した。床面出土の土器の特徴から、本住居跡は弥生時代後期終末前後の遺構と考えられる。

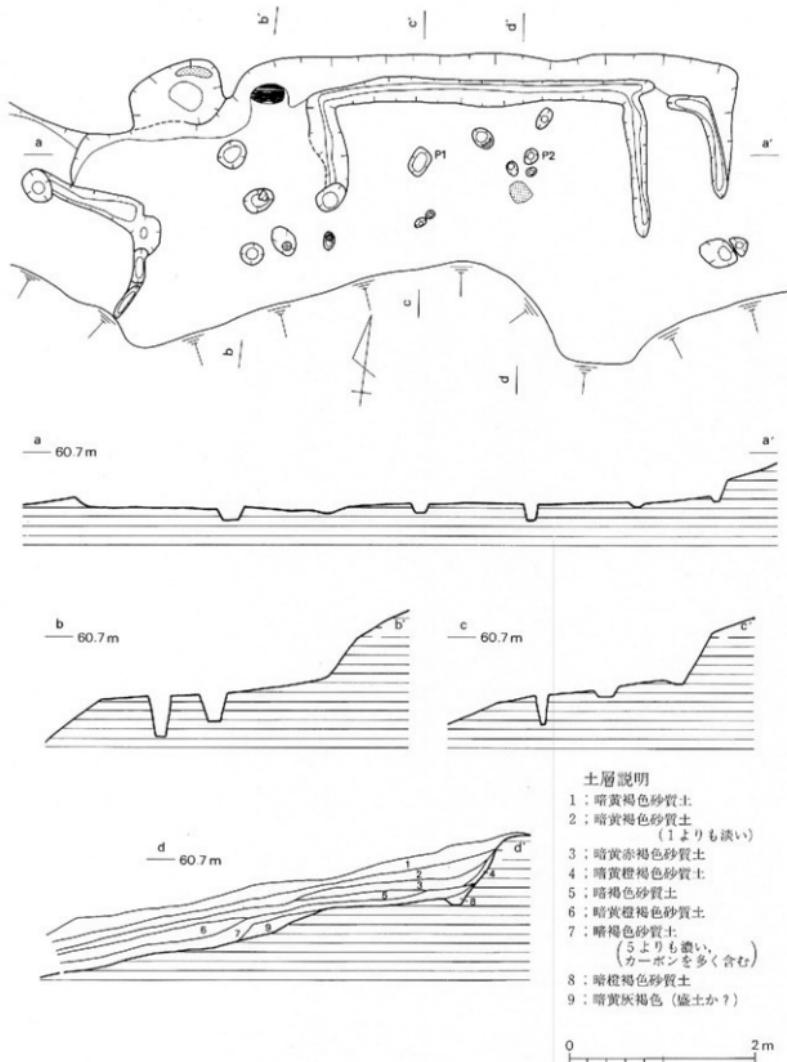
第2号住居跡（第6図・図版5-a）

第2号住居跡は、調査区J11区に位置する。南斜面が西の枝尾根の張り出しによってやや谷状に湾曲した標高60mの地点に立地し、周辺の水田面との比高は約8mである。第1号住居跡の南側約5mの南向き斜面を最大70cm掘り込み、現状で長さ約7mの平坦面を造り出し、本住居跡はその東側に位置する。

本住居跡の壁溝は北半部がコ字状に遺存し、規模は長さ東西3.7m×南北約1.7m、溝の幅15～30cm、深さ3～7cmである。床面では柱穴と考えられるピット8個を確認したが、このうち壁との位置関係からP1とP2が本住居跡の主柱穴に相当すると考えられる。柱穴の規模は、P1が長径30cm×短径20cm、底面の標高60.06m、P2が径15cm、底面の標高59.97m、柱間距離は1.2mである。また、P2南側の床面において径25cmの範囲の焼土を確認した。その位置関係から炉跡と考えられる。

本住居跡の東側に接してL字形を呈する溝状遺構を確認した。この溝は現状の長さ東西方向100cm、南北方向40cm、幅12～20cm、深さ4～10cmで、床面を東方向に拡張した壁溝の一部と考えられる。なお、西側にも現状で長さ東西方向100cm、南北方向120cmのL字形を呈した溝状遺構が認められた。この溝については幅や深さが一定せず、性格を明らかにすることはできなかった。

また、本住居跡が位置する平坦面西側の掘り方上において、上面径100cm、底面径30cm、深さ38cmのピット



第6図 第2号住居跡実測図 ($S = 1 : 60$) 綱目：焼土範囲、縄：炭化物

を確認した。壁面が焼け、埋土中から炭化物が出土しており、炉跡と考えられる。その立地から屋外の施設と想定されるものの、住居跡との関係は不明である。なお、第1号テラス状造構で確認した炉跡と形態が酷似し、また確認された位置も同様な場所にあることから、両者に相関関係があるものと想定される。

本住居跡の埋土中から土器（2）が出土した。床面からも土器が出土しているものの、細片で図示できなかった。そのため本造構の時期については明らかにしえなかった。

第3号住居跡（第7図・図版5-b）

第3号住居跡は、M7・8区、N7・8区に位置し、調査区南半部の最高所から、南東へやや下った尾根上平坦面の南端部に立地する。北西半分が第4号住居跡と重複している。土層観察の結果、本住居跡の埋土の北西半分を掘り込んで第4号住居跡が造られている。平面形は不整形の橢円形と推定され、規模は、床面で長径（東西）5.3m×短径（南北）約5mである。壁は北東部で最大75cmが残存している。壁溝は南北2か所で切れているが、南部については、壁面とともに流失したものと思われる。溝の規模は15~20cm、深さ3~11cmである。床面のピットのうち、壁面との位置関係から、主柱穴と考えられるのは4個（P1~P4）である。各柱穴の規模は、P1が長径40cm×短径28cm、底面の標高68.43m、P2が長径40cm×短径33cm、底面の標高68.69m、P3が長径32cm×短径25cm、底面の標高68.55m、P4が径30cm、底面の標高68.95mである。柱間距離はP1~P2間が3.1m、P2~P3間が2.8m、P3~P4間が2.8m、P4~P1間が2.3mである。

北西半分が第4号住居跡によって失われているものの、床面中央において、上面の径約150cm、深さ10cmの不整形の掘り込みが確認された。この掘り込みの底面には、炭化物を含んだ黒褐色土が見られ、その位置からも炉跡と考えられる。

なお、本住居跡の埋土中から土器（13）が出土している。この他にも土器は出土しているが、いずれも細片のため図示しえなかった。出土土器が弥生時代後期終末前後の特徴を示すことから、本住居跡の使用時期もこれを大きく逸ることはないと考えられる。

第4号住居跡（第7図・図版6）

第4号住居跡は、M7・8区に位置し、第3号住居跡の北西半分に重複して掘り込まれている。双方の床面のレヴェルはほとんど同じである。しかしながら、第3号住居跡の北西側壁溝が削平されていることから、北西側では本住居跡の床面が、やや低くなっていると思われる。平面形は方形に近い隅丸方形で、規模は床面で北西~南東3.0m、北東~南西4.1mである。壁は全周にわたって残っており、壁高は北西側で最大85cmである。壁溝も全周し、規模は、幅10~20cm、深さ5~10cmである。床面には、壁面との位置関係から主柱穴と考えられる4個のピット（P5~P8）がある。各柱穴の規模は、P5が長径34cm×短径30cm、底面の標高68.68m、P6が径25cm、底面の標高68.77m、P7が長径36cm×短径30cm、底面の標高68.73m、P8が径27cm、底面の標高68.72mである。柱間距離はP5~P6間が1.6m、P6~P7間が2.2m、P7~P8間が1.6m、P8~P5間が2.2mである。

床面中央には、65cm×100cmの不整形の掘り込みがあり、内部には焼土が見られた。この掘り込みは、その位置からも炉跡と考えられる。焼土は炉跡の周辺にも堆積しており、北西の壁面付近では部分的には厚さ20cmにも達し、その上面に一部カヤ状の炭化物も見られた。また、4本の主柱穴の内側の床面は広い範囲で赤変しており、床面付近の埋土は炭化物を多く含んでいた。以上のことから、本住居跡も大きな炭化材は遺存

していないものの焼失居跡と考えられる。

本住居跡の床面から土器(8~12), 石皿片(240), 台石が出土した。土器は個体分がそろったものが多く、石皿片・台石とともに火災時に床面に遺棄されたものと考えられる。また、炭化物や焼土が多く含まれた埋土層の上面に乗るような状態で、北西の壁面沿いから小型の壺形土器(14)が出土した。この土器はほぼ完形で、西側掘り方中央の床面から60cm上の地点に口を南へ向けて出土した。周辺に他の遺物は見られず、火災鎮火に際して行われた祭祀に伴う遺物の可能性も考えられる。なお、これらの土器の特徴から、本住居跡は弥生時代後期終末前後の遺構と考えられ、第3号住居跡との時間的な隔たりは殆ど認められない。

B 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第8・9図・図版7）

第1号掘立柱建物跡は、調査区N7・8区に位置する。調査区南半部の最高所から南東に伸びる尾根上の標高68mの地点に立地する。第3号・第4号住居跡の東隣で、尾根線を切断するように削平・造成された平坦面の中央に位置する。平坦面は斜面を最大68cm掘り込み、現状で幅8m、奥行き6mが遺存するが、東側は後に造られた第5号古墳の周溝によって削られている。この平坦面上ではピット17個と壁面の立ち上がりに沿った溝を確認した。ピットは規模や深さ、位置からその多くが柱穴と考えられ、何度かの建て替えが行われたことを示している。しかしながら確認できたのはP1~P6の配列の2間×1間の建物1棟のみである。なお溝の規模は現状で長さ520cm、幅10~30cm、深さ5~10cmである。この平坦面は、本建物を構築するために造成されたと考えられ、溝状遺構はこの平坦面ないしは建物に伴って掘り込まれた排水施設と考えられる。

本建物跡は、壁面から約70cm離れて平行に建てられている。規模は、南北2間（約3.7m）×東西1間（約2.0m）である。柱穴の規模はP1が径30cm、底面の標高67.53m、P2が径40cm、底面の標高67.66m、P3が径43cm、底面の標高67.66m、P4が径30cm、底面の標高67.45m、P5が径36cm、底面の標高67.54m、P6が長径50cm×短径38cm、底面の標高67.48mである。桁行の柱間寸法は、P1~P2間が1.9m、P2~P3間が1.8mである。梁行の柱間寸法は、P1~P4間で2.0mである。桁行の軸方向は、N41°Eである。

本建物跡に伴う遺物は柱穴内埋土から土器の細片が確認されたのみである。しかしながら、他の平坦面上に掘られた柱穴、P15・P16の埋土中から土器(15・16)が出土した。また、溝状遺構の底面や他のピット内からも土器が出土しているものの、細片のため復元することはできなかった。この土器の特徴から、本建物跡も弥生時代後期終末前後の遺構と考えられる。

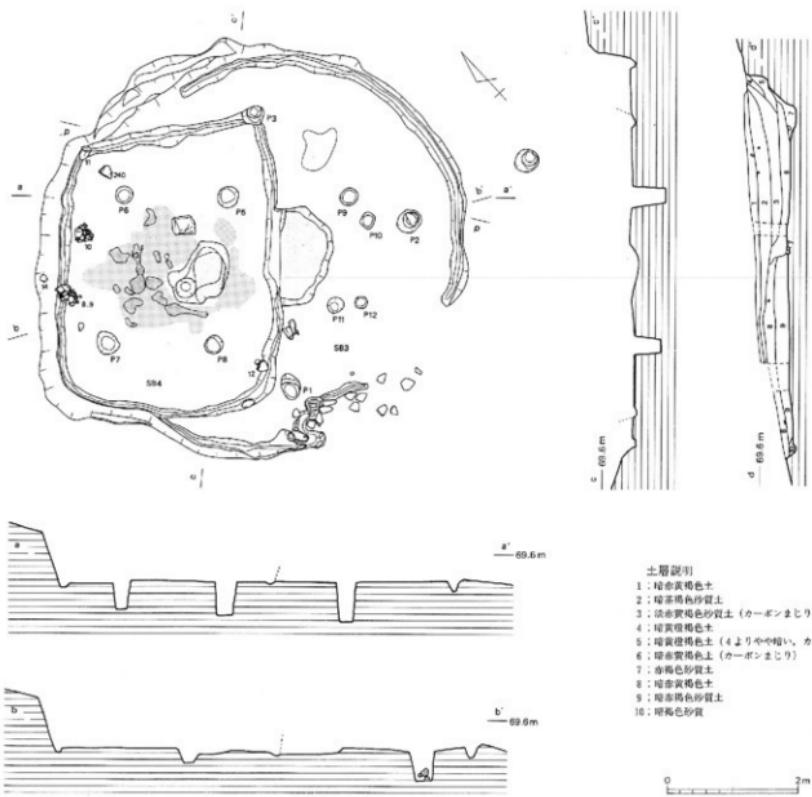
C 土坑

第1号土坑（第10図・図版8-a）

第1号土坑は、調査区J9・10区に位置し、調査区南半部の最高所から南西へ分岐する尾根上の第1号住居跡北側に立地する。現代まで使用されていた里道上に位置し、流水の浸食や崩落土の二次堆積によって遺構がかなり擾乱されていた。

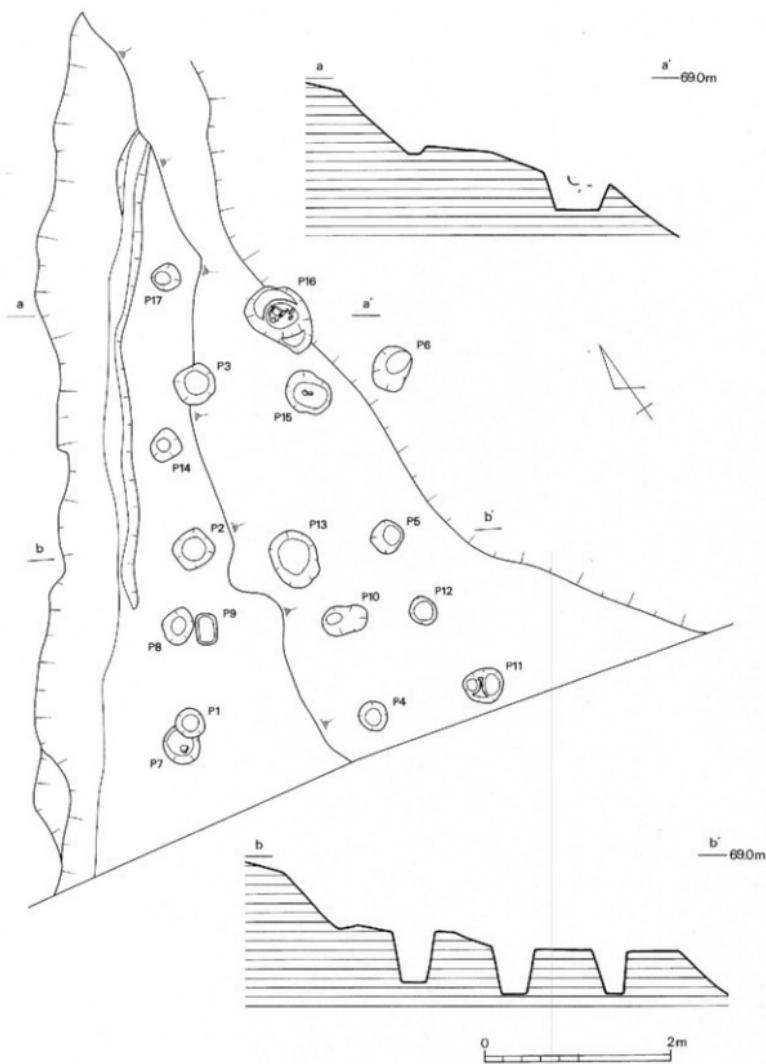
土坑の底面は、1.7m×1.5mの楕円形を呈し、深さは斜面上方である北東側で最大1mである。斜面下方にあたる南西側は、その立地場所や第1号住居跡北側に尾根を切断するように掘り込まれた溝状遺構などにより、壁のほとんどが流失している。

本土坑内からは、厚さ約10cmの埋土上に、5~20cm大の角礫が、径約1mの緩やかなすり鉢状に敷きつめら

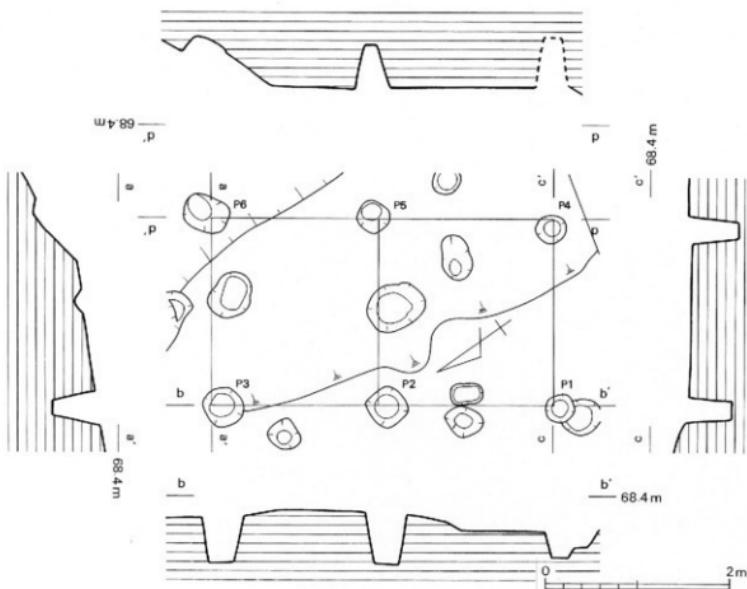


第7図 第3号・第4号住居跡実測図 ($S = 1:60$)

淡網目：カーボンマジリ土。青網目：焼土範囲



第8図 挖立柱穴跡群実測図 ($S = 1 : 60$)



第9図 第1号掘立柱建物跡実測図 ($S = 1 : 60$)

れた状態で確認された。また、石敷上の埋土から土器(89・90)が出土したが、遺構の時期を明確にすることはできなかった。

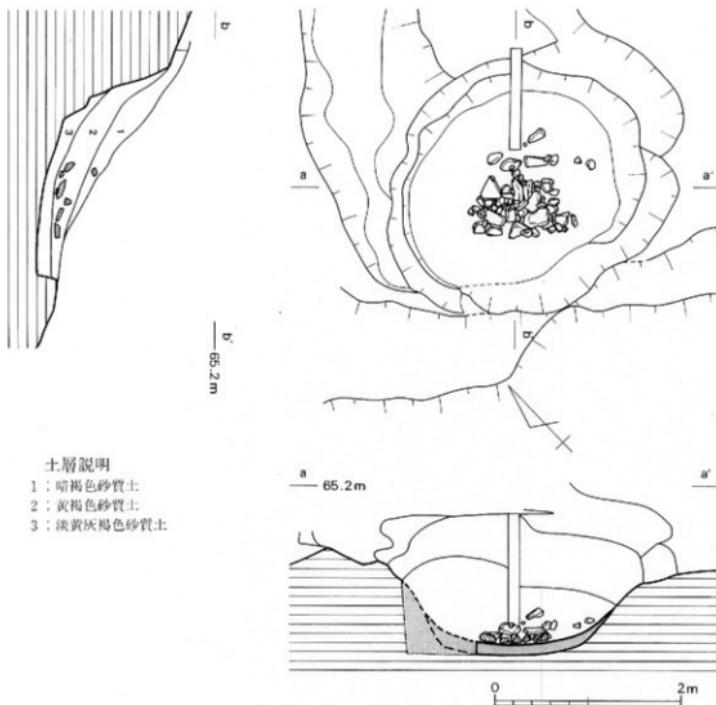
第2号土坑 (第11図・図版8-b)

第2号土坑は、調査区K9区の第3号テラス状遺構床面3cに位置する。平面形は、上面で $1.1\text{m} \times 0.9\text{m}$ の不整形の楕円形で深さは20~30cmである。流水や崩落によると思われる搅乱層に隣接しており、埋土中に5~20cm大の角礫と厚手の土器片を包含しているものの、搅乱を受けており、その性格は不明である。

本土坑埋土からは土器が出土しているが、器形を復元できるものはなく、遺構の時期は不明である。

第3号土坑 (第12図・図版8-c)

第3号土坑は、調査区K6区に位置し、第1号古墳の北西裾の西向き斜面に立地している。平面形は上面で $80\text{cm} \times 65\text{cm}$ の不整形の楕円形で、深さは約30cmである。埋土中から大型の壺形土器片がまとまって出土した。また、底面に径約18cm、深さ約4cmの小ピットがあり、その側面に沿う形で $10\text{cm} \times 15\text{cm}$ の範囲で、土器が据えられていた痕跡を確認した。これは大型の壺形土器が横向きに据えられてできたと考えられる。以上のことから、本土坑は土器棺墓であった可能性がある。



第10図 第1号土坑実測図 ($S = 1:60$) 綱目: 整地土

なお、出土した壺形土器の破片からは器形は復元できなかったが、複合口縁を持つ平底の壺形土器であり、弥生時代後期の特徴を持つと考えられ、本土坑もこの時期のものと考えられる。

D 土器棺墓

第1号・第2号土器棺墓 (第13・14図・図版9・10)

第1号・第2号土器棺墓は、調査区L9区に位置し、第2号テラス状遺構の西端付近の壁面に沿うように直列に埋置されており、墓壙の規模やレヴェルもほぼ同一である。墓壙が半ば横穴状を呈していたため、崩落土による土圧を免れ、2基ともほぼ埋葬時の状況を保っていた。しかしながら、棺内から遺物は確認できなかった。

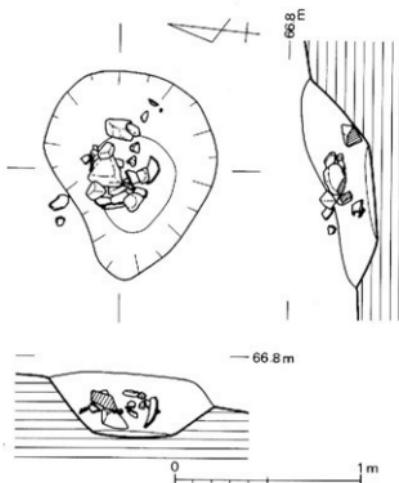
第1号土器棺墓の墓壙は、第2号テラス状遺構の西端から約3mの壁面を掘り込んでいる。この墓壙の平面形は長径76cm×短径54cmの楕円形である。壁面の立ち上がりを掘り込んでいるため、奥の壁高は83cmあり横穴状を呈している。

本土器棺墓は、胴部最大径33.5cmの大型の複合口縁壺形土器の頸部直下を打ち欠き、口縁部を外した土器(18)と、胴部を斜めに打ち欠いた胴部最大径29.4cmの壺形土器(19)とを組み合わせてあった。さらにこの土器の底部を先述の口縁部(17)の頭部側で押さえている。さらに破碎した土器片を墓壙との隙間に充填させて、土器の安定を図っていた。また、土器の合わせ部分には、一部に粘土が認められ、目張りをしたと考えられる。なお棺身は口を5度前後下向きにして、東へ向けて埋置されていた。

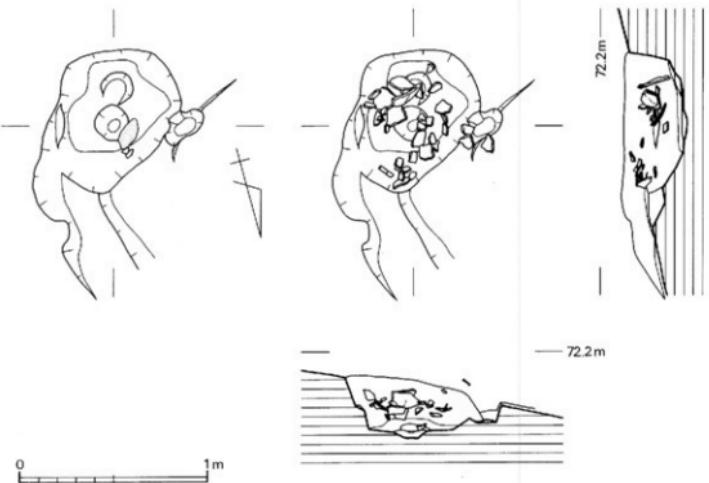
棺に用いられていた土器の特徴から、本土器棺墓は弥生時代後期終末前後の遺構と考えられる。

第2号土器棺墓の墓壙は、第1号土器棺墓の墓壙の東隣に接し、両者の墓壙の距離は現状で5cmである。平面形は長径79cm×短径51cmの楕円形である。やはり壁面を掘り込んでおり、奥壁の高さは54cmである。なお、北側壁面には一部横穴状の凹みも認められた。

本土器棺墓は、胴部最大径31.6cmの大型の壺形土器の頸部直下を打ち欠き、口縁部を外した土器(22)と、



第11図 第2号土坑実測図 (S = 1 : 30)



第12図 第3号土坑実測図 (S = 1 : 30) 細目：土器压痕

口径19.1cmの完形の甕形土器(21)とを組み合わせている。なお、合わせ口の部分には、幅8cm、厚さ約2cmの粘土の目張りが帶状に施されていた。ところで、この目張りは土器の下面を除き、入念に施されていることから、土器を設置後、目張りを行ったと考えられる。また、壺形土器の底部と墓壇壁面の間に4cm大の礎が置かれていたが、これは、土器を安定させるためのものと考えられる。この他、前者の壺形土器を覆うように甕形土器(23)の破片が検出された。また、壺形土器の口は10度前後下向きで西を向き、一方の甕形土器はほぼ水平に置かれていた。

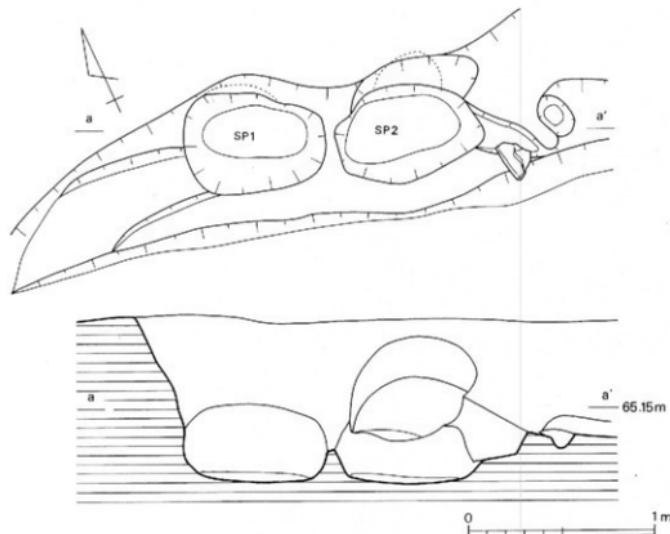
棺に用いられた土器の特徴から、本土器棺墓も第1号土器棺墓とほぼ同時期の弥生時代後期終末前後の遺構と考えられる。なお、双方の新旧関係は明確にしえなかった。

E テラス状遺構

第1号テラス状遺構（第15図・図版11）

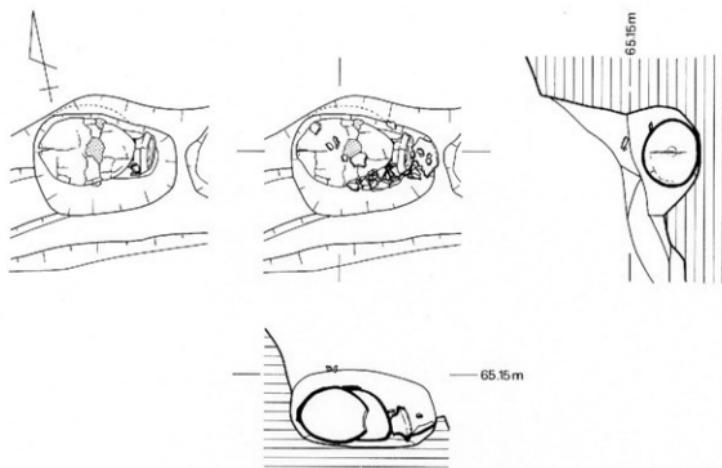
第1号テラス状遺構は、調査区L10区に位置し、南斜面の中腹東側、標高61mに立地する。本遺構は調査区の東端に位置し、東隣は田字造成によって削平されている。本遺構は斜面を最大94cm掘り込み、現状で幅約8m、奥行き最大約3mが遺存する。壁面は直線で溝状遺構は認められなかった。床面はレヴェルの異なる2つの面が確認されたが、土層断面の観察では、新旧関係を明らかにする事はできなかった。

床面では、径10~40cmのピット18個を確認した。その規模・形状から柱穴と考えられるが、建物等を想定することはできなかった。また、この他に東端付近では、長径75cm×短径65cm、深さ10cmと径約90cm、深さ20cmの2個の不整形の掘り込みを確認した。この掘り込み内には黒褐色の炭化物まじりの土が堆積し、壁面

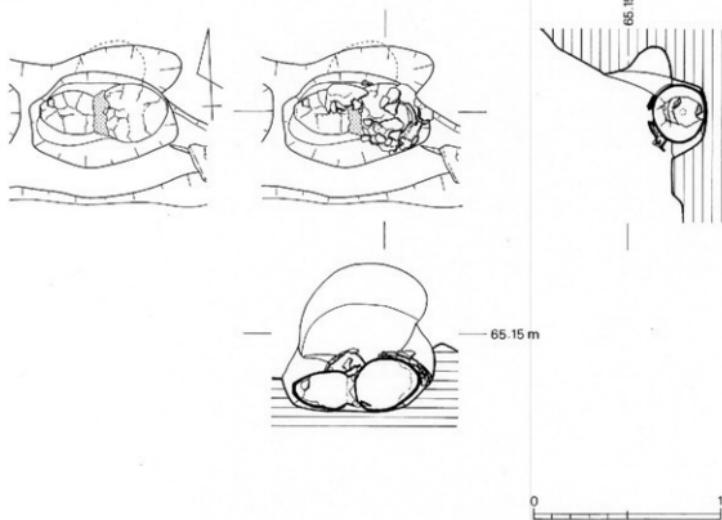


第13図 第1号・第2号土器棺墓実測図(1) (S = 1 : 30)

SP 1



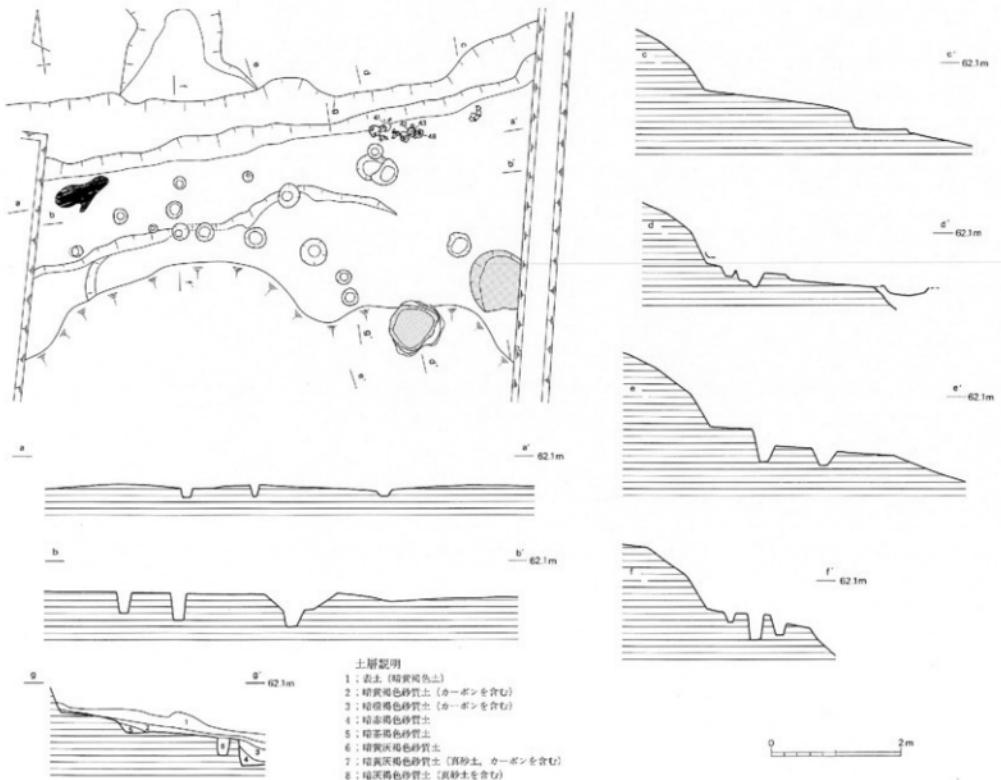
SP 2



0 1 m

第14図 第1号・第2号土器棺墓実測図(2) (S = 1 : 30)

網目：粘土



第15図 第1号チラス状遺構実測図 ($S = 1 : 60$) 線目：焼土範囲、網：炭化物

が焼土化していたため、炉跡と考えられる。床面の奥行きは西側で狭く、東へ行くにつれて広がっており、本遺構はさらに東方の調査区外へ続いていると考えられる。

本遺構に伴う遺物としては、東部の壁面近くの床面上から、並べて置かれた状態で出土した4個体以上の土器(41~43・48)がある。これらの特徴から、本遺構は弥生時代後期後半の遺構と思われる。また、床面上の埋土には多数の土器片などが含まれており、土器(44~47)、柱状片刃石斧片(241)が出土した。

第2号テラス状遺構(第16・17図・図版12)

第2号テラス状遺構は調査区L9区に位置し、南斜面の中腹、第1号テラス状遺構の上方、標高65mに立地する。斜面を最大70cm掘り込み、現状で幅約12m、奥行き最大約3mが遺存する。本遺構も東は調査区外へ続いていると考えられるが、団地造成により削平されている。なお、壁面の形状は不規則で、床面のレヴェルも一定でなく、複数の床面が重複しているようだが、境界やそれぞれの性格は明確にできなかった。

本遺構上では、第1号・第2号土器棺墓のほか、溝状遺構1、土器群2、焼土面2、大小のピット多数が確認された。

溝状遺構は本遺構の中央部壁面沿いに位置し、立ち上がりに沿って長さ2.8m、幅20cm、深さ3cmが確認された。平面形は東端がやや湾曲した直線を呈する。この溝の両端で床面の深さがやや下がることから、延長部分は別の床面の造成時に削平されたと思われる。

東土器群は、本遺構東側の壁面近くの床面上に位置し、壺形土器(51~53)3個体が近接して出土した。西土器群は本遺構の西端部に位置する第1号土器棺墓の墓壙西端に接し、壺形土器(25・26)、壺形土器(27~30)、鉢形土器(31~33)、高杯(34)など10個体以上の土器片が折り重なる状態で出土した。土器の中には風化が著しく火を受けたと考えられるものも含まれ、土器片の間からは炭化材も出土し、火を伴う使用の後に一括投棄されたものと考えられる。

2か所の焼土面は2基の土器棺墓の前面に隣接してあった。北側は長径90cm×短径70cm、南側は長径80cm×短径50cmの楕円形の平面形を呈する。焼土面は平らで、床面上で火を焚いたものと考えられる。

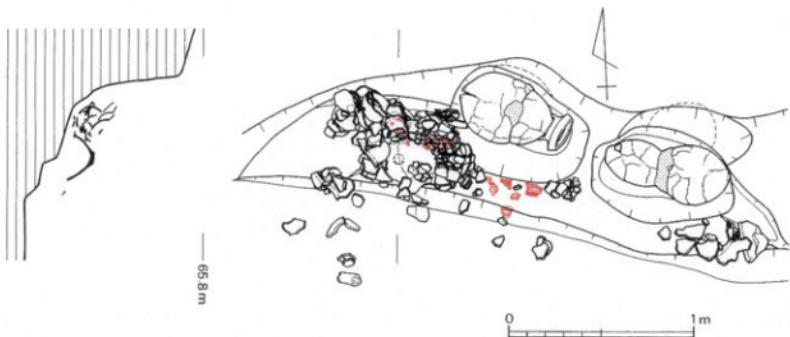
ピットは大小様々な形状のものが検出され、柱穴状のものや土坑状のものがあるが、規模や形状、底面のレヴェルにはばらつきがあり、性格を明らかにすることはできなかった。

本遺構に伴うと考えられる遺物としては、土器棺墓と西土器群および東土器群の土器がある。これらの特徴から、本遺構は弥生時代後期終末期前後の遺構と思われる。

第3号テラス状遺構(第18図・図版13・14)

第3号テラス状遺構は、調査区J9・K9・L9区に位置する。南斜面の上段、標高66~67mの地点に立地し、斜面を最大88cm掘り込み、現状で幅約18m、奥行き最大3.5mが遺存する。第1号土坑、第2号テラス状遺構の上方に東西に長い平坦面を形成しているが、少なくとも4面の床面が重複しており、レヴェルの低い西側のものから、それぞれ3a・3b・3c・3dとする。なお、斜面上方からの崩落や流水などによる擾乱が著しく、それぞれの床面の新旧関係を確認することはできなかった。

床面3aは、本遺構の西端に位置する。南北方向に伸びる尾根を切断する形で、斜面を最大30cm掘り込み、幅4.3m、奥行き最大0.9mが遺存する。床面にはピットなどの掘り込みは認められなかった。また、斜面下方の傾斜が急であるため、使用時の奥行きもさほど広く復元できない。本床面に伴うと考えられる遺物は出土していない。埋土中から土器(71~78)が出土している。



第17図 第2号テラス状遺構実測図(2) (S = 1 : 30) 網目：粘土、縞：炭化物

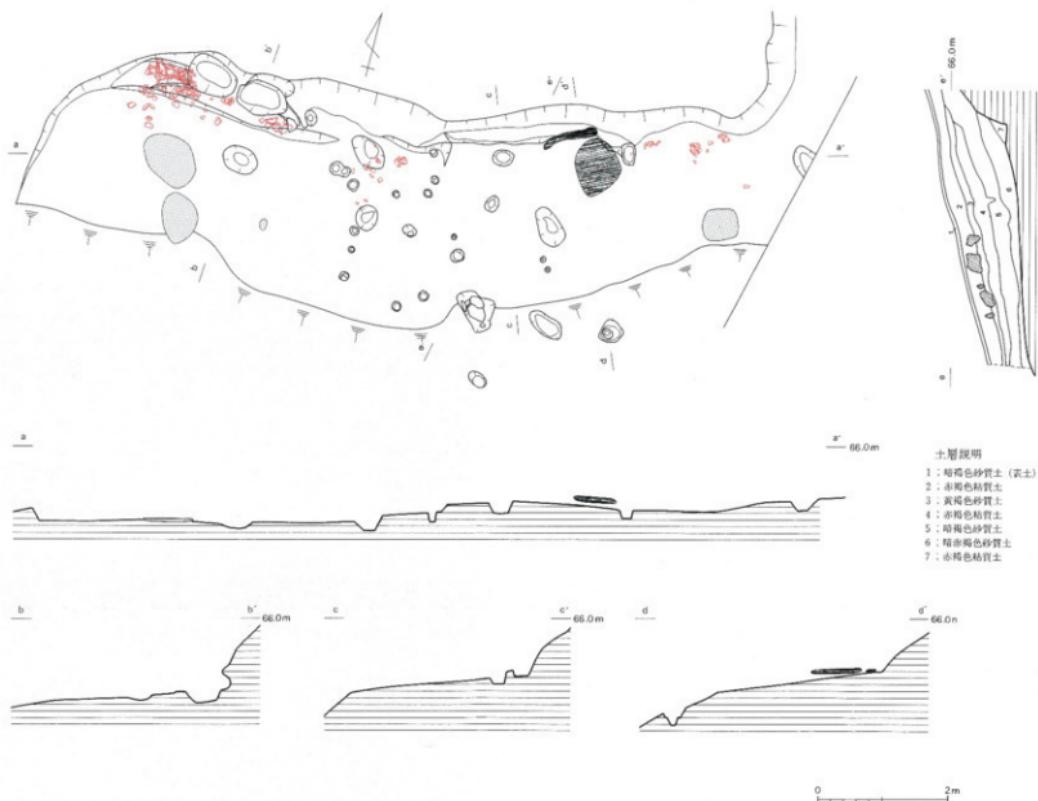
床面3 bは本遺構の中央に位置し、現状で幅8.5m、奥行き最大2.5mが遺存する。床面上にピット24個を確認したが、径や底面レヴェルなどが不揃いで建物跡などの復元はできなかった。このほかに、東半部で長径70cm×短径50cmの楕円形を呈した焼土面を確認した。また、本床面東半部の床面直上の埋土から、5~30cm大の礫群とともに土器(58~70)がまとまって出土した。これらの特徴から、本床面は弥生時代後期終末期前後のものと考えられる。

床面3 cは3 bの北東に接し、双方の床面の高低差は30~40cmである。幅9.5m、奥行き最大1.3mが遺存するが、この床面の中央部を、北東から南西方向に幅約1mの搅乱層が横切っており、遺構の遺存状態は悪かった。本床面では、前述の第2号土坑のほか、ピット5個を確認したが、その性格は不明である。本床面に伴うと考えられる遺物としては、第2号土坑埋土中の土器があるが、器形を復元することはできず、時期を特定することはできなかった。

床面3 dは、本テラス状遺構の東端に位置する幅4.5m、奥行き最大1.8mの小平坦面である。床面ではピット6個を確認したが、その性格は明確にしえなかつた。本床面に伴うと考えられる遺物としては、P4埋土中より土器が出土した。このほか床面や直上の埋土からも土器が出土したが、いずれも細片で時期を明らかにすることはできなかつた。

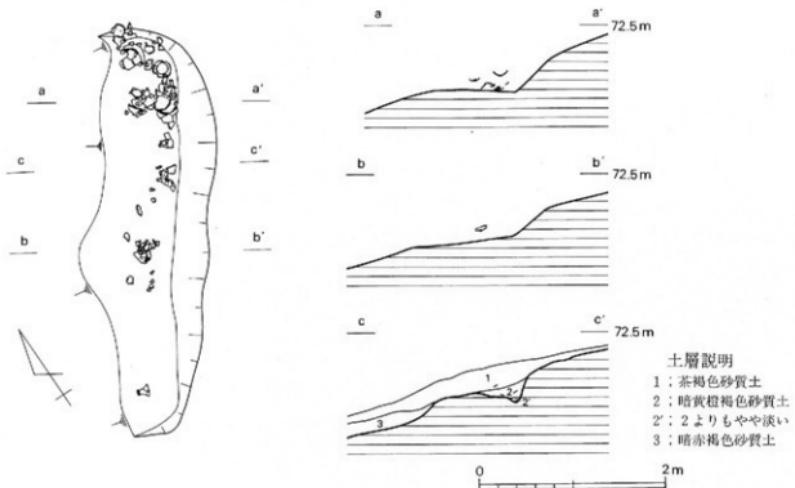
第4号テラス状遺構（第19図・図版15）

第4号テラス状遺構は、調査区K5・6区に位置する。調査区の南半部最高所に位置する第1号古墳の西側墳裾、標高72mの地点に立地し、斜面を最大30cm掘り込んで平坦面を造りだしている。現状で幅4.3m、奥行き最大1mが遺存し、西側は斜面のため流失している。床面から溝やピットは確認されなかつた。本遺構に伴うと考えられる遺物としては、床面および直上の埋土中から、土器(79~88)がまとまって出土した。これらの特徴から、本遺構は弥生時代後期後半の遺構と考えられる。

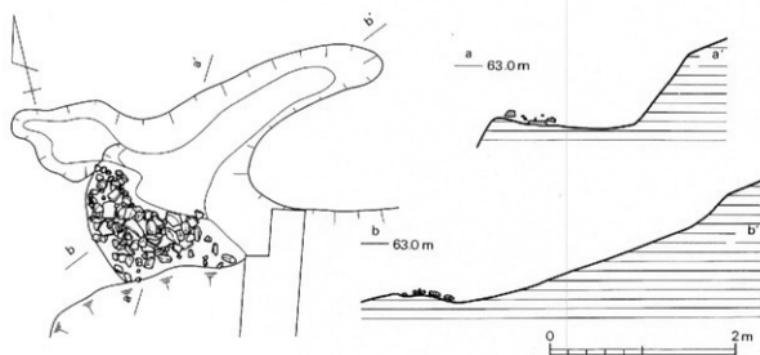




第18図 第3号テラス状堆積実測図 ($S = 1 : 60$) 網目：焼土範囲、濃網目：礫



第19図 第4号テラス状遺構実測図 ($S = 1 : 60$)



第20図 石敷状遺構実測図 ($S = 1 : 60$)

F 石敷状遺構（第20・21図・図版16）

本遺構は、調査区K 9区に位置する。第1号テラス状遺構の西端に近接しているが、テラス状遺構の床面とは約1mの高低差があり、連続した遺構とは考えられない。現状で幅1.8m、奥行き0.8mの平坦面上に、5~20cm大の角礫が並び、礫群の上面は緩やかなすり鉢状を呈している。石敷の西側は埋葬主体Cの墓壙上面に伴う削平面で切られており、南側は斜面により流失しているため、本遺構の全体像は明らかにできなかった。本遺構と関連すると思われる遺構としては、東方向に長さ3m、幅0.5~1m、深さ30~50cmの溝が、傾斜に対して斜め上方に向けて伸びていた。また、北西方向へも長さ1m、幅50cm、深さ30~40cmの溝が確認された。

本遺構に伴うと考えられる遺物としては、石敷の上面および埋土中から土器(91~105)がまとまって出土した。これらは概ね弥生時代後期後半の特徴を示す。比較的大きな破片で、完形近くまで復元できるものが多いため、本遺構の廃棄の時期にまとめて投棄されたものと考えられる。したがって、本遺構もこの時期のものと考えられる。



第21図 石敷状遺構上土器群実測図
(S = 1 : 30)

(3) 出土遺物

本遺跡の集落関係遺構およびその周辺からは、多量の土器および鉄器、磁石、石皿、土製小玉が出土した。土器の器種については壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯、器台が確認された。以下、各遺物について述べる。なお、個々の土器の詳細は後掲する土器観察表にまとめた。

1 弥生土器

本遺跡からは、多量の弥生土器が出土した。これらは、尾根上から南斜面の下段まで、ほとんどの遺構面やその周辺の埋土から出土している。なお、これらのうち、特に第4号住居跡床面土器群(8~12)、第1号・第2号土器棺墓(17~23)、第2号テラス状遺構西土器群(25~34)、第1号テラス状遺構床面土器群(41~43・48)、第4号テラス状遺構埋土土器群(79~88)、石敷状遺構土器群(91~105)などは一括性の高い資料と考えられるもので、当地域における弥生後期土器編年を考える上で良好な資料を提供したといえよう。

ところで、これらはいわゆる上深川様式土器と呼ばれている土器である。このうち、上深川様式土器において時間的変化をよく示すとされる甕形土器をみた場合、その大部分が「く」字状に外反した口縁部がやや厚さを減じながら広がり、端部は平坦もしくは丸みをもつて、胴部は倒卵形を呈し、底部径が萎縮していることを特徴とする一群と、「く」字状に外反した口縁部の端部が拡張や肥厚せず広がるものであり、端部は無文であるものを特徴とする一群があることが指摘できる。なお從来の当地の編年案との対応を示せば、いずれも潮見浩氏が示された第II類に属し¹⁾、最近のものでは、前者が妹尾周三氏のいう安芸V-5様式、後者が安芸V-4様式に対応すると考えられる²⁾。このうち、前記した前三者の遺構の出土土器は、安芸V-5様式に属するものと想定でき、弥生時代後期終末の時期に比定されるものである。また、前記した後三者の遺構の出土土器は、安芸V-4様式に属するものと想定でき、弥生時代後期後半の時期に比定されるものであろう。

また口縁端部を拡張し凹線を施す土器群も量的にはわずかながら出土している。これらは尾根上最高所から南斜面の中段までの比較的標高の高い地点の、しかも二次堆積層から出土している。口縁端部の拡張はあるあまり広くないものの、体部以下は欠損して器形全体については判明できないため、時期については明確にできなかった。おそらく妹尾氏の安芸V-3様式ごろに比定されるものと推定されるが、安芸V-4様式に下る可能性もある。

以上のことから、寺山遺跡の集落遺構は、弥生時代後期後半から終末ごろに比較的短期間に営まれた遺跡といえよう。

ところで、第2号テラス状遺構の南斜面埋土中からは、前述した安芸V-3様式ごろに比定される甕形土器とともに高杯(56・57)が出土した。この土器は在地の土器とは異なり、非常に精緻な胎土で焼成も良好である。内外面とも丁寧なミガキ痕が観察できる。器形は、柱状部から杯部と柄部がともに開き、途中に段をもって立ち上がり端部が再度大きく外傾するものである。搗打きなどの装飾はみられないものの、東部瀬戸内(特に吉備地域)を中心に分布する飾り高杯の系譜をひくものと考えられる。なお第4号テラス状遺構から出土した高杯(85)もその形態および胎土などから東部瀬戸内からの搬入品ないしは模倣品であろう。

2 鉄器(171)

第1号住居跡内の長方形土坑埋土中から出土した。現状で断面方形の長方形を呈し、片端の折損部付近で

は刃部が認められるため、刃部が折損した刀子と考えられる。現存長6.7cm、茎部長4.7cm、茎部幅1.05cm、刃部幅1.2cm、重さ8.9gである。

3 柱状片刃石斧（241）

第1号テラス状遺構の床面直上の埋土中から、多量の土器片とともに出土した。刃部側面が石の節理に沿って剝離した破片で、長さ4cm、幅3.2cm、厚さ1cmの珪質片岩製である。なお、石材の特徴から、J8区の包含層中から出土した基部側面の破片（242）と同一個体の可能性が高い。

柱状片刃石斧はもう一個体分が出土しており、材質とともに形態的にも上記のものと大いに異なる（243）。

4 砥石（238）

第1号住居跡の南東側床面から出土した。長さ15.8cm、幅8.1cm、厚さ2.5cmで、泥岩製である。板状に割った石の片面を使用し、擦痕とともに、中央部分が使い込まれて凹面状となっている。

5 石皿（239・240）

1個体がおそらく3点に割れたものと考えられ、このうち破片2点が離れた2軒の住居跡内からそれぞれ出土している。239は第1号住居跡の床面中央部の炉跡内埋土中から、240は第4号住居跡の床面北西隅から出土した。復元できる個体は長さ約30cm、幅約21cm、厚さ約6cmの砂岩製である。板状の石材の片面を使用しており、特に中央部の磨滅が著しく、長径17.5cm、短径7.5cmの楕円形の窪みが認められる。使用面は双方の破片に連続して認められ、分離以前の使用痕と考えられる。明らかに分離後のものと断定できる新たな使用痕は認められなかったが、240の磨滅面の方が若干なめらかであり、出土状況とともに破片の大きさや磨滅面の位置から考慮して、240は分割後も引き続き使用されたと推定される。

6 土製小玉（237）

第1号住居跡の床面の南端付近から出土した。孔に沿って割れており、半分が残存している。現存高2.5cm、重量9.1gである。直径約3cmの球状を呈し、径約0.8cmの穿孔は焼成前に施されている。胎土は1～2mmの大の砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は暗黒褐色を呈する。土鏡とも考えられるが、かなり小型であることから、装飾用の小玉と考えられる。

注

1. 松崎寿和・潮見浩 1961 「先史時代の広島地方」『新修広島市史』総説篇 広島市
2. 鈴尾周三 1992 「安芸地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社

第1表遺物観察表(1)弥生土器

No.	器種	出土位置	寸法(cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
1	壺形土器	J10区SH1床面	口径15.7 胴径22.7 底径5.0 器高25.7	口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸くおわる。胸部は球状に張り底部は平底。 口縁部内外面はナデ、胸部は外面ハケ目のちナデ、内面ヘラ削り。	橙褐色	φ1~3mm 大の石英・長石砂粒を含む	軟	底部付近にスス付着
2	壺形土器	J10区SH1埋土		口縁部はやや外反しながら立ち上がる複合口縁。 口縁部の内外面はていねいな横ナデ。	黄褐色	細砂粒とともに微砂粒を多く含む	良好	
3	壺形土器	J10区SH1北側溝埋土	口径15.0	大きく外反する日縁端部から、やや内傾気味に直立する拡張部をもつ複合口縁。端部は平らにおわる。 拡張部外面はヘラ状工具による波状文、内面はハケ目。	橙褐色	φ1~2mm 大の長石砂粒を多く含む	やや軟	
4	不明	J10区SH1北側溝埋土	底径6.7	わずかな凹み底をもつ底部、 胸部下半は内外面ともナデ、底部付近は内外面とも指頭調整。	橙褐色	φ1~5mm 大の長石砂粒を含む	軟	
5	高坏	J10区SH1北側溝埋土	脚端部径12.0	脚部はやや内湾し、徐々に器厚を減じ、脚端部は丸くおわる。円形の透かし孔2個あり、上端は坏部との接合面で剥離。 脚部外面は横方向のヘラ磨き、内面はナデ。	赤褐色	φ1~3mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	
6	高坏	J10区SH1北側溝埋土		高杯の脚柱部。柱部は厚手で円柱状を呈し、上下よりヘラ状工具によって内ぎりを行っている。 据部は「ハ」字状に開く。 外表面は指頭調整、脚部内面はナデ。	赤褐色	φ2~4mm 大の長石砂粒を含む	やや軟	
7	壺形土器	J10区SH2埋土	口径24.8	口縁部はゆるやかに外反し、器厚を減しながら端部は丸くおわる。 口縁部は外面が横ナデ、内面がナデと指頭調整。	暗褐色	φ1~3mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	
8	壺形土器	M7·8区SH4床面	口径14.9 胴径14.3 底径2.9 器高16.5	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平らにおわる。胸部の張りは弱く、底部は凹み底。 口縁部は外面がハケ目、内面がハケ目のちナデ。 胸部は外表面がハケ目、内面がヘラ削り。	明赤褐色	φ1~2mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	胸部外面下半にスス付着
9	壺形土器	M7·8区SH4床面	口径12.4 胴径13.6 底径2.7 器高16.4	口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおわる。 胸部の張りは弱く、底部は凹み底。 外表面はハケ目のちナデ、内面は胸部工半がヘラ削りのちナデ、下部がハケ目のちナデ。	明赤褐色	φ1~2mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	胸部外面下半にスス付着
10	壺形土器	M7·8区SH4床面	口径15.1 胴径16.6 底径3.0 器高22.0	口縁部は「く」字状に外反し、外湾しつつ端部は平らにおわる。胸部は倒卵形を呈し底部は小さな凹み底。 外表面はハマ口のちナデ、内面はヘラ削り、口縁部内面はハケ目。	明橙褐色	φ1~2mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	やや軟	
11	壺形土器	M7·8区SH4床面	口径4.0 胴径13.1 底径1.4 器高19.4	口縁部は「く」字状に外反し、器厚を減じつつ端部は丸くおわる。胸部は倒卵形を呈し、底部は小さな凹み底。 口縁部は内外面ともハケ目、胸部は外表面がハケ目のちナデ、内面がヘラ削りのちハケ目。	明橙褐色	φ1~4mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	胸部外面にスス付着
12	高坏	M7·8区SH4床面	口径26.5	高坏の环部、中位で窪をつくり、口縁部は外湾する。脚部はソケット状に差し込み接合する。环部内面はヘラ削りのちナデ、外表面はナデ、口縁部外面はヘラ磨き。	明赤褐色	φ1~3mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	
13	鉢形土器	M8区SH3埋土	口径22.2 胴径15.4 底径2.3 器高8.7	口縁部は逆「ハ」字状に大きく外反し、端部は丸くおわる。体部は半球状を呈し、底部は小さな突起状の凸底である。 全面にていねいなハケ目が施される。	橙褐色	φ1~3mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	
14	壺形土器	M7区SH4埋土	口径7.5 胴径9.8 器高8.7	口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸くおわる。胸部は球状を呈する。 内外面ともていねいなナデ。	橙褐色	φ1~2mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	
15	壺形土器	N7区P15埋土	口径17.5 胴径15.2	口縁部は「く」字状に大きく外反し、端部はさらに外傾して平らにおわる。胸部は球状を呈す	赤褐色	φ1~2mm 大の細砂粒	良好	胸部外面にスス付着

No.	器種	出土位置	寸法(cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
16	壺形土器	N7区P16埋土	口径14.3 胴径15.9 底径2.8 器高17.9	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平らにおわる。胴部の張りは弱く、倒卵形を呈する。底部は平底である。 口縁部は内外面ともハケ目、胴部は外面上半がハケ目のちナデ、下半がナデ、内面がヘラ削り。	明赤褐色	φ1~2mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	胴部外間にスス付着
17	壺形土器	L9区SP1	口径18.0	抵張部が内伸気味に上方にのびた複合口縁で、端部は平らにおわる。抵張部外面と端部に波状文がめぐり、頭部には斜格子状の刻目をもつ貼り付け突帯がめぐる。 抵張部内面はナデ、口縁部・頭部は内外面ともハケ目。	赤褐色	φ1~4mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	
18	壺形土器	L9区SP1	胴径33.5 底径6.5	大型の壺形上器の胴部。胴部は球状を呈し、底部は小さな平底。 内外面ともハケ目。胴部外面は特に細かいハケ目。	赤褐色	φ1~4mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	17と同一個体と考えられる
19	整形上器	L9区SP1	胴径29.4 底径6.1	倒卵形を吊する胴部で、底部は干底。 外腹はハケ目、内腹は肩部以下にヘラ削り。	明赤褐色	φ1~2mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	胴部外下面にスス付着
20	壺形土器	L9区SP1	口径16.8 胴径30.0	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平らにおわる。胴部は球状を呈する。 口縁部は外腹が横ナデ、内腹がハケ目。胴部外面は肩部がハケ目、中位がハケ目のち板ナデ、内腹はヘラ削りで頭部直下が指頭調整。	明赤褐色	φ1~2mm 大の石英・長石砂粒を含む	良好	
21	壺形土器	L9区SP2	口径19.1 胴径23.0 底径7.4 器高33.8	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平らにおわる。胴部はゆるやかに張り、倒卵形を呈する。底部は凸底。 外腹はハケ目、内腹は口縁部から肩部までハケ目、以下はヘラ削り。	明赤褐色	φ1~2mm 大の石英・長石砂粒を含む	良好	胴部外下面にスス付着
22	壺形土器	L9区SP2	胴径31.6 底径5.7	頭部に斜格子状の刻目をもつ貼り付け突帯がめぐり、胴部は球状を呈する。底部は小さな凹み底。 胴部外面はハケ目で底部付近に一部ヘラ磨き、内腹は肩部から頭部にかけてナデ、以下ヘラ削りのちハケ目。底部付近は指頭調整。	淡赤褐色	φ1~2mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	
23	整形土器	L9区SP2	11径19.7 胴径23.9 底径4.3 器高30.4	口縁部は「く」字状に外反し、器厚を減じつつ端部は平らにおわる。 刻立文がめぐる。胴部は倒卵形を呈し、底部は小さな平底。 口縁部は外腹がハケ目、内腹がナデのちヘラ磨き、胴部は外腹上半がハケ目、下半がヘラ磨き、内腹がヘラ削り。	赤褐色	φ1~3mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	やや軟	底部周辺にスス付着
24	壺形土器	L9区SP2	口径17.6	口縁部は「く」字状に外反し、端部が内傾気味に外傾する。胴部は球状を呈する。 口縁部は内外面ともナデ。胴部は外腹がハケ目のちナデ、内腹がヘラ削り、頭部外腹はつよい横ナデ。	赤褐色	φ1~3mm 大の石英・長石砂粒を含む	軟	外腹とも風化が著し
25	壺形土器	L9区SX2 西土器群	口径14.1 胴径26.7	口縁部は「く」字状に屈曲して直立気味に外反する。胴部は球状を呈する。 口縁部は内外面ともハケ目のちナデ、胴部は外腹がハケ目のちナデ、内腹がヘラ削り。	赤褐色	φ1~2mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	やや軟	
26	壺形土器	L9区SX2 西土器群	口径13.5 胴径29.5 底径6.5 器高43.0	口縁部はゆるやかに外反し、端部が内傾気味に上部に抵張される複合口縁。頭部はやや長く、胴部は倒卵形を呈する。底部は平底。 口縁部内腹はナデのちハケ目、胴部外腹下半はハケ目、内腹は肩部以下にヘラ削りのちハケ目。	明橙褐色	φ1~3mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	表面の風化が著しい
27	壺形土器	L9区SX2 西土器群	口径15.1 胴径15.0	口縁部は「く」字状に外反し、端部はさらに外傾して平らにおわる。胴部の張りは弱い。 口縁部は内外面ともナデ。胴部は外腹がハケ目のちナデ、内腹がヘラ削り。	赤褐色	φ2~3mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	軟	外腹全体にスス付着

No.	器種	出土位置	寸法(cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
29	壺形土器	L9区 SX2 西土器群	口径13.6 胸径13.0 底径4.0 器高14.0	口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸くおわる。胸部は半球状を呈する。底部はわずかな凹み底。 口縁部は内外面ともナデ、胸部外面は上半がハケ目、下半がナデ、内面はヘラ削り。	明赤褐色	φ1~3mm 大の長石、 φ3~5mm 大の石英砂粒を含む	軟	
30	壺形土器	L9区 SX2 西土器群	口径14.1 胸径15.1 底径2.5 器高13.0	口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸くおわる。胸部は強く張り、球状を呈する。底部は突起状の小さな平底。 口縁部は内外面ともナデ、胸部は外面が板ナデまたはハケ目、内面がナデと底部が指頭調整。	暗赤褐色	φ0.5mm大 の砂粒・微 砂粒を多く 含む	やや 軟	肩部と底部 外面にスス付着
31	鉢形土器	L9区 SX2 西土器群	口径19.5 胸径15.2 底径1.0 器高9.5	口縁部は「く」字状に大きく外反し、端部は平らにおわる。端面には1条の浅い沈線がめぐる。体部は半球状を呈し、底部は小さな突起状の凸底。 口縁部は内面がナデ、外側がハケ目の中ナデ、体部は内面上半がヘラナデ、下半がナデ、外側は肩部がヘラナデ、中位がヘラ磨き、下部がハケ目。	暗赤褐色	微砂粒およ びφ1mm大 の砂粒を多 く含む	良好	
32	鉢形土器	L9区 SX2 西土器群	口径19.8 胸径14.8 底径1.2 器高8.3	口縁部は「く」字状に大きく外反し、端部は平らにおわる。体部は張り、底部は小さな突起状の凸底。 内面はハケ目の中ナデ、外側はナデ。	暗橙褐色	φ0.5~1 mm大の砂粒 と雲母片を 含む	やや 軟	表面の風化 が著しい
33	鉢形土器	L9区 SX2 西土器群	口径10.2 胸径10.4 底径1.3 器高8.5	口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおわる。体部は半球状を呈し、底部は小さな平底。 口縁部は内外面とも横ナデ、体部は外側がハケ目の中ナデ、内面が指頭調整。	暗橙褐色	φ2mm大の 石英・長石 砂粒を多く 含む	良好	
34	高环	L9区 SX2 西土器群	口径2.4 脚端部径 17.4 器高18.5	环部はわずかに内溝しながら開く。口縁部は内傾気味に短く立ちあがり、端部は丸くおわる。脚部はゆるやかに広がり中位より大きく内溝気味に「ハ」字状に開く。 环部は内外面ともハケ目およびナデ、脚部は外面上半が板状工具によるナデ、下半がハケ目およびナデ、内面がハケ目およびナデ、接合部分外側はヘラ磨き。	暗褐色	φ1~2mm 大の砂粒と 雲母片を含 む	良好	
35	不明	L9区 SX2 西土器群	底径3.5	ほぼ平底の底部をもつ胴部。 外面・底面はナデ、内面はヘラ削り、底部内面はナデ。	暗赤褐色	φ1~5mm 大の長石砂 粒を多く含 む	やや 軟	
36	不明	L9区 SX2 西土器群	底径2.2	わずかに凹み底の底部をもつ胴部。 外面・底面はナデ、内面は不明。	赤褐色	φ2~6mm 大の長石砂 粒を多く含 む	軟	外面にスス付着
37	不明	L9区 SX2 西土器群	底径5.0	わずかに凹み底の底部をもつ胴部。 胸部外面はハケ目、内面はナデ、底部付近の内外面は指ナデ。	赤褐色	φ1~5mm 大の石英・ 長石砂粒を 含む	やや 軟	外面一部に スス付着
38	不明	L9区 SX2 西土器群	胸径25.8 底径4.8	倒卵形を呈し、凹み底の底部をもつ胴部。 胸部外面はナデ、内面はヘラ削り、底部付近の外側は貝殻による条痕調整、内面はナデ。	暗赤褐色	φ1~3mm 大の石英・ 長石砂粒を 含む	良好	
39	不明	L9区 SX2 西土器群	胸径23.0 底径3.8	倒卵形を呈し、小さい凹み底の底部をもつ胴部。 胸部外面はナデおよび貝殻による条痕調整、内面はヘラ削り、底部は指ナデ。	赤褐色	φ1~3mm 大の石英・ 長石砂粒を 含む	良好	
40	不明	L9区 SX2 西土器群	胸径15.8 底径3.8	倒卵形を呈し、小さい凹み底の底部をもつ胴部。 胸部外面はナデおよびヘラ削り、底部付近は外側がハケ目、内面はナデ。	赤褐色	φ1~3mm 大の石英・ 長石砂粒を 含む	良好	
41	壺形土器	L10区 SX1床面	口径14.0 胸径13.4	口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸くおわる。胸部は肩が張り、底部はわずかな凹み底。	橙褐色	φ1~3mm 大の石英・	やや 軟	表面の風化 が著しい

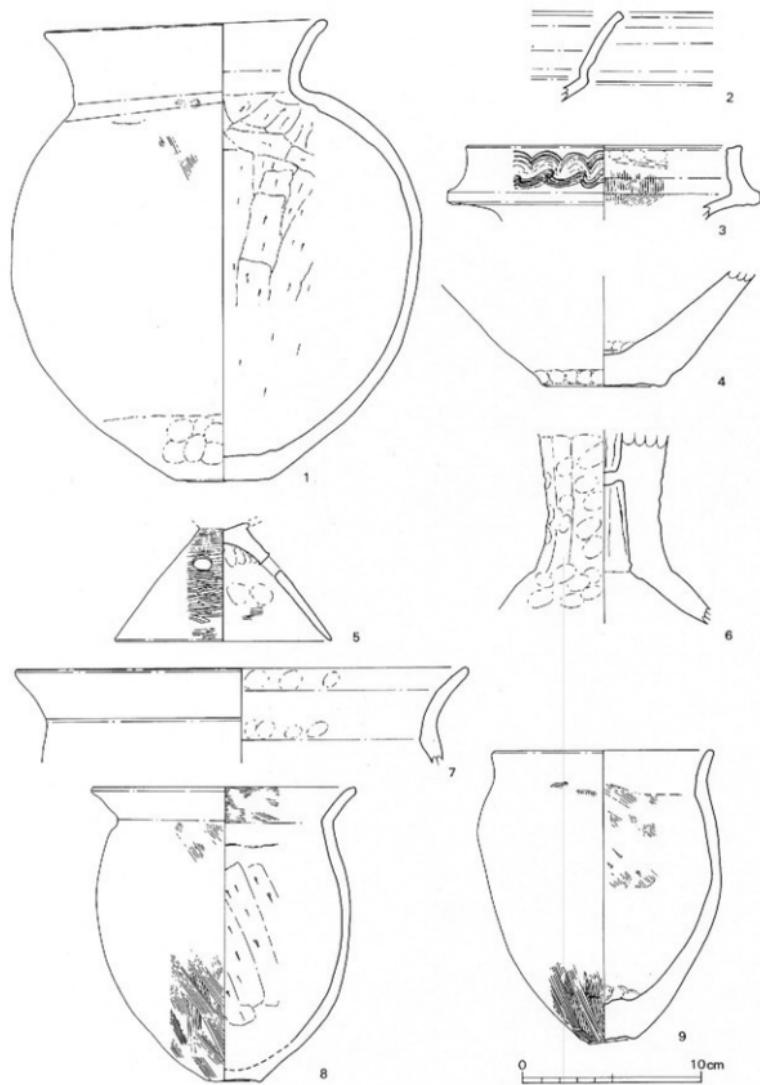
No.	器種	出土位置	寸法(cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
42	鉢形土器	L10区 SX1床面	口径11.2 器高5.9	口縁部は内湾気味に立ち上がり、器厚を減じつつ端部は丸くおわる。底部は底尖状の丸底。外面は一部へラ削りのちナデ、内面はナデ、口縁直下に指頭圧痕がのこる。	明槍褐色	φ1~3mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	軟	
43	鉢形土器	L10区 SX1床面	口径14.4 底径8.3 器高9.0	口縁部は外傾しながら立ち上がり、口縁部近くでやや内湾したのち外反して端部は丸くおわる。底部には内湾する脚台が貼り付く。風化が著しく調整は不規。	淡槍褐色	φ2~3mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	軟	表面の風化が著しい
44	壺形土器	L10区 SX1埋土	口径24.3 胴径23.1	口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸くおわる。肩部の張りは弱い。 外面はハケ目のみナデ、内面は口縁部がナデ、肩部がヘラ削り。	赤褐色	φ1~2mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	
45	壺形土器	L10区 SX1埋土	口径11.4 胴径13.3 底径2.6 器高16.1	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平らにおわる。肩部には連続刺突文がめぐる。肩部は倒卵形を呈し、底部はわずかな凸底。 口縁部は内外面ともナデ、肩部は外面がハケ目のみナデ、内面がヘラ削り。	赤褐色	φ1~4mm 大の石英・長石砂粒を含む	軟	
46	壺形土器	L10区 SX1埋土	口径14.4 胴径16.2	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平らにおわる。肩部の張りは弱い。 口縁部内外面および肩部外面はナデ、肩部内面はヘラ削り。	暗赤褐色	φ2~5mm 大の長石砂粒を含む	軟	
47	壺形土器	L10区 SX1埋土	口径20.0	口縁部は逆「V」字状にゆるやかに外反し、端部はやや凹んで平らにおわる。 外面はハケ目、内面はナデ、一部ハケ目で口縁端部付近は横ナデ。	槍褐色	φ1~3mm 大の石英・長石砂粒を含む	良好	
48	壺形土器	L10区 SX1床面	口径12.1 胴径12.9 底径2.1	口縁部は「く」字状に外反し、器厚を減じながら端部は丸くおわる。肩部は肩の張った倒卵形で底部は小さな平底。 口縁部は内外面とも横ナデ、肩部は外面がハケ目のみナデ、内面が肩部以下にヘラ削り、底部内面にはナデ。	明槍褐色	φ1~3mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	やや軟	肩部外面に炭化物付着
49	高坏	L10区 SX1埋土	脚端径14.3	高坏の脚部、脚部はゆるやかに外反し、脚端部は丸くおわる。 环部との接合部と脚端部内外面は横ナデ、脚部外面はハケ目。	赤褐色	φ1~3mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	軟	
50	高坏	L10区 SX1埋土		高坏の脚部、脚部はゆるやかに外反し、φ0.8~1.0cmの透かし孔4個がみられる。 外面は指ナデ、内面は指頭調整。	赤褐色	φ2~5mm 大の石英・長石砂粒を含む	軟	
51	壺形土器	L9区 SX2 東土器群	口径19.1 胴径18.1	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平らにおわる。肩部の張りは弱い。頭部直下に板状工具による沈線が部分的にめぐる。 口縁部は内外面ともナデ、肩部は外面がハケ目のみナデ、内面がヘラ削り。	赤褐色	φ1~3mm 大の石英・長石砂粒を含む	良好	外面全体にスス付着
52	壺形土器	L9区 SX2 東土器群	口径15.1 胴径17.0	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平らにおわる。肩部の張りは弱い。 口縁部内外面と肩部外面上半はナデ、下半は二枚貝による柔痕、肩部内面はヘラ削り。	赤褐色	φ1~5mm 大の石英・長石砂粒を含む	軟	肩部外面にスス付着
53	壺形土器	L9区 SX2 東土器群	口径18.8 胴径15.8	口縁部は「く」字状に大きく外反し、器厚を減じつつ端部は丸くおわる。肩部の張りは弱い。 口縁部外面はナデとヘラ磨き、内面はていねいなナデ、肩部外面はナデと頭部直下に板状工具による整形、内面はナデと板状工具によるナデ。	淡黄褐色	φ1~2mm 大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	肩部外面にスス付着
54	壺形土器	L9区 SX2 南斜面崩落土	口径16.5	口縁部は「く」字状に外反し、端部はやや肥厚し平らにおわる。肩部は強く張る。 口縁部は内外面ともナデ、肩部は外面がハケ目のみナデ、内面がヘラ削りのちナデ。	濃赤褐色	φ1~3mm 大の石英・長石砂粒を含む	やや軟	
55	壺形土器	L9区 SX2 南斜面崩落土	口径19.4	口縁部は「く」字状に外反し、端部は肥厚し平らにおわる。端面には2条の凹線が、肩部には二枚貝による連続刺突文がめぐる。肩部の張りは弱い。 口縁部は内外面ともナデ、肩部は外面がハケ目のみナデ、内面がヘラ削り。	赤褐色	φ1~3mm 大の長石砂粒を含む	やや軟	外面にスス付着

No.	器種	出土位置	寸法(cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
56	高坏	L9区 SX2 南斜面崩落土	口径36.5	皿状の环部から屈曲して立ち上がった口縁部は、大きく外反して開く。端部はやや肥厚し、平らにおわる。 外面は細かいハケ目、内面はハケ目のちへら磨き。	暗赤褐色	中1~2mm 大の石英、 長石砂粒を わずかに含む	良好	
57	高坏	L9区 SX2 南斜面崩落土	脚端径 25.1	大きく外反する脚部、端部はやや肥厚し、平らにおわる。円形透かし痕あり。 外面はハケ目のちへら磨き、内面はハケ目のち横ナデ。	暗赤褐色	中1~2mm 大の石英、 長石砂粒を わずかに含む	良好	56と同一個体と考えられる
58	壺形 土器	K9区 SX3床面b 土器群	口径15.5 胴径24.5	口縁部は球状を呈する脚部からゆるやかに外反しつつ立ち上がり、端部付近で強く外傾する。 端面は内傾気味に上方へ試張される。脚部には刻み目文の貼り付け突帯がめぐる。 口縁部は外面がナデとハケ目、内面がナデ、胴部は外面がハケ目、内面上半がハケ目、下半がヘラ削り。	黄褐色	中1~3mm 大の石英、 長石砂粒を 含む	やや 軟	外面とも 風化が著し
59	壺形 土器	K9区 SX3床面b 土器群	口径12.8 胴径13.8	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平らにおわる。肩部にはヘラ工具による連続刺突文がめぐる。脚部の張りは弱い。 口縁部は内外面とも横ナデ、脚部内面は指ナデ、脚部は外面がナデ、内面がヘラ削り。	赤褐色	中1~5mm 大の石英、 長石砂粒を 多く含む		外面全体に スス付着
60	壺形 土器	K9区 SX3床面b 土器群	口径12.4	口縁部は「く」字状にゆるやかに外反し、端部は平らにおわる。肩部には二枚貝による連続刺突文がめぐる。脚部の張りは弱い。 口縁部は内外面とも横ナデ、脚部内面は指ナデ、脚部は外面がナデ、内面がヘラ削り。	赤褐色	中1~2mm 大の石英、 長石砂粒を 含む	良好	
61	壺形 土器	K9区 SX3床面b 土器群	口径14.8	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平らにおわる。 口縁部は内面がハケ目のち一部ナデ、外面がナデ、脚部外面がハケ目のちナデ、内面がナデのち肩部以下にヘラ削り。	暗褐色	中1~3mm 大の石英、 長石砂粒を 含む	良好	口縁部外面 にスス付着
62	壺形 土器	K9区 SX3床面b 土器群	口径15.4	口縁部はゆるやかに外反し、端部はわずかに肥厚し平らにおわる。 口縁部は外面がナデ、内面がハケ目のちナデ、脚部は内面がヘラ削り。	橙褐色	中1~3mm 大の石英、 長石砂粒を 含む	良好	
63	壺形 土器	K9区 SX3床面b 土器群	口径19.1 胴径17.8	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平らにおわる。肩部の張りは弱く、半球状を呈する。口縁部は外面がナデ、内面がナデと貝殻条痕、脚部は外面上半がナデ、下半がハケ目、内面脚部付近がナデ、下半がヘラ削り。	赤褐色	中1~4mm 大の石英、 長石砂粒を 含む	やや 軟	外面にスス 付着
64	壺形 土器	K9区 SX3床面b 土器群	口径14.6 胴径18.5 底径3.5 器高22.8	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平らにおわる。肩部はやや張り倒卵形を呈し、底部は凹み底。 口縁部は端部付近内外面が横ナデ、内面がハケ目、脚部は外面がハケ目、内面がヘラ削り。	暗赤褐色	中1~3mm 大の石英、 長石砂粒を 多く含む	やや 軟	外面にスス 付着
65	壺形 土器	K9区 SX3床面b 土器群	口径18.2 胴径22.7	口縁部は「く」字状に外反し、端部はやや肥厚し、平らにおわる。肩部は球状を呈し、肩部に二枚貝による連続刺突文がめぐる。 口縁部は内外面とも横ナデ、脚部は外面がナデ、内面がヘラ削り。	黄褐色	中1~2mm 大の石英、 長石砂粒を 多く含む	やや 軟	
66	壺形 土器	K9区 SX3床面b 土器群	口径19.0	口縁部は「く」字状に外反し、やや内傾気味に立ち上がり、端部は平らにおわる。脚部は球状を呈する。 口縁部は内外面ともナデ、脚部は外面がナデ、内面がヘラ削り。	橙褐色	中1~2mm 大の長石、 中3~5mm 大の砂粒を 含む	良好	
67	高坏	K9区 SX3床面b 土器群	口径21.2	皿状の环部から屈曲して立ち上がる口縁部は大きく外反し、端部は粘土円盤を上方から充填している。脚部はゆるやかに「ハ」字形に開く。 内外面ともナデ。	黄褐色	中1~5mm 大の石英、 長石砂粒を 多く含む	やや 軟	
68	高坏	K9区 SX3床面b 土器群		口縁部は皿状の环部から屈曲して立ち上がる、外反する。环部の底面は粘土円盤を上方から充填している。脚部はゆるやかに「ハ」字形に開く。 内外面ともナデ。	橙褐色	中1~3mm 大の石英、 長石砂粒を 含む		外面の風化が著しい

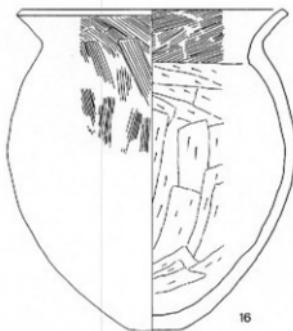
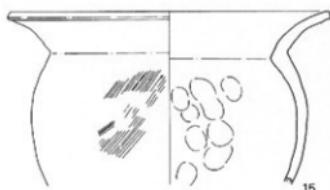
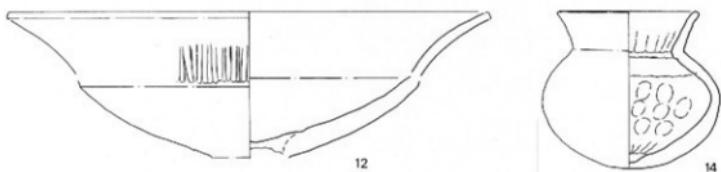
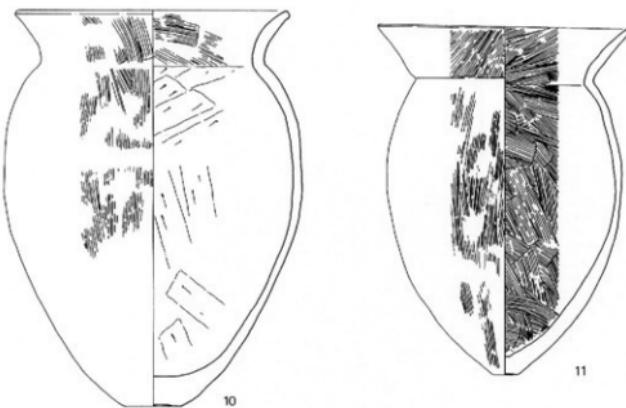
No.	器種	出土位置	寸法(cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
69	不明	K9区 SX3床面b 土器群	底径3.6	小さな平底の底部をもつ胴部。 外表面が板状工具によるナデ,内面がナデ,底部付近は内外面とも指ナデ。	黄褐色	Φ1~2mm 大の石英・ 長石砂粒を含む	軟	内外面の風化が著しい
70	不明	K9区 SX3床面b 土器群	底径6.6	凹み底の底部をもつ胴部。 胴部外面はハケ目,内面はヘラ削り,底部付近は内外面ともナデ。	赤褐色	Φ2~6mm 大の石英・ 長石砂粒を含む	やや 軟	
71	壺形 土器	J9区 SX3床面a 埋土	口径16.0	口縁部は「く」字状に外反し,端部は平らにおわる。 口縁部は内外面ともナデ,胴部は外表面がナデ,内面がヘラ削り。	淡橙褐色	Φ1~3mm 大の石英・ 長石砂粒を含む	軟	表面の風化が著しい
72	壺形 土器	J9区 SX3床面a 埋土		口縁部は「く」字状に外反し,端部は平らにおわる..肩部には二枚貝による連続刺突文がめぐる。 口縁部は内外面ともナデ,胴部は外表面がナデ,内面がヘラ削り。	淡橙褐色	Φ2mm大の 長石砂粒を含む	良好	
73	壺形 土器	J9区 SX3床面a 埋土		口縁部は「く」字状に外反し,端部は上方に拡張され,端面には凹線がめぐる.肩部には2条の平行寸線とヘラ状工具による連続刺突文がめぐる。 口縁部は内外面ともナデ,胴部は外表面がナデ,内面がヘラ削り。	淡橙褐色	Φ2~4mm 大の石英・ 長石砂粒を多く含む	軟	
74	鉢形 上器	J9区 SX3床面a 埋土	口径17.4 胴径15.7	半球状の体部から,口縁部がゆるやかに外反する。端部は下方にやや厚く,平らにおわる。 口縁部は内外面ともナデ,体部は外表面がハケ目のちナデ,内面がヘラ削り。	橙褐色	Φ1~2mm 大の石英・ 長石砂粒を含む	良好	
75	鉢形 土器	J9区 SX3床面a 埋土	口径16.0 胴径12.8 高10.2	半球状の体部から「く」字状に外反する口縁部が,内面に種をつくりてのびる。端部はやや丸みをもっておわる。 口縁部は外表面がハケ目のち板状工具によるナデ,内面がナデ,体部は外表面と内面上半がハケ目のち指ナデ・ヘラナデ,内面下半がナデ。	橙褐色	Φ1~3mm 大の石英・ 長石砂粒を多く含む	良好	体部下半は剥離
76	不明	J9区 SX3床面a 埋土	底径3.3	平底の底部をもつ胴部。 内外面ともナデ。	橙褐色	Φ1~3mm 大の石英・ 長石砂粒を含む	良好	
77	器台	J9区 SX3床面a 埋土	脚端径 12.5	「く」字状に上下に聞く小型の器台,台部は欠損していて不明,脚部はゆるやかに外反し,脚端部は平らにおわる.脚部中位に計12個の外側からの穿孔がみられる.また,脚部上端にも穿孔1個がみられる。 内外面ともナデ。	暗赤褐色	Φ1~5mm 大の石英・ 長石砂粒を含む	やや 軟	
78	不明	J9区 SX3床面a 埋土		器台または高环の脚部と思われる,大きく外反する脚端部で,端面は平らにおわる.外側からの穿孔がみられ,外面には板状工具による波状文がめぐる。 外表面がナデとヘラ磨き,内面がナデ。	黄褐色	Φ1mm以下 の細砂粒を 多く含む	良好	
79	壺形 土器	K6-7区 SX4土器群	口径17.1 胴径20.6	口縁部は「く」字状に大きく外反し,端部はさらに外傾してほぼ水平となり,平らにおわる. 胴部は肩が強く張り,側卵形を呈する.肩部には二枚貝による連続刺突文がめぐる。 口縁部は外表面がナデ,内面がハケ目,胴部は外表面がハケ目のちナデ,内面がヘラ削り。	橙褐色	Φ1~3mm 大の石英・ 長石砂粒を含む	良好	
80	鉢形 土器	K6-7区 SX4土器群	口径9.3 胴径9.4	口縁部は「く」字状に外反し,端部は平らにおわる.体部は半球状を呈す。 内外面ともナデ。	赤褐色	Φ1~5mm 大の長石砂 粒を多く含 む	軟	内外面とも風化が著し
81	鉢形 土器	K6-7区 SX4土器群	口径18.4 胴径16.9	口縁部はほぼ垂直の体部より外反し,端部は平らにおわる.体部は円筒状を呈し,底部は大き 具によるナデのちていねいなナデ,内面がヘラ削り,底部付近は内外面ともナデ。	暗赤褐色	Φ1~3mm 大の石英・	軟	

No.	器種	出土位番	寸法(cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
82	鍤形 土器	K6-7区 SX4土器群	口径19.2 胴径26.3	口縁部は「く」字状に大きく外反し、端部は平らにおわる。脚部は張り、倒卵形を呈する。肩部には二枚貝による連続刺突文がめぐる。 口縁部は内外面ともナデ、胴部は外面がハケ目(ちナデ)、内面がヘラ削り。	赤褐色	φ1~2mm 大の石英・ 長石砂粒を 含む	やや 軟	
83	鍤形 土器	K6-7区 SX4土器群	口径15.0 底径4.8 器高8.0	逆「ハ」字状にやや内湾気味に開く体部の端部付近はやや外傾し、丸くおわる。底部は平底。内外面ともナデ、底部付近は指ナデで、円盤状の粘土を充填している。	橙褐色	φ1~3mm 大の石英・ 長石砂粒を 含む	良好	
84	鍤形 土器	K6-7区 SX4土器群		口縁部は半球状の体部から外反し、端部は平らにおわる。 口縁部は内外面ともナデ、体部は内面がヘラ削り、外表面は不明。	赤褐色	φ1~3mm 大の石英・ 長石砂粒を 含む	軟	
85	高环	K6-7区 SX4土器群	口径26.5	口縁部は漏斗状の环部から外面に棱をつくり立ち上がり、外反して器厚を減しつつ端部は尖り気味におわる。脚部は「ハ」字状にゆるやかに広がり、透かし孔が1個みられる。 环部は外外面ともヘラ磨き、脚部は外面がヘラ磨き、内面がナデ。	黄橙褐色	φ1mm以下 の細砂粒を 多く含む	良好	
86	高环	K6-7区 SX4土器群	脚端径 13.4	「ハ」字状にゆるやかに広がる高环の脚部。脚端部はやや肥厚し、平らにおわる。中位に透かし孔を4個穿つ。 外面上半がナデ、下半がハケ目、内面がナデ。	橙褐色	φ1~3mm 大の石英・ 長石砂粒を 含む	やや 軟	
87	高环	K6-7区 SX4土器群	脚端径 13.5	「ハ」字状にゆるやかに広がる高环の脚部。脚端部はさらにお外反し、平らにおわる。中位に3個づつ2段、計6個の透かし孔を穿つ。 外表面は不明、内面はナデ。	橙褐色	φ1~4mm 大の石英・ 長石砂粒を 多く含む	やや 軟	外外面とも 風化が著し
88	不明	K6-7区 SX4土器群	底径6.2	やや凸面を呈する広い底部。 外表面がハケ目(ちナデ)、内面はヘラ削り、底面付近は指ナデ。	赤褐色	φ2~3mm 大の石英・ 長石砂粒を 含む	良好	外面にスス 付着
89	壺形 土器	J10区 SK1内埋土		外反する口縁部端面が上下両方に拡張される複合口縁壺。拡張部は大きく内傾し、下方端面は平らにおわり、ヘラ状工具による連続刺突文がめぐる。拡張部外面には縱方向の3条の沈線がめぐる。 内外面ともナデ。	橙褐色	φ2~5mm 大の石英・ 長石砂粒を 含む	軟	
90	高环	J10区 SK1内埋土		柱部が筒状を呈し、縁部が「ハ」字状に大きく外反する高環脚部。 柱部外面と縁部内外面がナデ。	橙褐色	φ1~3mm 大の石英・ 長石砂粒を 含む	やや 軟	
91	壺形 土器	K10区 SS 土器群	口径14.3 胴径24.1	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平らにおわる。脚部は強く張り、倒卵形を呈する。 口縁部は内外面ともナデ、胴部は外面が板状工具によるナデ、内面がヘラ削り。	赤褐色	φ1~2mm 大の石英・ 長石砂粒を 含む	良好	
92	壺形 土器	K10区 SS 土器群	口径11.8 胴径21.6 底径5.3 器高30.7	口縁部は「く」字状にゆるやかに外反し、端部はやや肥厚して平らにおわる。脚部は倒卵形を呈する。底部は平底。 口縁部は内外面ともナデ、胴部は外面がハケ目(ちナデ)、内面がヘラ削り。	黄褐色	φ1~3mm 大の石英・ 長石砂粒を 含む	良好	
93	壺形 土器	K10区 SS 土器群	口径16.6	口縁部は「く」字状に強く外反し、端部は平らにおわる。 口縁部は内外面ともナデ、胴部は外面がハケ目および板状工具によるナデ、内面がヘラ削り。	赤褐色	φ1~3mm 大の石英・ 長石砂粒を 含む	軟	外面にスス 付着
94	壺形 土器	K10区 SS 土器群	口径12.9 胴径12.7 底径4.7 器高15.3	口縁部は逆「L」字状に外反し、端部はやや肥厚して平らにおわる。脚部の張りは弱く、底部は平底。 口縁部は内外面ともナデ、胴部は外面が細かいハケ目、内面がヘラナデまたはヘラ削り。	暗橙褐色	φ1~2mm 大の石英・ 長石砂粒を 多く含む	良好	底部外面 にスス付着
95	壺形 土器	K10区 SS 土器群	口径12.5 胴径13.1	口縁部は「く」字状に外反し、端部はやや肥厚して丸くおわる。脚部の張りは弱く、肩部に二枚貝による連続刺突文がめぐる。	明赤褐色	φ1~4mm 大の石英・ 長石砂粒を	軟	表面の風化 が著しい

No.	器種	出土位置	寸法(cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
96	甕形 土器	K10区 SS 土器群	口径13.8 胴径13.0 底径2.8 器高14.2 ~14.8	口縁部は「く」字状に外反し,端部は丸くおわる. 脊部の張りは弱く, 底部は平底. 頸部外面にへラ状工具による連続刺突文がめぐる. 口縁部は内外面ともナデ, 脊部は外面がヘラナデ, 内面がヘラナデおよびヘラ削り, 底部付近はヘラ状工具による整形.	暗赤褐色	Φ0.5~1mm大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	胸部外面にスス付着
97	壺形 土器	K10区 SS 土器群	口径22.2	大きく外反する口縁端部が内傾し, 上下に拡張される複合口縁兼, 拡張部の外面には櫛描文と櫛描波状文がめぐり, 下方端面には二枚貝による連続刺突文がめぐる. 拡張部は内部がハケ目の中ナデ, 口縁部は外面がハケ目の中ナデ, 内面がハケ目.	暗赤褐色	Φ1~3mm大の石英・長石砂粒を多く含む	良好	
98	甕形 土器	K10区 SS 土器群	口径17.1 胴径20.3	口縁部は「く」字状に外反し, 端部はやや肥厚して平らにおわる. 端面には1条の凹線がめぐる. 脊部の張りは強く球状を呈する. 口縁部は内外面ともナデ, 脊部は外面がナデ, 内面がヘラ削り.	赤褐色	Φ1~3mm大の石英・長石砂粒を含む	やや軟	
99	甕形 土器	K10区 SS 土器群	口径20.4	口縁部は「く」字状に外反し, 端部は肥厚して平らにおわる. 端面には2条の凹線がめぐる. 脊部には二枚貝による連続刺突文がめぐる. 口縁部は外面がナデ, 脊部は外面がナデ, 内面がヘラ削り.	赤褐色	Φ1~5mm大の石英・長石砂粒を含む	やや軟	
100	甕形 土器	K10区 SS 土器群	口径13.8	口縁部は「く」字状にゆるやかに外反し, 端部は平らにおわる. 脊部の張りは弱い. 脊部に二枚貝による連続刺突文がめぐる. 口縁部は内外面ともナデ, 脊部は外面がナデ, 内面がヘラ削り.	赤褐色	Φ1~3mm大の石英・長石砂粒を含む	やや軟	
101	甕形 土器	K10区 SS 土器群	口径12.2 胴径13.3	口縁部は「く」字状にゆるやかに外反し, 端部は肥厚して平らにおわる. 脊部は球状を呈し, 脊部に連続刺突文がめぐる. 口縁部は内外面ともナデ, 脊部は外面がナデ, 内面がヘラ削り.	淡赤褐色	Φ1~3mm大の石英・長石砂粒を含む	やや軟	肩部外面にスス付着
102	甕形 土器	K10区 SS 土器群	口径16.1	口縁部は「く」字状に外反し, 端部はやや肥厚して平らにおわる. 内外面ともナデ.	暗茶褐色	Φ0.5~2mm大の石英・長石砂粒を含む	良好	
103	甕形 土器	K10区 SS 土器群	口径22.6 胴径25.5	口縁部は「く」字状に外反し, 端部はやや肥厚して平らにおわる. 脊部は球状を呈する. 口縁部は外面がナデ, 内面がハケ目, 脊部は外面がナデ, 内面がヘラ削り.	淡黄褐色 ~淡黄橙褐色	Φ0.5~2mm大の石英・長石砂粒を含む	やや軟	外面にスス付着
104	甕形 土器	K10区 SS 土器群		口縁部は「く」字状に外反し, 端部は平らにおわる. 脊部の張りは弱く, 脊部に二枚貝による連続刺突文がめぐる. 口縁部は内外面ともナデ, 脊部は外面がナデ, 内面がヘラ削り.	暗橙褐色	Φ2~3mm大の石英・長石砂粒を多く含む.	良好	
105	甕形 土器	K10区 SS 土器群		口縁部は「く」字状に外反し, 端部は丸くおわる. 脊部は強く張り, 球状を呈する. 脊部には二枚貝による連続刺突文がめぐる. 口縁部は内外面ともナデ, 脊部は外面がハケ目の中ナデ, 内面がヘラ削り, 脊部内面がハケ目の中ナデ.	黒褐色	Φ5mm大の砂粒を多く含む.	良好	

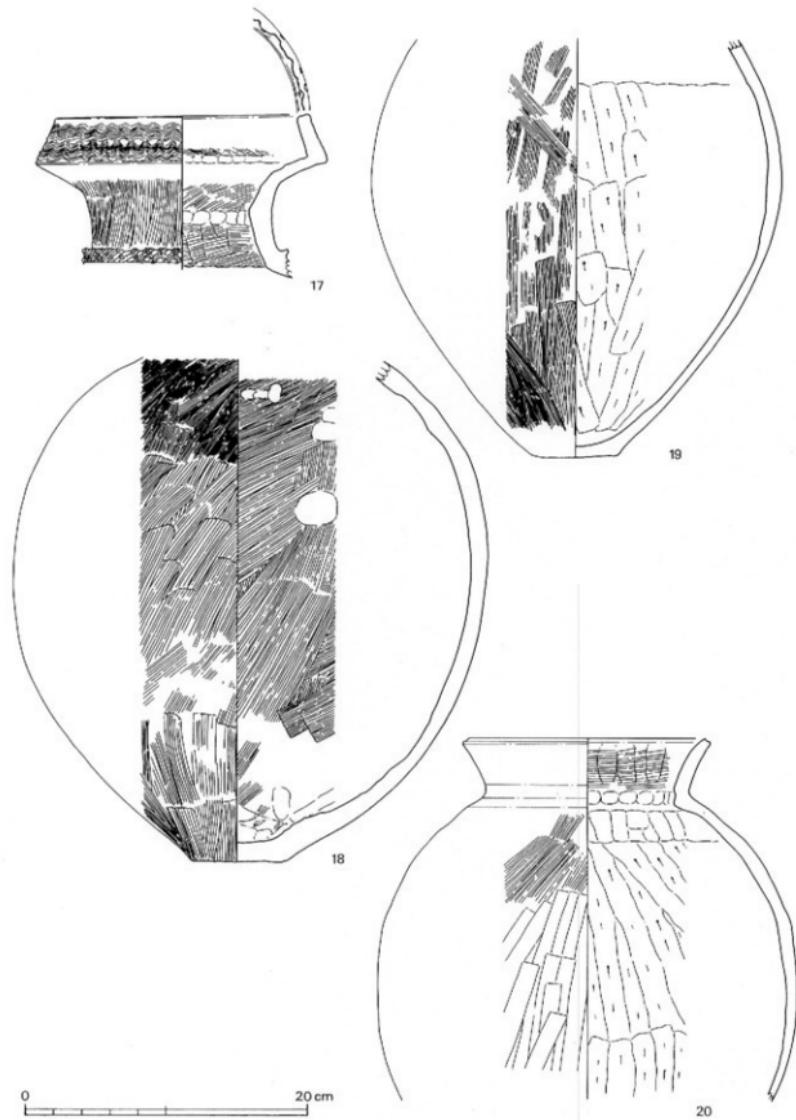


第22図 遺跡内出土遺物(1) ($S = 1 : 3$)

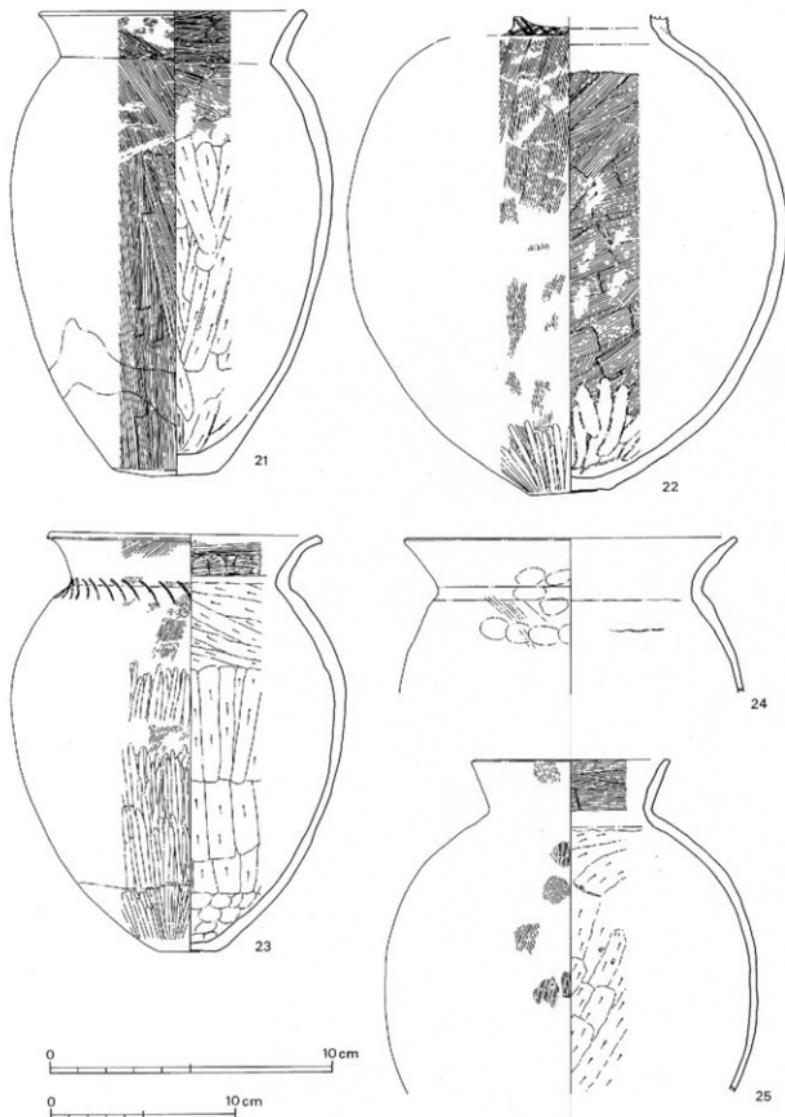


0 10 cm

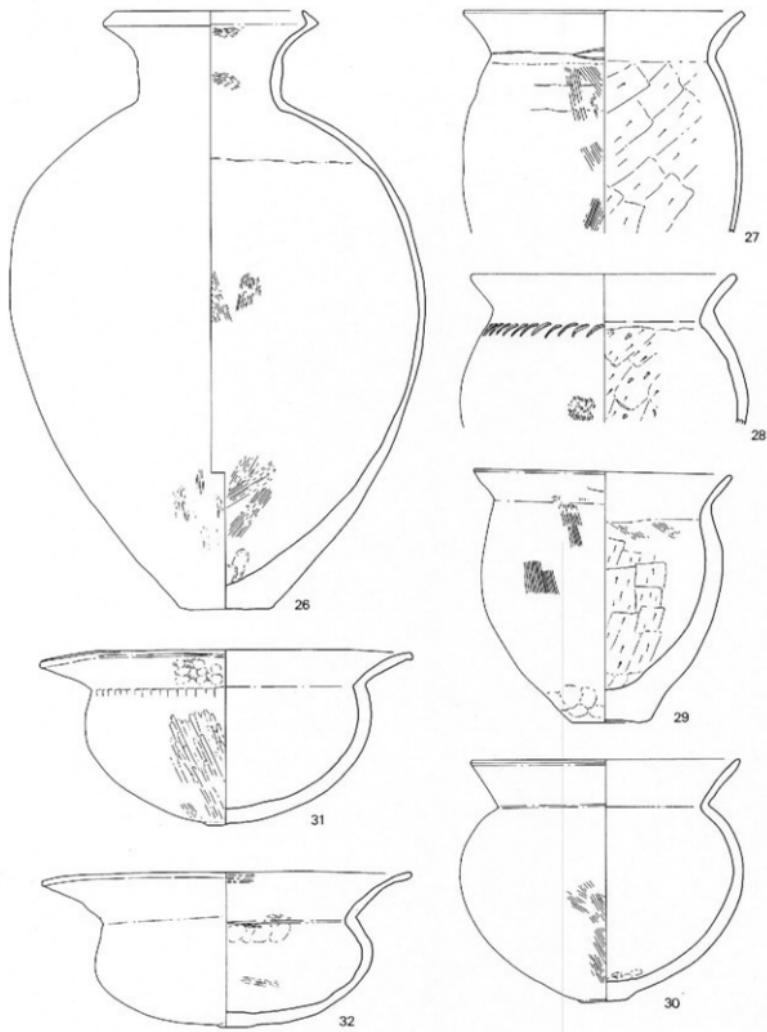
第23図 遺跡内出土遺物(2) (S = 1 : 3)



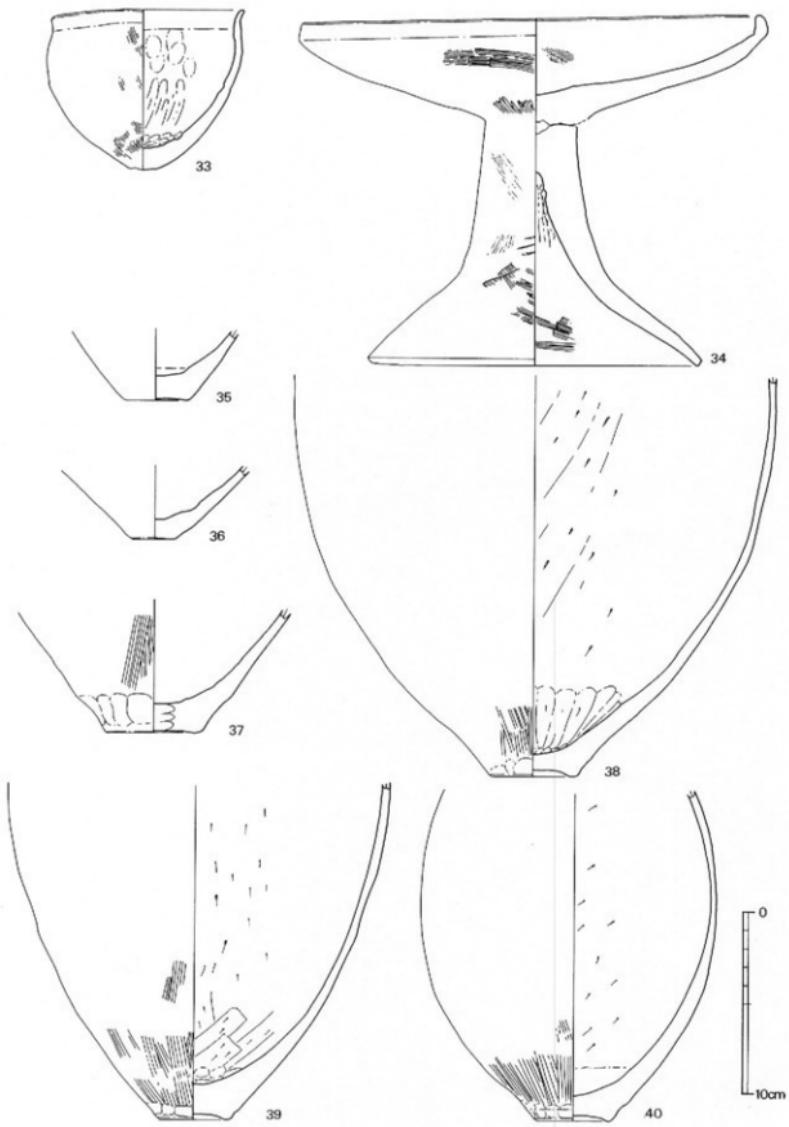
第24図 遺跡内出土遺物(3) ($S = 1 : 4$)



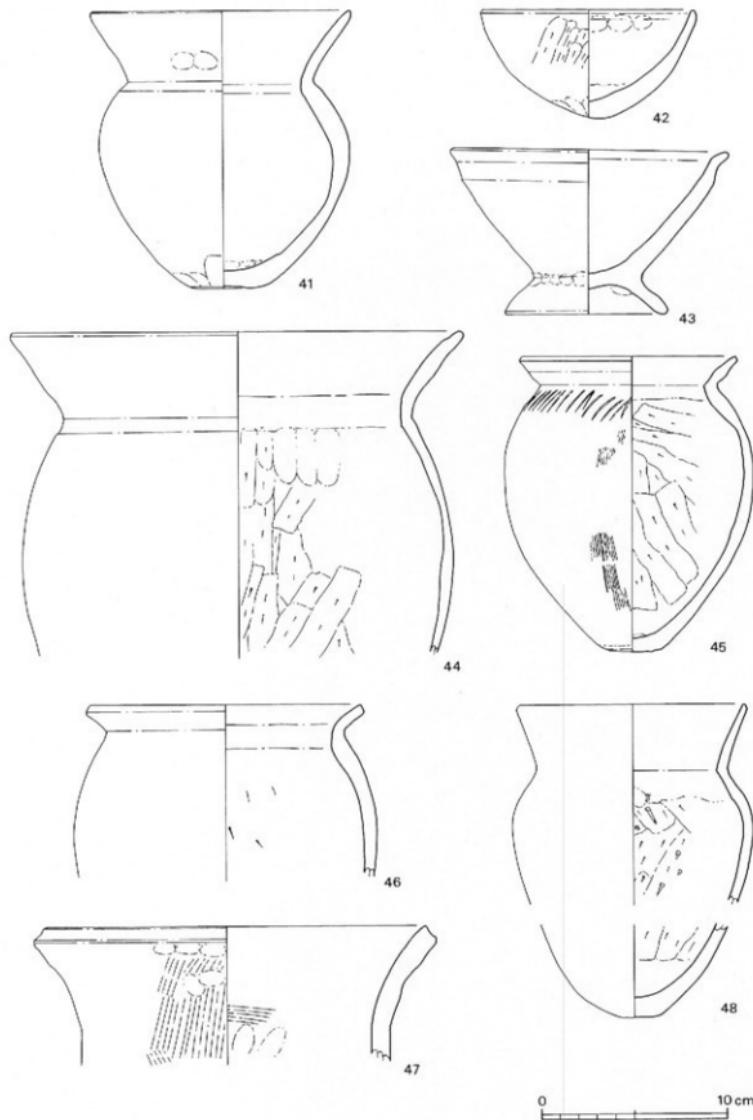
第25図 遺跡内出土遺物(4) (23・24は S = 1 : 3, 他は S = 1 : 4)



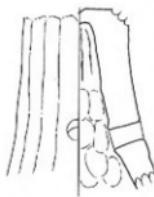
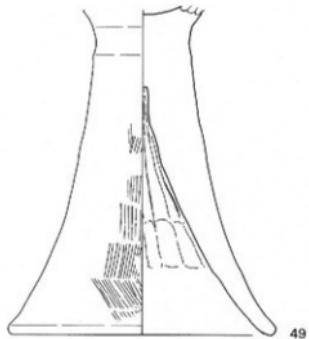
第26図 遺跡内出土遺物(5) ($S = 1 : 3$)



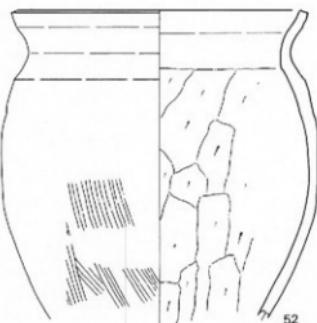
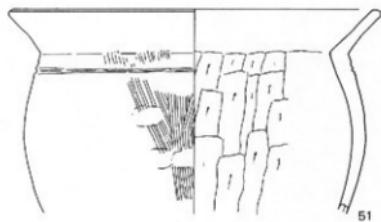
第27図 遺跡内出土遺物(6) (S = 1 : 3)



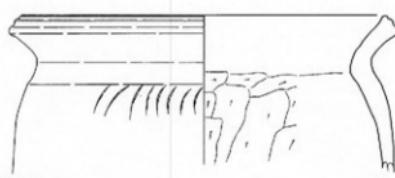
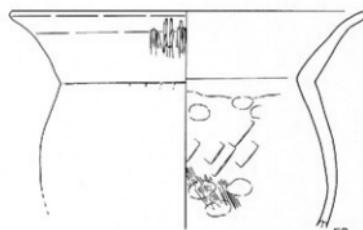
第28図 遺跡内出土遺物(7) ($S = 1 : 3$)



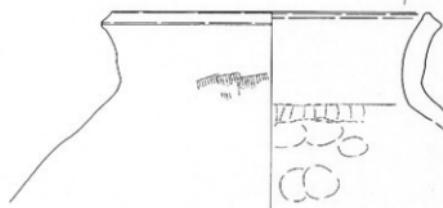
50



52

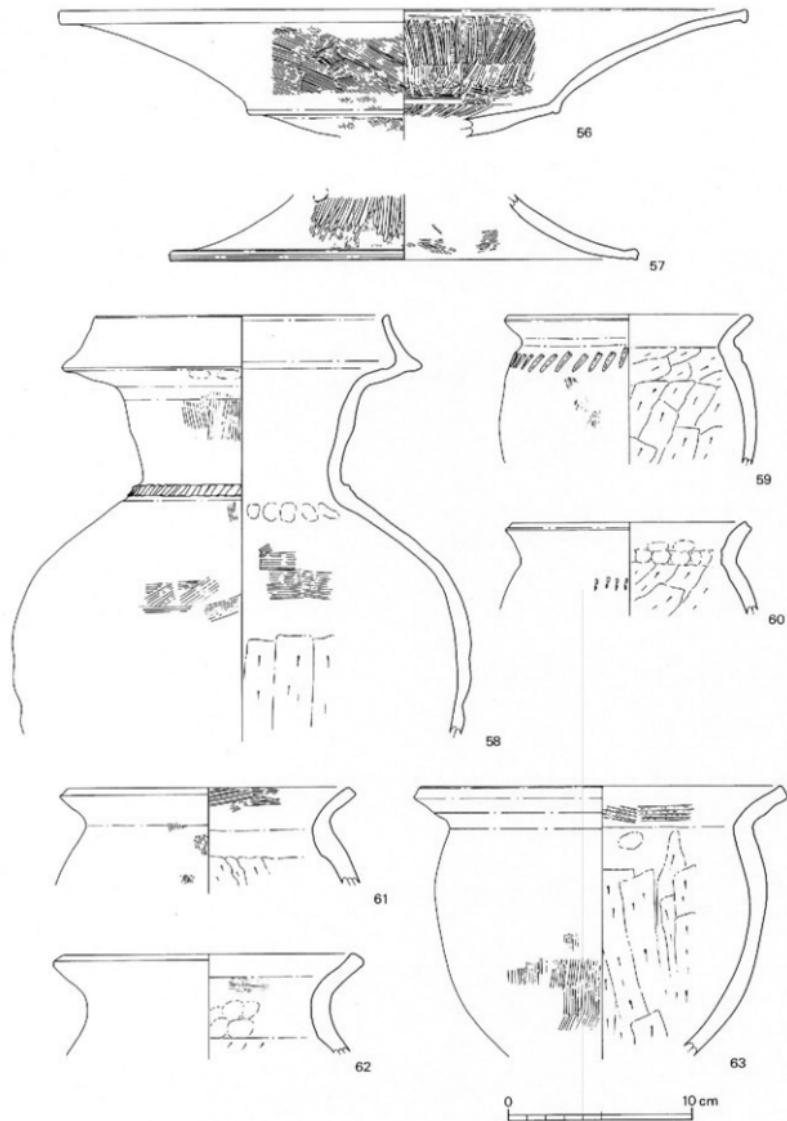


54

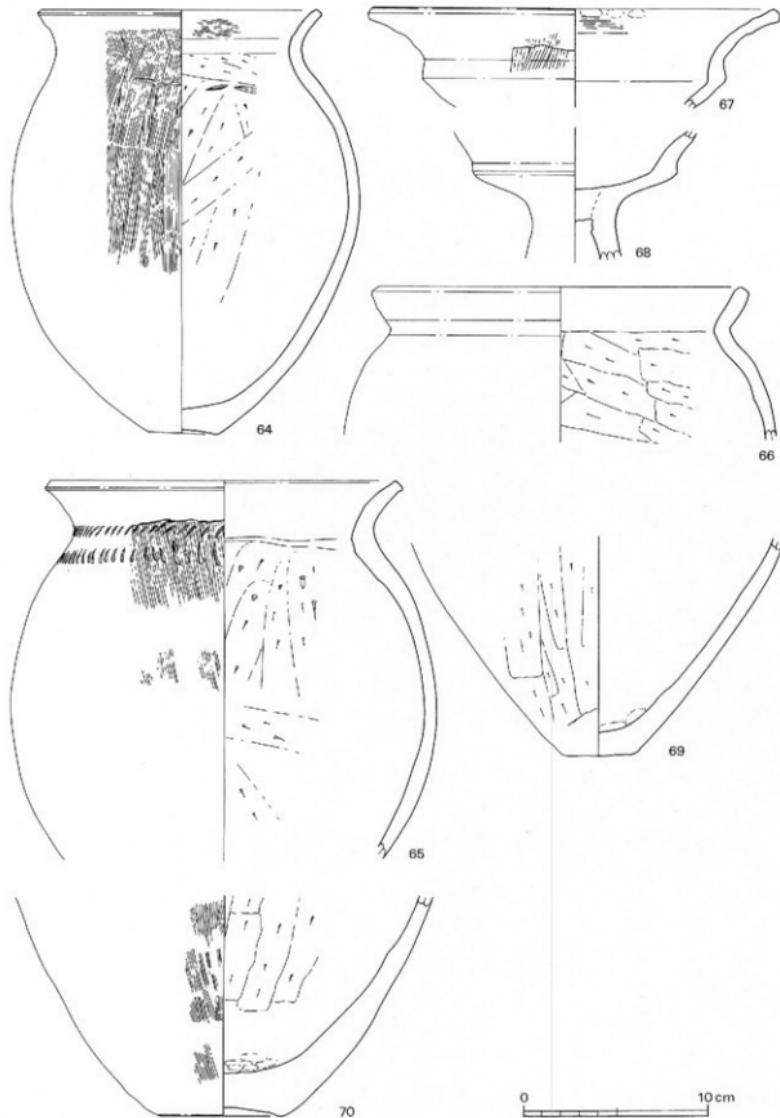


0 10 cm

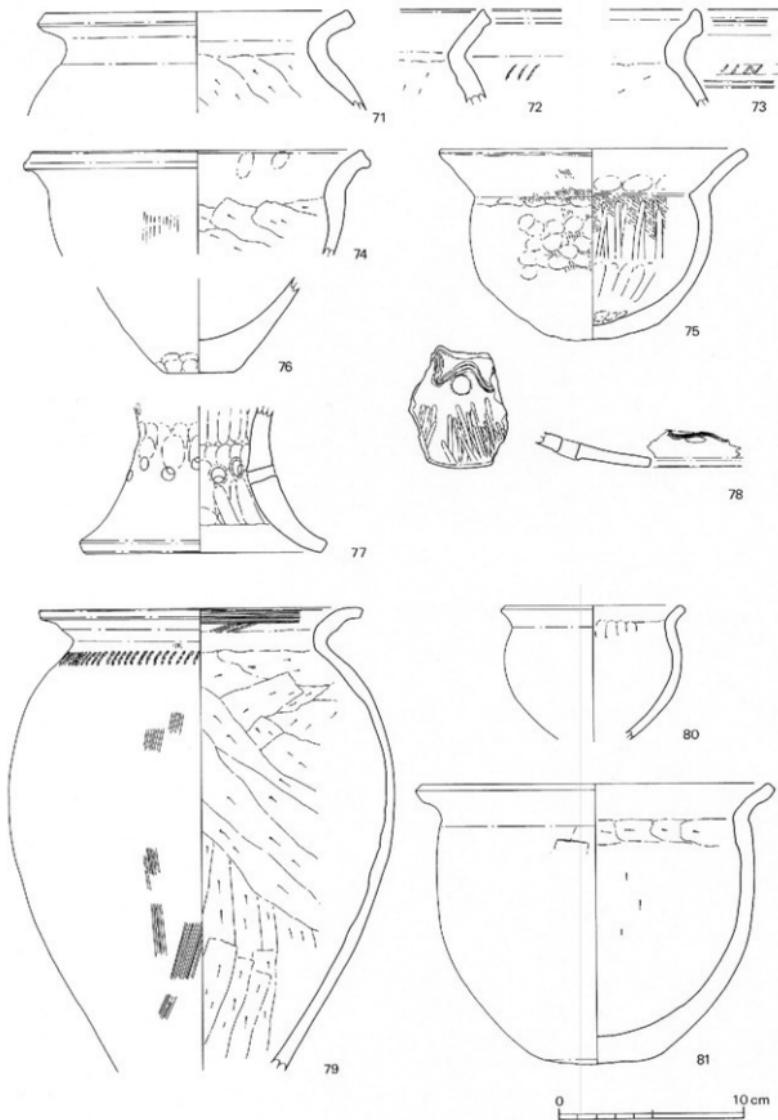
第29図 遺跡内出土遺物(8) ($S = 1 : 3$)



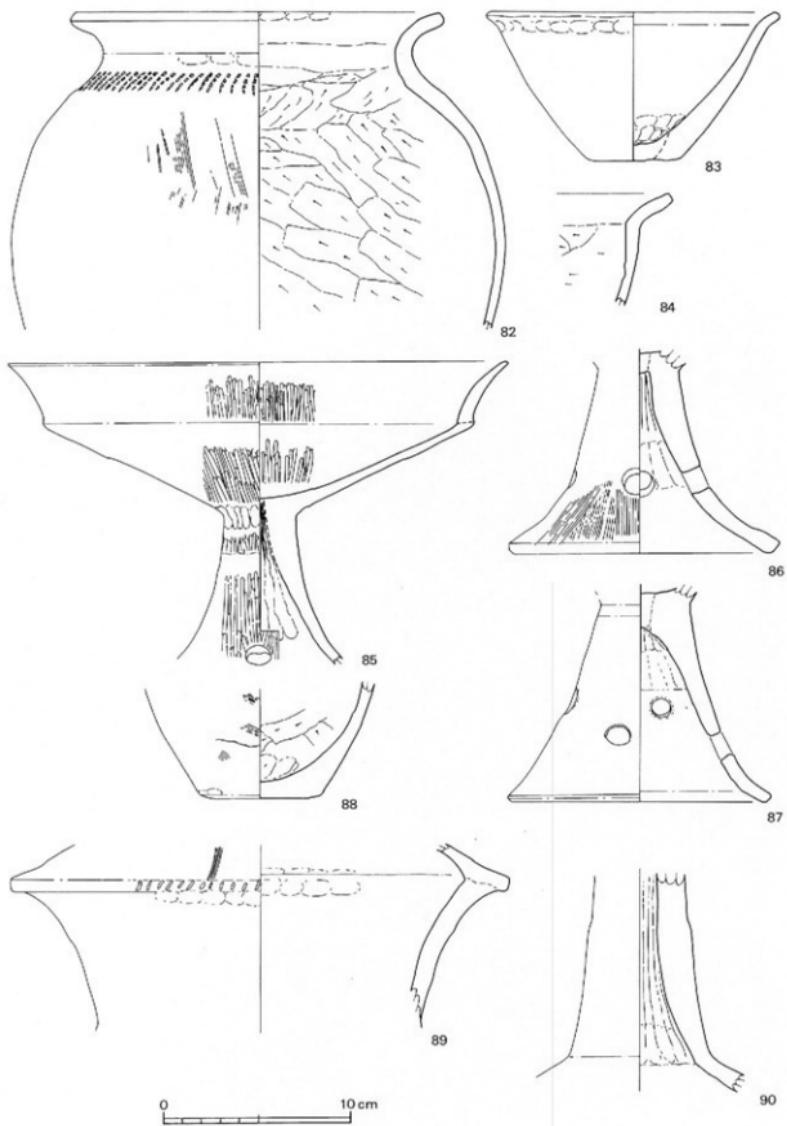
第30図 遺跡内出土遺物(9) (S = 1 : 3)



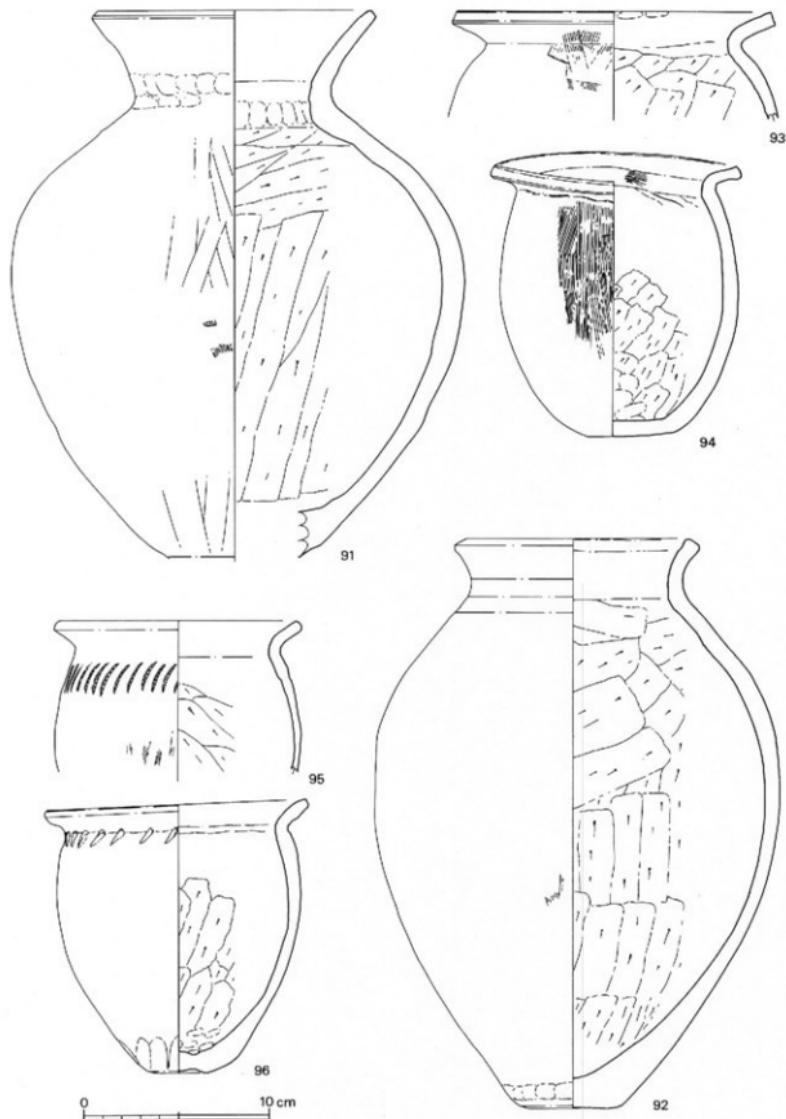
第31図 遺跡内出土遺物(1) ($S = 1 : 3$)



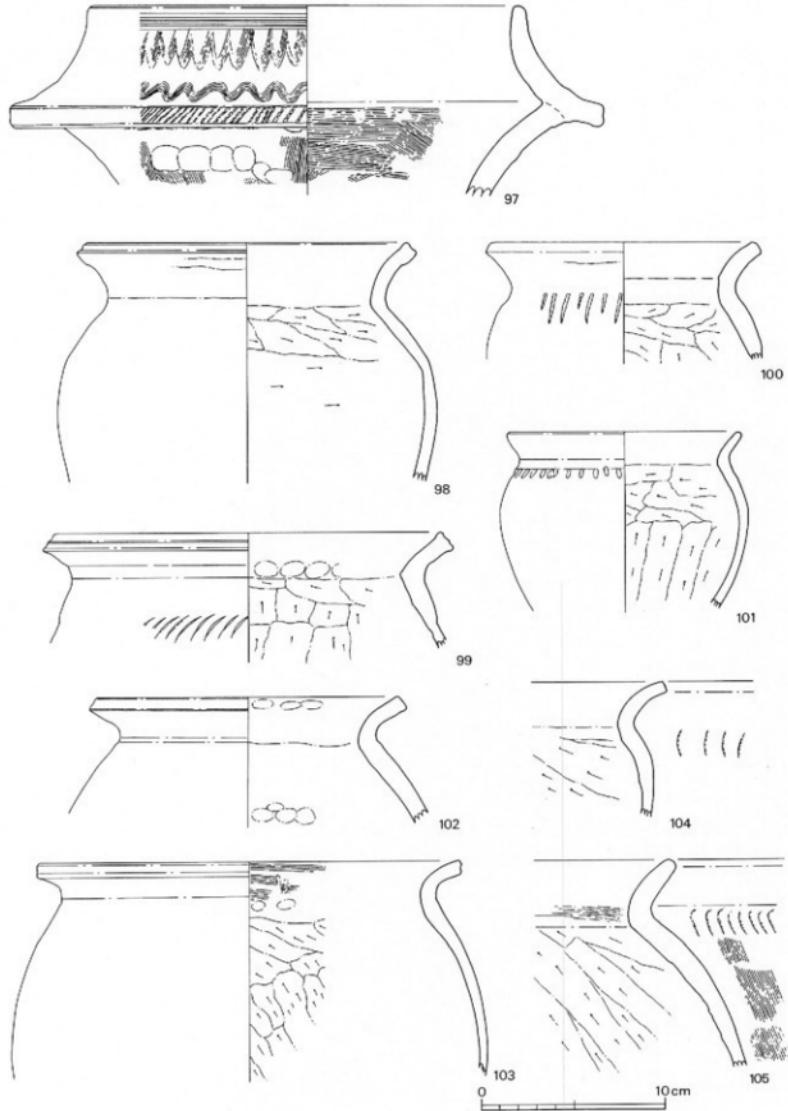
第32図 遺跡内出土遺物01 (S = 1 : 3)



第33図 遺跡内出土遺物(3) ($S = 1 : 3$)



第34図 遺跡内出土遺物⑩ (S = 1 : 3)



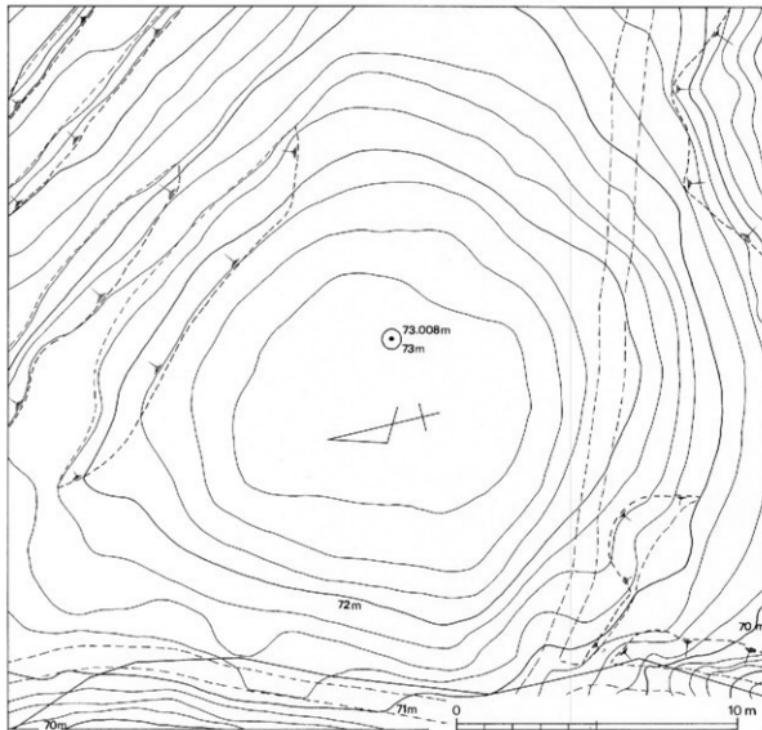
第35図 遺跡内出土遺物⑩ (S = 1 : 3)

2. 古墳群

(1) 概 要

本古墳群は、円墳5基、方墳1基、埋葬主体5基から構成される。本遺跡の範囲内において、西側削平箇所から丘陵尾根線の変換点箇所まで空白地帯があるため、西側と東側に分かれた分布状況になっている。ここでは便宜的にそれぞれを西墓群、東墓群と呼称する。西墓群には第2号～第4号古墳及びa主体が、また東墓群には第1号古墳、第5号・第6号古墳及びb～e主体が存在している。古墳については立地的にみれば主に丘陵尾根上に構築されたものと尾根線から若干外れて下った緩斜面上に構築されたものに分かれている。前者に当たるものは第1号～第5号古墳が、また後者に当たるものは第6号古墳がある。なお第6号古墳は埋葬施設が未確認である。しかし平面形状が方形を呈し、墳丘斜面に貼石を行なうなどの特徴から、他の事例から推測して墳墓（古墳）として扱う。

ところで第1号古墳裾北側、丘陵尾根鞍部付近において溝状遺構を確認し、その内外から須恵器や土師器が出土した。平面形態が北側に弧を描いていることから、第1号古墳に伴うというよりも鞍部側に存在した



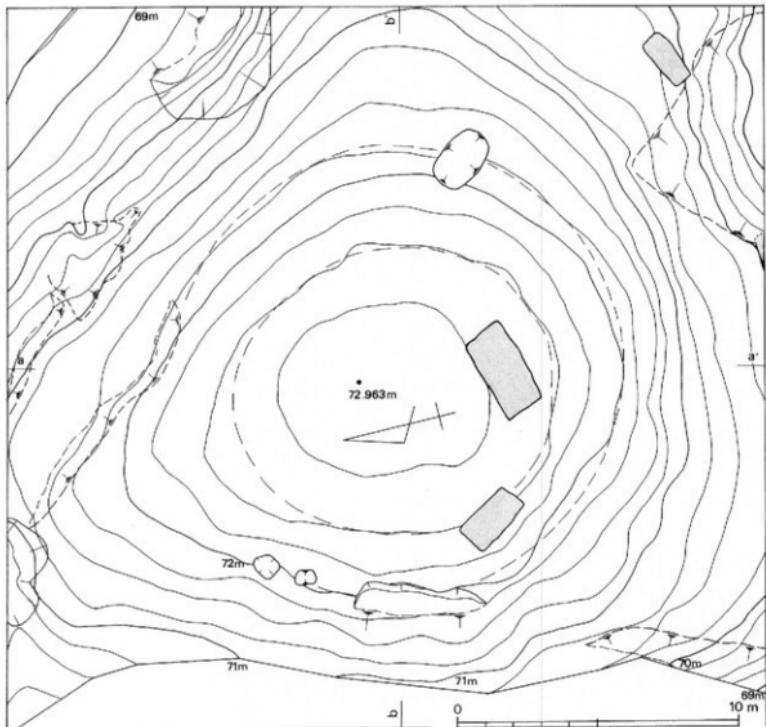
第36図 第1号古墳実測図（調査前）(S = 1 : 200)

古墳の周溝の可能性が想定される。なお古墳の番号は便宜的なもので、発見順につけている。

遺物には、埴丘覆土、周溝内や埋葬主体内から出土した土師器、須恵器が、また埋葬主体内から出土した鉄器、装身具などがある。

(2) 第1号古墳

第1号古墳は丘陵尾根軸線の変換点である丘陵鞍部まで下降した丘陵が再び隆起した箇所に立地する。この場所は丘陵先端域における最高所にあたり、眼下に広がる山本川が形成した沖積地だけでなく、太田川をはさんだ対岸の牛田・戸坂及び高陽地区など遠方に対する眺望も良好である。調査前の観察においても頂部の形状が人工的な平坦面を呈していたことから古墳の存在が想定できた。墳頂平坦面の標高は約73mである。本古墳南東側には等高線に沿うように北からd主体・e主体が、また北東斜面下にb主体が、南側裾に第6号古墳が、そして約20m東側の位置に第5号古墳がそれぞれ存在する。



第37図 第1号古墳実測図（調査後）(S = 1 : 200)

・墳丘（第36・37図・図版17）

調査前から墳頂平坦面が広いため、墳丘頂部は削平を受けていると推定された。調査の結果、墳丘頂部は表土直下数cmで地山（花崗岩バイラン土層）になっており、盛り土の確認はできなかった。また表土直下で地山が現れたことから、盛り土は墳丘斜面においても確認できなかった。そのことから、本来の小山状の自然地形を利用して一部を地山整形、加工を行い埋葬施設を埋め戻した後、古墳頂部にわずかな盛り土を行ったか、あるいは盛り土自体の行為がほとんどなされていないと考えられる。なお自然丘陵の高まりを利用しているためか溝などの掘削も行われていない。

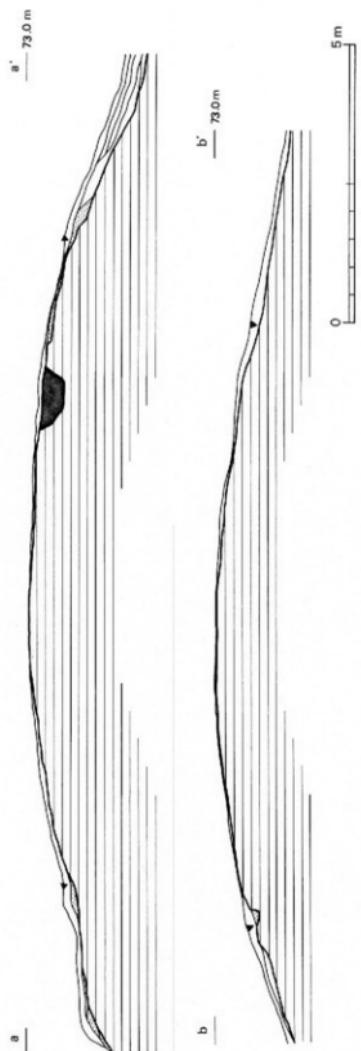
墳丘の平面形状はやや南北に長い楕円形と推定される。墳裾北東部は削平を受けており、幾らかいびつになっていた。墳丘の規模は、墳裾部における計測値で、現状で南北約16.5m、東西約16.0mである。また高さは東墳裾から約1.2m、西墳裾から約1.0mである。そして墳頂平坦面は直径約10mである。

遺物については、墳丘の覆土中から弥生土器・土師器の破片が、また墳頂部から小鉄器片が出土している。しかし本古墳に伴うのかどうかについては明確にできなかった。

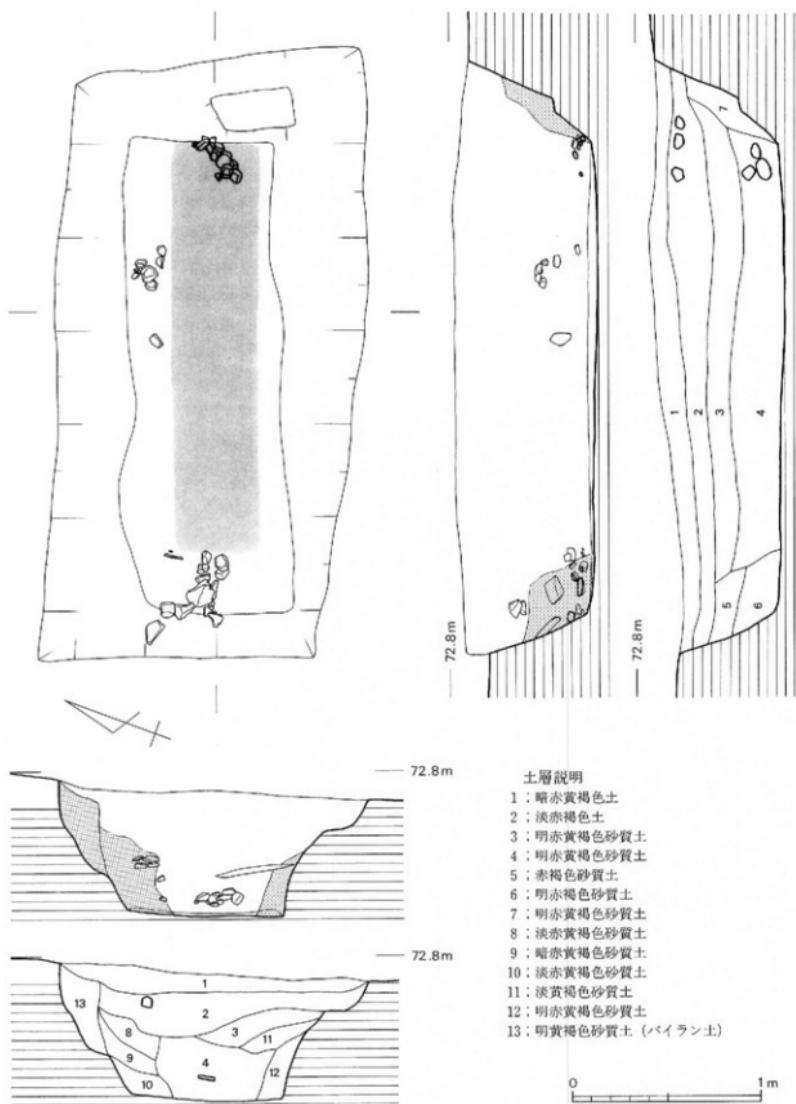
・埋葬主体（第39・40図・図版18）

埋葬主体は墳頂平坦面の南端と西端において等高線に沿うように掘り込まれた土壙2基である。中心部から外れており、中央部付近においても埋葬主体の存在が予想された。しかし平坦面上の他の箇所からは埋葬施設は確認できなかった。なお、ここでは東から第1主体、第2主体と呼ぶ。

第1主体は、掘り方上面の規模が長さ320cm、幅は東小口側で155cm、西小口側で148cmの長方形プランである。床面の規模は長さ253cm、幅は東小口側で80cm、西小口側で82cmである。深さは東小口側で65cm、西小口側で55cmである。東西小口部における高低差は、両小口側とともに標高約72.03mで



第38図 第1号古墳墳丘断面図 (S = 1 : 100)



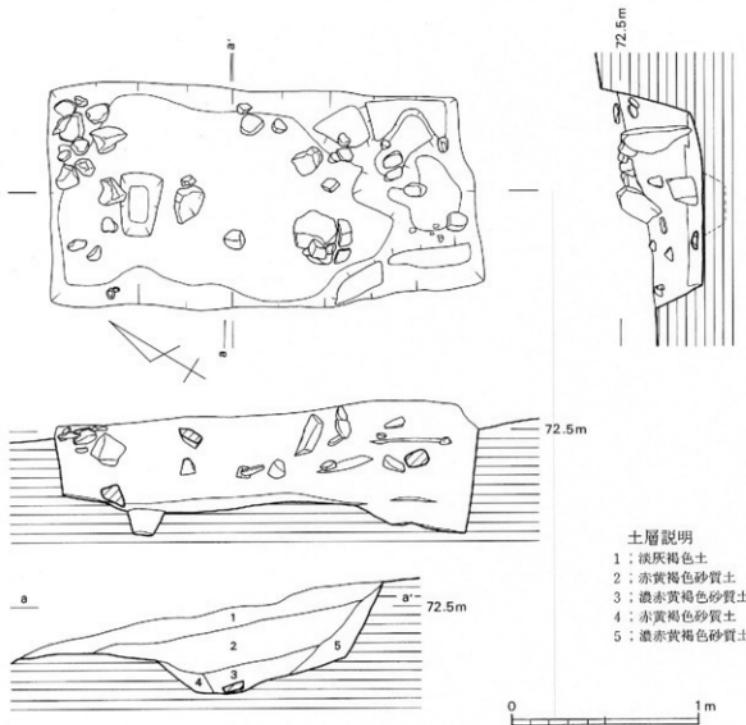
第39図 第1号古墳第1主体実測図 ($S = 1 : 30$)

濃網目：木棺推定範囲

あり、ほぼ平坦となっている。墓壇内における土層観察の結果、東西方向では西小口側から東方へ約32cmの位置に、また東小口側は土壙壁に接した位置に、一方南北方向では土壙両側壁から約17.5cmの位置に、その内・外において内側は比較的軟らかく、また外側は割合硬くしまるなど、土層の差異がみられた。そのことから、土壙内に長さ約224cm、幅約45cmの規模の木棺が埋置されていたと推定され、外側は裏込めとして固定された土層と考えられる。なお東西両小口付近と北側面の一部の3か所から拳大の小礫群を確認した。それぞれ推定される木棺ラインに沿った位置で出土しており、これら小礫群は木棺材の固定のための埋め土内に裏込め状に置かれたと推定される。本主体の長軸方向はN70°Eである。

遺物には、推定木棺西側小口の北隅部において、床面から約5cm程度浮いた状態で出土した鉈1点がある。刃先と柄は分離しており、刃先を柄に添えるようにして、柄部を木棺小口に対して平行に置かれていた。なお埋葬頭位方向は床面の高低差や幅の差などから決定できず、また副葬品の位置なども決定要因にならないことから不明である。

第2主体は、第1主体の約2.5m西側に造られていた。掘り方上面の規模が長さ約230cm、幅約120cmの長方



第40図 第1号古墳第2主体実測図 (S = 1 : 30)

形プランである。また床面の規模は長さ約213cm、幅は北小口側で約100cm、南小口側で約55cmである。深さは北小口側で32cm、南小口側で55cmである。南北両小口部における高低差は、南小口側は標高約71.95m、北小口側は標高約72.15mであり、北側が約20cm高い。床面の北小口壁から約30cmの位置において、上面の規模35cm×20cmの掘り込みを確認した。この掘り込みは小口板材を固定した穴と推定され、本主体においても木棺が埋置されたと考えられる。小口板固定の穴の位置関係から木棺は土壇のほぼ中央に埋置されたと考えられる。推定される木棺の規模は長さ100~120cm、幅40cmである。第1主体同様小礫を土壇床面や埋土中から確認した。このうちの多くは木棺材の裏込めとして使用されたものと考えられるものの、墓壇中央部において確認された礫についてはその性格は不明である。なお土壇南小口部から炭化物の小片を3か所で確認した。板材の強化のための乾燥化を意図したものかどうか不明であるものの、板材の表面を焼いたと推定される木棺材の痕跡と捉えられる。本主体の長軸方向はN31°Wである。埋葬頭位方向は土壇床面の高低差などから南方位と考えられる。

遺物は土壇内から出土していない。

・出土遺物

鉄器（第74図172）

施 第1主体から刀部と柄部が分離した状態で出土した。刀部は細長く下方に湾曲させ表面中央部に明瞭な鋒がつく。断面は「く」字状を呈する。刀部と柄部は接点はないものの、刀部最大幅と柄部幅はほとんど同じであることから、恐らく両者の境についても不明瞭と推定される。

(3) 第2号古墳

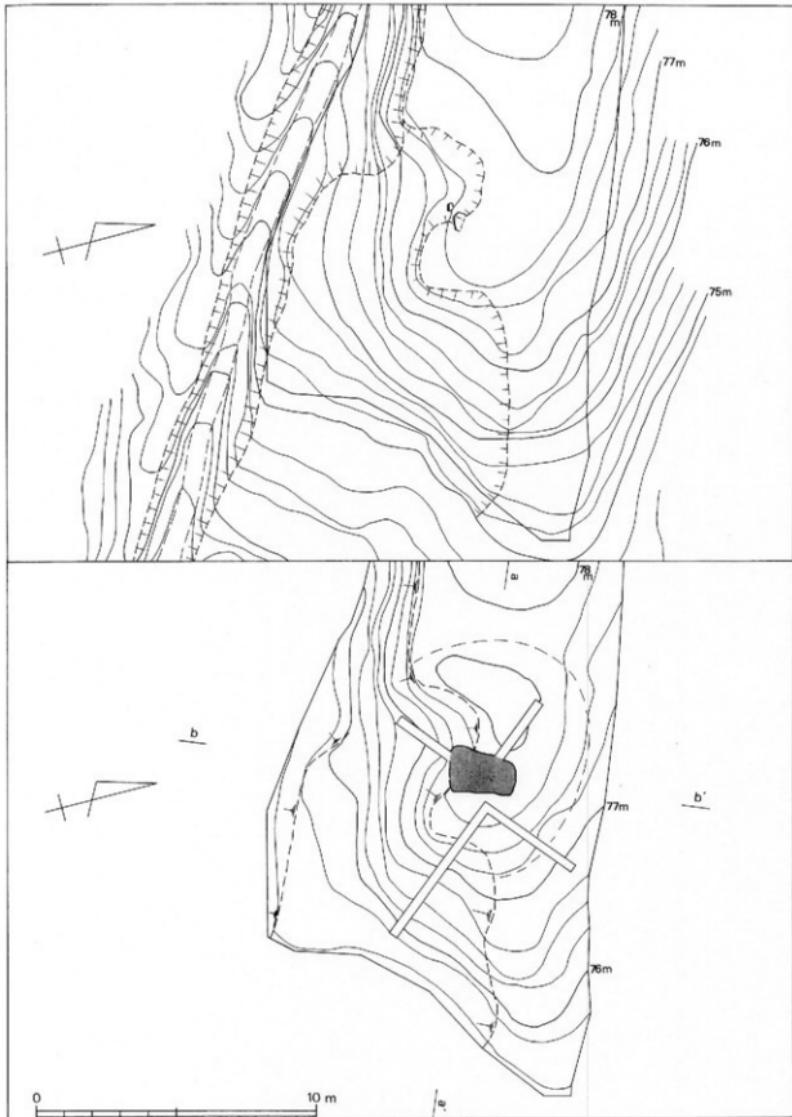
第2号古墳は西墓群の位置する直線状に派生した尾根上に立地する。本古墳の東側は耕作地造成のため、また南側は里道によって削平を受けており、本来の地形の状況を呈していない。旧地形の復元を行った場合、周辺の地形などから丘陵はこの付近から鞍部に向かって緩やかに下降すると推察される。仮にそうであるならば、この西墓群の東端箇所に位置することになろう。ちなみに墳頂部の標高は約78.1mである。この位置からは東方向の第1号古墳が障壁になっているものの、眼下に広がる沖積地への眺望は良好である。

なお削平を受けていることから、現状では墳形は不明確であった。しかしながらわずかな墳丘状の高まりと蓋石と推定される石材が露出しており、古墳の存在が想定された。

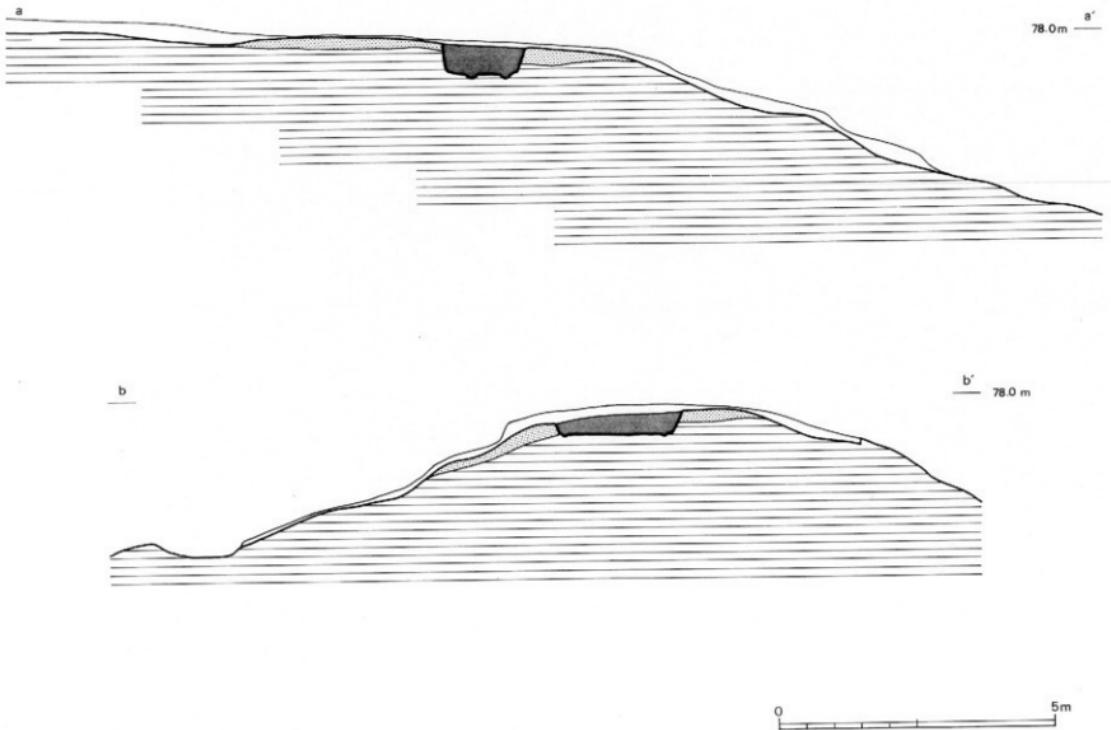
・墳丘（第41図・図版19-a）

墳丘の形状は、南から東側にかけて削平による搅乱が著しく不明確な部分があるものの円形であろう。ただ狭い尾根上という地形の制約からか東西にややゆがんだ楕円形となっている。墳丘については表土層直下に花崗岩土壇（淡黄褐色土）上に花崗岩風化土壇状の淡暗黄褐色土がみられ、明確な盛り土については確認できなかった。しかし主体部の蓋石の確認位置は、確認した掘り方上面からわずか約2cm下であることから盛り土は流出していると推察された。古墳築造に伴う溝などの開削についてもほとんど行われていないことが観察されることから、旧地表面を整形し埋葬施設を構築後、わずかな盛土などで封鎖したと推定される。墳丘の規模は東から南側が削平され、正確な規模はわからないが、現状での規模は墳裾における計測値で、東西約8.5m、南北約7mである。高さは西墳裾から約0.4m、東墳裾から約0.8mである。

遺物は墳丘の覆土中から須恵器の破片が出土している。また東側削平箇所にあたる斜面や平坦面上に設定



第41図 第2号古墳実測図（調査前・後）（S = 1 : 200）



第42図 第2号古墳埴丘断面図 ($S = 1 : 100$)

したトレンチからも須恵器の破片が出土している（165など）。これらの土砂は尾根からの流出土である可能性もあり、そうであればこれらの須恵器も本古墳に伴う可能性もあるかもしれない。

・埋葬主体（第43図・図版19-b）

埋葬施設は箱式石棺である。墳丘の中央からやや東側よりに確認された掘り方は南半部上面及び南小口西側は削平されており、遺存状況は悪い。平面形状は南半部が幅広になる長方形を呈している。掘り方の規模は、現状上面で長さ240cm、幅は北側約110cm、南側約145cm、深さは北側で約40cmである。掘り方内は石棺を埋置するために二重の掘り込み状を呈していた。すなわち長さ220cm、幅は北側小口約108cm、南側小口約135cmの規模の一段目の床面に、東側はほぼ一段目の壁に接し、西側は最大幅50cmの広い空間をもたせるように、上面長さ206cm、幅は北側で約87cm、南側で約69cm、下面長さ185cm、幅は北側で約70cm、南側で約65cmの規模の掘り込みがなされている。また南北両小口はある程度傾斜をもっているものの、東西両壁は垂直に近い。

石棺の蓋石は長辺70~80cm、短辺50~65cm、厚さ12~15cmの方形の板石3枚で構成されている。この3石のうち、北側の石材は他の2石に比べて規模が大きい。蓋石間は隙間が存在しているものの、粘土等の目張りを行っていない。

本石棺は両側壁石で小口石をはさむ構造である。東西両側壁はともに4個の石で構成されており、厚さ25cmの石材を使用している北1石目以外は厚さ12~15cmとやや薄手の長方形の板石を横長に立てて構築されている。いずれの石材も下端部を若干埋め込んで上端面の高さを調整している。石材間は上端面の傾斜を合わせるように構築されているものの、各石材の形態が揃わず一部隙間があるため、東壁の北から1石目と2石目の隙間にように小縫を詰めている箇所もある。

南北の両小口石は1枚づつで、北小口と両側壁との隙間には1~2片の小礫を詰めている。底面には石は敷いていない。棺の内法は長さ155cm、幅は南側で30cm、北側で32cmである。南北両小口部における高低差は、南小口側は標高約77.34m、北小口側は標高約77.37mであり、わずかに北側が高い。埋葬頭位方向は内法幅などから北方位と推定される。石棺の主軸方向はN22°Eである。南側小口から25~35cm北側の位置の床面近くから小礫2片が検出された。転石の可能性があるものの、その場合かなり早い段階になり、当初から存在していたと考えられる。出土位置や頭位方向が北と推定されることなどから枕石とも考えられず、その性格については不明である。

石棺内外及び掘り方内からは人骨及び遺物は出土していない。

・出土遺物

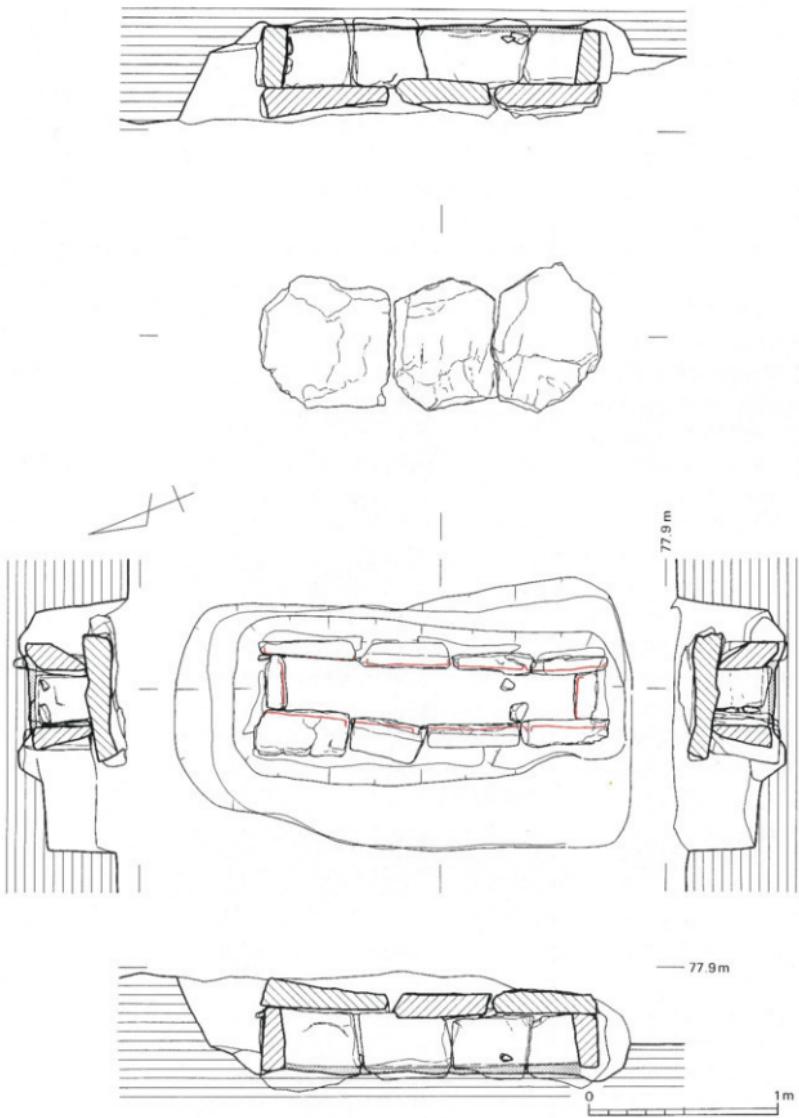
土器（第68図106~109）

墳丘覆土中からは、須恵器の甕あるいは壺と推定される胴部と底部の小片2点と無蓋高坏の口縁部と考えられる破片および小型器種の口縁部の破片2点が出土している。

無蓋高坏(106) 端部を丸く仕上げるものである。復元口径は14.4cmである。

口縁部(107) やや内傾気味に立ち上がり、端部はやや尖り気味に收める。

甕(壺)(108·109) 108は体部の破片で外面に叩き痕がみられ、内面はすり消している。109は底部の一部の破片で、外面は指なで、内面は底部は指なで、それから上は回転なで調整である。



第43図 第2号古墳主体部実測図 ($S = 1 : 30$)

(4) 第3号古墳

第3号古墳は、下降する丘陵尾根筋が若干緩やかになる傾斜変換点付近に立地する。第2号古墳の約5m西側に位置する。調査前の現地表面での観察からも、墳丘状の高まりと墳丘西側の溝が確認できた。西墓群中において他の古墳に比べ規模的には突出はしていないものの、確認が可能な古墳のひとつであった。埋葬主体の側壁の石材の一部が露出していたことから、箱式石棺状の埋葬主体が構築されていると推定された。なお墳丘頂部の標高は約79.1mである。本古墳も第2号古墳同様、南東方向の眺望は第1号古墳によって遮られているものの、眼下に広がる沖積地への眺望は良好である。

・墳丘（第44図・図版20）

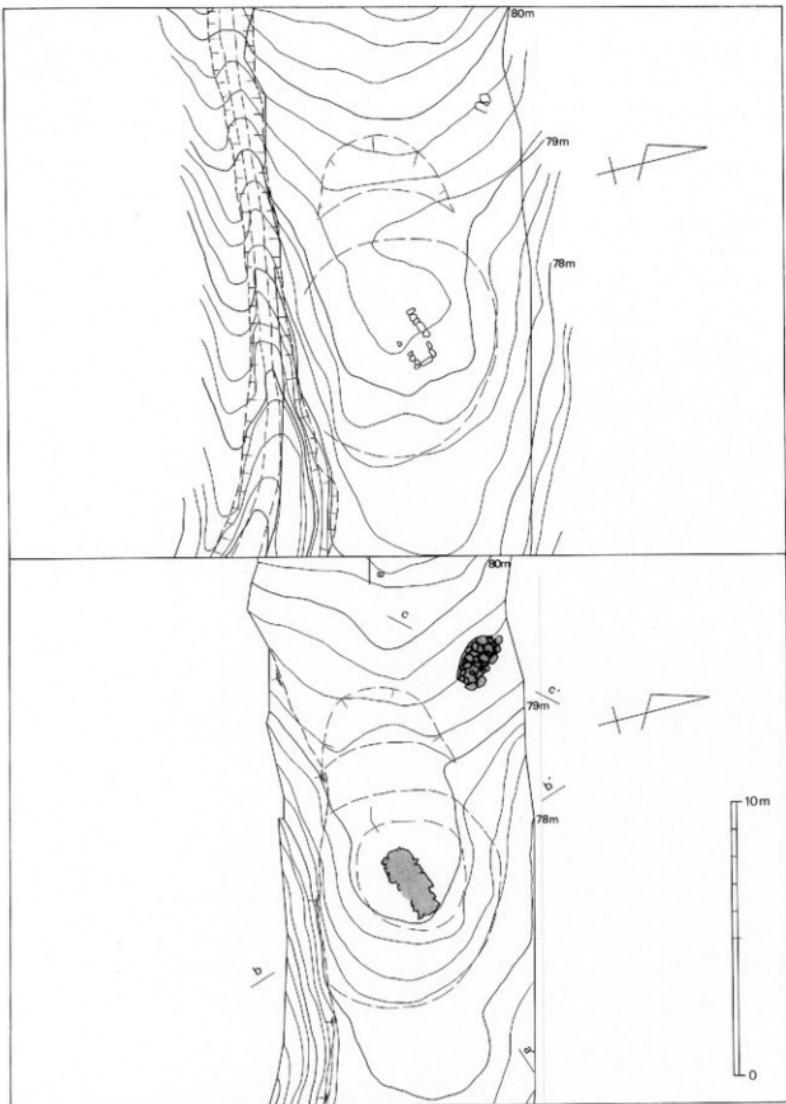
本古墳は、旧地形の整形を行うとともに、山側にあたる丘陵西側斜面に溝を掘り込むことによって出た土砂を盛土して墳丘が構築されている。盛土の高さは現状で約0.3mである。墳丘の形状は南側は里道によって削平され、また地形に制約されているためか、やや東西に長くなる橢円に近い円形になっている。墳丘の規模は墳裾における計測値で東西約8m、南北は現状で約6.5m（推定7m）である。墳頂平坦面は直径約4mである。西側の溝の規模は、長さ約6m、幅約1.5mである。高さは現状では東側裾からは約0.9mとなっている。西側裾からは約0.2m程度しかないものの、上方の西側斜面を溝として掘り込むことによって視覚的にはそれ以上に高く感じるようにならされている。

・埋葬主体（第46・47図・図版21・22）

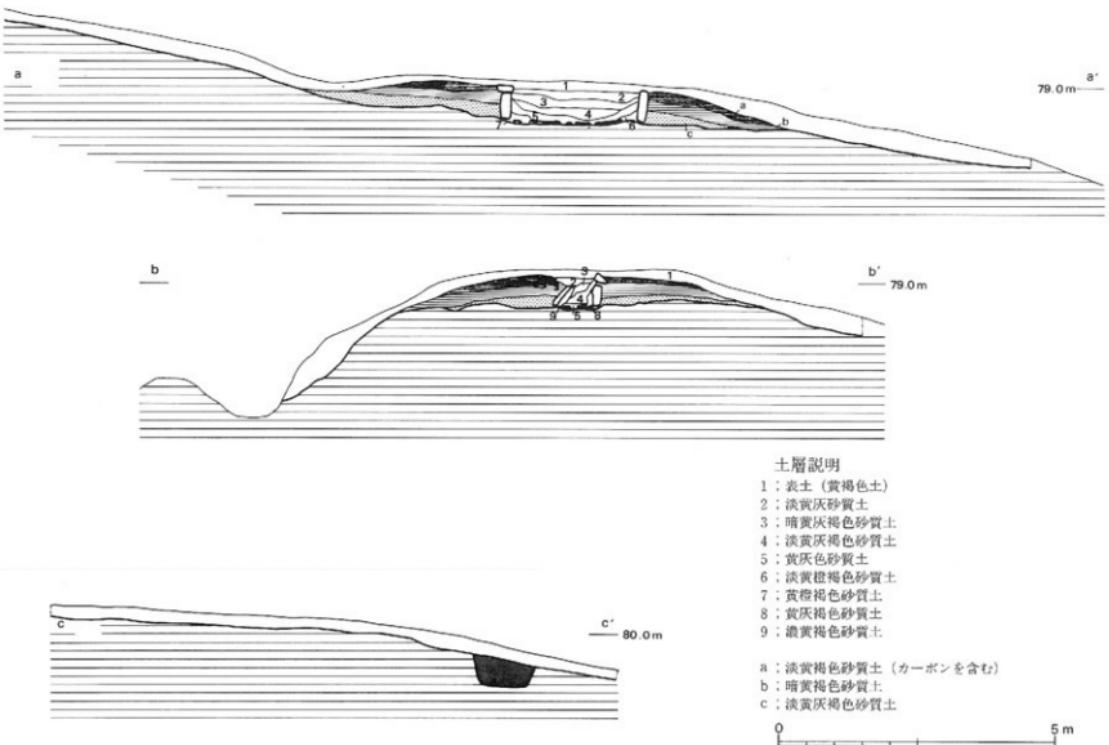
埋葬施設は、墳頂平坦面のほぼ中央に構築された、箱式石棺と竪穴式石槨の要素を併せ持つ形態の石槨である。墳頂平坦面および墳丘の断面からは明確な掘り方のラインが確認できなかったため、本来から掘り方は存在せず、旧地形を若干掘り込んで石材を固定し、構築しながら盛り土を行ったと推定される。裏込め等の補強をおこなっておらず、また石材の固定が弱かったためか、南側壁の西から5石目と6石目は極端に内側に傾いていた。また前述のように調査前から側壁石が露出しており、かつ蓋石は遺存していなかった。石槨内の土層観察において、その堆積状況は比較的整然としており、搅乱についてもみられなかった。そのことから石蓋による被覆ではなく、木蓋であった可能性もある。

本石槨は、両側壁石で小口石をはさむ構造である。側壁については、北側は比較的平らな8枚の板石を、床面を若干掘り込むなどして縦長に広口積みし、その上面には西小口から1.6mの位置までは1段ないし2段、板石を小口積み（横積み）にして高さを調整している。南側も床面を掘り込んで比較的平らな8枚の板石を縦長に広口積みし、その上方には西小口から約1mの位置までは1段ないし2段、板石を小口積み（横積み）にして高さを調整している。両側壁とも、それぞれの板石の形態が不揃いのため隙間が存在している。両小口石については、西側は板石を縦長に設置し、その上に板石を横長に設置している。基底となっている縦長に設置した石材の上面が平坦でないことから、上石を平坦にするためにできた隙間に小礫を詰めている。東側は1枚の板石を縦長に設置しているだけである。東小口石材の基底部の上端面は西側の石材と異なり揃っていることからもともと存在していなかったかもしれない。しかしながら現状では両小口間において高低差ができるおり、なおかつ東側にもその上に長手積み（横長）に設置した板石が存在していた可能性があるものの、両側壁の西半部が上面はほぼ揃っている状況にあるとのとなり、東小口付近はやや不揃い感があることや調査前から石材が東側を中心に露出していたことも併せて、本来存在したが消失したと考えることもできよう。

石槨の内法は長さ226cm、幅は東小口側で56cm、西小口側で57cmである。現状での深さは東小口側で45cm、



第44図 第3号古墳・a 主体実測図（調査前・後）(S = 1 : 200)



第45図 第3号古墳埴丘断面図・a 主体断面図 (S = 1 : 100)

西小口側で63cmである。床面には、両側壁及び両小口からやや離した状態で、最大25cm×40cmから最小10cm四方の大小様々、厚さ平均3cmの偏平な板石を敷いていた。これらは東側は割合大きめな石を敷き、間に小型の石を置く状況であるのに対して、西側は徐々に小ぶりになり、かつ置き方も粗くなっている。なお敷石の状態での東西両小口部における高低差は、東小口側は標高約78.62m、西小口側は標高約78.56mであり、東側が約6cm高い。

石櫛内埋土中の上部から数点の須恵器の小破片が出土したほか、床面の敷石上や土壙床面に近い位置からは多くの鉄器が出土した。この鉄器は、東側、中央、西側と間隔をおいて出土した計12点の鏡のほかは、ほとんどが西側小口付近に集中して出土しており、副葬品と推定される。なお、鏡以外の鉄器には武器（鎌・小刀・直刀など）、農具（U字形鋤先・曲刃鎌）、工具（金槌・刀子など）がそれぞれ存在する。ほとんどが床面に置かれた状況にあるものの、出土位置が高い鉄器も9点存在した。盗掘の可能性は低いもののこれらは散在しているようにも見えることから恐らく、木棺の蓋の上に置かれていたと推定される。鏡は出土状況や木質が付着していることから、木棺を固定したものと推定される。

埋葬頭位方向は、敷石上面の高低差、敷石の状況及び副葬品の直刀・小刀の切先・茎部の方向などから東方位と考えられる。鏡の出土位置や土層観察などから、推定される木棺の規模は、長さ約190cm、幅約40cmである。主体の主軸方向はN70°Eである。

・出土遺物

本古墳に伴う遺物は、主体部内埋土中や埴丘覆土中から須恵器が出土したほか、主体部床面付近から鉄器が出土している。なお主体部西側小口において、鉄器に混じって河原石1点を検出した（225）。その性格・意味については不明である。

土器（第68図110～122）

蓋（115） 口縁部が直線的に垂下するもので、端部内面に段をもつ。天井部との境は鋭い稜を持つ。埴丘覆土中から出土。

坏身（110～114） 110は埋葬主体埋土中、その他は埴丘覆土中から出土。受部は110・112は鉤形を呈し、111・113・114は直線的にのびる。なお110は底部に対して直線的に受部が付き、112・113も同様な傾向を呈している。

無蓋高环（116・117） 口縁部の下に鋭い上向きにのびる二条の凸帯がつき、その下に櫛描波状文がめぐる。117は高环底部から脚の破片であり、色調や胎土等から同一個体と推定される。脚と坏底部との境の径はやや広めである。両者とも埴丘覆土中から出土。

高环脚基部（118） 「く」字状に屈折し、外面は凹凸が著しい。埋葬主体埋土中から出土。

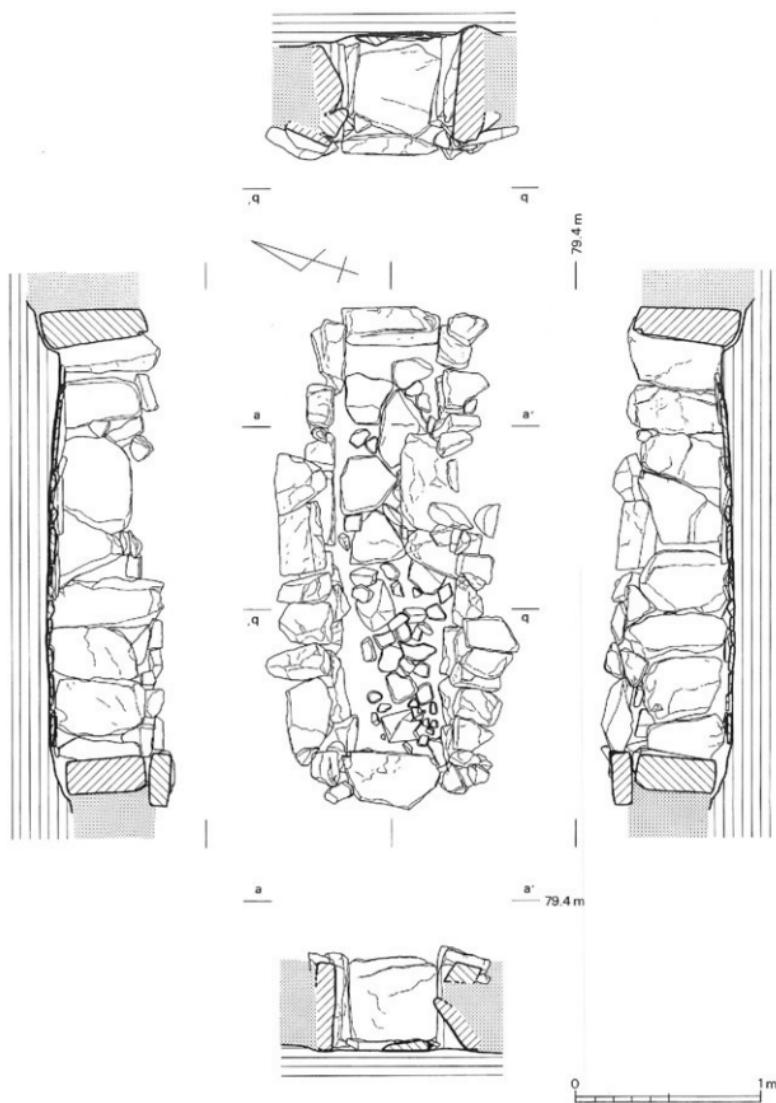
壺（119） やや肩のはる部から「く」字状に外反する頸部が立ち上がる。口縁部との境に凸帯を付し、その下に櫛描波状文がめぐる。口縁部の小破片が出土しており、同色の自然釉がかかっており同一個体と考えられるが、端部は丸みをもって収めている。埴丘覆土中から出土。

甕（120～122） いずれも外面たたき痕をのこし、内面は同心円のあて具痕を丁寧にすり消しているものである。埴丘覆土中から出土。

鉄器（第74～76図173～224）

A. 武器（172～191）

武器には直刀（191）1点、小刀（189・190）2点、鎌（172～183）12点以上がある。小刀は幅が狭いもの



第46図 第3号古墳主体部実測図 ($S = 1 : 30$)

と広いものがあり、前者はその出土状況から半分に切断して埋葬されたと推定される。鎌は完形品はほとんどなく、形状が明確にしえるものは少ない。その中で長茎鎌は2~3点程度しかなく、短茎鎌がほとんどであった。また上述したように棺蓋上に置かれたと推定される9点のうち、器形が判定できたものは少ないが、鎌が3点(173・182・187)含まれている。

B. 農具 (202・203)

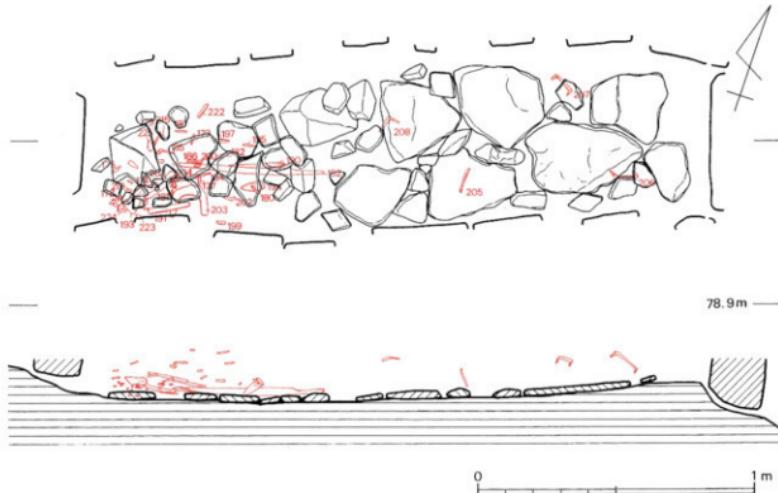
農具には曲刀鎌(202)1点、U字形鎌先(203)1点がある。曲刀鎌は刃先を左に、また刀部を下向きに置いた場合、基部は手前側に折り返しているタイプのものである。U字形鎌先は木製鈎に固定するため、内側は断面V字状を呈するが、外側は刃先までやや直線的になっている。

C. 工具 (193~201)

工具には袋状斧1点、刀子3点、金槌1点がある。201は鉈の破片か。袋状斧(193)はやや緩い肩をつくり、刃先まで直線的ではあるものの、若干開き気味である。刀子は完形品がなく、刃部(199)、切先(197・198)、柄部から刃部(195・196)の破片である。194と196には木質が残っている。金槌(194)は、幅2.1cm、長さ6.2cm、厚さ1.5cmの楔状の体部に、2.5cm×2.0cmの長方形の叩き面が付く。木製の柄を付すための孔が体部の中心軸、叩き部上端部から片面は1.1cm、もう片面は1.5cm下の位置にあけられている。

D. 鎧 (204~214)

鎧は計11点出土している。出土位置は床面よりも高い位置からのものがほとんどであり、また東西両小口付近とともに中心部からも出土しており、木棺を固定するとともに蓋と木棺側板との固定具も存在する可能性もある。基部の長さ11.5cm、9cmの大型のものと6.5cm、5cmといった小型のものに分けられる。木質が遺存していたが、基部に付着した木質はすべて、木目が基部に直交しており、楔部でも軸線に直交していた。



第47図 第3号古墳主体部内遺物出土状況実測図 (S = 1 : 20)

(5) 第4号古墳

第4号古墳は、下降する丘陵尾根筋上に立地し、第3号古墳の約7.5m西側に位置する。墳丘頂部の標高は81.5mであり、本古墳群では最高所に位置する。周辺の沖積地に対する眺望は良好であるとはいえる、もっとも奥まった場所に構築されている。調査前の現地観察からは、墳丘は不明瞭であったものの、蓋石と想定される石材が一部露出していたため、古墳の存在が推定された。

・墳丘（第48図・図版23-a）

本古墳築造にともなう旧地形および地山の整形については、調査前から墳形自体が不明確であり、また山側にあたる西側において、溝などの掘り込みも行われていないことから、わずかな旧地形の整形のみおこなわれたものと推定される。また蓋石が露出していたことから、多少の盛土が行われたものの、流出したものと推察される。なお、墳丘の形状は、不明瞭で南側の一部が若干削平されているものの、恐らく円形と推定される。推定される規模は、現状で直径約7m、高さは東墳裾から約1mである。墳頂平坦面の広さは直径約3.5mであり、それほど広くはない。

墳丘の覆土中から遺物の出土はみられなかった。

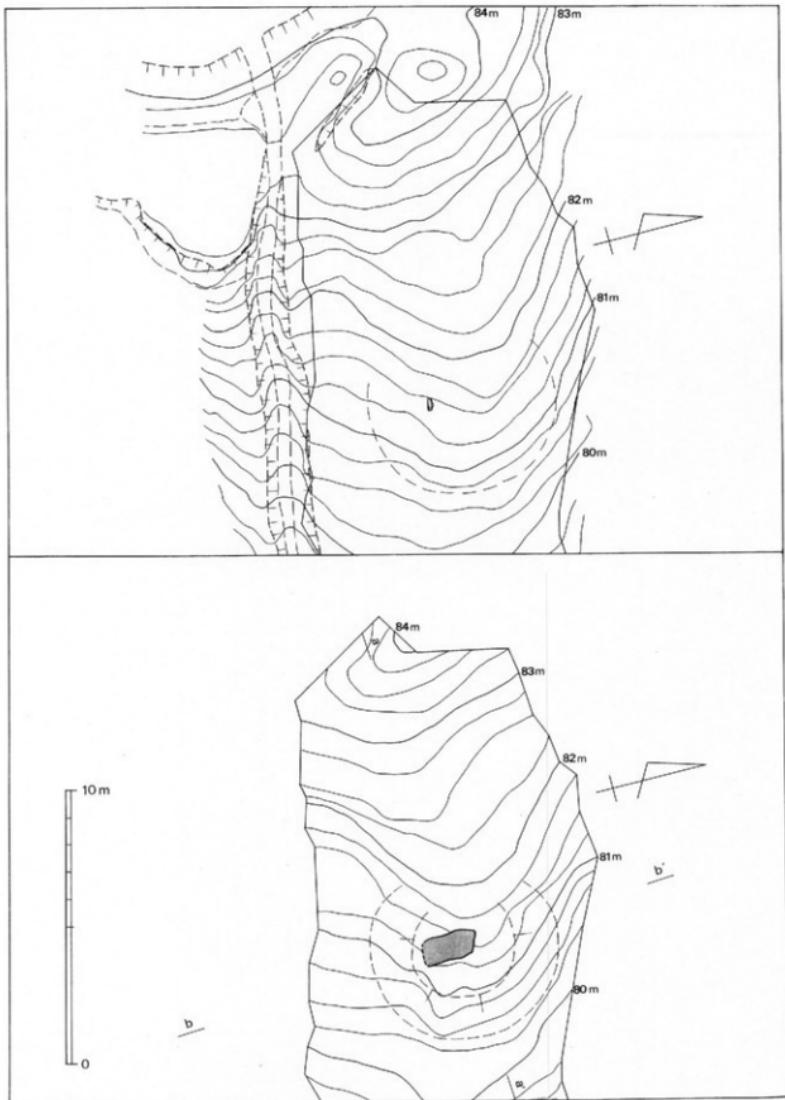
・埋葬主体（第50図・図版23-b）

埋葬主体は、箱式石棺と竪穴式石槨の要素を併せ持つ形態の石棺である。墳丘平坦面上のはば中央に掘り込まれた掘り方の平面形は長方形プランであるが、掘り方上面の南北小口側は明確なラインが確認できなかつた。掘り方の規模は、上面では長さ約200cm、幅95cmである。深さは47cmである。また床面の規模は長さ約156cm、幅78cmである。設置された石棺は、ほぼ壁に接するように構築されている。

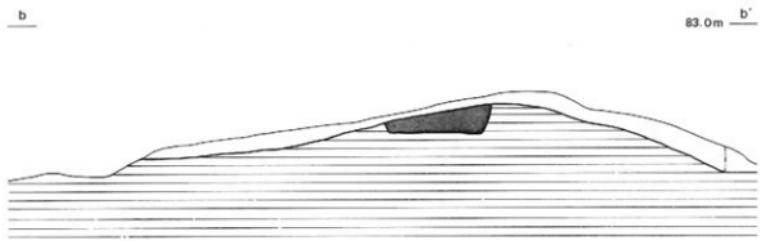
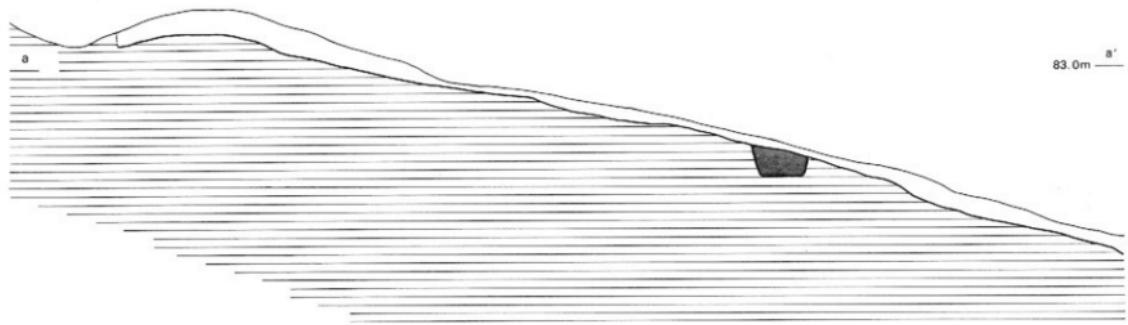
横架された蓋石は規模長辺55cm、短辺40cm、厚さ20cmと長辺50cm、短辺25cm、厚さ15cmとの2石だけしか遺存していなかった。そのほか北側の西壁上面に小角礫がわずかに遺存しているだけであった。このことから本古墳は蓋石を架構したのち、隙間を埋めるため小角礫を置いたと推定される。

本石棺は両側壁石で小口石をはさむ構造である。東西両側壁は花崗岩の礫の積み上げによって構築されている。東側壁は、まず比較的平らな6枚の板石を基底石として横長に床面上に設置している。南端から2石目から4石目までは土壙床面上南半部に造られた段の上に設置されていた。この段は恐らく高さや安定性を保つために削り造られたと考えられる。そして基底石の上方に平坦な石を1ないし2段小口積み（横積み）にして蓋石を架構するために高さを調整している。基底石の石材間は隙間が目立つものの、その間に小礫を詰めるような行為はほとんど行われていない。西側壁もまず比較的平らな6枚の板石を基底石として横長に床面上に設置する。その上方に平坦な石や角礫を小口積み（横積み）に積み上げて蓋石を架構するために高さを調整している。蓋石の欠けている箇所については蓋石の遺存した箇所の上端面部と高さが揃っていることから本来の状況をはぼ示しているものと推定される。西側壁も不整形の石が多いため隙間があき、比較的雑な造りといえる。

小口壁は北側のみ遺存していた。北側小口壁は、6石を使用して3段積み上げられている。基底となる20cm×15cm大の板石を東側に据え置き、西側には同規模の石が揃わなかつたためか2石を積み上げて高さを揃えている。その上段に東西それぞれ2段と1段に比較的偏平な石を小口積み（横積み）にして側壁との高さを揃えている。南側小口については石材は遺存していなかった。その上面に蓋石が横架されていたにもかかわらず小口石は確認できなかつたことから、当初から設置されないまま構築されたと考えられる。しかし掘り



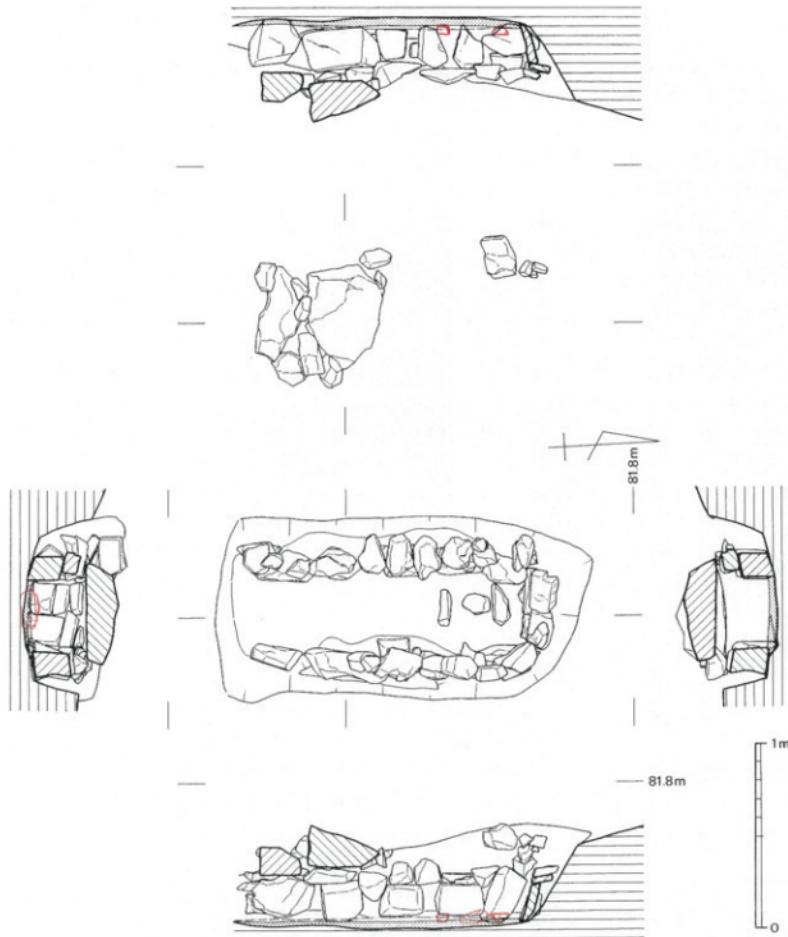
第4号古墳実測図 (調査前・後) ($S = 1:200$)



第49図 第4号古墳墳丘断面図 ($S = 1 : 100$)

方上面の南側部分が未確認であったことから、後世抜き取られた可能性もある。なお床面は、暗黄褐色砂質土で平坦に整地されている。

石棺の内法は、長さ約155cm、幅は南北両小口ともに35cmである。南北両小口部における高低差は、南小口側は標高約81.04m、北小口側は標高約81.06mであり、北側がわずかに高い。埋葬頭位方向は、床面の高低差などから北方位と推定される。ちなみに石棺の長辺における主軸はN3.5°Wである。北側小口付近の床面直



第50図 第4号古墳主体部実測図 (S = 1 : 30)

上から直方体形状の石2点、偏平な丸石1点の計3点を確認した。頭位方向とも考慮して、枕石と考えられる。石棺内には、人骨および遺物は埋土中を含めて確認できなかった。

(6) 第5号古墳

第5号古墳は、第1号古墳から東へ緩やかに下降する尾根筋線上において弥生時代の掘立柱建物を建てるために削られた一段低い平坦面上に立地する。第1号古墳の約19m東側に位置する。現地での調査前の観察では、近年まで松などの植林が行われたという地元住民による話から広い平坦面は削平された結果であると考え、そのため古墳の存在は想定できなかった。なお広島市教育委員会が実施した試掘調査における知見から溝の存在は予想されたものの、試掘が一部であること、遺物の出土もなかったことから古墳に伴う周溝とは考えられなかつたのである。念のため調査区にそってトレチを何か所か設定したところ、溝が弧を描くように掘削されていること、また溝内から土師器や須恵器の破片が出土したことから古墳として調査を行つた。しかし、北側は排土の問題、東と南側は団地に接することから、危険防止のため古墳周辺の全面発掘を断念し、一部掘り残すかたちとなつた。

第5号古墳の東側と南東側は団地造成のため削平されていることから、周囲の旧地形の復元はなかなか難しいものの、周囲の地形などから、丘陵はこの位置を境として急激に下降すると推測できる。そのことから本古墳は丘陵尾根平坦面の最先端部に位置すると考えられ、第1号古墳同様墳丘上からの眺望の良好な場所を選定しているといえよう。

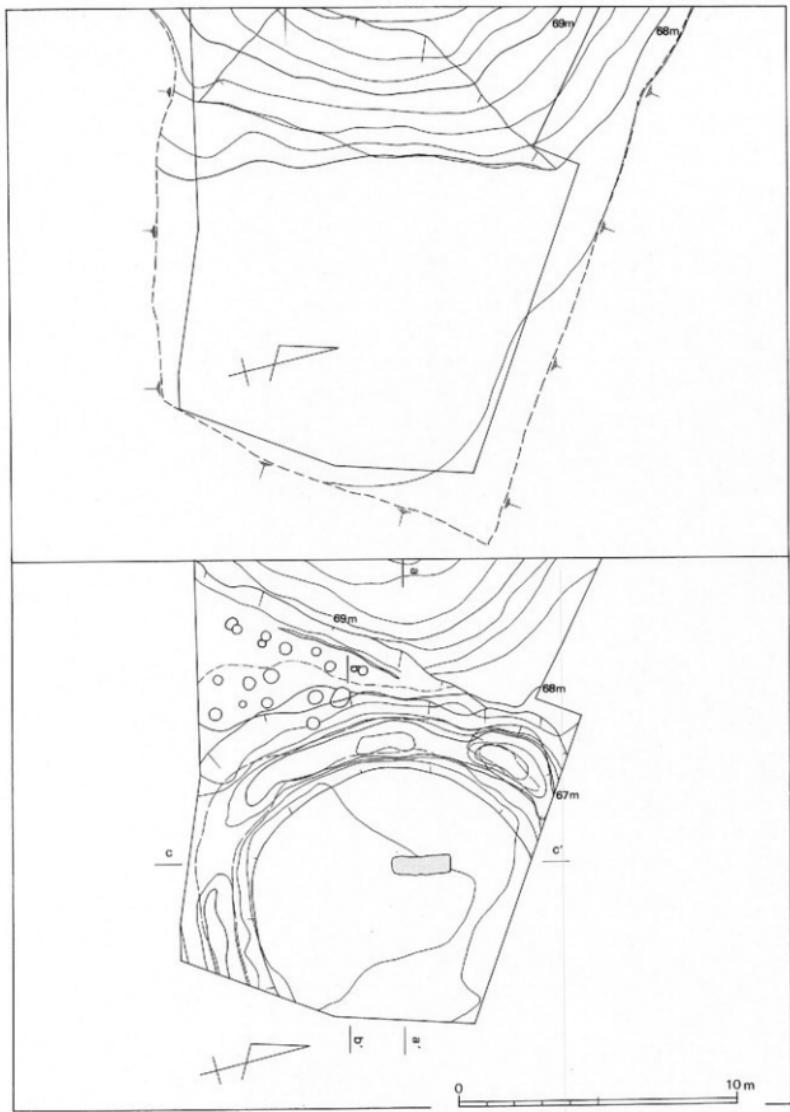
・墳丘（第51～53図・図版24）

弥生時代の掘立柱建物築造に伴う平坦面の削り込みがどの程度行われたのか、また耕作によってさらにどの程度削平をうけているのかが不明であるため、古墳築造のための地山整形がどの程度行われたのか、明らかにすることは困難である。少なくとも現状でいえることは周溝の掘り込みが行われていることである。恐らく流出した土砂を盛土として墳丘を構築したと考えられるものの、結果として削平は地山まで達しており盛土は残っていないことから、墳丘がどの程度の高さを呈していたのか現状では不明である。古墳の平面形状は円形で、規模については、未掲箇所があるため不明確であるものの、推定される規模は周溝底部における計測値から直径12m程度に復元できる。周溝は、現地形の観察においても北側は崖面になっていることから、北側は途切れる可能性があるが、ほぼ全周しているものと推定される。規模の明らかにできた箇所で、現状で最大幅3.7m、現状における墳頂部から計測した深さは、最深部では約3m、最浅部では約0.5mである。

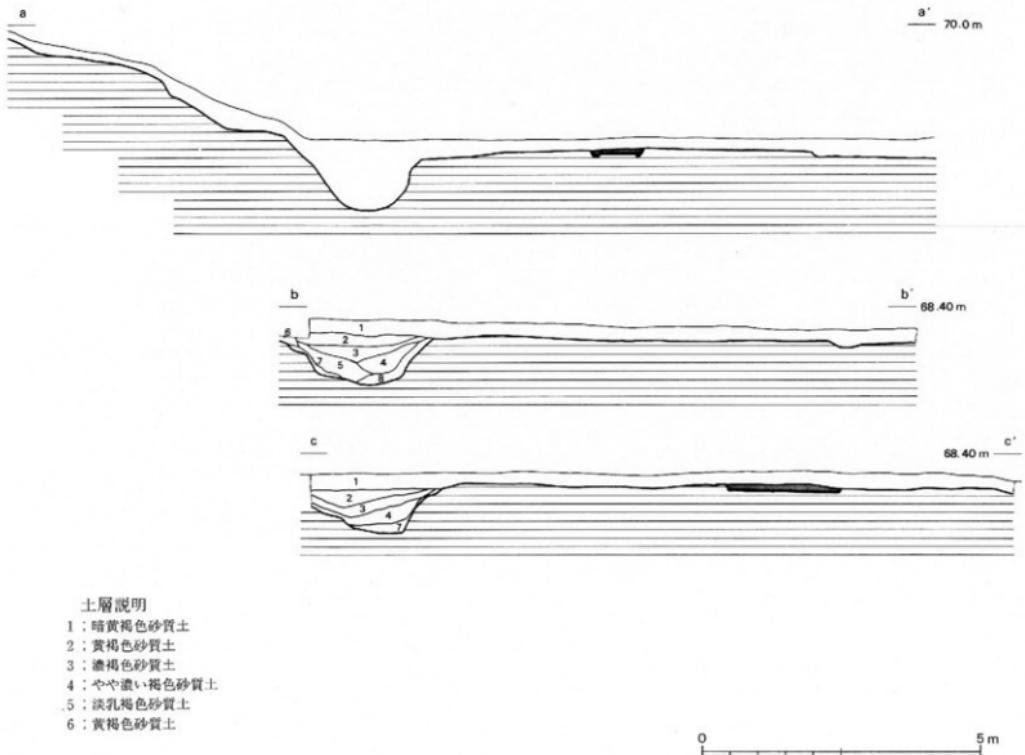
周溝内からは、南東側と西側において集中的に計17個体分の須恵器と1個体分の土師器が破片となった状態で出土した。この2か所の土器の集中箇所においては、南東側からは壺蓋と壺身がそれぞれ125～127、129と133、135～137の3セットと128、140、141及び土師器の甕（143）が出土し、西側からも壺蓋と壺身が128と134の1セットと139、142が出土している。これらは南東側、西側の両者にまたがって接合する器種がなく、それぞれの場所において決められた器種を破碎し、投棄したと推定される。また後世埋められたものと考えられる獸骨が南西部の溝の上面から出土した。

・埋葬主体（第54図・図版25）

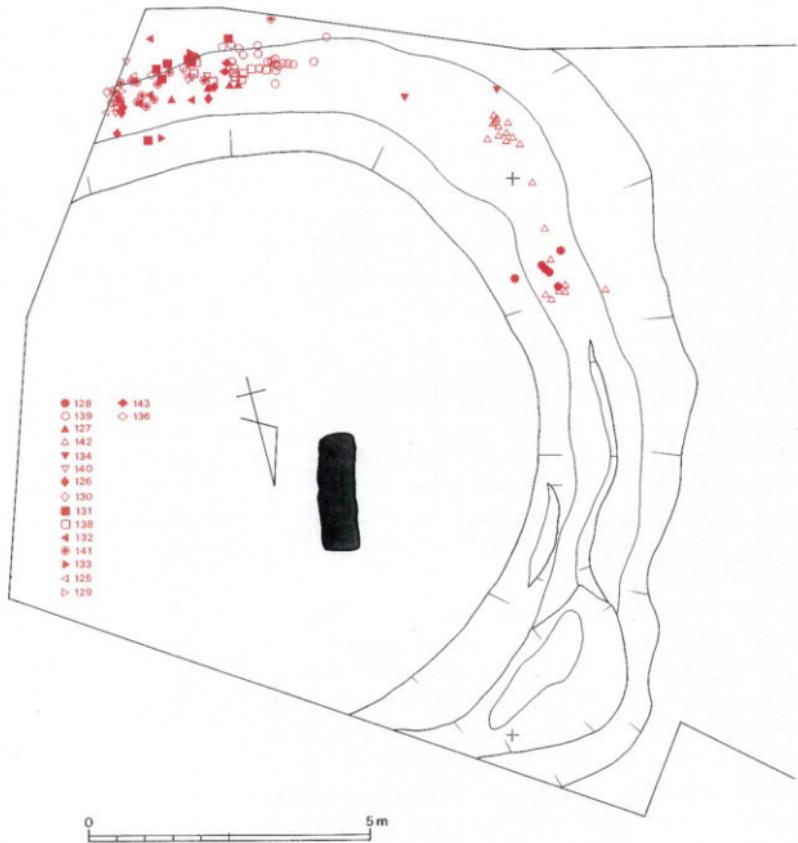
埋葬施設は平面形状が長方形の土壙である。中央部からやや北西側にずれた位置で確認した。土壙の規模



第51図 第5号古墳実測図（調査前・後）（S = 1 : 200）



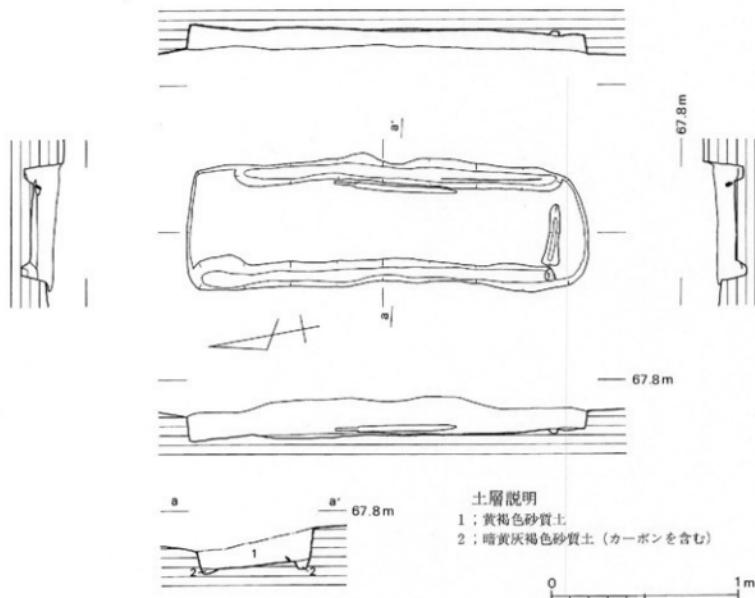
第52図 第5号古墳墳丘断面図 ($S = 1 : 100$)



第53図 第5号古墳周溝内土器出土状況実測図 (S = 1 : 100)

は、確認面上面は長さ215cm、幅は北小口側で65cm、南小口側で約60cmである。床面は長さ210cm、幅は北小口側で62cm、南小口側で約57cmである。床面の東西両側壁にそって東壁側が長さ175cm、幅約10cm、深さ5cmの、西壁側が長さ193cm、幅約10cm、深さ5cmの、また南側木口付近にも土壤の南壁床面から14cm北側の位置に長さ35cm、幅約6cm、深さ3cmの溝が掘り込まれていた。特に東側壁溝内の南半部から表面を焼いたと推定される板材の痕跡と考えられる、長さ約54cmの直線的な炭化材の筋が確認された。また西側壁溝の南収束箇所にも炭化した木材片が遺存していた。これらの溝は木棺材を据え置いたものであると推定される。なお北側小口以外の3か所に掘り込まれた溝の痕跡から、木棺は側板が小口板を挟み込む構造と推定される。床板が存在したかどうかは不明である。推定される木棺の内法は、長さ約185cm、幅約40cmである。墓壙上面はかなり削平されており、現状の深さは10cm程度である。また南北両小口の高低差は、北側は標高約67.5m、南側は標高約67.52mであり、南側の方が2cm程度高くなっているものの、ほぼ平坦に仕上げている。墓壙の長軸方向はN10.5°Eである。埋葬頭位方向は側溝の幅や副葬品である鉄剣の切先との位置関係からみて北方位と推定される。

遺物は、墓壙内中央部、東側壁溝にそって床面直上に刃を立てた状態で茎部を北側、切先部を南側に向けた鉄剣が一本出土した。剣身には一部において木質が遺存していた。出土状況から木鞘に収められた状態で木棺内に収められたものであろう。



第54図 第5号古墳主体部実測図 (S = 1 : 30)

・出土遺物

土壤内から出土した鉄製品以外はすべて周溝内から出土している。

土器（第69～71図125～143）

須恵器（125～142）

壺蓋（125～130） やや平坦な天井部を呈し、口縁部との境の棱は、下方を強くなることによってつくりだしたもので、124や129以外は総じて鋭い。また口縁部は、外へ開き気味に下降し、端部内面の段も128のようにほんと彫化しているものもみられる。天井部のへら削りは80%である。口径は15.5～16cm、器高は4.1～4.7cmである。なお128と125～127・129・130は出土位置が、それぞれ西側と南東側と異なっており、またそれぞれ壺身がともなっており、セットで供獻されたものと推定される。また天井部内面に同心円のあて具痕跡をのこすもの（125）が含まれる。

壺身（131～137） 131は尖り気味であるが、全体的に偏平な底部を呈し、やや太く端部も丸みをもった受け部がやや上方にのびる。口縁部はやや内傾気味に直線的にたちあがり、端部はやや尖り気味におさめる。端部内面の段はすでにみられない。底部外面のへら削りは、70～80%である。口径は12.8～13.7cmで、受部の中心径は、14.6～15.6cmである。上記蓋128とセットになるのは134で、胎土や焼成（色調）も類似している。他の壺身の蓋とのセット関係は不明であるが、胎土や焼成（色調）などでおさえられるかもしれない。また131は底部内面に同心円のあて具痕跡をのこす。

甌（138） 頸部上半から口縁部にかけて欠損しており、口縁部の一部が出土しているが接合箇所はみあたらない。算盤玉状の体部から頸部がハサ字状に開いて直線的に立ち上がる。口縁部は頸部とは段をなしていない。端部内面に段をもっている。頸部と口縁部に波状文が施され、胴部には上下をなでてつくり出した文様帶に横歯状工具による刺突文が施され、また円形の穴が穿たれている。

短頸甌（139） 体部はやや長胴の球体を呈し、丸底である。約2cm程度の直線的に立ち上がる口縁部がつく。端部は面を持っているが、押さえつけて内側に傾いており、段を持っていますように見える。外面は平行叩き、内面は同心円のあて具痕跡がのこる。体部上面はなで消している箇所もある。

甌（140・141） 140は器高が18cm程度の小型品で、球形を呈す体部に強く外反する口縁部がつくもので、端部は下方に凸帯を付し、肥厚した口縁を呈している。体部外面は平行叩きのうち、体部上半を中心にもカキメ、下半はなで消している。内面は同心円のあて具痕跡をなで消している。141は器高約43.6cmの中型品で、頸部が短く、口縁端部は「く」字状に屈曲するもので、体部外面にたたき痕跡、内面には同心円のあて具痕跡がみられる。また底部付近に2か所、焼き台痕跡がみられる。

提瓶（142） 偏平な体部の一側面に外反する口縁部がつく。端部はやや丸みをもち、肥厚する。欠損しているが、肩部に鉤形の把手がつく。体部の一面は丸みをもち、その内面に円盤状の充填痕跡がみられ、なで仕上げである。一方は平坦でへら削りやカキメ痕跡がのこる。

土師器（143）

甌 口縁部を強く外反させ、端部はやや丸みをもっておさめる。内外面ともなで仕上げである。

鉄器（第77図230）

劍 完形品で、内外面とも木質が付着しているが、木鞘の可能性がある。柄は木質のみで、遺存していなかった。目釘穴は現状では明瞭ではない。長さ66.95cmである。断面凸レンズ状を呈しており、鞘は不明瞭である。闊は両闊で、ほぼ直角となっている。

(7) 第6号古墳

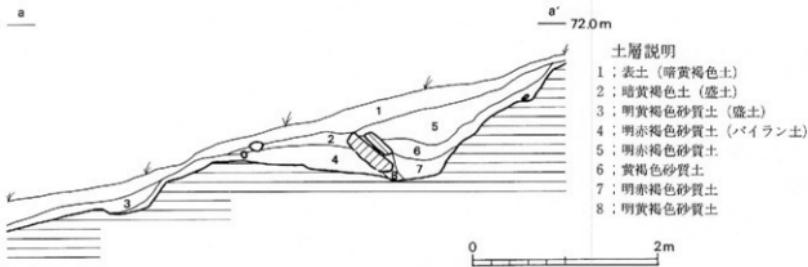
第6号古墳は、第1号古墳の南側の緩斜面に立地する。広島市教育委員会の実施した試掘トレンチによつて、貼石が確認されていたものである。調査の結果、北側の山側を一部削り込んで溝を形成し、そこから排出された土砂を利用して長方形の墳丘を構築し、その墳丘斜面にやや大ぶりな礫を利用して貼を行った遺構であることと確認した。なお本古墳は、埋葬主体が確認されなかつた。しかしながら弥生時代から古墳時代における類例から、墳墓（古墳）として取り扱うものである。なお、墳頂部の最高所の標高は約70.5mである。

・墳丘（第55・56図・図版26）

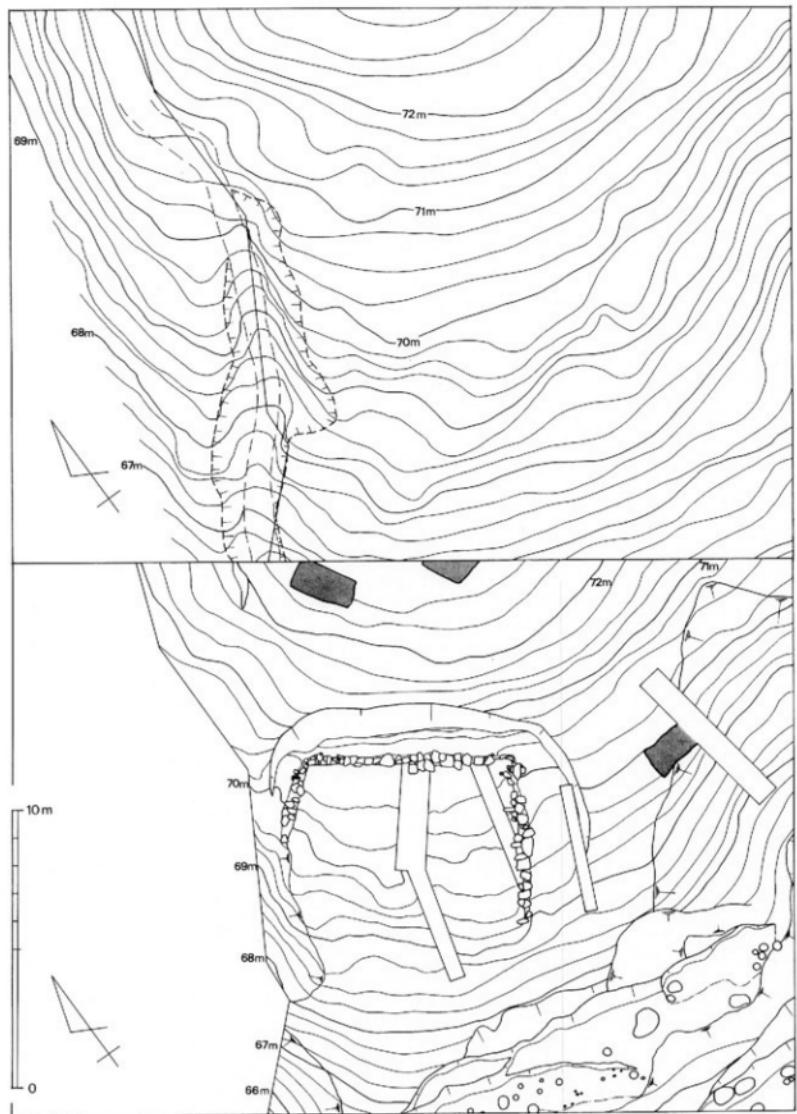
本古墳築造に伴う地山の整形は、主にコ字状に掘り込まれた溝の掘削で、溝を削り出すことで墓域を区画している。旧地形面の明赤褐色を呈するバイラン土上に、周溝の掘削によって出た明黄褐色砂質土を盛土として利用している。溝の規模は、西側辺が里道で搅乱を受けており現状で長さ約2.0m、幅は上面で約1.3m、最も良好に遺存する北側辺で長さ約8.2m、幅は上面で5.5m、トレンチによって南北側が削られた東側辺は現状での長さは約4.7m、幅は上面で約2.5mである。現存の深さは北側で、約1.2mである。溝の断面は逆台形気味に掘られている。

墳丘の形状は方形である。斜面に構築しているため、墳丘自体も南へ約10度の傾斜をもつてゐる。南側及び、里道で削り込まれている東側の一部は、貼石及び墳丘盛土についてはほとんど流出していた。そのため規模も明確ではない。しかしながら遺存した貼石から墳丘の規模は、溝底面内側下端で南北は6.1m、東西が約9mと推定される。また高さについては現状で最高所である北側で約0.55mである。また現状の墳丘平坦面の規模は東西約7.8m、南北は約5.5mである。なお墳丘の長軸方向はN51°Wとなっており、丘陵緩斜面の軸線に対して南西方向に傾いてゐる。

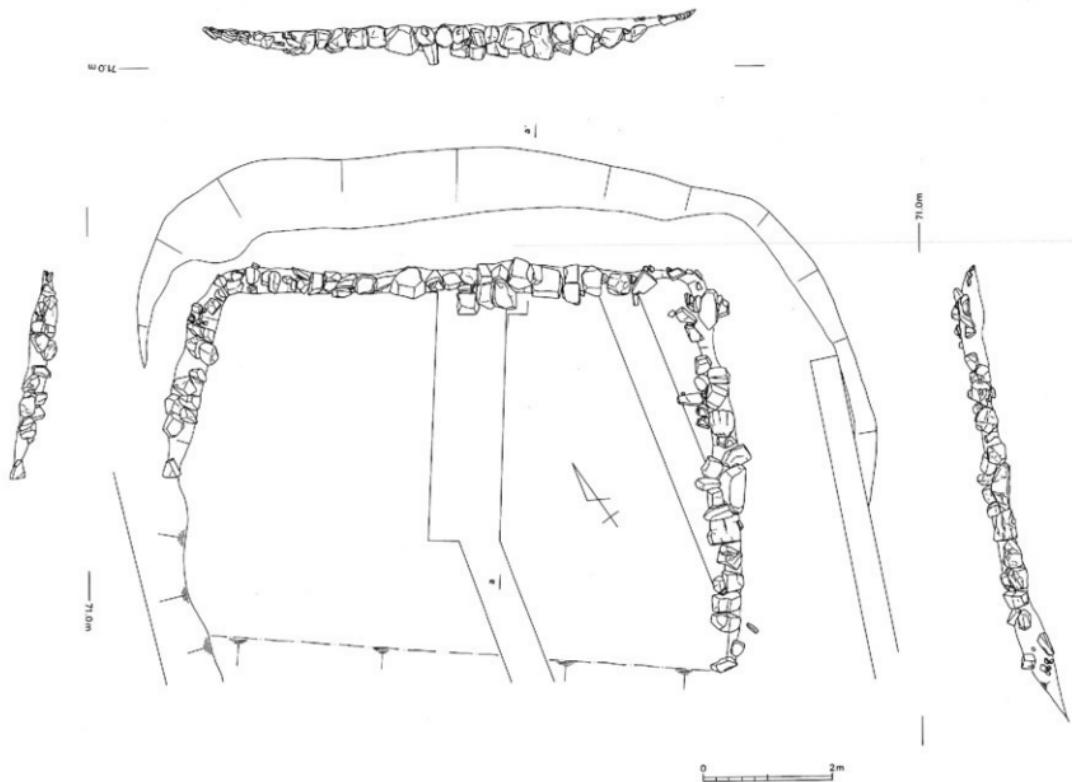
遺存している墳丘斜面には、大小さまざまな規模の花崗岩の角礫を1段ないし2段に貼り付けている。比較的遺存の良好な北側の貼石の状況を観察してみれば、基本的には斜面に偏平な石を縦長に1石ないし2石貼り付けている。東端より6石目から21石目までの中央部は貼り方が比較的均質で20cm大から55cm×30cm大の偏平な石材が使用されている。大型の石材は1段、小型の石材は2段に貼り付け、上面はいくらか凹凸が生じているものの、高さが40~60cmに揃っているように観察できる。また東端および西側22石以西、すなわち東西両端箇所は先述の中央部とは異なり、使用された石材は小型で貼石の上面の高さは10~20cmであった。よって現状では中央部が最高となり、東西両端部に向かうにつれて徐々に低くなる状態となつてゐる。



第56図 第6号古墳墳丘断面図 (S = 1 : 60)



第55図 第6号古墳実測図（調査前・後）（S = 1 : 200）



第57圖 第6號古墳平面及U立面實測圖 ($S = 1 : 60$)

また東側斜面の状況は、北隅部から1.3mまでは概ね小型の礫を使用して1段ずつ積まれており、それから以南約4mまでは、1段ないし2段、偏平な礫を使用して、比較的隙間をあけずに貼られている状態であった。ただ北側墳丘斜面と異なり、整然とした積み方とはいえない。これは西側墳丘斜面にも同様に言えることである。西側墳丘斜面は南半部が欠損しており、全体の状況を窺い知れないが、東側と異なり比較的礫は小さなものを使っていることが指摘できる。

なお貼石の状況は全体的に上面が不揃いであり、南に傾斜する地形の観察から、もう数段積み上げられていた可能性がある。しかし南側のレヴェルを北側と揃えようとすれば大量の盛土が必要なことから、この傾斜は地形の規制によって生じたとも想定され、恐らく1段ないし2段程度と推定される。

また隅部の仕上げ方については北東隅は小型の平石を貼り付けていたが、北西隅は墳丘北面と西面との石の貼り方について差異がみられなかった。そのことから隅は特別に意識して構築されていなかったと考えられる。

埋葬主体は墳丘が流出したためか、あるいは中心部分に入れられた試掘トレンチによって破壊されたためか、確認できなかった。

試掘を実施した際、弥生時代後期の土器が出土している(第73図168~170)。この出土状況からいえば、遺存した盛土下の旧地形を掘りくぼめた段上の埋土中からのものである。これらの土器は築造時期の上限を知るうえでの資料とはなりうるもの、本遺構に伴うものとはいえないであろう。また溝内からも土器の細片が出土しているものの、器種など判別が不可能であった。

(8) a 主体 (第44図・図版27)

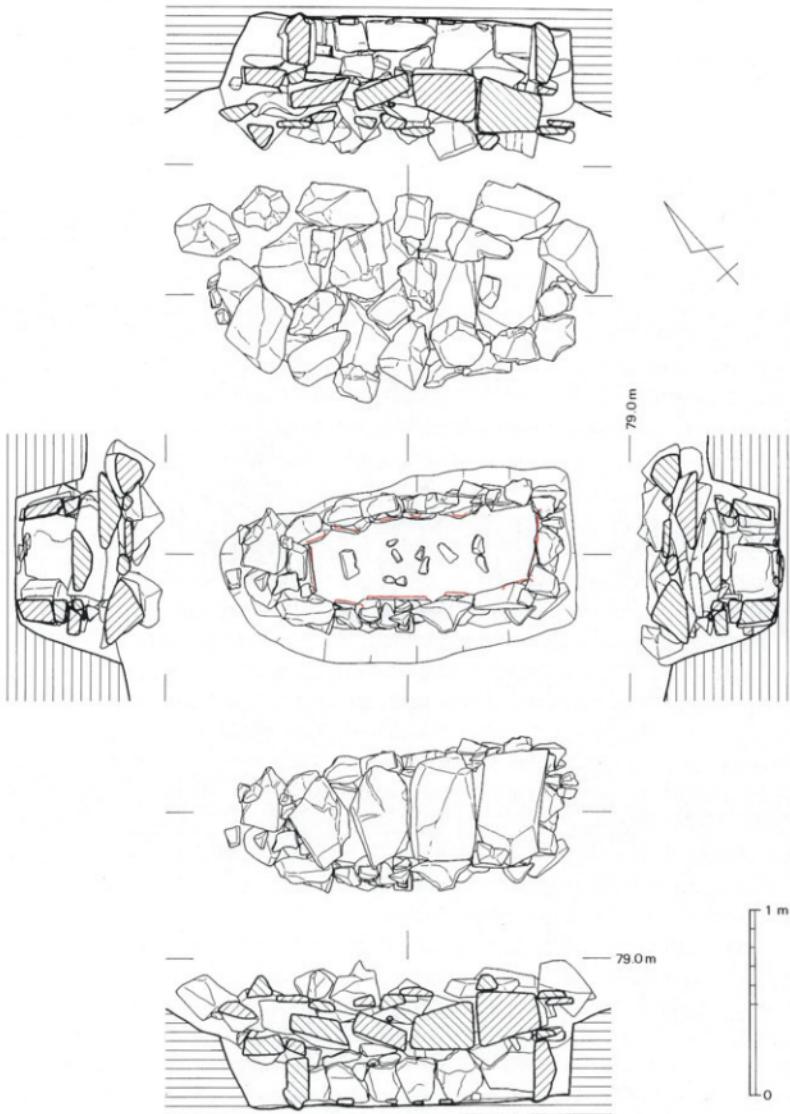
a 主体は丘陵尾根筋から北側斜面下における平坦面上に立地する。また第3号古墳の約4m北西側に、第4号古墳の約2.5m東側に位置する。調査前の現地観察において蓋石上面に積み上げた石材の一部が若干露出していたため、なんらかの遺構の存在が推定された。しかし墳丘等は明確ではなく調査前の地形もほぼ平坦であったことから、表土を除去し蓋石上の積石部分を確認するまでは遺構の全容を把握することはできなかった。調査の結果、本古墳は緩傾斜面にあたる地形を平坦に削り込んだのち、埋葬施設を構築しただけと考えられ、明確な墳丘も有していない。北側に未調査箇所があるものの、平坦面の現状の規模は長さ約4m、幅約2mである。平坦面上における最高所の標高は約79.5mである。

・埋葬主体 (第58図)

埋葬施設は、箱式石棺と竪穴式石槨の要素を併せ持つ形態の石棺である。蓋石を覆ったのち、その上に隙間をうめたり、蓋石を覆い隠すように角礫が積み上げられているという特徴がみられる。

掘り方の平面形状は、東側がやや狹まる台形状の長方形を呈する。規模は上面で長さ190cm、幅は西小口側で90cm、東小口側で60cmである。深さは最大で40cmである。また床面の規模は長さ172cm、幅は西小口側で69cm、東小口側で50cmである。壁はほぼ垂直に近い状態で掘り込まれ、埋置された石材は、西小口を除いて壁に接するようにして構築されている。

蓋石は長辺50~60cm、短辺30~35cm、厚さ10~30cmの方形ないし台形の板石4枚で構成されている。東側2石はほぼ同規模であり、西側2石は西側ほど小さな石を使用している。蓋石間は約2~10cmの隙間が存在しているものの、粘土等の目張りは行っていない。その上面にはその隙間を埋めるかのように、2段程度蓋石西側上面及び蓋石の周囲に人頭大の角礫が積み上げられていた。規模は長さ225cm、幅最大120cm、高さは



第58図 a 主体実測図 ($S = 1 : 30$)

西側掘り方上面から22cmである。これらの積石は蓋石を架構した際に生じた隙間を塞ぐ目的で行われたと考えられる。しかし現状では東側蓋石2石は露出しており、完全に封鎖している状態ではない。

本石棺は両側壁石で両小口石をさむ構造である。南北両側壁は花崗岩の礫の積み上げによって構築されている。北側壁は比較的平らな6枚の板石を横長に床面上に設置し、基底石の上面の形が揃っていないことから生じた隙間に小礫を詰めて、平坦な石を小口積み（横積み）にして蓋石を架構するために高さを調整している。南側壁も比較的平らな5枚の板石を横長に床面上に設置し、基底石の上面の形が揃っていないことから生じた隙間に小礫を詰めて、平坦な石を小口積み（横積み）にして蓋石を架構するために高さを調整している。

東西両小口石はまず40cm×30cmの板石を横長に設置し、そして側壁石との高さを揃えるため、2石ないし3石を横並びでその上面に設置して上端面を平坦にしている。また西小口では、上面の石の裏側に20~30cmの平坦な石を裏込め状に設置して掘り方上面との間にできた隙間を塞ぐような形をとり、蓋石の架構に備えている。石棺の内法は長さ120cm、幅は東小口側で42cm、西小口側で34cmである。高さは東小口部で37cm、西小口部で35cmである。両小口部における高低差は、東小口側は標高79.03m、西小口側は標高79.02mであり、わずかに東側が高い。埋葬頭位方向は内法幅や床面の高低差などを考慮すれば、東方位と推定される。ちなみに石棺の長辺における主軸は、N55.5°Wである。

石棺内には、人骨及び副葬品は確認できなかった。床面には、棺台石と推定される大小の小石材10点が確認された。また石棺内埋土中から土器片の出土を確認した。また石蓋上に構築された石積付近から須恵器が数点出土している。

・出土遺物

a 主体に伴う遺物のうち、主体内埋土中の土器片は細片のため、器形等不明である。石積付近から出土した須恵器は、その形態から壺類の蓋と考えられる。

土器（須恵器）（第68図123）

蓋 やや丸みをもつ天井部を呈し、口縁部との境の稜も明瞭で鋭い。口縁部は直線的に下降し、端部はやや外側に屈曲させ、内面に段をもつ。天井部のへら削りは90%に及ぶ。

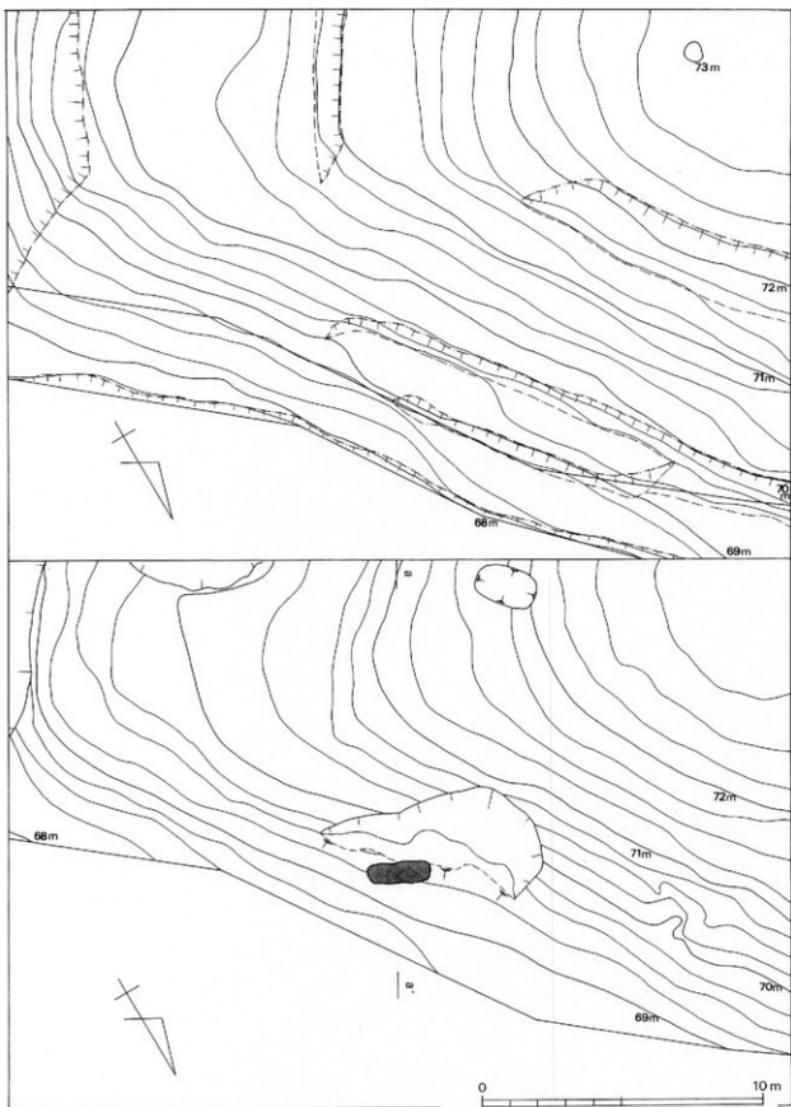
（9）b 主体（第59図・図版28）

b 主体は、第1号古墳から東側に延びる丘陵尾根筋から北側にはずれた斜面下に造りだした平坦面上に立地する。調査前においては、緩斜面にあたり、墳丘等古墳の存在を想定できるものはなにも存在していないかった。調査の結果埋葬施設の確認面は、調査前の地表から約45cm下であった。そのため盛土及び封土などに関しては確認はできなかった。別位置の調査区にそった南北方向の土層観察によれば、検出面上に10~20cm堆積した暗黄褐色土層があり、墓壙埋土上層のものと同質であることから封土の可能性があり、その場合、約10~20cm程度の封土が行われたと考えられる。

なお埋葬施設を構築するにあたっては丘陵斜面を若干削って平坦面を造り出している。平坦面の規模は長さ約7m、幅約1.5mである。また平坦面の標高は最高所において約69.3mである。

・埋葬主体（第61・62図）

埋葬施設は、掘り方平面形態が隅丸の長方形を呈した土壤内のやや湾曲した床面上に平石を敷く形式であ



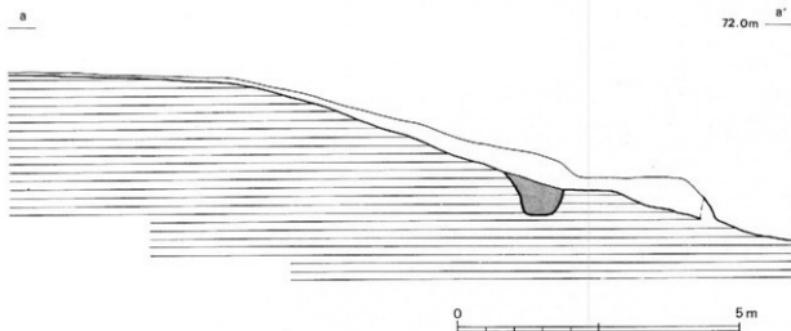
第59図 b 主体実測図（調査前・後）(S = 1 : 200)

る。掘り方上面の規模は長さ235cm、幅は西小口側で78cm、東小口側で70cmである。床面の規模は長さ223cm、幅は東小口側で61cm、西小口側で55cmである。また深さは最大で60cmである。なお土壙床面の高低差は、東小口側は標高約68.61m、西小口側は標高約68.60mであり、東側がわずかに高いもののはば平坦である。

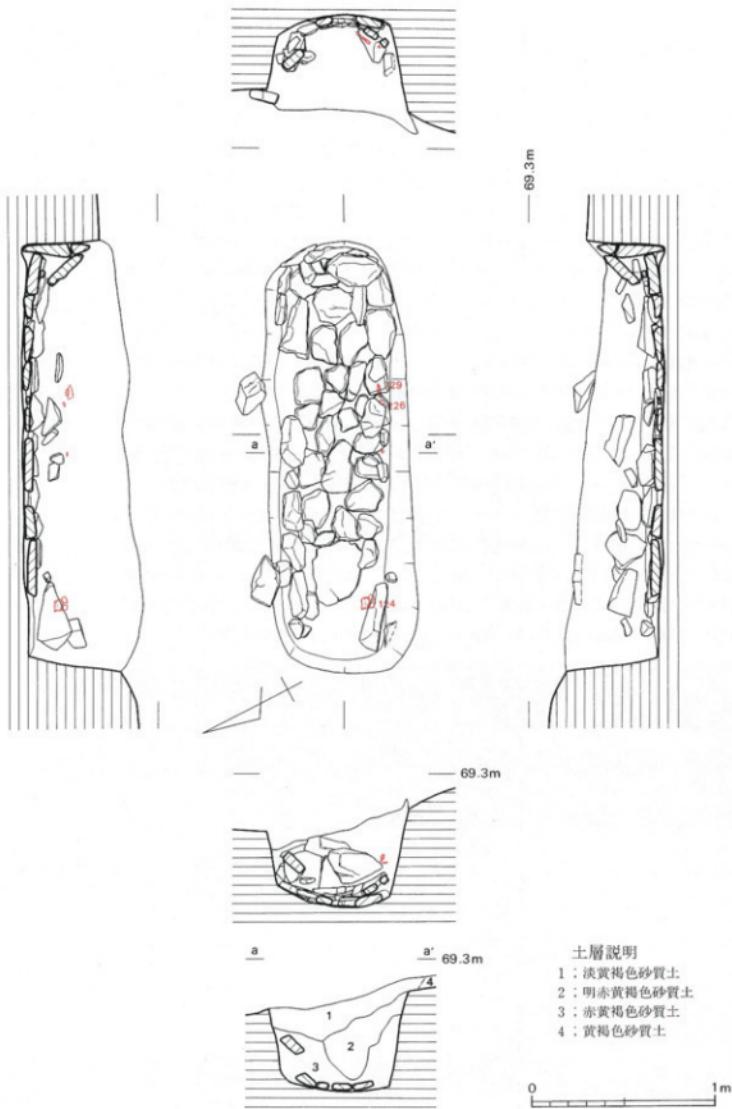
床面に敷かれた石材は長さ15~37cm、幅7~25cm、厚さは3~4cm程度の不整形の偏平な石を使用していた。石材の形状が揃っていないため、敷石間の隙間があいた状態であるものの、比較的整然と配置されている。土壙床面が若干舟底状に湾曲しているため、これに規制されこの敷石の上面も弧を描いた状態となっている。土壙側壁面には北側に9石、南側には7石の大小様々な石を横長に立てて、1段分壁に沿って設置されていた。また東側小口においては、ずれ落ちたと推定される板石を除いて、3枚の板石が壁にそって縦長に直立した状態で確認できた。これら東側小口に埋置された石材は敷石の上ではなく、土壙床面に石材の安定をはかるための掘り込みを行い、敷石と土壙壁ではさみ込むような状態を呈しており、本来よりこの小口側の立石は意識して設けられたものと考えられよう。

墓壙内に木棺等の内部施設を埋置していたかどうかは土層断面からも明らかにしがたい。しかしながら両側壁際の1段分の石列は木棺材の裏込め的な補強材であると想定でき、木棺が埋置された可能性が推定される。その場合、敷石の上面の形状から割竹形木棺状の丸底を呈する木棺と推察される。埋葬主体の規模は長さ210cm、幅は東側が55cm、西側が30cm、現状での掘り方上面から敷石上面までの深さは最大で55cmである。なお東端小口付近の床面には、東側が長さ15cm、幅7cm、南側が長さ25cm、幅9cmの2つの長方形の石が敷石直上にL字状を呈するように置かれていた。東側を埋葬頭位とした場合、その位置関係や敷石下から検出した装飾品と推定されるガラス小玉などから、それらは枕石ではないかと考えられる。このことから埋葬頭位方向は東方位と推定される。墓壙の長軸方向はN62°Eである。

墓壙内からは、上記のように敷石下に落下した状態で出土したガラス小玉56個が、また埋土中から用途不明の鉄製品と墓壙上面に供献されたと推定される小型壺の破片が出土した。また、埋葬施設構築のために造られた平坦面直上においても、墓壙から約1.5m西側の位置から土器が出土した。



第60図 b 主体断面図 (S = 1 : 100)



第61図 b 主体実測図 ($S = 1 : 30$)

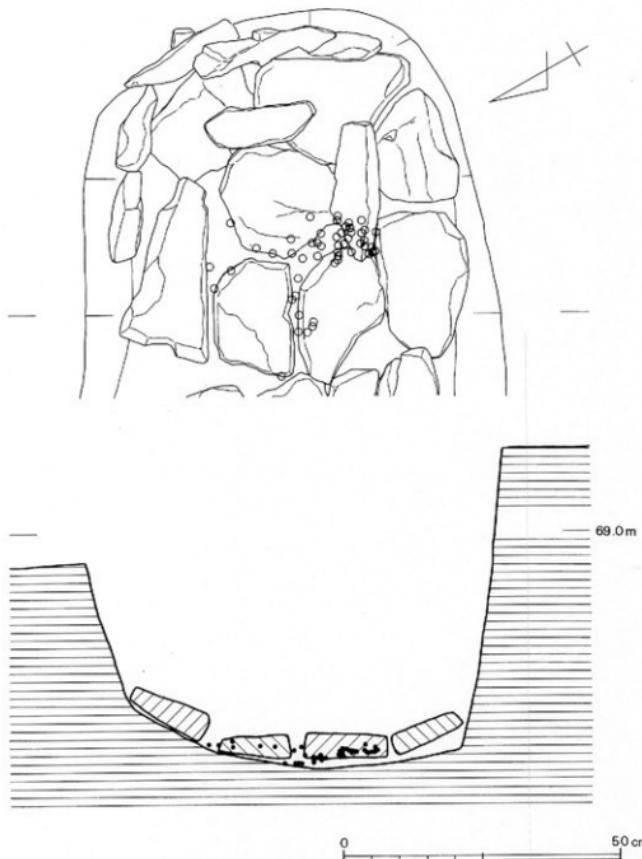
・出土遺物

b 主体に伴う遺物は埋葬主体内からガラス小玉、埋土中から土器（土師器）と鉄器が、また削り出した平坦面上からも土器（土師器）が出土している。

土器（第68図124・第73図166）

小型壺（124）墓壇内上方から出土した。墓壇上面に供獻されたと推定される。

甕（166）墓壇から約1.5cm西側で出土した。口縁端部を尖り気味に仕上げるもので、頸部をつよく横にして窪んだようにみえる。



第62図 b 主体内小玉出土状況実測図 (S = 1 : 10)

鉄器（第77図226～229）

226は墓壙内埋土中から出土したもので、ほぼ長方形を呈し両側面を一方に折り込んだもので、厚さが薄いつくりである。性格は不明である。227と228は墓壙付近の平坦面上から出土したもので、228は226同様薄いつくりで、側面を折り込んでいる。227は現状で三角形を呈し、遺存する2辺のうち1辺は断面三角形状に刃をつくっている。いずれも性格は不明である。229は遺存状況は悪いとはいえ、木葉形を呈していることが窺えることから鎌と推定される。

ガラス小玉（第79図244～299）

敷石下に落ち込んでいたが、枕石と推定される石との位置関係から胸飾りと推定されるものである。計56点が出土した。すべてコバルトブルーを呈し、大きさは直徑0.3～0.35cm（最大0.4cm(270)）、幅0.2～0.25cm、孔径0.1～0.15cmの類似したものである。側面に凸状の瘤が遺存しているものがあることから巻きガラス手法で製作されたものと推定される。

（10）c 主体（第63図・図版29）

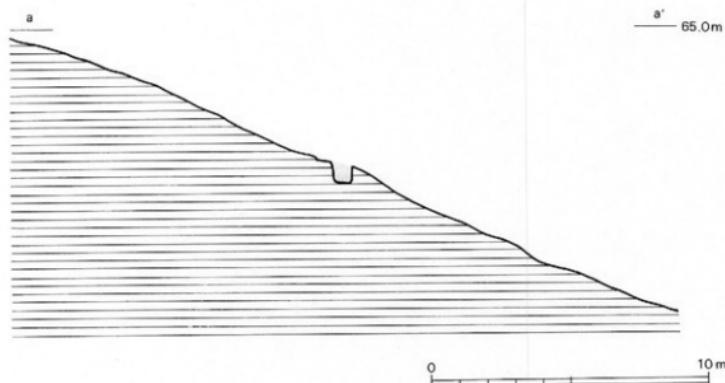
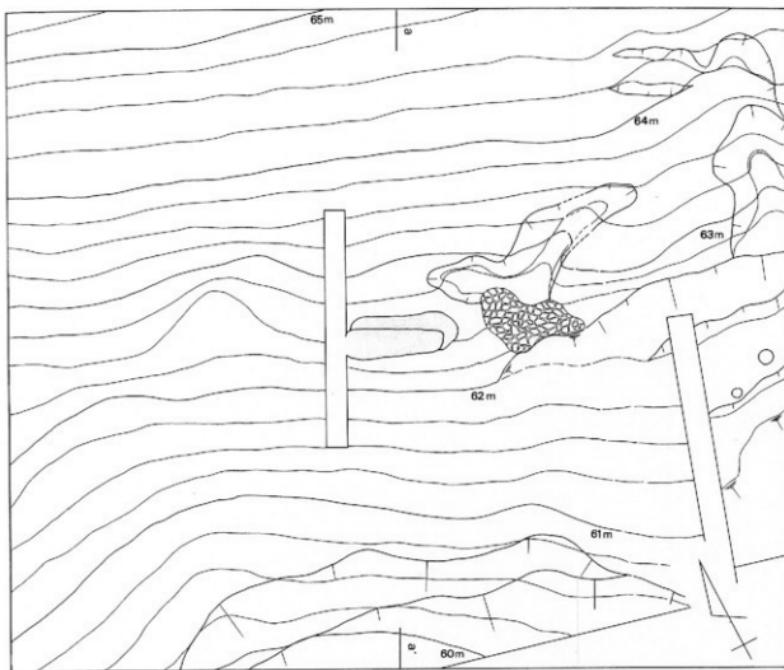
c 主体は、南東斜面のやや傾斜が緩くなる場所に立地する。他の古墳が丘陵尾根上付近に構築しているのと異なり、第1号古墳裾からは直線距離で約25m下、第1号古墳との比高約9mの位置にある。標高は約62.5mである。外標施設等の存在はなく、墓壙を斜面に直交する形で構築しているのみである。この付近は傾斜角度約23度であり、埋葬施設は想定できなかった。調査の過程で須恵器溜まりとともに、その下方に斜面に直交して掘り込まれた長方形の土壙を確認し、墳墓として認識するにいたったものである。

・埋葬主体（第64図）

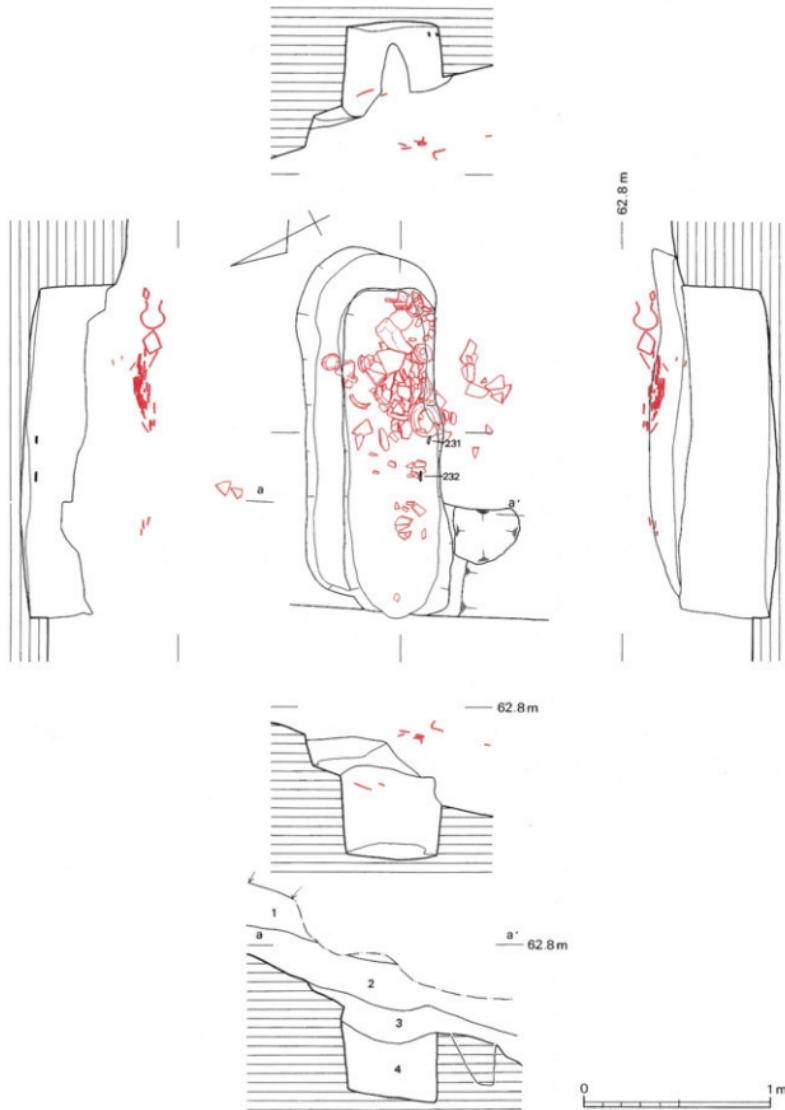
埋葬主体は、土壙である。平面形態は、隅が丸みをもつ長方形を呈する。上記のとおり、緩傾斜面に直交している。北側から東側にかけて1段平坦な面をつくっており、平面的に北側は2段、南側は1段の掘り込みとなっている。規模については西小口部分がトレンチで消失しているため明確ではないが、現状の規模は、掘り方上面で外側の掘り込みで長さ196cm、幅75cm、内側の掘り込みで長さ179cm、幅は東側で51cm、西側59cmである。内側の掘り方からの高さは最高で52cmである。南北両壁はほぼ直立気味に立ち上がっている。床面の規模は、長さ178cm、幅44cmである。東西両小口の高低差は、東側は標高62.04m、西側は標高62.0mで、東小口側がわずかに高い。墓壙の長軸方向はN117°Eである。土層観察の結果、木棺の側壁などの痕跡を示す、立ち上がりの痕跡がみられなかったが、すり鉢状に落ち込んだ土層から恐らくは木棺が埋置されていたと考えられる。埋葬頭位方向は、墓壙上面に置かれた土器群の位置や床面の高低差などから、東方位と推定される。

墓壙埋土中からは、須恵器のほか、墓部の形態の差から恐らく別個体と考えられる刀子の破片を2点検出した。それぞれ床面から東側は4cm上方、西側は3cm上方という位置で出土しており、副葬品と考えられる。

また墓壙上面で出土した須恵器溜まりは、恐らく供献されたものと推定されるが、主には墓壙東側にあたる位置に集中して置かれていた。墓壙上端面よりもいくらか高所になるが、そのレヴェルは墓壙の外側に掘り込まれた平坦面の高さに近いことから、この外側の掘り込みは土器供献用に造り出した可能性がある。供献に使用された器種は、須恵器の环身6点、有蓋高杯3点、小型壺1点、大型甕1点、土師器甕1点である。出土状況から、大量の破片の須恵器甕や体部を欠損した土師器甕以外の器種は、一部破損のものもあるけれども、完形のまま置かれていたと推定される。



第63図 c 主体実測図及び墳丘断面図 ($S = 1 : 200$)



第64図 c 主体実測図 ($S = 1 : 30$)

・出土遺物

土器（第71・72図144～155）

須恵器

环身（144～149） 149は他のものが青灰色を呈し、焼成が良好であることと異なり、灰褐色を呈し、軟質である。形態は、ほとんど同様なプロボーションを呈するが口縁端部内側の段の有無においても、他のものとは異なり、段をもっていない。またその外の青灰色を呈するものについても口縁部の立ち上がり方で、内傾気味に立ち上がるるもの（147・148）と外傾気味に立ち上がるもの（144～146）に分けることができる。

有蓋高环（150～152） 3点とも环部や脚部の形態はほとんど同様であるが、口縁部が内傾気味に立ち上がるもの（150）と、外傾気味に立ち上がるもの（151・152）とに分けることができる。

小型壺（153） 完成品である。やや胴部が張った球形を呈する体部から外反した頸部が立ち上がる。内傾気味に外反する口縁部との屈曲面に2条の凸帯がめぐる。頸部には14条の櫛歯状工具による波状文が巡っている。底部外面にはタタキ痕を残している。

大型甕（154） 体部は肩が強く張る球体を呈するが、底部は押さえ込むことによって若干平底気味になっている。短い口縁部が強く外反してつくが、端部は肥厚して凹面を呈し、その直下に断面三角形状の凸帯が巡っている。タタキの具合が悪く、空気抜きが十分できなかったためか、器面には、焼成によってこぶ状の膨れが多数できている。また底部には窓内での安定を保つための粘土板状のものが2か所付着している。

土師器

甕（155） なで肩を呈する体部から強く外反しながら立ち上がる口縁部がつく。端部は丸みをもっているが面をなす。

鉄器（第77図231・232）

刀子 231は刀子の柄部と考えられる。232は柄部から刃部の間にかけての破片である。両者は幅が異なることから別個体と考えられる。

(11) d 主体（第65図・図版30）

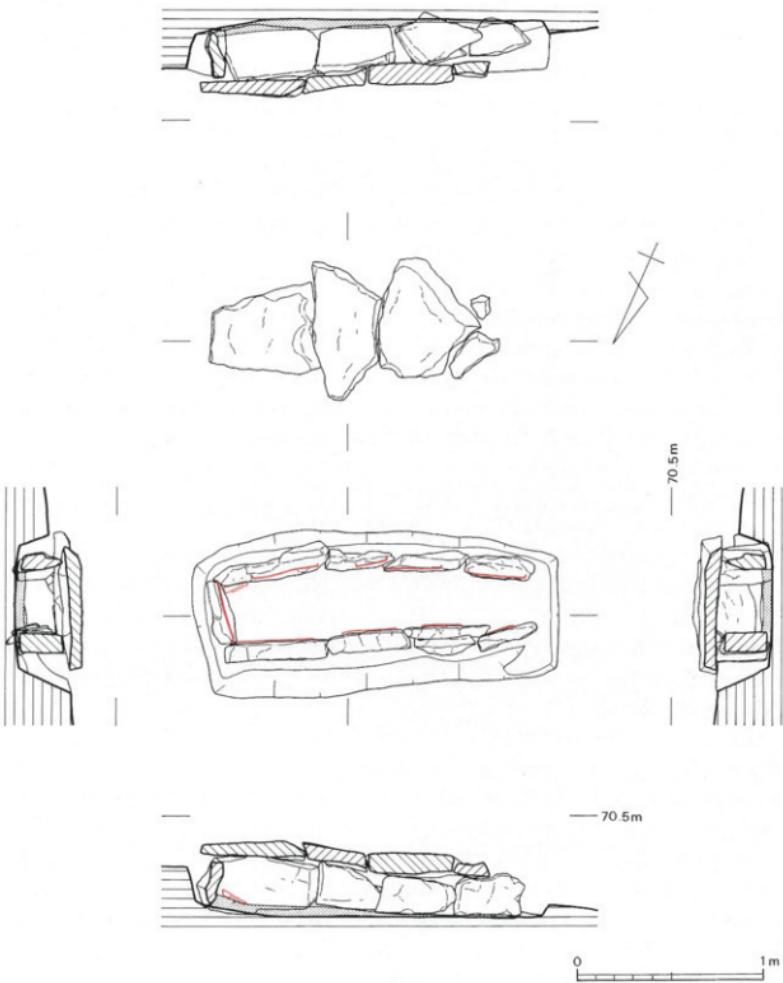
d 主体は、第1号古墳から南東に下った平坦面に構築されている。第1号古墳裾から約6m離れている。

e 主体は西側に約5m離れている。現状では西小口付近は谷地形となっており、削平を受けたものと推定される。石棺埋土と覆土が同種の土壤であったため、掘り方検出作業は困難を極め、蓋石を検出するまでは確認できなかった。

掘り方は平面形態はやや歪んだ長方形を呈し、規模は、確認面で長さ196cm、幅は東小口側で約75cm、西小口側で約65cmである。床面の規模は長さ185cm、幅は東小口側で約64cm、西小口側で約50cmである。埋置された石棺は、ほぼ壁に接するように構築されていた。

本石棺は、検出状況から蓋石は西端部1石が欠落していると考えられる。現状では3石と隙間に設置したと考えられる小板石2石が遺存していた。蓋石は大きさが長辺55～70cm、短辺35～55cmの平石が使用され、東端部は他の2石が横方向に架構していると様相が異なり、縱方向に架構している。架構の順序は検出状況から東側からと推定される。

石棺は、両側壁で小口石をはさむ構造である。南北両側壁は、基本的に4枚の板石が使用され、横長に設



第65図 d 主体実測図 ($S = 1 : 30$)

置している。北側壁の西から2石目は、内壁を揃える必要からか、あるいはこの石のみ露出した上面が三角形状を呈し、蓋石の架構に1石では不安があったのか、外側にもう一枚板石を添えている。側壁石は、土壇床面を掘り込み、また北壁の西から1石目と2石目の境目の上には小角礫を配置し、蓋石の架構に備えるため高さを揃えている。なお南北壁とも西側方向に傾斜をもっている。小口石は、東側のみ遺存していた。小口には比較的偏平な石を使用している。

西小口が欠けているため棺の内法は不明である。現状で長さ165cm、幅は東小口側で32cm、西小口側で27cmである。床面の高低差は、東小口側の標高が70.05m、西小口側の標高が69.97mであり、東側が約1cm程度高いものの、ほぼ平坦になっている。本石棺の長軸方位は、N66°Eである。埋葬頭位方向は、棺内法幅や床面の高低差から東方位と推定される。

棺内からの出土遺物は、北東隅の床面直上に鉄製品の鎌に鍔が付着したものが、東側壁石に接し刃部を下方にしていわば立てかけたような状態で出土した。頭部の左傍に副葬されたものと考えられる。棺の内法幅が27~32cmと相当狭く人物を埋葬すると身体と棺材が接するような状態になると推察されるため、副葬品を置こうとした場合、頭部側が適切な位置であったのであろう。

・出土遺物

鉄器（第77図233）

鎌 いわゆる直刀のタイプで、刃先を左にし、刃部を下に置いた場合、基部のかえりは手前側に折り返されている。

鍔 鎌に付着して出土した。上記のように置いた場合、茎を鎌の基部側に添えて埋置されたものと考えられる。柄部と刃部との境が明瞭ではなく、幅はおなじつくりであろう。刃部先端も尖らず丸みをもっており、刃先の断面は「く」字状を呈している。

(12) e 主体（第66図・図版31-a）

e 主体は、第1号古墳下の南部の平坦面から斜面に変わる傾斜変換点付近に立地する。d 主体の約5m西側に位置する。d 主体とともに、第1号古墳の裾下の等高線に沿うように構築されていることから、第1号古墳との関連が想定される。東側は谷地形になり、削平を受けていると考えられるとともに、トレンチを設定したため東側小口は完全に欠失している。

本石棺は、蓋石は既に遺存しておらず、表土直下に石棺の壁石及び裏込め状の小礫が露出した。傾斜する立地場所に影響をうけ、石棺が全体的に南北に傾斜している状況にあることから、転落したものと推定される。掘り方は、長方形を呈し、中に埋置した石棺は、南側はほぼ壁に接するよう構築されていた。西側と北側には、それぞれ幅約20~25cm、幅約25~30cmのL字状に広い空間を持たせている。そこにはそれぞれ裏込め状に小礫を詰め込んでいた。側壁よりも上方にあり、単純に裏込めとしての機能だけではないのかもしれない。現状の掘り方の規模は、上面で長さ約190cm、幅113cmであり、床面では長さ約155cm、幅68cmである。

石棺は、両側壁で小口をはさむ構造である。石棺は、現状で側壁石は北壁3枚、南壁2枚の板石で構成され、掘り方床面を溝状に掘り込み、蓋石の架構に備えて上面の高さを揃え、横積みにしている。しかしながら、上記裏込め状の礫群に圧迫されたためか北壁のうち東から1石目と2石目は内側に傾斜していた。

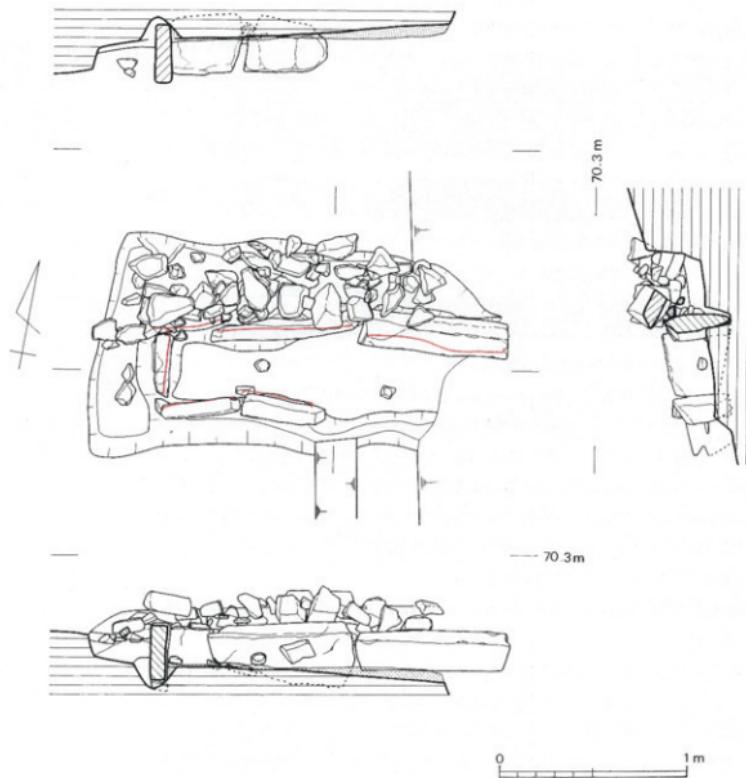
トレントのため東小口を欠失しているので本来の規模は不明であるが、棺内法の長さは現状で150cmである。また幅は、遺存した西小口部で40cm、中央部で40cmである。石棺の長軸の方位はN80°Eである。埋葬頭位方

向は、棺内床面の状況から、東方位と推定される。

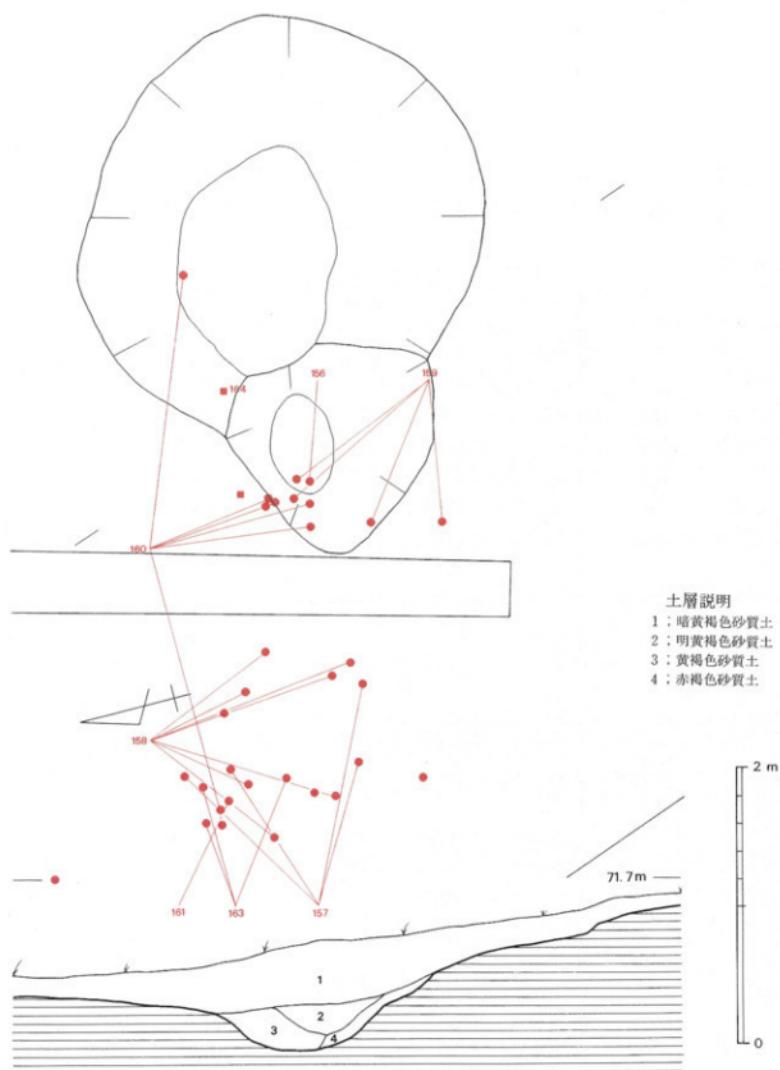
棺内埋土中および棺底からも遺物は出土しなかった。

(13) 溝状遺構（第67図・図版31—b）

調査区のJ 5・K 5区の第1号古墳の北側斜面の墳裾から約3.5m北の傾斜変換箇所に溝状の掘り込みがみられた。第1号古墳の墳丘確認の際にトレントを入れ、本遺構の存在を確認した。まず第1号古墳の区画の溝と想定して調査を進め、その後遺構の広がりを確認するため、全面発掘を行った。調査の結果、溝の平面形態は、第1号古墳側の南東にたいしてではなく、若干北西方向に弧状を呈していたものであった。しかしながら、既に尾根鞍部は平坦に削平されており、墳丘や埋葬施設の確認もできなかった。あくまでも推定の域を超えないものの、須恵器が溝状遺構内外から出土しており、古墳の存在の可能性を考慮してとりあげた。



第66図 e 主体実測図 ($S = 1 : 30$)



第67図 溝状遺構内外土器出土状況実測図 ($S = 1 : 40$)

溝は丘陵尾根線に直交する形で、東西方向に掘り込まれている。規模は長さ9.75m、幅は最大で7.5mである。西側は2段に掘り込まれており、掘り方上面の最高所からの深さは、第1段が約53.5cm、第1段の最深部が約78cmである。

仮に古墳築造にともなう溝の掘削痕であるとすれば、墳形は円形で、径は約8m程度と推定される。

溝状の掘り込み内及びその周辺からは、須恵器及び土師器が出土している。須恵器には壺身・高壺・高壺蓋・無蓋高壺がある。土師器は細片が多かったため、確認できる器種は高壺だけであった。

・出土遺物

溝状の掘り込みの内外から須恵器・土師器が出土した。

土器（第72図156・164、第73図157～163）

須恵器

高壺蓋（157）やや偏平面天井部を呈し、口縁部との境の稜は明瞭で、やや鋭い。口縁部は直線的に下降して、端部には段をもつ。へら削りは90%である。つまみは欠損している。

有蓋高壺（158～163）このうち158の脚端部の一部に灰褐色を呈した生焼けの箇所が存在する。158・159は器形が復元でき、また壺部のみの160と脚部の162は同一個体と考えられる。また端部の仕上げ方や口縁部の形状から、さらに2個体分が存在したと推定され、恐らく5個体分が存在したと考えられる。なお、形態的な差異を示せば、159と160、壺身口縁部のみの161は口縁端部に面をもち、158が端部内面に段を有しているものとは様相を異にする。また脚端部の仕上げ方についても前者が鉤形を呈しているのにたいして、後者は凹凸をもっている。

無蓋高壺（156）口縁端部内面に不明瞭であるが、段を持っている。脚外面にカキメが残る。脚端部は丸く収めている。外面全体に自然釉がかかっている。見込みには、円形で色調が異なる部分があり、焼成時における特徴を示していくよう。すなわち見込みに別器種を入れ重ね焼きを行ったものと推定される。

土師器

高壺（164）脚が出土している。残存部からやや小型品と推定される。

第2表 遺物観察表(2) 土器類・須恵器

*復元径

No.	器種	出土位置	寸法(cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
116	無蓋 高坏 ?	E2区 MT2 埴丘裾部	口径14.4*	直線的に逆「ハ」字状に広がり、端部は丸く收める。内外面とも回転ナデ。	暗黒灰色 細砂粒をわずかに含む	良好		
107	不明	D2-E2区 MT2 埴丘裾部		内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反させる。端部は尖り気味に收める。内外面とも回転ナデ。	暗青灰色 Φ1mm大の砂粒をわずかに含む	良好		
108	壺形 上器	D2-3区 MT2 埴丘裾部		(外)タタキ痕。(内)スリケシ。	青灰色 精緻	良好		
109	底部	E2区 MT2 埴丘裾部		底部と胸部との境に段を有する (外)未調整。(内)底面はヨコナデ、それ以外は回転ナデ。	青灰色 Φ1~2mm 大の砂粒をわずかに含む	良好		
110	坏身	C2区 MT3 主体部内埋土		立ち上がりは内湾気味にたちあがり、受部は鉤状に延びる。 内外面とも回転ナデ。	青灰色 精緻	良好		
111	坏身	C2区 MT3 埴丘裾部		立ち上がりは内湾気味にたちあがり、受部は横方向に直線的に延びる。 内外面とも回転ナデ。	暗青灰色 精緻	良好		
112	坏身	D2区 MT3 埴丘裾部		受部は鉤状にやや上方に延びる。 内外面とも回転ナデ。	暗青灰色 精緻	良好		
113	坏身	D2区 MT3 包含層		受部は横方向に直線的に延びる。 内外面とも回転ナデ。	暗青灰色 精緻	良好		
114	坏身	D2区 MT3 包含層		受部は横方向に直線的に延びる。 内外面とも回転ナデ。	暗黒灰色 精緻	良好		
115	蓋	D2区 MT3 埴丘裾部	口径12.0*	口縁部は直線的に下り、端部内面に凹面を有する。棱は断面三角形を呈し、鋭い。 内外面とも回転ナデ。	青灰色 Φ1mm大の砂粒をわずかに含む	良好		
116	無蓋 高坏	D2区 MT3 埴丘裾部		坏部の口縁部は外反し、丸く收める。体部には上向きの断面三角形の凸帯が2条めぐり、その下に櫛描波状文を施す。 内外面とも回転ナデ。	暗青灰色 精緻	良好		
117	高坏	C2区 MT3 主体部内埋土		明確な段をなし、端部はやや内傾して尖り気味に收める。外面は凹線状にくぼむ。 内外面とも回転ナデ。	暗黒灰色 精緻	良好	116と同一個体か?	
118	高坏 脚部	D2区 MT3 埴丘裾部	脚径10.1*	鳥嘴状を呈し、端部は尖り気味に收める。外面は凹凸が著しい。 内外面とも回転ナデ。	暗灰色 精緻	良好		
119	壺形 土器	D2区 MT3 埴丘裾部		外面及び頸部内面まで暗黒緑色の白然釉がかかる。頸部に櫛描波状文あり。 (外)回転ナデ。(内)口縁部は回転ナデ、肩部内面はスリケシ。	暗灰色 精緻	良好		
120	壺形 土器	D2区 MT3 埴丘裾部		(外)タタキ痕。(内)スリケシ。	青灰色 精緻	良好		
121	壺形 土器	D2区 MT3 埴丘裾部		(外)タタキ痕。(内)スリケシ。	青灰色 精緻	良好		
122	壺形 上器	D2区 MT3 埴丘裾部		(外)タタキ痕。(内)スリケシ。	青灰色 精緻	良好	121と同一個体か?	

No.	器種	出土位置	寸法(cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
123	蓋	C2区 STa付近	口径10.8*	口縁部は直線的に下り、端部内面に凹面を有する。穂は断面三角形を呈し、鋭い天井部はドーム形を呈する。 内外面とも回転ナデ。	青灰色	精織	良好	
124	壺形 土器	M6区 STb 主体部内埋土	口径14.4* 胴径10.45 器高9.0	やや底部が尖り気味の球形の体部を呈し、短い内湾気味の口縁部が延びる。 (外)頭部は板ナデ、他はナデ仕上げ。(内)口縁部ナデ、以下は指ナデ、指頭圧痕が多数のこる。	暗褐色	中1~2mm 大の砂粒を 多く含む	良好	
125	坏蓋	O8区 MT5 周溝内	口径15.8* 器高4.1	天井部はやや平坦につくる。口縁部との境は明瞭で、穂は鋭い。口縁部はややひらき気味に直線的に下り、端部内面の段はわずかに窪む。 天井部外面の4/5がヘラ削り、その外は内外面とも回転ナデ。	青灰色	中1mm大の 砂粒をわず かに含む	良好	天井部内面 に同心円の あて具痕跡 あり。 131とセッ ト?
126	坏蓋	O8区 MT5 周溝内	口径15.1 器高4.7	天井部はやや丸みをもつ。口縁部との境は不明瞭。口縁部はややひらき気味に直線的に下り、端部内面に段を有する。 (外)天井部の4/5がヘラ削り、その外は回転ナデ。 (内)回転ナデ後天井部は横ナデ。	青灰色	精織	良好	
127	坏蓋	O8区 MT5 周溝内	口径15.4 器高4.3	天井部はやや平坦につくる。口縁部との境は不明瞭。口縁部はややひらき気味に直線的に下り、端部内面の段もわずかに窪む。 天井部外面の4/5がヘラ削り、その外は内外面とも回転ナデ。	暗灰色	中2mm大の 砂粒をわず かに含む	良好	
128	坏蓋	O8区 MT5 周溝内	口径15.7 器高4.2	天井部はやや平坦につくる。口縁部との境は不明瞭。口縁部は直線的に下り、端部内面に段がつく。 天井部外面の4/5がヘラ削り、その外は内外面とも回転ナデ。	暗青灰色	中1~2mm 大の砂粒を わずかに含 む	良好	134とセッ ト?
129	坏蓋	O8区 MT5 周溝内	口径14.4*	口縁部はややひらき気味に直線的に下る。天井部との境は不明瞭で、口縁部内面の段もほとんどない。 内外面とも回転ナデ。	暗青灰色	精織	良好	
130	坏蓋	O8区 MT5 周溝内		天井部はやや平坦につくる。口縁部との境は明瞭で、穂は鋭い。 天井部外面の4/5がヘラ削り、その外は内外面とも回転ナデ。	暗灰色	中1~2mm 大の砂粒を わずかに含 む	良好	
131	坏身	O8区 MT5 周溝内	口径12.8 受部14.6	底部は丸味をもち、受部は水平に延びる。立ち上がりは短くやや内傾し、端部内面には段はない (外)底部の4/5がヘラ削り、その外は回転ナデ。 (内)回転ナデ	暗青灰色	精織	良好	底部内面に 同心円のあ て具痕跡あ り。
132	坏身	O8区 MT5 周溝内	口径13.4 受部14.6 器高4.5	底部はやや尖り気味の丸みを呈す。受部は水平に延びる。立ち上がりは短くやや内傾し、端部内面には段はない。 (外)底部の4/5がヘラ削り、その外は回転ナデ。 (内)回転ナデ後底部は横ナデ。	青灰色	中1~2mm 大の砂粒を わずかに含 む	良好	
133	坏身	O8区 MT5 周溝内	口径13.7 受部15.6 器高4.3	底部は平坦気味で、立ち上がりには短くやや内傾する。端部内面には段はない。受部は横方向に延びる。 (外)底部の4/5がヘラ削り、その外は回転ナデ。 (内)回転ナデ後底部は横ナデ。	青灰色	中1~2mm 大の砂粒を わずかに含 む	良好	
134	坏身	O8区 MT5 周溝内	口径13.7* 受部15.4* 器高4.5	底部は平坦気味で、受部は水平に延びる。立ち上がりは短くやや内傾し、端部直下に凹線状の窪みがめぐる。 (外)底部の4/5がヘラ削り、その外は回転ナデ。 (内)回転ナデ後底部は横ナデ。	暗青灰色	中1~2mm 大の砂粒を わずかに含 む	良好	
135	坏身	O8区 MT5 周溝内	口径13.4 受部14.6 器高4.5	底部はやや尖り気味の丸みを呈す。受部は水平に延びる。立ち上がりは短くやや内傾し、端部内面には段はない。 (外)底部の4/5がヘラ削り、その外は回転ナデ。 (内)回転ナデ後底部は横ナデ。	青灰色	中1~2mm 大の砂粒を わずかに含 む	良好	132同一 個体か？

No.	器種	出土位置	寸法(cm)	成形・調整	色調	胎土	施成	備考
136	环身	OB区 MT5 周溝内		底部は平坦気味である.受部は横方向に延びる. (外)底部の2/3がへら削り,その他は回転ナデ. (内)回転ナデ後底部は切ナデ.	暗青灰色 細砂粒をわずかに含む		良好	
137	环身	OB区 MT5 周溝内		斜め上方に延びる受部をもつ. (外)底部の4/5がへら削り,その他は回転ナデ. (内)回転ナデ.	やや濃青 灰色	精緻	良好	
138	●	OB区 MT5 周溝内	胸径9.8	算盤玉状の体部に,やや直立気味の頸部と逆V字状にひらく口縁部がつく.口縁部および頸部に櫛描波状文がめぐる.胴部には微齒状工具による押し引き. (内)回転ナデ.(外)底部回転へら削り.そのほかは回転ナデ.	暗青灰色 字状にひらく口縁部がつく.口縁部および頸部に櫛描波状文がめぐる.胴部には微齒状工具による押し引き. (内)回転ナデ.(外)底部回転へら削り.そのほかは回転ナデ.	精緻	良好	底部外面にヘラ記号あり.
139	短頭 壺	OB区 MT5 周溝内	口径10.8 胸径25.9 器高28.1	口縁部は短く直線的に立ち上がり,端部は内傾した面をなす.体部はやや長円形を呈する. (内)口縁部は回転ナデ.体部は同心円のあて具痕跡.(外)口縁部は回転ナデ.体部は平行タキ半.肩部に数条のナデ消し痕跡.	暗灰色 字状にひらく口縁部がつく.口縁部および頸部に櫛描波状文がめぐる.胴部には微齒状工具による押し引き. (内)回転ナデ.(外)底部回転へら削り.そのほかは回転ナデ.	精緻	良好	
140	壺	OB区 MT5 周溝内	口径14.8* 胸径17.7 器高17.8	口縁部は逆V字状にひらく端部は丸く收め,下方に肥厚して段をなす.体部は球形を呈する. (外)口縁部は回転ナデ.体部は格子状のタキ半のうち肩部はカキメがめぐり,底部付近はナデ消し.(内)口縁部は回転ナデ.体部は横ナデ.	青灰色 字状にひらく口縁部がつく.口縁部および頸部に櫛描波状文がめぐる.胴部には微齒状工具による押し引き. (内)回転ナデ.(外)底部回転へら削り.そのほかは回転ナデ.	精緻	良好	
141	壺	OB区 MT5 周溝内	口径20.8 胸径41.2 器高43.5	体部はやや球体をなし倒卵形を呈する.丸底である.口縁部はV字状に外反し,端部は上に肥厚する. (外)口縁部は回転ナデ.体部は格子目状のタキ跡が見られる.肩部はナデ消している.底部付近に窓内の固定器具の痕跡が2か所に見られる.(内)口縁部は回転ナデ.体部は同心円のあて具痕跡.底部はあて具による叩いた跡が見られる. 口縁部内外面から体部上半部外面に自然釉がかかる.	外: 黒灰色で一部青灰色 内: 黒灰色 字状にひらく口縁部がつく.口縁部および頸部に櫛描波状文がめぐる.胴部には微齒状工具による押し引き. (内)回転ナデ.(外)底部回転へら削り.そのほかは回転ナデ.	精緻	良好	
142	提瓶	OB区 MT5 周溝内	口径8.2 胸径23.2 器高26.8	鰐頭状の体部を持ち,その側面にV字状にひらく口縁部をつけたものである.封鎖痕跡は体部横方向にみられ,円盤充填である. (外)体部外面は片方はへら削り,もう片方はカキメのちナデ仕上げ.(内)回転ナデ.製作時に下方にあたる箇所はナデ跡が残る.口縁部から体部中位まで自然釉がかかる.	青灰色 字状にひらく口縁部がつく.口縁部および頸部に櫛描波状文がめぐる.胴部には微齒状工具による押し引き. (内)回転ナデ.(外)底部回転へら削り.そのほかは回転ナデ.	中1~2mm 大の砂粒を わずかに含む	良好	
143	变形 土器	OB区 MT5 周溝内	口径10.7 胸径12.1	強く外反する短い口縁部がつき,端部はやや尖り気味に收める.体部は球体を呈する. (外)口縁部はナデ.体部はハケノの後ナデ. (内)口縁部はナデ.体部は指ナデ.	暗黄褐色 字状にひらく口縁部がつく.口縁部および頸部に櫛描波状文がめぐる.胴部には微齒状工具による押し引き. (内)回転ナデ.	中2mm大の 砂粒を わずかに含む	良好	
144	环身	K10区 STc 主体部直上	口径10.8 受径11.5 器高4.8	底部はやや平坦で,受部は斜め上方に延びる. 口縁部はほぼ直立し,端部内側に段を持つ. (外)底部の4/5がへら削り,その他は回転ナデ. (内)回転ナデ.	暗青灰色 字状にひらく口縁部がつく.口縁部および頸部に櫛描波状文がめぐる.胴部には微齒状工具による押し引き. (内)回転ナデ.	精緻	良好	ヘラ記号?
145	环身	K10区 STc 主体部直上	口径11.0 受径12.0 器高5.0	底部は丸味をもち,受部は太く,横方向に延びる.口縁部は内傾しながら直立し,端部内側に僅かに段を持つ. (外)底部の4/5がへら削り,その他は回転ナデ. (内)回転ナデ.	暗青灰色 字状にひらく口縁部がつく.口縁部および頸部に櫛描波状文がめぐる.胴部には微齒状工具による押し引き. (内)回転ナデ.	精緻	良好	
146	环身	K10区 STc 主体部直上	口径11.0 受径12.0 器高6.9	底部はやや尖り気味である.受部は横方向に延びる.口縁部は内傾しながら直立する.端部内側に段を持つ. (外)底部の4/5がへら削り,その他は回転ナデ. (内)回転ナデ.	暗青灰色 字状にひらく口縁部がつく.口縁部および頸部に櫛描波状文がめぐる.胴部には微齒状工具による押し引き. (内)回転ナデ.	精緻	良好	
147	环身	K10区	口径10.6*	底部はほぼ平坦で,受部は横方向に鋭く延びる.	暗青灰色 字状にひらく口縁部がつく.口縁部および頸部に櫛描波状文がめぐる.胴部には微齒状工具による押し引き. (内)回転ナデ.	中1~2mm	良好	

No.	器種	出土位置	寸法(cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
149	环身 STc 主体部直上	K10区	口径11.6 受径13.0 器高6.0	底部は丸味を呈し、受部は横方向に延びる。口縁部は内傾しながら直立し、端部内側の段はなく尖り気味に收める。 (外)体部の2/3がヘラ削り、その他は回転ナデ。(内)回転ナデ。	青灰褐色	細砂粒を多く含む	やや不良	
150	有蓋 高坏	K10区 STc 主体部直上	口径10.8 受径11.9 脚径8.4 器高10.5	环部は球状を呈し、受部はやや上方に延びる。口縁部は内傾しながら直立し、端部内側に段を有する。脚は「ハ」字状に外反し、端部は鉤状に下方に屈曲する。透かしは台形のものが、3方向に穿たれている。 (外)环底部は2/3がヘラ削り、その他は回転ナデ。 (内)环部は回転ナデ、脚部は粗い横ナデ。	暗青灰色	精織	良好	
151	有蓋 高坏	K10区 STc 主体部直上	口径10.8 受径11.8 脚径8.6 器高10.5	环部は球状を呈し、受部はやや上方に延びる。口縁部は内傾しながら直立し、端部内側に段を有する。脚は「ハ」字状に外反し、端部は鉤状に下方に屈曲する。透かしは台形のものが、3方向に穿たれている。 (外)环底部は2/3がヘラ削り、その他は回転ナデ。 (内)环部は回転ナデ、脚部は粗い横ナデ。	暗青灰色	細砂粒を多く含む	良好	
152	有蓋 高坏	K10区 STc 主体部直上	口径11.0 受径11.6 脚径8.6 器高10.7	环部は球状を呈し、受部はやや上方に延びる。口縁部は内傾しながら直立し、端部内側に段を有する。脚は「ハ」字状に外反し、端部は鉤状に下方に屈曲する。透かしは台形のものが、3方向に穿たれている。 (外)环底部は2/3がヘラ削り、その他は回転ナデ。 (内)环部は回転ナデ、脚部は粗い横ナデ。	暗青灰色	細砂粒を多く含む	良好	
153	壺	K10区 STc 主体部直上	口径11.2 胴径14.1 器高15.7	頸部は強く外反し、口縁部との屈曲面外面は2条の凸帯がめぐる。頸部外面に櫛描波状文を施す。口縁部はやや内傾しながら直立する。体部は算盤玉状を呈し、丸底である。 (外)口縁部から頸部は回転ナデ、体部下半に平行タキ痕がのこる。(内)体部上半までは回転ナデ、下半は刺突状のくぼみが多数みられる。頸部内面から外面肩部まで自然釉(黄灰褐色)がかかる。	暗黒褐色	精織	良好	
154	壺	K10区 STc 主体部直上	口径21.8 胴径49.4 底径11.0 器高47.5	口縁部は強く「ハ」字状にひらき、端部は強く窪ませている。その下方に段を有する。体部は強く肩が埋り、また底部は平底気味につくる。底部に焼成時に付着した窯内固定具の一部が付着している。 (外)口縁部は回転ナデ、体部は平行のタキ痕のち底部付近は一部ナデ消し。(内)口縁部は回転ナデ、体部は同心円のあて具でおさえた後、ナデ稍し。底部は横ナデ。	黒灰色 ～青灰色	φ1～2mm 大の砂粒を僅かに含む	良好	
155	斐形 土器	K10区 STc 主体部直上	口径19.6	「ハ」字状に外反する口縁部を呈し、端部は面を持つ。体部はナデ肩である。 (外)ナデ。(内)口縁部はナデ、体部はヘラ削り。	黄褐色	φ1-2mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	
156	無蓋 高坏	K5区 MD 内外	口径17.7 脚径10.4 器高12.1	环部は底部が丸く、凸線から口縁部にかけて外方に延び、口縁端部は凹面をもって内傾する。脚は「ハ」字状に外反し、端部は丸く收める。環部1か所に把手を付けるのが欠失している。凸線下には櫛描波状文がめぐる。透かしは台形のものが、三方向に穿たれている。脚の内側を中心的に自然釉がかかる。 (外)环底部は2/3がヘラ削り、その他は回転ナデ。脚は書き目を残す。(内)环部・脚部とも回	暗黒褐色 見込み部はセピア色を呈する	精織	良好	

No.	器種	出土位置	寸法(cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
158	有蓋 高环	K5区 MD 内外	口径10.5 受径11.7 脚径8.8 器高9.4	环部は平底を呈し、受部は横方向に延びる。口縁部は内傾しながら直立し、端部内側に段を有する。脚は「八」字状に外反し、端部は鉤状に下方に屈曲する。端部外面は平滑に仕上げる。透かしは台形のものが、3方向に穿たれている。 (外)环底部は2/3がヘラ削り、その他は回転ナデ。 (内)环部は回転ナデ、脚部は粗い横ナデ。	暗青灰色 Φ1mmの大 砂粒をわざ かに含む		良好	
159	有蓋 高环	K5区 MD 内外	口径10.3 受径11.3 脚径9.0 器高9.0	环部は平底を呈し、受部は横方向に延びる。口縁部は内傾しながら直立し、端部内側に段を有する。脚は「八」字状に外反し、端部は鉤状に下方に屈曲する。透かしは台形のものが、三方向に穿たれている。 (外)环底部は2/3がヘラ削り、その他は回転ナデ。 (内)环部・脚部とも回転ナデ。	暗青灰色 脚端部は 一部生焼 けで黄灰 褐色を呈 する	Φ1mmの大 砂粒を多く 含む	良好	
160	高环 7	K5区 MD 内外	口径10.3 受径11.5 器高4.5*	底部はやや平坦につくる。受部はやや上方にのびる。口縁部は内傾しながら立ち上がり、端部内側に段を持つ。 底部の2/3がヘラ削り、その他は内外面とも回転ナデ。	暗青灰色 Φ1mmの大 砂粒をわざ かに含む		良好	
161	高环	K5区 MD 内外	口径11.0	口縁部は内傾しながら立ち上がり、端部内側に段を持つ。 内外面とも回転ナデ。	暗青灰色 Φ2~3mm 大の砂粒を 僅かに含む		良好	
162	高环 脚部	K5区 MD 内外	脚径9.0	「八」字状に外反し、端部は鉤状に下方に屈曲する。端部外面はほとんど平滑に仕上げる。透かしは台形のものが、3方向に穿たれている。 内外面とも回転ナデ。	暗青灰色 精緻		良好	
163	高环 脚部	K5区 MD 内外	脚径9.7	「八」字状に外反し、端部は鉤状に下方に屈曲する。透かしは台形のものが、3方向に穿たれている。 内外面とも回転ナデ。	青灰色 細砂粒を多 く含む		良好	
164	高环	K5区 MD 内外		円盤充填によるもので、环部と脚部との境を強く横ナデしたため、窪みを呈する。円形の透かしを穿つ。 内外面ともナデ。脚部は縱方向の指ナデ。	淡赤褐色 細砂粒を僅 かに含む		良好	
165	甕	F2区 包含層	口径17.4*	口縁部は「八」字状に外反し、端部は1条の凹縫がめぐる。 内外面とも回転ナデ。	暗青灰色 精緻		良好	
166	壺形 土器	M6区 STb付近 平坦面	口径13.8*	さて肩の体部から「八」字状に強く外反する口縁部がつく。端部はやや尖り気味に收める。体部と口縁部の境界は、強くナデで窪んでいる。 内外面ともナデ仕上げ。	暗赤褐色 細砂粒を僅 かに含む		良好	
167	壺	K6区 表土中		凸縫を有し、その下方に櫛搔波状文がめぐる。 内外面とも回転ナデ。	暗青灰色 細砂粒を僅 かに含む		良好	
168	壺形 土器	K8区 MT6 填丘下包含層	口径27.2*	口縁部は「八」字状に外反し、端部は平坦な面をもつ。 体部の肩はあまり張らない。肩部には櫛歯状工具による刺突文がめぐる。 (外)ナデ仕上げ。(内)口縁部はナデ、体部はヘラ削り。	淡赤褐色 Φ2~3mm 大の砂粒を 僅かに含む		良好	
169	壺形 土器	K8区 MT6 填丘下包含層	口径20.3*	口縁部は「八」字状に外反し、端部は下方に拡張して面を持つ。肩部にはヘラ状工具による刺突文がめぐる。 (外)ナデ仕上げ。(内)口縁部はナデ、体部はヘラ削り。	淡褐色 Φ2~3mm 大の砂粒を 僅かに含む		良好	
170	底部	K8区 MT6 填丘下包含層	底径5.8*	やや凹んだ底部を呈する。 (外)ナデ仕上げ。(内)ユビナデ。	淡褐色 Φ2~3mm 大の砂粒を 僅かに含む		良好	

第3表 遺物観察表(3) 鉄器

※:2個体分の重さ

No.	器種	出土位置	寸法				備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
171	刀子	SH1	柄 4.7	柄 1.05	柄 0.2	8.9	
172	鉈	MT1 第1主体	刃 1.7 柄 11.5	刃 0.8 柄 0.75	刃 0.3 柄 0.2	刃 0.5 柄 10.7	
173	鉈	MT3 主体部内	全 5.2	身 1.45	刃 0.3	4.5	木棺蓋上?
174	鉈	MT3 主体部内	4.3 茎 1.0	身 0.8 茎 0.3		0.2	2.7
175	鉈	MT3 主体部内	3.5 茎 1.8	身 0.95 茎 0.45	刃 0.15 茎 0.2		2
176	鉈 片刃鉈?	MT3 主体部内	8.2 身 1.6	身 0.8 茎 0.5	身 0.3 茎 0.4	7.5	184と同一 個体
177	鉈 片刃鉈?	MT3 主体部内	4.7 身 4.5	身 0.9 茎 0.5	身 0.2 茎 0.1		2.2
178	鉈 切先	MT3 主体部内		2.9	1.1	0.35	3.3
179	鉈 茎	MT3 主体部内		3.6	0.5	0.15	1.0
180	鉈 茎	MT3 主体部内		2.8	0.9	0.2	2.1
181	鉈 茎	MT3 主体部内		2.3	身 0.65	0.35	2.5
182	鉈 茎	MT3 主体部内		6	1	0.2	4.8 木棺蓋上?
183	鉈 茎	MT3 主体部内		2.3	0.25	0.25	1.3
184	鉈 茎	MT3 主体部内		10.8	0.5	0.45	7.1
185	鉈 茎	MT3 主体部内		4.9	0.3	0.35	1.3
186	鉈 茎	MT3 主体部内		4.1	0.4	0.25	2.3
187	鉈 茎	MT3 主体部内		4.8	0.35	0.35	1.8 木棺蓋上?
188	鉈 茎	MT3 主体部内		3	0.3	0.3	1
189	鉈 茎	MT3 主体部内		3	0.25	0.25	1.2
190	小刀	MT3 主体部内	22.4 茎 5.2	刃 2.6 茎 1.6	刃 0.35 茎 0.2	50.1	柄木質 茎目釘
191	小刀	MT3 主体部内	現15.2 茎 3.3	刃 1.15 (復17.3)	刃 0.35 茎 0.9	24.4 茎 0.4	
192	直刀	MT3 主体部内	55.85 刃長42.15 茎長13.6	刃 2.75 茎1.3~2.1	刃 0.5 茎 0.3	302.3	

No.	器種	出土位置	寸法				備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
193	斧 袋状	MT3 主体部内	11.0 袋 6.0	先 5.2 袋 3.6	刃 0.9 袋 0.45	263.4	
194	金槌	MT3 主体部内	6.9 頭 2.65	2.3 頭 2.2	1.5	118.1	
195	刀子	MT3 主体部内	5.9	刃 1.1 柄 0.75	刃 0.25 柄 0.2	4.1	柄木質
196	刀子	MT3 主体部内	4.1 柄 1.9	刃 0.75 柄 0.5	0.2	1.8	埋土中 鉄片付着
197	刀子	MT3 主体部内	5.0	0.8	0.25	2.9	
198	刀子	MT3 主体部内	2.3	1.1	0.25	2.1*	鉄片付着
199	刀子	MT3 主体部内	5.1	1.0	0.3	5.5	
200	不明	MT3 主体部内	4.1	0.65~0.8	0.2	1.9	木棺蓋上?
201	不明	MT3 主体部内	2.8	0.55	0.1	0.8	埋土中
202	鍤	MT3 主体部内	15	刃 2.2 基部2.45	0.35	47.0	曲刃
203	鋤(鍔)先	MT3 主体部内	現 12.1	13.45	最大 0.7	126	U字形
204	鍤	MT3 主体部内	4.5 釘 4.4	釘 1.0 柄 0.8	釘 0.35 柄 0.35	7.2	木質付着
205	鍤	MT3 主体部内	11.4 釘 3.4	釘 0.9 柄 0.9	釘 0.3 柄 0.3	17.6	木質付着
206	鍤	MT3 主体部内	8.5 釘 4.0	釘 0.9 柄 0.9	釘 0.4 柄 0.4	27.4	木質付着
207	鍤	MT3 主体部内	7.5 釘 3.1	釘 0.8 柄 0.8	釘 0.3 柄 0.3	12.3	木質付着
208	鍤	MT3 主体部内	6.3 釘 3.2	釘 1.0 柄 0.75	釘 0.25 柄 0.3	10.3	木質付着
209	鍤	MT3 主体部内	1.4 釘 2.1	釘 0.45 柄 0.45	釘 0.2 柄 0.15	1.0	埋土中
210	鍤	MT3 主体部内	2.45	0.85	0.1	1.4	
211	鍤	MT3 主体部内	2.7	1	0.15	1.3	
212	鍤	MT3 主体部内	2.8	0.5	0.2	1.6	木質付着
213	鍤	MT3 主体部内	2.5	1.15	0.2	1.7	
214	鍤	MT3 主体部内	2.1	0.95	0.1	5.5	木質付着

No.	器種	出土位置	寸法				備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
215	鎧	MT3 主体部内	1.5	0.7	0.1	0.5	木質付着
216	鎧?	MT3 主体部内	1.9	0.6	0.15	0.9	
217	不明	MT3 主体部内	2.15	1.05	0.45	2.1	
218	不明	MT3 主体部内	2.4	0.75	0.45	4.2	
219	不明	MT3 主体部内	2.4	0.85	0.5	1.7	
220	不明	MT3 主体部内	4.5	0.8	0.4	2.4	蓋上?
221	不明	MT3 主体部内	2.1	0.75	0.3	1.2	
222	不明	MT3 主体部内	3.7	1.2~1.9	0.15	2.1	木棺蓋上?
223	不明	MT3 主体部内	2.2	0.55	0.2	0.9	
224	不明	MT3 主体部内	2.45	0.3 0.55	0.2	0.8	
226	不明	STb 主体部内	現 7.6	1.25	0.1	8.6	埋土中
227	不明	STb付近	現 7.0	2.6	0.1~0.3	9.2	包含層
228	不明	STb付近	現 2.7	3.9	0.2	5.9	
229	鎧?	STb付近	6.5	2.6	0.4	15.8	埋土中
230	剣	MT5 埋葬主体	劍身 52.45 茎 14.5	刃 3.1 茎1.7~2.85	刃 0.65 茎 0.4	472.5	剣身・茎と も木質付着
231	刀子	STc 主体部内	2.25	1.15	0.3	3.6	
232	刀子	STc 主体部内	4.5	刃 1.4 茎 0.85	0.2	5.8	
233	鎌	STD 主体部内	14.1	2.8	0.2	64.6*	直刃
	鎌	STD 主体部内	刃 3.7	刃 1.0 茎 0.8	刃 1.0 柄 0.8		233に付着
234	刀子	L11区 埋土中	5.5	刃 1.3 茎 1.0	刃 0.2 柄 0.2	6.9	SH2に伴 うか?
235	鎧	M7区 埋土中	4.25	2.9	0.25	12.4	方頭斧箭式
236	鎧 茎	L10区 埋土中	2.8	1.4	0.3	4.5	

第4表 遺物観察表(4) ガラス小玉

単位(mm)

No.	径	幅	孔径	備考
244	3.5	2.5	1.0	
245	3.5	2.0	1.0	
246	3.5	2.5	1.5	
247	3.0	2.0	1.5	
248	3.5	2.0	1.0	
249	3.0	2.0	1.0	
250	3.0	2.5	1.0	
251	3.0	3.0	1.0	
252	3.0	2.0	1.0	
253	3.5	2.0	1.0	
254	3.0	2.5	1.0	
255	3.0	2.5	1.0	
256	3.0	2.0	1.0	
257	3.0	2.5	1.0	
258	3.0	2.5	1.5	
259	3.0	3.5	1.0	
260	3.5	2.5	1.0	
261	3.0	2.5	1.0	
262	3.5	2.0	1.0	
263	3.0	2.5	1.5	
264	3.0	2.0	1.0	
265	3.0	2.0	1.0	
266	3.0	2.5	1.5	
267	3.5	2.5	1.0	
268	3.5	2.5	1.0	
269	3.0	2.0	1.0	
270	4.0	2.5	1.0	
271	3.0	2.0	1.0	

No.	径	幅	孔径	備考
272	3.0	2.5	1.5	
273	3.0	2.5	1.0	
274	3.0	2.5	1.5	
275	3.5	2.0	1.0	
276	3.0	2.5	1.0	
277	2.5	2.5	1.0	
278	3.0	2.0	1.0	
279	3.5	2.5	1.0	
280	3.0	2.0	1.5	
281	3.5	2.5	1.0	
282	3.0	2.0	1.0	
283	3.5	2.0	1.0	
284	3.0	2.5	1.0	
285	3.5	2.5	1.0	
286	3.0	2.5	1.0	
287	3.0	2.5	1.0	
288	3.0	2.5	1.0	
289	3.0	2.5	1.0	
290	3.5	2.5	1.0	
291	3.0	2.5	1.0	
292	3.0	2.0	1.0	
293	3.5	2.0	1.0	
294	3.5	2.5	1.0	
295	3.0	2.5	1.0	
296	3.0	2.5	1.0	
297	3.5	2.0	1.0	
298	3.0	2.5	1.5	
299	3.5	2.0	1.5	

3. 遺構に伴わない遺物

調査区内からは、遺構に直接伴わない土器・石器・鉄器やこれまで述べた弥生時代や古墳時代以外の遺物が出土している。前者では、弥生土器や須恵器、柱状片刃石斧破片2、鉄鏃の破片1があり、また後者では、縄文土器破片1、スクレーパー1、石匙1、石鎌3、块状耳飾り1、などがある。ここでは、特徴的な遺物について概要を示したい。

柱状片刃石斧破片（242・243） 2点のうち、1点は石敷状遺構上の土器だまりから出土した241と同一個体と推定される。242は基部の一部で、刃部破片である241とは接合はしない。剥離しやすい性質の石材を使用しているためか、厚さ1cm前後で両者とも剥離した状況で出土している。一側面に抉りが認められた。現存長は7.7cm、幅は1.2cmで、厚さは1.15cmで、重さは89.6gである。石材は珪質片岩製である。243は刃部から基部にかけての破片である。断面は長方形を呈する。砂岩製で、軟質であり、表面の剥落が激しく、刃先も欠落している。現状の長さ9.1cm、幅最大で4.9cm、厚さ最大で2.4cm、重さ190.9gである。242はJ8区出土、243はK10区出土。

刀子（234） 茎部から刃部にかけての破片。茎部・刃部とも先端部が欠損している。J11区から出土しており、第2号住居跡に伴う可能性もある。

鉄鎌（235・236） 235は方頭斧箭式の刃部の破片である。現存長約4.3cm、幅最大約3cm、厚さ3.5mm、重さは12.4gである。M7区出土。236は茎部の破片である。現存長2.8cm、幅1.4cm、厚さ3mm、重さ4.5gである。L10区出土。

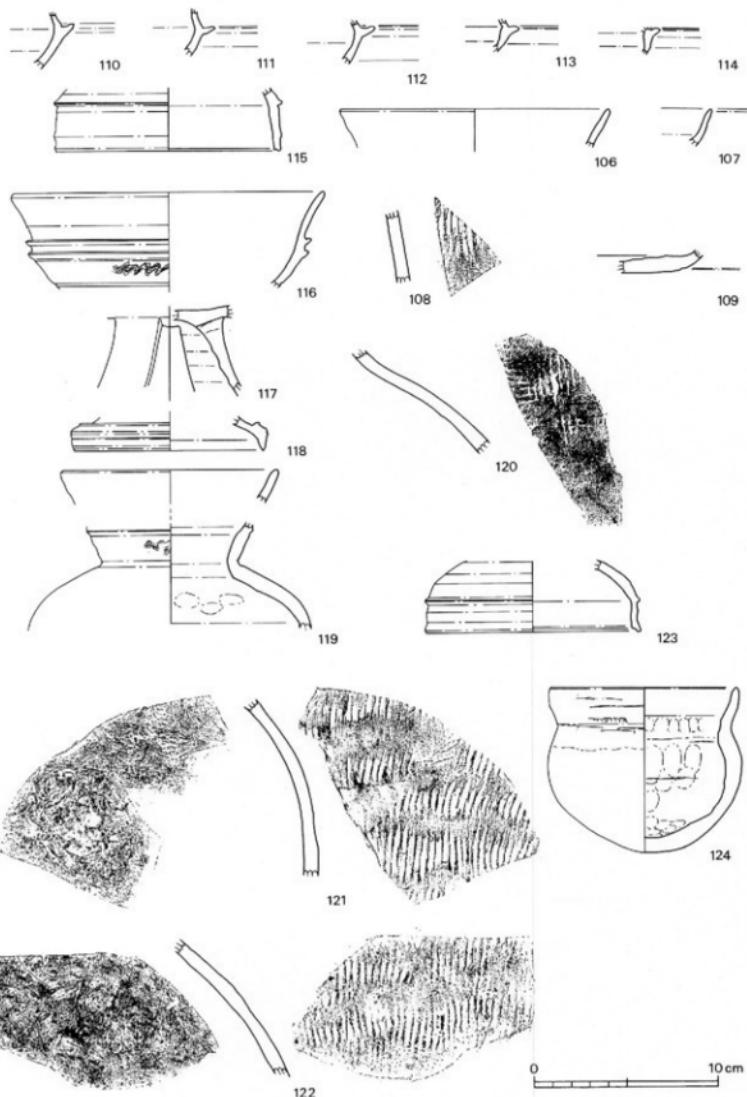
縄文土器（301） 押型文土器の小破片で山形文である。K10区出土。

石匙（306） 材質は安山岩製で、長さ4.8cmで、幅は上端で3cm、下端で約6cm、厚さ最大0.65cm、重さ23.8gである。台形状を呈し、両側縁を抉ってつまみとしている。K10区出土。

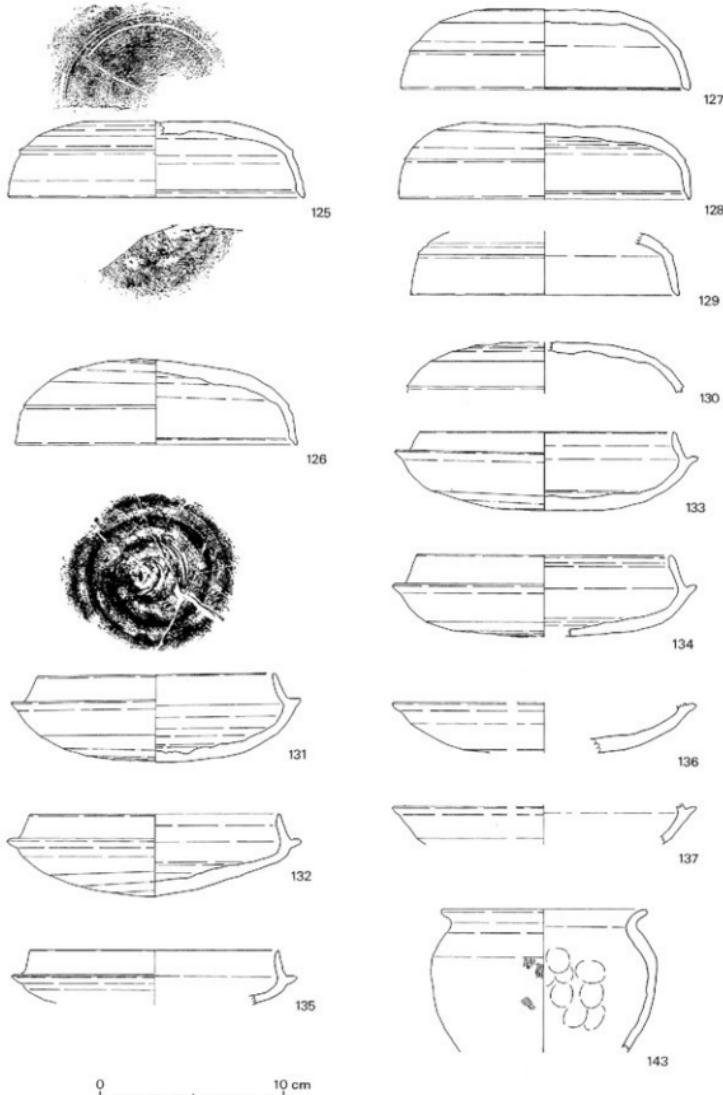
块状耳飾り（300） けつ岩もしくはチャート製で、横長の橢円形を呈している。3破片別々で出土し、欠落した箇所はみつかっていない。長径は5.9cm、短径は約5.1cm、中央の孔径1.45cmである。直径約0.4mmの補修孔が分離部分の両側に2か所ずつ存在している。すべて片側穿孔である。J10区及びK10区出土。

スクレーパー（305） 安山岩製でほぼ台形状を呈する。長さ4.8cm、幅は最大で4.2cm、厚さ0.55cm、重さ11.0gである。K6区出土（第1号古墳北側埴丘斜面）。

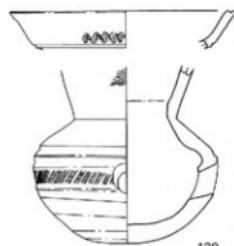
石鎌（302～304） 302・303は長さ：幅が2：1の細長い三角形を呈し、抉りは小さい。断面は303はほとんど偏平に近く、302は菱形を呈する。両者とも石材は安山岩製である。303は長さ約2cm、幅は最大で1.1cm、厚さ約0.2cm、重さ0.6gである。L9区表土中出土。302は長さ2.45cm、幅は最大で1.2cm、厚さ0.3cm、重さ0.7gである。L10区出土。304は小型の凹基式の石鎌で、抉りは浅い。石材は黒曜石製で、姫島産である。長さ1.8cm、幅は最大で1.6cm、厚さ0.35cm、重さ0.6gである。N8区出土。



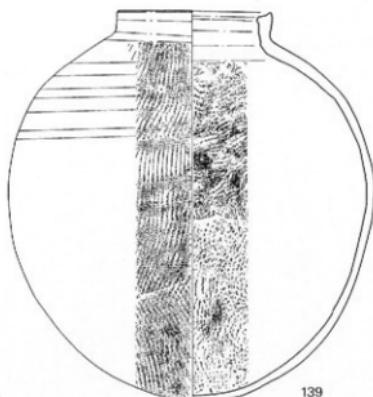
第68図 遺跡内出土遺物(5) ($S = 1 : 3$)



第69図 遺跡内出土遺物図 ($S = 1 : 3$)



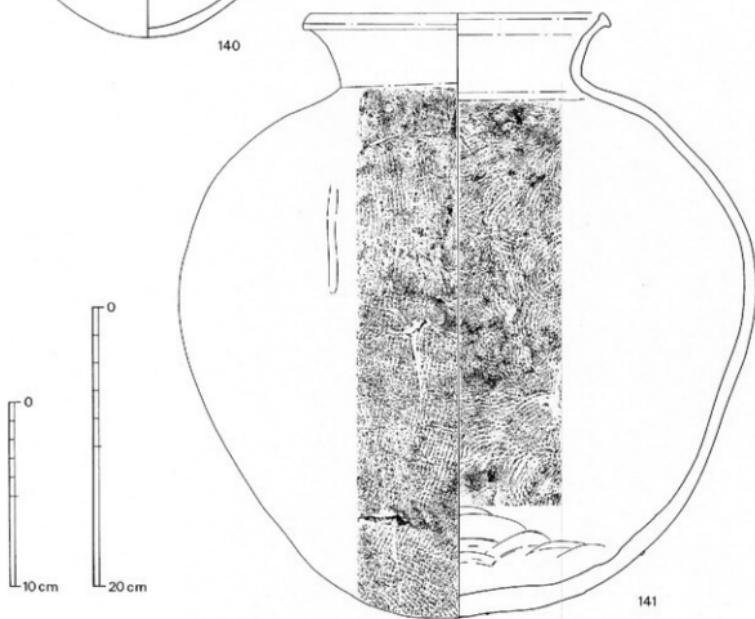
138



139

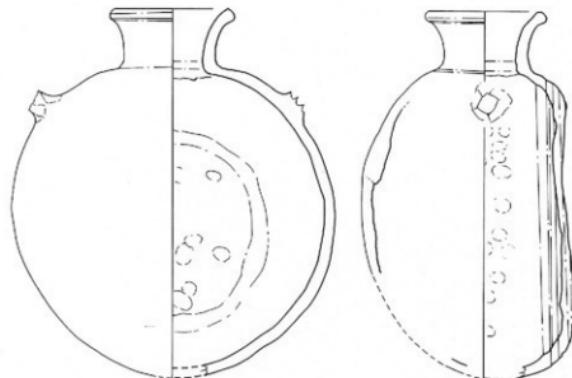


140

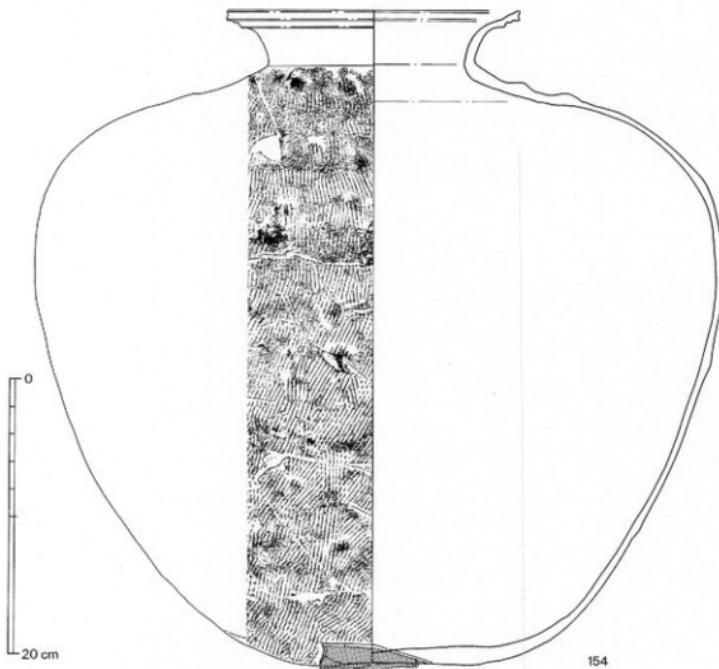


141

第70図 遺跡内出土遺物(138はS=1:3, 他はS=1:4)



142



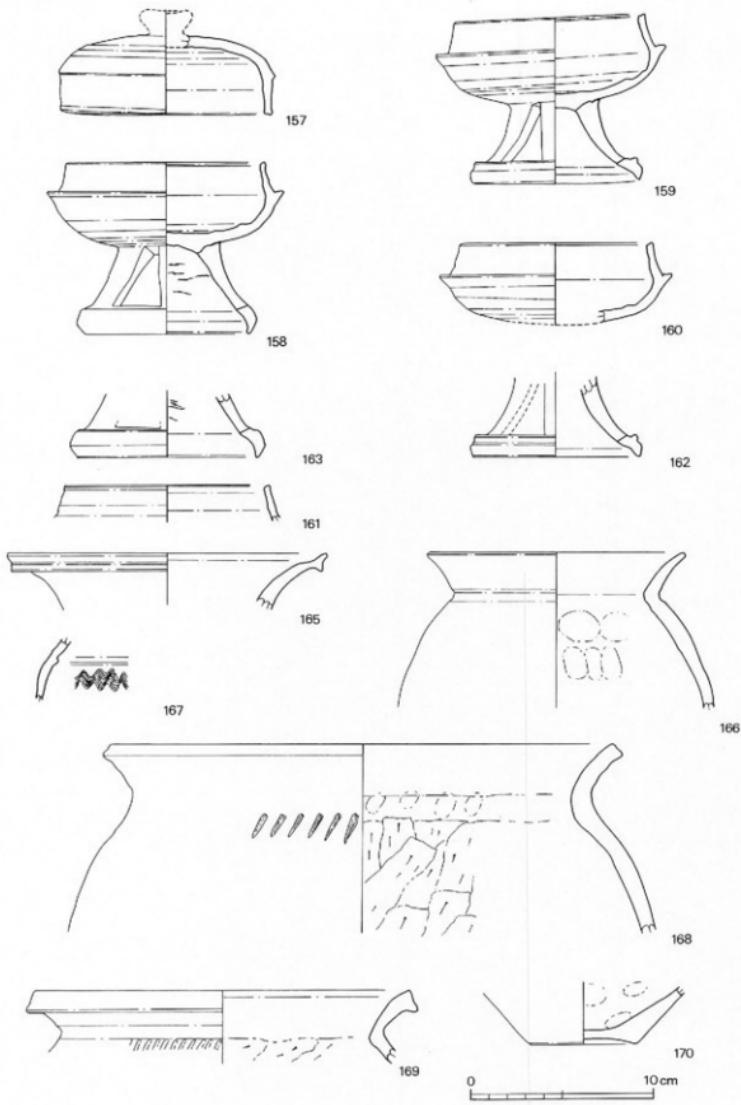
154

第71図 遺跡内出土遺物08 (S = 1 : 4)

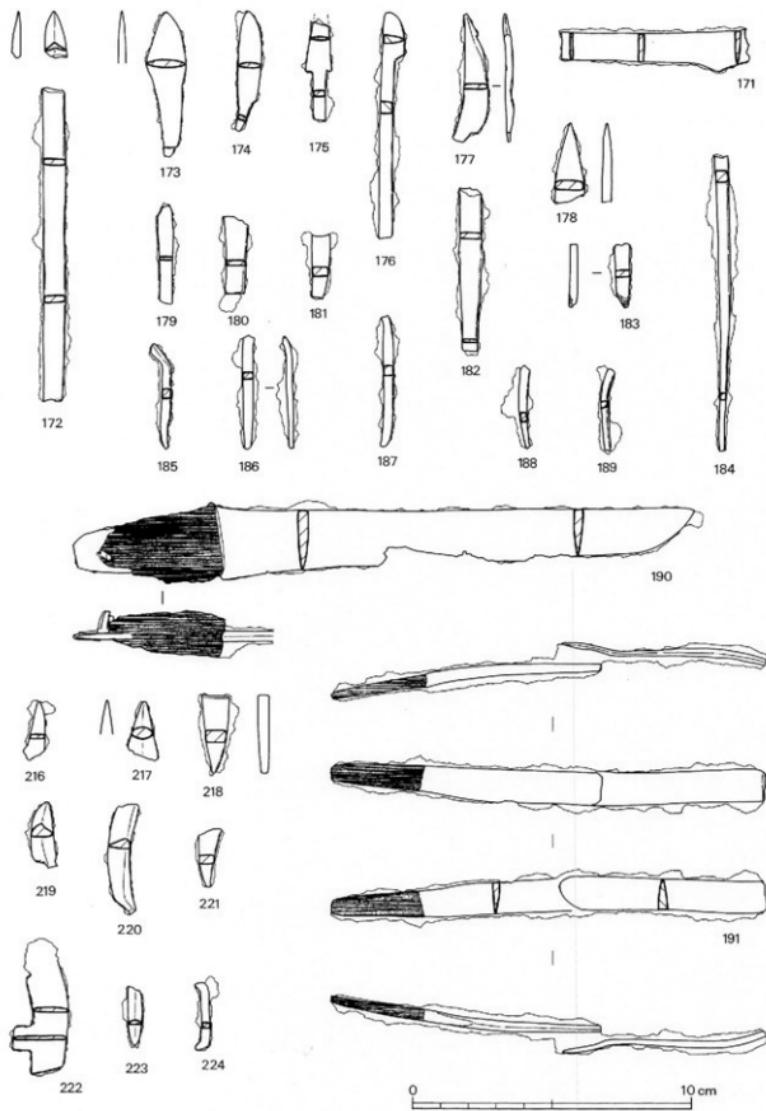
網目：窯内底土塊付着箇所



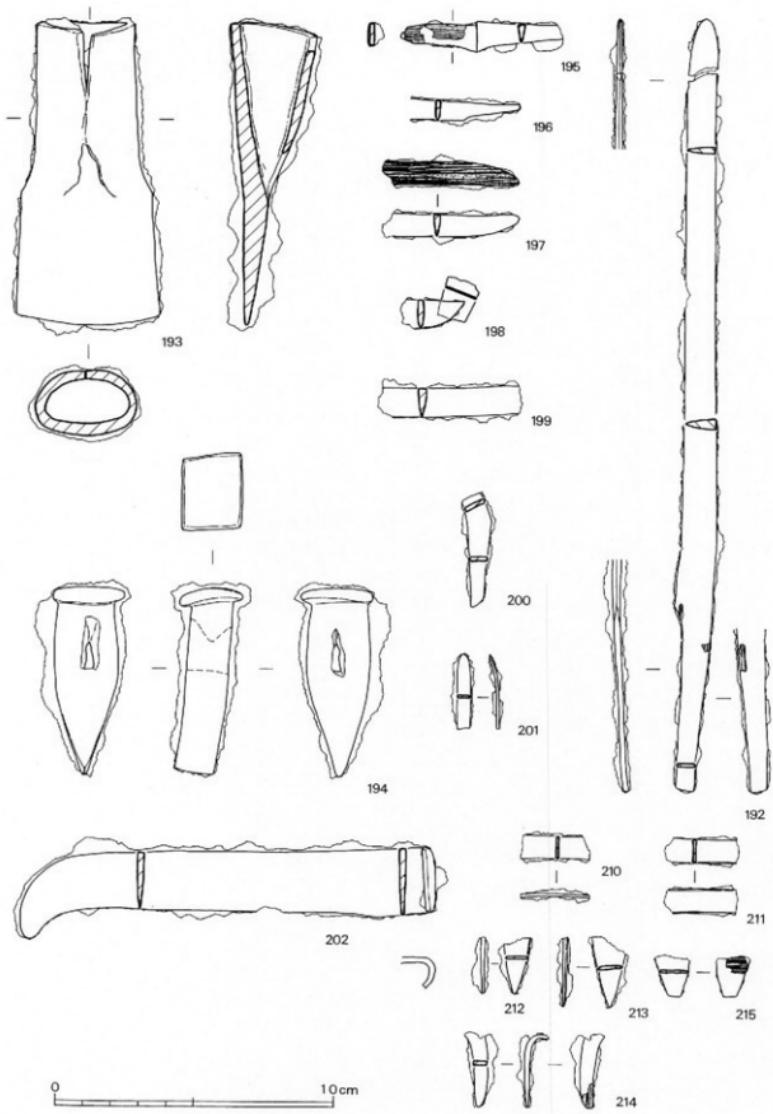
第72図 遺跡内出土遺物⑩ (S = 1 : 3)



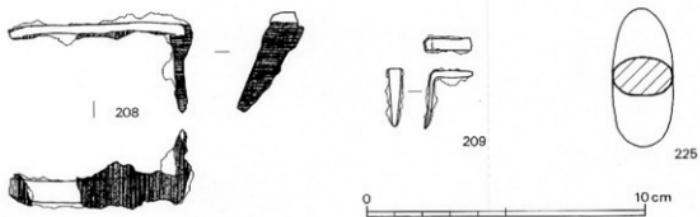
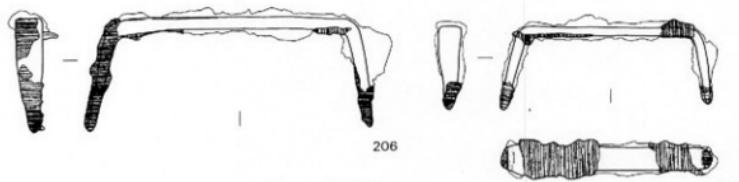
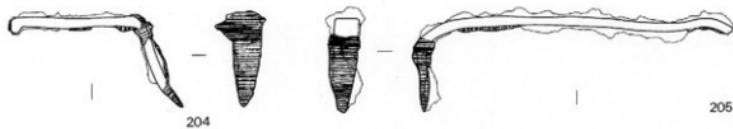
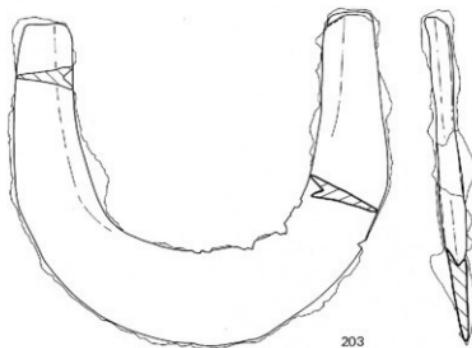
第73図 遺跡内出土遺物(3) ($S = 1 : 3$)



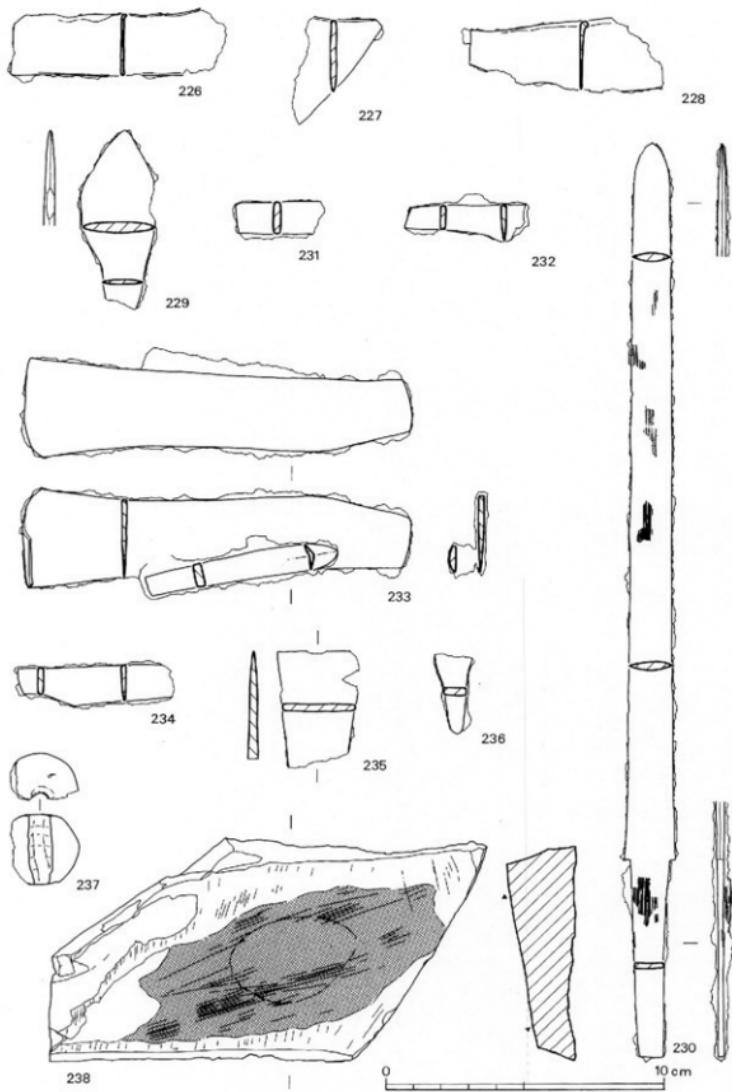
第74図 遺跡内出土遺物(2) (S = 1 : 2)



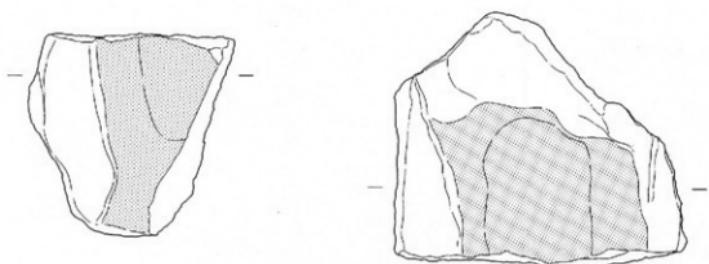
第75図 遺跡内出土遺物② (192はS=1:4, 他はS=1:2)



第76図 遺跡内出土遺物23 (S = 1 : 2)

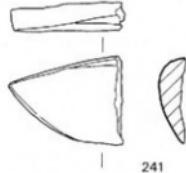


第77図 遺跡内出土遺物24 (230はS=1:4, 他はS=1:2) 細目は擦り面

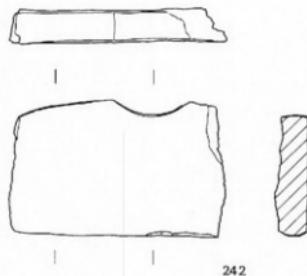


239

240



241



242

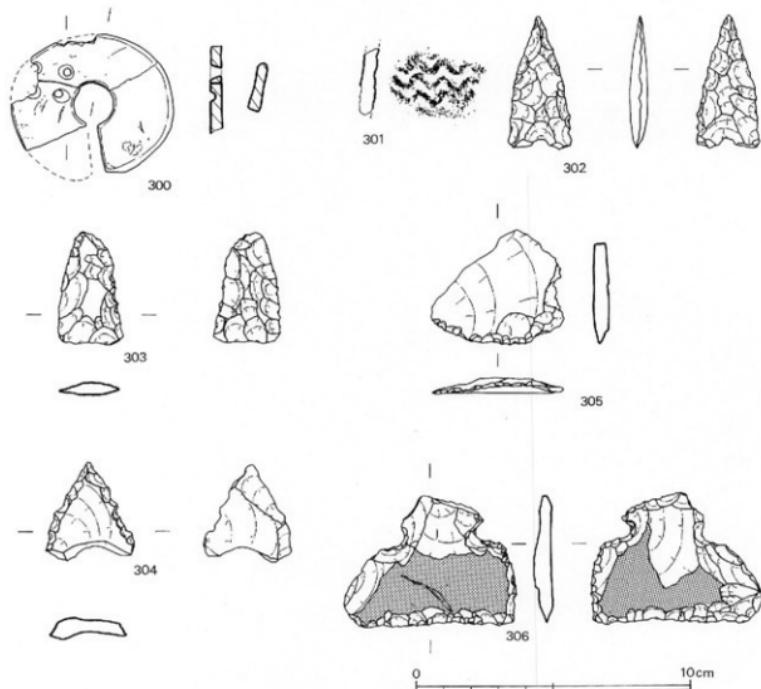
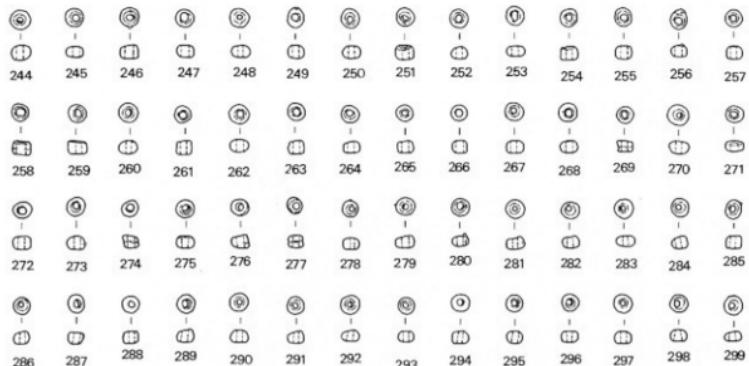


243



第78図 遺跡内出土遺物25 (241~243はS=1:2, 他はS=1:4)

網目は擦り面



第79図 遺跡内出土遺物(300・301・305・306はS=1:2, 他はS=1:1)

4 まとめ

寺山遺跡では、弥生時代後期の集落跡と古墳時代前半期の古墳群を確認した。ここでは、それぞれの遺構ごとに若干考察を加え、まとめとしたい。

(1) 集落跡について

集落の構成について

集落関係遺構は、調査区南半の尾根状平坦面および南斜面（標高60～73m）において、竪穴式住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟、土坑3基、土器棺墓2基、テラス状遺構4か所、石敷状遺構1か所を確認した。これらの遺構は、尾根上の平坦面から標高差約13mの南向き斜面に散在した状況でみられた。また、出土土器の特徴から、ほとんどが弥生時代後期後半から終末ごろの限られた期間に使用されたものである。

竪穴式住居跡は、尾根上で2軒、斜面中腹で2軒を確認した。平面形状は第1号・第3号住居跡が楕円形、第2号住居跡が方形、第4号住居跡が方形に近い隅丸方形である。上屋構造については、柱穴の位置などから第1号・第3号・第4号住居跡が4本柱構造と考えられる。第2号住居跡については斜面中腹の傾斜地上に立地するため南側が流失しており、全体像を明確にすることはできなかったが、炉跡と推定される焼土の位置から2本柱構造の可能性が高いと考えられる。また、第1号・第4号住居跡は焼失住居であり、特に第1号住居跡は炭化した構造材や上屋材が遺存し、科学分析を行うことができた。

これらの住居跡の新旧関係については出土土器が同一様式内にあることから、その判断は相当困難な状況であった。とはいっても、第3号住居跡と第4号住居跡については重複関係にあり、後者が前者の掘り方埋土を掘り込んでつくられており、両者の間に時間差が認められる。また、この重複した2軒の住居跡とは離れて斜面中腹に建てられている第1号住居跡については、第4号住居跡からも同一個体の石皿片が出土していることから推定が可能となった。この石皿は一定期間使用された後に割れ、その1片は第1号住居跡の炉跡内から、もう1片が第4号住居跡の床面から出土したものである。以上のことから、第3号住居跡が最も古く、第1号住居跡と第4号住居跡がほぼ同時期と推定できる。なお、第2号住居跡については、遺構に伴う遺物が出土していないため時期は不明である。

第1号掘立柱建物跡は、第3号・第4号住居跡の南東方向の斜面下の平坦面上に建てられた、規模1間×2間の建物と想定される。本遺構は、他の柱穴内からの出土土器の特徴から、第3号・第4号住居跡とほぼ同時期と考えられる。建物の長軸方向が第4号住居跡の柱穴の軸方向とほぼ一致していることから、第4号住居跡に伴う可能性が高い。なお、この建物跡には炉跡などの生活の痕跡は認められず、建物の規模に比して柱穴の規模が大きいことから、高床倉庫と考えられる。

土坑は3基確認されたが、崩落土や流水による搅乱が著しかった。しかし、出土土器や規模などから、第2号・第3号土坑は土器棺墓であった可能性がある。第1号土坑については、その形状から底面に石敷を施した施設と考えられるが、流水による搅乱や第1号住居跡北側の溝による削平などから詳細は不明である。土器棺墓は2基が並んで確認された。土圧による破壊を免れ、埋置当時の姿を保っていたため、土器の埋置状況を知る貴重な資料となった。両者は墓壙が近接し、深さもほぼ同一に掘り込まれていることから、ほぼ同時期に埋置されたと考えられる。

本遺跡では、テラス状遺構が4か所において確認された。その特徴からいくつかの機能の違いが想定できる。まず、第1号テラス状遺構は地山掘削面が深く整地されている。床面には柱穴や炉跡などが見られるものである。広義では、第1号・第2号住居跡や第1号掘立柱建物跡が構築されている平坦面についてもこれに含まれよう。これらは住居や倉庫などの建設に伴って広い平坦面を必要とした造成と考えられる。第

2号・第3(b・c・d)号テラス状遺構は、地山掘削面が不規則で、床面には小ピットや不定形の土坑、焼土面、土器棺墓などが散在し、小規模な平坦面の造成が繰り返されている。これらは作業小屋を建てたり、屋外作業用のスペースを確保するためのものと考えられる。このように整理してみると、寺山遺跡では、尾根上の平坦面と斜面中腹の標高60～63m(水田面より7～10m)付近に住居や倉庫などを構え、その間の斜面は作業や土器棺埋葬、その他の用途に使用したと思われる。なお、第3号(a)・第4号テラス状遺構は、小規模で奥行きも狭く、床面には溝も柱穴と想定されるピットも認められなかった。これらの機能については不明であるが、第4号テラス状遺構は、他と異なり西方向に面している。生活面であることも否定しきれないが、なんらかの別の非日常的な機能をもつものであることも想定できよう。

本遺跡の斜面から検出された石敷状遺構は、第1号土坑のように周辺に掘り方は確認できなかった。この遺構の性格については、テラス状遺構のはずれに位置し、斜面上方および北西方向へ伸びる溝状遺構を伴っていることから、斜面に散在する施設を結ぶ通路状遺構の一部と推定した。石敷は、流水などによる地面の軟化に対応する工夫ではないだろうか。この時期の集落遺跡において、このような石敷を伴った通路状遺構の確認例は管見ではまだ知らないが、斜面に立地する遺跡としては必要な施設である。なお、第1号土坑内の石敷についても、斜面上方に溝状の落ち込みが見られたことから、通路状遺構の可能性も考えられよう。

調査区の東に統一していたと考えられる丘陵が造成によって削平されているため、集落の全体像については把握できなかったが、確認された住居跡はいずれも2～4本柱構造で床面積が20m²以下の小規模住居であり、調査範囲の中では1～2軒が同時期に営まれていたと考えられる。また、住居跡の他にも倉庫、作業場、土器棺墓など、葉落の様々な施設が斜面に散在しており、周辺水田面からの比高が8～30mの南向き斜面の利用状況を部分的ではあるが明らかにできたといえよう。

土器棺墓について

本遺跡では、乳幼児の埋葬と言われる土器棺墓が2基確認された。これらは土圧による破壊を免れ、埋葬当時の状況を知る手がかりを多く残していた。2基の土器棺墓はテラス状遺構の壁面に沿って近接して埋置されており、墓壙の底面のレヴェルもほぼ同一で、2人の乳幼児を並べて埋葬したものと考えられる。

第1号土器棺墓は、複合口縁を持つ大型の壺形土器の胴部を棺身としており、これに大型の壺形土器の胴部下半を斜めに打ち欠いた蓋を被せている。さらに蓋を安定させるため壺形土器の口縁部を蓋底部に固定し、あたかも1個体分の壺形土器が横たわっている状態に埋置している。棺身と蓋の接合部には粘土の目張りが残っており、丁寧な仕上げとなっていた。一方の第2号土器棺墓は、やはり複合口縁を持つ大型の壺形土器の胴部が棺身として用いられており、これに壺形土器をそのまま用い、合わせ日棺としている。接合部には厚く粘土を巻き付けて目張りとしており、これも仕上げは丁寧である。

両者は棺身に大型の壺形土器の胴部を用いている点では共通しており、棺身に蓋をする際の土器の使用方法は異なるものの、その埋置状況には一貫性が認められる。蓋用の土器の差については、単に手持ちの土器の中からの選択の結果とも考えられるが、通常は鉢形上器あるいは壺形土器の口縁部や胴部などが使用されることが多く、壺形土器を完形で用いてカプセル状に結合させる例は珍しい。埋葬対象の乳幼児の身長との関連なども考えられ、今後の検討課題としておきたい。

ところで、2基の土器棺墓は第2号テラス状遺構の西端に位置しているが、第1号土器棺墓の墓壙に接して西土器群が確認された。この土器群は10個体以上の土器が一括投棄されたもので、二次的に火を受けた土器や炭化材も含んでいる。これらの土器は土器棺墓に使用された土器と同時期の特徴を示しているため、土器棺の埋葬に関連のある遺物と考えられよう。なお、第3号土坑と第4号テラス状遺構上の土器群の関連性も同様のものになる可能性がある。

さらに土器棺墓前面のテラス状遺構床面からは2か所の焼土面が確認されており、この床面で火を用いた何らかの行為が2回行われたことを示唆している。以上のことから、西土器群の土器は、土器棺埋葬の際の祭祀に使用された土器の可能性が高く、床面の2か所の焼土面もその際の火の使用によるものと考えられよう。

(2) 寺山古墳群について

本古墳群は、円墳5基、方墳1基、墳丘下に造られた埋葬主体6基で構成される。なお、溝状遺構は古墳の周清の可能性があり、そうであれば円墳と推定されよう。

時間的変遷について

まず各古墳の築造時期をみてみたい。出土する遺物の割合にはばらつきがみられた。明確な古墳築造時期を導き出す積極的な根拠とはいえないものの、ここでは主に各古墳の墳丘ないし周溝内からの出土土器を用いて築造時期を推定する。また時期が明確な土器が出土していない古墳については他の遺物や埋葬施設などを用いて推定したい。なお時期設定について、須恵器は陶邑古窯址群の編年基準1) 2) による。

それではまず確実に伴うと考えられる土器を出土した古墳からみていこう。第2号古墳は墳丘覆土中から須恵器の無蓋高杯の破片や壺(壺)の胴部の破片が出土している。なお埋葬主体から副葬品等の遺物は出土していない。この須恵器のうち、後者は外面に叩き痕を残し内面はスリケシ調整を行っているなど、古い段階の様相を呈している。時期を限定できる資料ではないけれども、本古墳は5世紀代の築造と位置付けられよう。

ところで本古墳の東側下方に位置する、F・G区においてトレーナーを設定したところ、須恵器の壺(壺)の日縁部の破片(165)が出土した。この口縁部の特徴は初期須恵器(田辺編年1)ではTK73～TK208型式)のものに類似すると考えられる。この調査区は耕作によって削平されていたが、この土器を含む土砂が上方からの流れ込みなどによるものであれば、この土器も本古墳に伴う可能性もある。とりあえず、本古墳の築造時期を5世紀後半頃と位置付けておきたい。

第3号古墳は埋葬主体埋土中及び墳丘覆土中から無蓋高杯、壺身、蓋、直口壺、壺などの須恵器の破片が多数出土している。また埋葬主体内から鍔や武器・農工具など多数の鉄器が出土している。これらの須恵器は小破片が多く器形を明確にできるものは少なかった。このうち無蓋高杯、壺身、蓋、直口壺などの特徴は、陶邑編年との対比から、田辺編年ではTK208型式、中村編年2)ではI型式3段階のものに類似している。とりあえず特に比定は避け、5世紀後半段階と位置付ける。

第5号古墳は周溝内から土師器や須恵器が出土している。このうち須恵器は、壺蓋・壺身各6点、●・壺・短頸壺・提瓶・中型壺各1点が出土している。また埋葬主体内から鉄剣が1本出土している。この須恵器のうち、壺蓋は口縁部内面の段とともに、天井部と口縁部との境の稜も形骸化したものである。また壺身は口縁端部内面の段が喪失しており立ち上がりも短い。このような特徴は、概ね田辺編年ではTK10型式、中村編年ではII型式第2段階に属するものに類似し、6世紀前葉段階に位置付けられる。

a主体はその周辺の覆土から須恵器の壺類の蓋の破片が出土している。なお本主体内から副葬品等の遺物は出土していない。須恵器は埋葬主体の蓋石上面に隙間を埋めるように積み上げられた疊群の周辺から出土したものである。この蓋の特徴は、陶邑編年との対比から、田辺編年ではTK47型式、中村編年ではI型式5段階に属するものであり、6世紀初頭に位置付けることができる。

b主体は主体内上方から土師器の小型壺が出土しており、供獻土器と推定される。また本主体構築のため

に削り出した平坦面の直上からも壺（第73図166）が出土している。埋葬主体内からは他に鉄製品が出土したものの器種は特定できなかった。前者の土器は丸底を呈し、球形を呈した部から内湾気味に短い口縁部が立ち上がるるもので、いわゆる小型丸底壺の範疇に入る。しかし器壁は厚く、胎土も多量の砂粒を混入しており、その退化形態であるといえる。なお、こうした形態を呈する類例は、武末純一氏の論考³⁾や県内の事例⁴⁾、を参考してみれば、須恵器が出現する時期に多く見られるようである。そのことから古墳時代中期後半頃、すなわち5世紀中頃に比定できる。また平坦面直上から出土した土器は、「く」字状に外反する口縁を呈し端部は尖り気味に収めるもので、頭部屈曲部は強く横なでて窪む特徴を呈する。こうした形態を呈する類例をあげれば、安佐北区金川遺跡⁵⁾SB6から出土した壺（第1-13図19、pp25）などがあり、植田千佳穂氏の編年⁶⁾では古墳時代前期III期、妹尾周三氏の編年⁷⁾では古墳I-a期に属するとされている。しかしこの平坦面が本主体と一体であるとみなした場合、この土器の時期はもう少し下つてもよいのかもしれない。いずれにしてもこの小型壺の時期から、本主体の築造時期は5世紀中葉頃と比定する。

c主体はその直上より須恵器壺身6点、有蓋高壺3点、直口壺、中型壺各1点、土師器壺1点が出土している。これらは出土状況から、一括して供獻されたと考えられる。本主体内からも刀子2点が出土している。この須恵器のうち、壺身・有蓋高壺は口縁端部などに新しい様相を呈する器種も一部含まれるもの、口縁端部内面に明瞭な段を有する特徴を呈している。これらの須恵器はおおむね田辺編年ではTK23型式、中村編年ではI型式4段階に属するといえよう。なお、この須恵器群は有蓋高壺に蓋が共伴していないという特徴がみられる。また6点の壺身のうち、149は口径が他のものより若干大きく、口縁端部内面に段をもたず、上り気味に終わる形態を呈し、また色調、焼成も灰褐色で、軟質であり、他の壺身の資料とは形態的にも、見た目にも異質である。生焼け状態といえる資料であり、管見の限りでは、県内においてほぼ同時期の須恵器の供獻事例にこのような資料を含む事例は現在のところ知られていない。わずか1点とはいえる、このような資料の存在は近隣地域における須恵器窯の存在を示唆するものである。

なお、溝状遺構内外からも土器が出土している。このうち明確にした器種は、須恵器が蓋1点、有蓋高壺4点以上、無蓋高壺1点、土師器が高壺1点である。この須恵器のうち有蓋高壺の口縁端部内面は段を有しており、おおむね田辺編年によればTK23型式、中村編年のI型式4段階に属するものである。ただ口縁部に面を残す仕上げ方からいえば、前述したc主体よりもやや古い様相を呈している。これらの有蓋高壺のうち、159の脚部は一部生焼け状態を呈している。なお、この土器群は高壺のみで構成されていることからこれらが何らかの祭祀用に置かれた可能性があり、この遺構が古墳の周溝であると見なすこともできる。その場合、位置や平面形態が北側に若干弧状を描くことから、その南側に立地する第1号古墳に伴うよりも、現状では平坦を呈するその北側に古墳が存在したと想定される。

以上のように時期が判別可能な土器を伴う各古墳の築造時期を示せば、b主体が5世紀初頭、第2号古墳、第3号古墳は5世紀後半段階、第5号古墳が6世紀前葉、a主体が6世紀初頭、c主体が5世紀末とそれぞれ推定される。溝状遺構が古墳の周溝とするならば、c主体とほぼ同時期の築造であろう。

さて今度は土器などを伴わない古墳について築造時期を推定してみたい。第1号古墳については組み合わせ式木棺を埋置する土壙2基を埋葬主体にてもつ円墳である。直径約16mと本古墳群中では最も規模の大きい古墳であるとともに、立地的にも本古墳群中、最も眺望の良好な場所に立地する。のことから本古墳が最も早い段階に築造されたと考えることもできる。ところで本古墳に確實に伴う遺物といえるものは、第1主体から出土した鉈だけである。この鉈は刃部と茎部が同幅で連続する特徴を呈しており、古瀬清秀氏の分類⁸⁾による1a類に属するものである。形態的には弥生時代から存在するものであり、古瀬氏によれば古墳時代前半を中心に全期間みられるタイプとされている。そのためこの鉈からは時期を明確にできない

ものの、確実に須恵器が伴っていないことから、古墳時代前半期の築造と捉えられよう。ところで、本古墳周辺の墳丘下に構築されたb主体、d主体、e主体を含めてもう少し考えたい。まずb主体は第1号古墳北側斜面下に平坦面を造り出して構築している。b主体の覆土と考えられる土層の上面に、上方、特に第1号古墳からの流出土が堆積しており、b主体は第1号古墳築造の前後の段階に存在したと考えられる。特に北側の斜面下方に位置し、また墳丘を有していないことから、その築造にあたって第1号古墳を意識した築造と推定することができる。そのことから本古墳の築造時期はb主体よりも古いと考えられる。また、あたかも本古墳の南側の裾まわりに沿ったように北からd主体、e主体が造られている。これらが造られた段階で第1号古墳が存在していたかについては明確ではないものの、築造状況は第1号古墳の存在する地形を意識して築造されたと捉えられよう。この主体についても第1号古墳より遅れて築造されたと考えるのが無難であろう。これらの主体のうちd主体から鎌と鉈の鉄製品が出土した。鎌はいわゆる直刃タイプであり、鉈は刃部と茎部が同幅で連続したものである。鉈の特徴は古瀬清秀氏の分類によるとIa類に属する。第1号古墳例同様古墳時代前半期を中心に全期間にみられるものである。また鎌については、直刃タイプと曲刃タイプの転換期が大阪府アリ山古墳や静岡県堂山古墳の事例を掲げて5世紀前葉段階といわれている⁹⁾。のことからd主体の築造時期は古くとも5世紀前葉段階と捉えることができる。またb主体が5世紀中葉頃と推定できることから、とりあえずは第1号古墳の築造時期を4世紀代から5世紀前葉までの時間幅のなかで捉えておきたい。

第4号古墳は遺物などが出土していない。埋葬主体は、蓋石上の礪の有無はあるけれども、墳裾において確認したa主体と側壁面の状況など類似した構造を呈している。またa主体の立地は本古墳から東側へ下った緩斜面上であり、a主体が等高線に沿って築造されているように窺えることから、本古墳とa主体との関連が指摘できる。両者の立地の位置関係から、本古墳はa主体よりも古い段階に築造されたと考えられる。よって第2号古墳や第3号古墳などとほぼ同時期に築造されたと推定される。

第6号古墳は埋葬主体の確認ができなかった。しかし、本古墳のように山側をコ字状に溝を掘り下げ、旧地形を方形に整形したのち盛土し、その斜面に貼石をした墳墓は、県北地域や山陰地域において弥生時代中期後半から古墳時代前半までみられる四隅突出形墓や貼石方形墓（墳）などと類似することから、墳墓として扱うものである。北側の清などから小破片の土器しか出土がないため時期の判別はできなかった。ただ、第1号古墳の立地する自然地形を削って溝をつくり出していること、また溝の埋土上面に第1号古墳からの流出土が堆積していることから、築造時期は第1号古墳よりも古いと推定される。また、市教育委員会実施の試掘トレンチ内において盛土下の旧地形に掘り込まれたと考えられる段の埋土中から弥生後期土器（第73図168～170）が出土している。のことからこの貼石墳墓の築造は、これより後の時期から4世紀代の時間幅の中で位置付けられる。

ところで、本古墳のような墳形が方形であり、また貼石を行うものは近隣地域においてほとんど類例が認められないことから注目される。上記のように県北地域や山陰地域において弥生時代中期後半から古墳時代前半までみられる四隅突出形墓や貼石方形墓などと類似した様相を呈しており、これらとの関連についても考えなければならない。なお、安芸南部地域における類例は東広島市横ヶ坪第2号古墳¹⁰⁾）があげられる。この古墳は埋葬施設が箱式石棺であり、時期は溝床面から出土した土師器から5世紀前半と考えられている。しかし貼石の状況は隙間が目立ち、本古墳の方が貼石の仕方が比較的丁寧である。しかし事例が少なく、時間差を示すものとはいえないことから、両者の関連とともに弥生時代における貼石を伴う墳墓との関わりも含めて、系譜など考える必要があろう。とりあえず本古墳の築造時期は、可能性として考えられる弥生時代後期後半から4世紀代という時間幅のうち、横ヶ坪例からもう少し遡らせ、第1号古墳よりも古い段階の4世紀代として認識しておきたい。

以上のように、寺山古墳群の古墳の築造の変遷を示せば、第9号古墳→第1号古墳→d主体・e主体、b主体→第2号古墳、第3号古墳→第4号古墳→a主体→(溝状遺構)・c主体→第7号古墳ということになろう。

ところで、本古墳群は丘陵鞍部を境にして分布域が東西の墓群に分けられる。西墓群は第2号～第4号古墳の3基の古墳とa主体が分布し、東墓群は第1号古墳、第5号・第6号古墳の3基の古墳とb主体、d主体・e主体、やや離れてc主体の4基の埋葬主体が分布する。それぞれ古墳と墳丘下に造られた埋葬主体で構成される。このように、古墳とその縁辺に築造された埋葬主体が見られることは、「階層構成が古墳被葬者を中心「密接な関係」を保ちながらも比較的明確に分化した状況を示して」¹¹⁾ いると捉えることができるであろう。

まず西墓群内での様相を観察すれば、上記のように第2号古墳・第3号古墳→第4号古墳→a主体の変遷が考えられる。埋葬施設は、第2号古墳が箱式石棺、第3号・第4号古墳及びa主体が箱式石棺と竪穴式石槨の要素を併せもつものである。後三者については、既述したように第4号古墳とa主体は規模や側壁の構築法などが類似し、また第3号古墳とa主体は側壁や小口石の仕上げ方などで、築造に際して相互に関連してなされたことが窺えよう。しかし第3号古墳は床面に敷石を行い、第4号古墳は小口の一方が欠落し、a主体は蓋石上面に角礫を積み上げるなど、三者で微妙に様相を異にしている。そして規模や副葬品の有無、そして墳丘の有無などの要素を加味してみてみると、この三者間における差異は、被葬者間における性格の違いを明確に示すものであろう。また第4号古墳やa主体は規模や副葬品をもたないことから未成人葬の可能性があり、第3号古墳の被葬者との血縁的な関連が指摘できよう。一方、第2号古墳の被葬者と第3号古墳の被葬者の関係はどうであろうか。両古墳とも成人埋葬であり、規模は約8mと差異がないにもかかわらず、前者は箱式石棺で副葬品がなく、後者は箱式石棺的な特徴を呈しているものの、石槨で大量の鉄製品を副葬しているなど、明らかに埋葬方法に差異がみられる。時間的な差異も考慮する必要があるものの、被葬者の性格の違いを示していると考えられる。

次に東墓群は、上記のように第6号古墳→第1号古墳→d主体・e主体、b主体→c主体→第5号古墳の変遷が推定できる。後二者が須恵器を伴うものの、外の2基の古墳と3基の埋葬主体は伴っておらず、両者で築造時期に関して若干の開きがあることを示している。すなわち前五者は4世紀代から5世紀中葉頃の築造であり、後二者の古墳の築造時期はそれぞれc主体が5世紀末頃、第7号古墳が6世紀前半頃である。立地的にみると、墓壇直上に須恵器を供獻しているc主体だけが他の墳墓と異なって斜面上に築造し、また離れた場所に構築されている。この被葬者の性格を考える上で、他の古墳の被葬者との差異が想定できよう。一方第5号古墳は丘陵尾根上しかも先端部付近の眺望のきく場所が選ばれ、鉄剣を副葬品するなど周溝内から出土した須恵器とともに、被葬者の勢力を物語るものであろう。特に武器を副葬する古墳は、本古墳群では第3号古墳と本古墳だけである。一方前者の2基の古墳と3基の埋葬主体は、第1号古墳は本墓群の最高所でかつ眺望のきく場所に立地し、第6号古墳や3基の埋葬主体はその裾まわりに構築している状況を呈している。既に述べているように、第1号古墳よりも以前の築造である第6号古墳を除いた、b主体、d主体、e主体は立地状況から第1号古墳を意識した築造と考えられる。ところでb主体が第1号古墳の北側斜面下にあるという状況は、西墓群における第4号古墳とa主体との立地関係と類似した様相を呈している。のことから、西墓群は関連をもって造営されたといえよう。

本古墳群の築造段階については、第1号古墳を前後する、4世紀代から須恵器の出現する段階の時期と、第3号古墳を前後する、5世紀後半から6世紀前半段階の時期の2段階がある。それぞれ、前者では第1号古墳が立地および規模で他の古墳を凌駕し、後者では第3号古墳が埋葬主体や副葬品で他の古墳を凌駕している。各古墳の立地からみても、第6号古墳や第1号古墳の築造によって本古墳群の築造が開始されたと考えられる。第1号古墳が立地的に最も眺望のとれた場所を占拠しており、他の古墳を築造するにあたっ

では、なんらかの規制が働いたものと考えられる。特に第3号古墳の存在する西墓群は確かに眺望はよいが、やや奥まったしかも狭い丘陵尾根上に立地し、築造にあたっては地形的な制約を受けている。

埋葬主体について

古墳においては、第1号古墳は組み合わせ式木棺を埋置した2基の土壙、第2号古墳は箱式石棺、第3号古墳、第4号古墳はともに箱式石棺と竪穴式石槨の要素を併せ持つもの、第5号古墳が組み合わせ式木棺を埋置した土壙である。また埋葬主体では、a主体は箱式石棺と竪穴式石槨の要素を併せ持つもの¹²⁾、b土体は敷石をした土壙、c主体は組み合わせ式木棺を埋置した土壙、d主体・e主体は箱式石棺である。

ここでは、第3号、第4号古墳、a主体、特に第3号古墳のような基底部の石材を広口積みして立て、上部は石材を横積みないし小口積みで構築している。すなわち箱式石棺と竪穴式石槨の要素を併せ持つ埋葬施設について注目してみたい。この特徴的な形態は古くから注目されている¹³⁾。これらの名称として竪穴式石室系の箱式石棺、小型の竪穴式石室、箱形石槨などが使用され、「全体的に箱形石棺の構築方法と共通性があり、その系統上にあるものと思われる」¹⁴⁾とか「箱形石棺的な要素が強い」¹⁵⁾などの分析が行われている。

このような類例を太田川下流域においてあげれば、指呼の間にある空長第2号古墳¹⁶⁾、池の内第1号古墳¹⁷⁾が存在する。遺存状況の良好である前者をみると、基底となる石材が両壁とも縦方向に広口積みされていること、床面に板石を敷くこと、そして壁面上端石及び小口上端石の設置の仕方など類似性が指摘できる。なおこの空長第2号古墳例は3石のみとはいえ蓋石を伴っており、本第3号古墳例も材質は別にして蓋を架構していた可能性がある。ちなみに空長第2号古墳では周溝内から出土した須恵器から田辺編年でTK208型式に属し5世紀末ないし6世紀初頭と位置づけられ、また池の内第1号古墳は出土した須恵器の細片から5世紀後半頃と推定されている。県内に目をむけてみれば、福山市才谷第1・2号石棺¹⁸⁾、庄原市月貞寺第30号古墳A・B主体¹⁹⁾、三次市上四拾貫第10号古墳A・B主体²⁰⁾、千代田町古保利第44号古墳の埋葬主体²¹⁾、東広島市豊ヶ崎古墳の埋葬主体²²⁾、同市龍向山第2号古墳の埋葬主体²³⁾、同市森信第10号古墳の埋葬主体²⁴⁾などが認められる。分布状況は県内に広く認められ、特に地域的に限定して見られる埋葬形態ではないようである。そしてこれらの古墳の時期は、概ね5世紀後半から6世紀前半代の範囲内に納まるものである。

またこれらの構造とは若干相違するものとして、東広島市才が迫第1号古墳第2主体²⁵⁾がある。この主体は基底の石材を内外2列にして並べた特殊な形態をとっており、4世紀初頭と推定されている。同様な形態を呈するものでは5世紀初頭から前半頃の築造とされる同市三ツ城第2号古墳の埋葬土体や同第12号古墳の埋葬主体²⁶⁾がある。これらは「二重棺」構造もしくは「石棺・石槧」構造といえ、先にあげた5世紀後半以降の事例とは様相を異にしており、それぞれ系譜が異なる可能性があろう。しかしながら、これらの構造を呈する埋葬主体がその内部に棺を入れる石槧としての意識をもって構築されたとすれば、棺の材質の違いと捉えられなくない。大上裕士氏は、「竪穴式石室の石室構造」から、才が迫第1号古墳第2主体、三ツ城古墳例（第2号古墳→第1号古墳）を経て、これら5世紀後半から6世紀前半にかけての時期の古墳の埋葬主体例への変遷を想定している²⁷⁾。

ただ、このような類例が少なくとも古墳時代後半期を中心につく広い分布状況を示している事実からいえば、それぞれ有機的に結びついて系譜がたどれるものとは言えないのではないだろうか。よって、大上氏の想定もひとつの地域内（西条盆地）のみに限定した見方といえよう。さらにこれらの類例について、基底に立てる石材を詳細に観察すれば、！縦方向に設置するもの、”横方向に設置するもの、# 両者の混在するもの、と大きく三つに分けることができるようにはらつきがあり、ひとくくりにできるものではなさ

そうである。さらに床面における敷石の有無や小口石の設置方法をみても、構造的に類似するとはいえ、かなりバリエーションが多いことからも、一元的に捉えられないと考える。ちなみに、「にあてはまる類例は、太田川下流域の寺山第3号古墳と空長第2号古墳、池の内第1号古墳の埋葬主体が挙げられる。」にあてはまる類例は、三次市上定古墳群第3号堅穴式石室28)があげられる。そして現在のところほとんどの類例は#にあてはまる。

ところで、これらの埋葬施設の構築方法は、箱式石棺と堅穴式石槨との折衷形態を呈するその構造的特徴からみて、大上氏が指摘しているように、これまで言われたような箱式石棺の系統上にあるとか、箱式石棺から直接に発生したというものではなく、技術的な面からみて堅穴式石槨の構造があったことから出現が可能であったと考えられる。そしてこれを「石棺」と捉えるか、「石槨」と捉えるかについては、定義的にいえば直接遺体を収めているか、あるいはその中に遺体を納める容器（棺）をもつかということを考慮に入れる必要があるものの、堅穴式石槨と呼ばれる埋葬施設が文字どおり棺を入れた槨の意識をもって構築されたと考えられることから、これらの埋葬施設についても堅穴式石槨のひとつのバリエーションとして、ひいてはその簡略化した構築方法として捉え、5世紀後半以降普及した埋葬形態のひとつとして考えたい。しかし、現状ではここであげた類例のうち第4号古墳やa主体のように内法が100cm前後~150cm以下のもの、すなわち規模の点から内部に棺が納められた可能性が低いものも存在しており、これら小規模のものを「槧」として捉えるべきか判断しかねる。

なお、第3号古墳の埋葬施設において、その中に埋置された木棺の緊結具として鍔が使用されていた。木棺の固定に鍔が使用される古墳は横穴式石室を採用する古墳に多く見られるものの、岡山県総社市隨庵古墳29)や同吉備郡真備町天狗山古墳30)などの5世紀中頃や後半に遡る事例もわずかながら存在する31)。太田川下流域では前述の池の内第1号古墳や空長第1号古墳の事例が知られる。前者は前述したように埋葬施設の構造の点で本古墳のものに類似しており、時期も5世紀の後半段階である。一方後者は埋葬施設が堅穴系横口式石室と呼ばれるもので、やはり5世紀後半段階のものである。大田川下流域においては鍔を使用する古墳について系譜関係など不明な点は多いものの、この山本川流域に集中的に見られることは注目される。そして、すべて鍔を便用する古墳は古墳群中1基だけという共通した状況を呈しており、各古墳群が何らかの関連をもって形成されたことを物語るものではないであろうか。

遺物について

次に遺物、特に埋葬施設内出土の遺物について、築造時期を考慮しないでみてみよう。4基の古墳（第2号古墳、第4号古墳、第6号古墳、a主体、e主体）以外の6基の古墳の埋葬施設や埋葬土体内から遺物が出土している。第1号古墳の第1主体から錐1点、第3号古墳から結繫具である鍔12点のほか、直刀1・小刀2・鍔12以上などの武器類、U字形鋤先1・曲刃鎌1などの農具、斧1・刀子5・金槌32)1などの工具類など大量の鉄器、b主体からはガラス小玉56点と鉄器、第5号古墳は鉄劍1点、c主体からは刀子2点、d主体からは鉄鎌・鍔1点づつである。構成でいえば、第1号古墳が工具、第3号古墳が武器と農工具と結繫具、第5号古墳が武器、b主体が装身其、c主体が工具、d主体が農工具である。

その中で時期を限定し第3号古墳を前後する時期、すなわち5世紀後半頃から6世紀前半頃に構築された古墳群をみると、第2号古墳が副葬品をもたず、また第3号古墳に後続して造られたと考えられるc主体や第5号古墳がそれぞれ鉄劍1本や刀子2点に限られることから、規模の面では差異はないものの、第3号古墳が突出している。副葬品は被葬者の生前の勢力を反映するという立場をとるならば、武器類だけでなく農工具などの生産用具を伴うことから、本古墳の被葬者は、権力を象徴する武力だけでなく、積極的に水田開発や農業経営を推進し、強い権力を誇った有力者であったと推定できよう。さらに第3号古墳を前後

する時期に築造された各古墳群において明らかに認められる差異は、各被葬者の社会的地位やその置かれた政治的状況をより大きく反映していると思われる。

さて、太田川下流域、特に山本川流域に限定してみた場合、5世紀以降、第3号古墳の事例のような武器類とともに農工具類を副葬する古墳がいくつか見られる。例えば池の内古墳群では、5世紀中頃と推定される第2号古墳（刀1・馬鍔1・鎌、斧1）、5世紀中頃と推定される第5主体（刀1・鎌（鍔）先1・鎌1・斧2・平鑿1・刀子1）、5世紀後半と推定される第4号古墳（剣1・鎌1・刀子1）がある。また空長古墳群では、5世紀末から6世紀初頭に推定される第2号古墳（刀1・鎌1・鎌2・鉈1・刀子3）がある。そして5世紀代と推定される権地古墳B主体（棺外も含めると刀1・鎌20（外）、鎌1（外）、錐状鉄製品1・刀子状鉄製品1（外））がある。

なお、当該期の太田川下流域東岸では、矢口川流域において5世紀前半と推定される大明地第2号古墳33）（剣2・鎌20・鎌1・刀子2）、上小田古墳3句（剣3・刀子1・鎌1・斧2）、5世紀中頃と推定される中 小田第2号古墳35）（大形剣1・大刀1・剣1・蛇行剣1・刀4・鎌83・手鎌1・鎌1・銚鎌1・斧1・袋鑿1・小型撃1・刀子1）がある。また戸坂川流域においては5世紀後半と推定される揮昌寺西遺跡C主体36）（刀1・鎌13・鎌1・斧1・刀子1）が知られる。太田川下流域において、この5世紀代にみられる武器とともに農工具を副葬する古墳が広島湾頭付近のこの山本川流域、特に約1km以内の範囲内において集中する事実は注意してよく、当時ようやく生活地として開発が可能となった広島湾頭地域において、寺山第3号古墳ほか、上記した古墳の被葬者たちの性格が土地開発などを積極的に推進し、強い統率力をもった有力者ではなかったかと推定される。

以上、寺山古墳群は4世紀代から5世紀前葉と5世紀後半から6世紀前葉の2時期に分かれて断続的に形成された古墳群である。前者の時期では山本川流域において4世紀代にさかのほる古墳が確認されたこと、また貼石をもつた埴輪が存在したこと、また後者の時期では大量の鉄製品を副葬した第3号古墳の存在、また古墳縁辺の埋葬主体の存在、そして周辺地域に当該期の須恵器窯の存在を推定させるe主体や溝状遣構出土須恵器群に含まれる生焼け須恵器の存在などが注目すべき点であろう。いずれにしても、この山本川流域、ひいては太田川下流域西岸地域における特質的な古墳群のひとつといえよう。

ところで、本古墳群の周辺には、5世紀以降、同じ山本川流域には池の内古墳群、空長古墳群、権地古墳37）があり、また水系が異なる安川下流域には二土原古墳、芳カ谷古墳群、尾首古墳が存在している。池の内古墳群は本古墳群の約1km南東側の位置に存在しており、5世紀中葉を若干さかのほる時期から6世紀初頭にかけての時期に築造されたと考えられている。この古墳群は、排水溝を有した竪穴式石室を埋葬主体とし、須恵質・土師質の埴輪を樹立し、葺石を巡らした直径約28mの規模の円墳である第2号古墳をはじめ、須恵器を使用した土器棺、小口側や棺台石などの石材を使用した土壙などを埋葬主体とする、5基の円墳と10基の埋葬主体から構成されるものである。また特色のある遺物としては把手脚付壺や古式須恵器などが出土している。この構成は、寺山古墳群と類似したものである。山本川流域のみならず太田川下流域では傑出した様相をもつ古墳群のひとつである。また空長古墳群は南西約0.8kmの位置に存在する。この古墳群は円墳4基で構成され、うち2基の埋葬主体は竪穴系横口式石室を採用している。第1号古墳からは太刀の柄に付す金銅製三輪玉、蛇行鉄劍などが出土し、また各古墳の周溝からは古式須恵器が出土している。築造時期は5世紀後半から6世紀初頭ごろに比定されている。規模や構成からは池の内古墳群に劣るもの、独自性をもつた優れた古墳群といえよう。先述したように第2号古墳の埋葬主体は寺山第3号古墳の埋葬主体の構造に近似し、また竪穴系横口式石室を埋葬主体となす第1号古墳からは鏡が確認されており、やはり本古墳群との関連が指摘できる。権地古墳はやや離れた約1.6km南東側に所在する。粘土櫛、箱式石棺の2基の埋葬主体が造られ、後者の箱式石棺の内外から鉄刀1・鉄鎌20・鉈2・錐状鉄製品1・

平盤1, 突き盤3, 銚1, 斧1などが出土しており、5世紀代の築造と推定されている。

また水系の異なる三王原古墳38), 芳カ谷古墳群39) や尾首古墳40) も周囲約1.7kmの範囲内に存在している。三王原古墳は0.9km東側に位置する。この古墳は埋葬主体が竪穴式石室であり、獸形鏡1, 鉢1, 馬具, 甲冑片などを出土している。5世紀中頃の築造と推定されている。また芳カ谷古墳群は約1・3km北側に位置する。第1号古墳は割竹形木棺を置いたと考えられる土壙を埋葬主体とし、棺外と推定される土壙内から珠文鏡1, 勾玉2, 管玉21, ガラス小玉13, 刀子1が出土している。築造時期は遺物から5世紀後半と推定される。また第2号古墳は埋葬主体が小型箱式石棺である。第3号古墳は方形ないし梢円形を呈した、東西10m, 南北7mの規模の古墳であり、埋葬主体として大型と小型の箱式石棺2基が構築されている。両者とも遺物が出土していないため築造時期は明確ではない。また尾首古墳は約1.7km北側に位置している。直径約20mの円墳であり、中世山城築造のため削平を受けており、埋葬主体は明確ではない。しかし、土師器及び須恵器の外、U字形鉄先1, 短冊形鉄斧1, そして円筒形埴輪が出土しており、これらの遺物から5世紀後半の築造と推定される。

こうしてみていくと5世紀中葉頃から6世紀前半に、この山本川流域や周辺の安川下流域の丘陵上に、相次いで古墳が築造されていることをみることができよう。このことは当時眼下に広がる山本川などが形成した沖積地を支配拠点とした、太田川下流域における中心的な勢力が形成されていたことを推定させるものであろう。

注)

1. 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
2. 中村浩 1981『和泉陶邑窯の研究』柏書房
3. 武末純一 1989「小形丸底用の軌跡－考古学から見た日朝交流の一断面－」『古文化談叢』第20集(下) 九州古文化研究会
4. 主な類似資料として、三次市四捨貫小原第2号古墳出土土器がある。直径約11mの円墳で、5世紀中葉頃に比定されている。
潮見浩編 1969『四捨貫小原』四捨貫小原調査団
5. 道上康仁 1987「金川遺跡」(植田千住穂・妹尾周三編『山陽白動卓道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(IV)』財團法人広島県埋蔵文化財調査センター)
6. 植田千住穂 1987「大明地遺跡まとめ」(植田千住穂・妹尾周三編『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(IV)』財團法人広島県埋蔵文化財調査センター)
7. 妹尾周三 1990「広島県の弥生後期土器」『瀬戸内の後期土器の編年と地域性』(古代学協会四国支部 第4回大会資料)
8. 古瀬清秀 1977「古墳出土の施の形態的変遷とその役割」『考古論集』
9. 都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
古瀬清秀 1991「農工具」(石野博信・岩崎車也はか編『古墳時代の研究』8 古墳II副葬品雄山閣出版)
10. 青山透 1990「棋ヶ坪遺跡群」(加藤光臣編『東広島ニュータウン内遺跡群』財團法人広島県埋蔵文化財調査センター)
11. 桑田俊明 1990「広島県における古墳研究の現状と課題(上)」『芸備地方史研究』芸備地方史研究会
12. a主体のような蓄石に生じた隙間を埋めるために角礫を積み上げた構造については、太田川流域に聞いていえば、安佐南区長束に所在する権地古墳B主体にその類例を見ることができる。出土した鉄製品から5世紀代といわれている。
橋垣栄二 1984「権地遺跡」(『広島市安佐南区紙園町所在九郎杖遺跡・権地遺跡発掘調査報告』(広島市の文化財第26集) 広島市教育委員会)
13. 管見では、県内では23遺跡例があげられる。

14. 石井隆博 1990『森信第10号古墳発掘調査報告書』東広島市教育委員会
15. 伊吹尚編 1972『賀茂工業団地内遺跡発掘調査概報』広島県教育委員会
16. 石田彰紀 1978『空長古墳群発掘調査報告書』(広島市の文化財第13集) 広島市教育委員会
17. 若島一則・中村眞哉 1985『広島市安佐南区紙園町所在池の内遺跡発掘調査報告』(広島市の文化財第32集) 広島市教育委員会
18. 新谷武夫 1976「才谷遺跡群」(『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県文化財協会)
19. 新谷武夫・山県元 1978「月真寺古墳群」(『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 広島県文化財協会)
20. 向田裕始・鹿見啓太郎 1978「上四拾貢古墳群」(『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 広島県文化財協会)
21. 潮見捨編 1976「古保利第44号古墳」「龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書」龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査団
22. 注15 におなし。
23. 河瀬正利編 1975『賀茂カントリーグラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告』広島県教育委員会
24. 注14 におなし。
25. 大上裕士 1993「才が追遺跡」(『山陽自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(IX) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター)
26. 東広島市教育委員会 1995『史跡三ツ城古墳発掘調査と整備の記録』
27. 注25 に同じ。
28. 道上康仁 1987『大判・上定・殿山』財團法人広島県埋蔵文化財調査センター
29. 鎌木義呂編 1965『隨庵古墳』総社市教育委員会
30. 村井雄 1972「岡山県天狗山古墳出土の遺物」「MUSEUM」250 東京国立博物館
31. 田中彩太 1978「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」「考古学研究」第25卷第2号考古学研究会
32. ここでは潮見先生の説のとおり、金槌のみの出土の場合は鍛治具としてみなさず、他の用途としての使用も想定し、工具として捉えるものである。なお、この金槌は松井和幸氏の分類では、小型のbタイプに属するものであり、このbタイプは望として用いられた可能性が指摘されている。潮見浩 1982『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館松井和幸 1991『古代の鍛冶具』r児鳴隆人先生喜寿記念論集古文化論叢
33. 植田千佳穂・妹尾周三 1987「大明地遺跡」(植田千佳穂・妹尾周三編『山陽自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(IV) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター)
34. 本村豪章 1960『広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告』『広島考古研究』第2号 広島考古学会
35. 潮見浩編 1982『中小田古墳群』(広島市の文化財第16集) 広島市教育委員会・広島大学文学部考古学研究室
36. 石田彰紀 1980『禪窟寺西遺跡発掘調査報告』禪窟寺西遺跡発掘調査団
37. 植垣栄二 1984『権地遺跡』(『広島市安佐南区紙園町所在九郎杖遺跡・権地遺跡発掘調査報告』(広島市の文化財第26集) 広島市教育委員会)
38. 玉井源作 1929『山本村三王原古墳』『史跡名勝天然記念物調査報告』第1輯 広島県
中田昭 1973『広島市紙園町三王原古墳について』『芸備』第1集 芸備友の会
39. 植垣栄二 1984『広島市安佐南区紙園町所在広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』(広島市の文化財第30集) 広島市教育委員会
40. 青山透・小都隆ほか編 1984『尾首城跡発掘調査報告』広島県教育委員会

第1号住居跡 自然科学分析調査報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

寺山遺跡（広島市安佐南区山本7丁目所在）は、弥生時代後期末頃の集落跡と古墳時代中期頃の古墳群が確認された複合遺跡である。今回、標高約62～63mの緩斜面上のやや平坦な箇所で弥生時代後期末頃の住居跡（SH1）が検出された。この住居跡からは、構築材と見られる炭化材が出土した。また、住居の上屋材と考えられる、イネ科と思われる植物遺体が炭化した状態で認められた。これらの炭化材や植物遺体の種類を明らかにすることにより、当時の住居構築材に利用された植物に関する情報が得られると期待された。

そこで、炭化材を対象として材同定、植物遺体を対象として植物珪酸体分析・灰像分析を行うことにより、利用された種類を明らかにすることとした。

1. 試料

炭化材試料は、弥生時代後期末頃の焼失住居跡（SH1）から出土した、住居構築材と考えられる炭化材40点（炭一～40）である。

灰像分析試料はSH-1の上屋材と考えられる、床面より10～15cm程度上で検出された植物遺体である。試料は、発掘調査時にはイネ科の植物遺体とみられた。

また、植物遺体の認められない部分もあり、植物遺体が灰化し、周囲の土壤に混在したことが予想された。この部分についても土壤試料が採取された。この試料を肉眼観察したところ、そのままでは土壤中から灰を抽出することが難しいと判断された。植物体の葉や茎には、植物珪酸体列などの組織構造が認められる。植物体が燃えて灰になると熱に強い植物珪酸体列などの組織片が灰中に残る。そこで、組織片を抽出するために植物珪酸体分析を実施する。

2. 方法

(1) 炭化材同定木口（横断面）・梃巨（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(2) 植物珪酸体分析・灰像分析

灰像分析試料は、肉眼および双眼実体鏡で観察した。植物珪酸体分析試料については、湿重約10gを秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250kHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃葉する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由來した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、これらを含む組織片を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

3. 結果

(1) 炭化材炭化材は、針葉樹1種類(マツ属複維管束亜属)と、広葉樹3種類(コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ)に同定された(表1)。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・マツ属被維管束亜属(*Pinus subgen. Diploxyylon sp.*)マツ科

早材部から晩材部への移行は急~やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1~15細胞高のものと水平樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ筋(*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus sp.*)ブナ科

環孔材で孔圈部は1~2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織がある。柔組織は周囲状および短接線状。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus subgen. Cyclobalanopsis sp.*)ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では梢円形、単独で放射方向に配列する。道管は單芽孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複合放射組織がある。柔組織は短接線状および散在状。柔細胞はしばしば結晶を含む。

・クリ(*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*)ブナ科クリ属

環孔材で孔圈部は1~4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形~梢円形、小道管は単独および2~3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った梢円形~多角形、ともに管壁は薄い。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

(2) 植物遺体

イネ科とみられた植物遺体は、断面構造の形態がタケ亜科などの稈部(いわゆる茎の部分)に類似するが、種類を特定するには至らない。

表1 SH-1より出土した炭化材の樹種

番号	用途	樹種
炭-1	住居構築材	クリ
炭-2	住居構築材	クリ
炭-3	住居構築材	マツ属複維管束亜属
炭-4	住居構築材	クリ
炭-5	住居構築材	クリ
炭-6	住居構築材	クリ
炭-7	住居構築材	クリ
炭-8	住居構築材	クリ
炭-9	住居構築材	クリ
炭-10	住居構築材	クリ
炭-11	住居構築材	クリ
炭-12	住居構築材	クリ
炭-13	住居構築材	クリ
炭-14	住居構築材	クリ
炭-15	住居構築材	クリ
炭-16	住居構築材	クリ
炭-17	住居構築材	クリ
炭-18	住居構築材	クリ
炭-19	住居構築材	グリ
炭-20	住居構築材	クリ
炭-21	住居構築材	クリ
炭-22	住居構築材	クリ
炭-23	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
炭-24	住居構築材	コナラ属アカガシ亜属
炭-25	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
炭-26	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
炭-27	住居構築材	クリ
炭-28	住居構築材	グリ
炭-29	住居構築材	クリ
炭-30	住居構築材	クリ
炭-31	住居構築材	クリ
炭-32	住居構築材	コナラ属アカガシ亜属
炭-33	住居構築材	クリ
炭-34	住居構築材	クリ
炭-35	住居構築材	クリ
炭-36	住居構築材	コナラ属アカガシ亜属
炭-37	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
炭-38	住居構築材	クリ
炭-39	住居構築材	クリ
炭-40	住居構築材	コナラ属アカガシ亜属

灰が含まれていると考えられる土壤からは、スキ属短細胞列やウシクサ族機動細胞列、特徴的な植物珪酸体を含まない不明細胞片がわずかに認められる。また、単体の植物珪酸体としてスキ属短細胞珪酸体やウシクサ族機動細胞珪酸体、タケ亜科短細胞珪酸体などがわずかに検出される。

4. 考察

住居構築材はクリを主とし、他にアカガシ亜属・コナラ節・複雜管束亜属が認められた。炭化材の出土状況の図面を見ると、いくつか出土している大型の炭化材は重木に由来する可能性がある。しかし、多くの試料は小片であるために部材の推定は難しい。重木の可能性がある比較的大型の部材には、クリと共にコナラ節とアカガシ亜属も認められる。このことから、少なくとも重木ではクリを中心としながらも、複数の種類が使用されていたことが推定される。

広島市では、これまでに黒谷遺跡や牛田早稻田遺跡で弥生時代後期の住居構築材について樹種同定が行われている。これらの遺跡では、いずれもシノキ属を中心とした樹種構成が確認されており、今回の結果とは異なる。住居構築材の用材選択については、関東地方の調査例をまとめた結果、遺跡周辺の植生を反映していることが指摘されている（高橋・植木、1994）。

このことを考慮すれば、本遺跡周辺と牛田早稻田遺跡や黒谷遺跡周辺では植生が若干異なっていたことが推定される。

また、上屋材と考えられた植物遺体はタケ亜科などの稈部に類似するものの、種類を特定することができなかった。しかし、灰が含まれていると考えられる土壤からは、スキ属短細胞列やウシクサ族機動細胞列などの組織片、単体のスキ属短細胞珪酸体やウシクサ族機動細胞珪酸体などがわずかに認められた。これより、上屋材の構築材のひとつとしてスキ属も利用されたと考えられる。このような例は群馬県渋川市中筋遺跡でも認められ、扇状地上に立地する古墳時代の住居跡の上屋構造構築材としてスキ属の中のオギがヨシとともに利用されていた（群馬県渋川市教育委員会、1988）。スキ属の中には草原などの開けた場所に生育するスキも属しており、いわゆるカヤ材を構成する種類のひとつである。

なお、本地域ではこれまでに住居構築材としてどのような種類が利用されていたのか、あるいは用材の選択に関する分析調査事例が少ない。今後も資料の蓄積が必要であり、各時代時期の焼失住居跡に伴う炭化材などを対象とすることが望まれる。

〈引用文献〉

- 群馬県渋川市教育委員会（1988）中筋遺跡第2次発掘調査概要報告書、渋川市発掘調査報告書18集、51p.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究、25、p.31-64
- 高橋 敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択・PALYNO、2、p.5-18.

種類	SH1	
	試料番号	覆土
イネ科葉部短細胞珪酸体		
タケ亜科	1	
ウシクサ族スキ属	5	
不明ヒゲシバ型	1	
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
タケ亜科	1	
ウシクサ族	11	
不明	2	
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	7	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	14	
総計	21	
組織片		
スキ属短細胞列	2	
ウシクサ族機動細胞列	1	

図 版



図版 1



a 寺山遺跡遠景（南東から）



b 寺山遺跡航空写真（調査前）

図版 2



a 寺山遺跡航空写真（調査後）



b 寺山遺跡航空写真遺跡南東部分（調査後）

図版 3



a 第1号住居跡炭化材検出状況（南から）



b 第1号住居跡完掘状況（南から）



a 第1号住居跡遺物出土状況（南から）

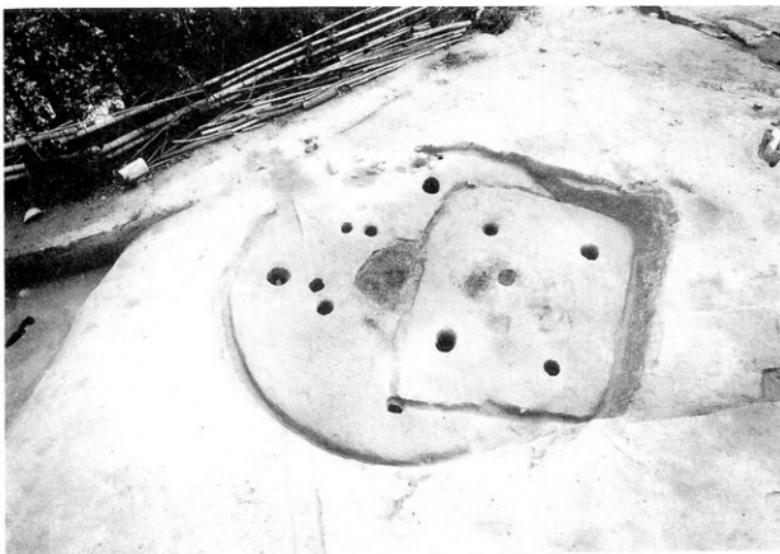


b 第1号住居跡屋根材検出状況（西から）

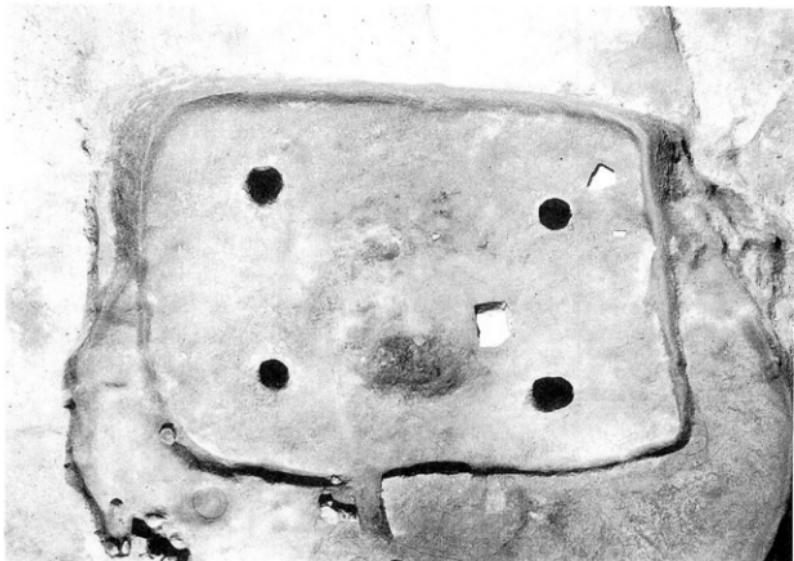
図版 5



a 第2号住居跡完掘状況（東から）



b 第3号・第4号住居跡完掘状況（北から）



a 第4号住居跡完掘状況（東から）



b 第4号住居跡土器出土状況（北から）

図版 7

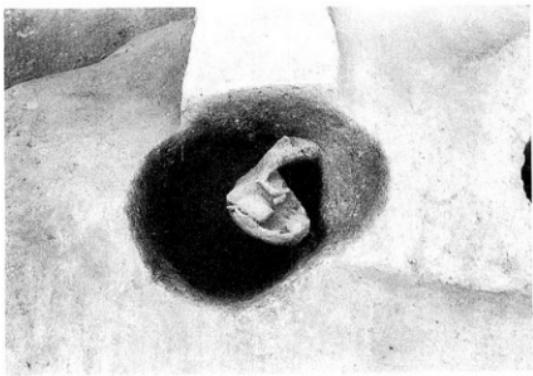
a 捜立柱建物跡完掘状況
(北から)



b 捜立柱建物跡完掘状況
(西から)



c 柱穴内土器出土状況
(西から)



図版 8

a 第1号土坑検出状況
(西から)



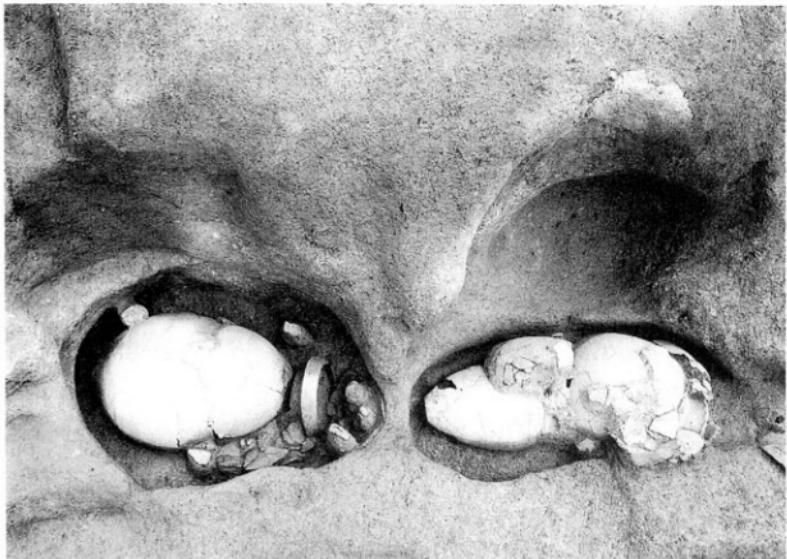
b 第2号土坑検出状況
(南から)



c 第3号土坑検出状況
(北から)



図版 9

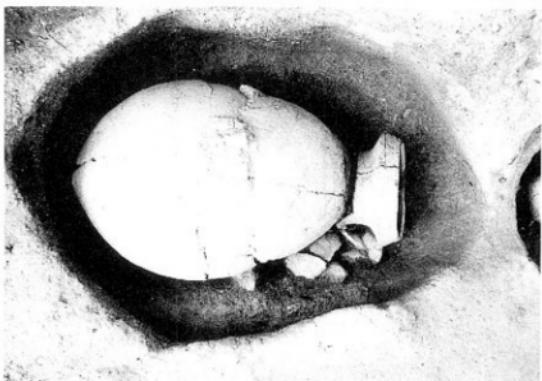


a 第1号・第2号土器棺墓検出状況（南から）

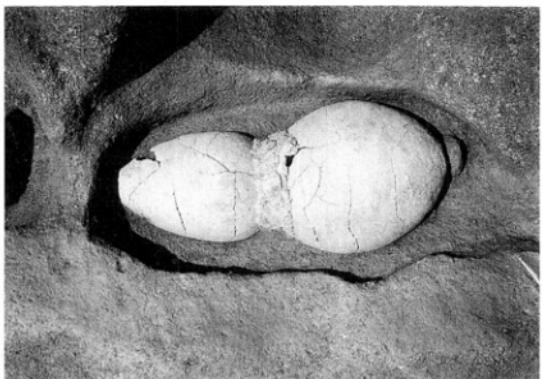


b 第2号テラス状造構西土器群検出状況（北から）

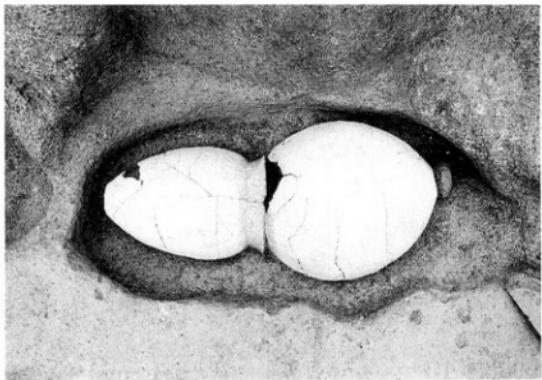
a 第1号土器棺墓検出状況
(南から)



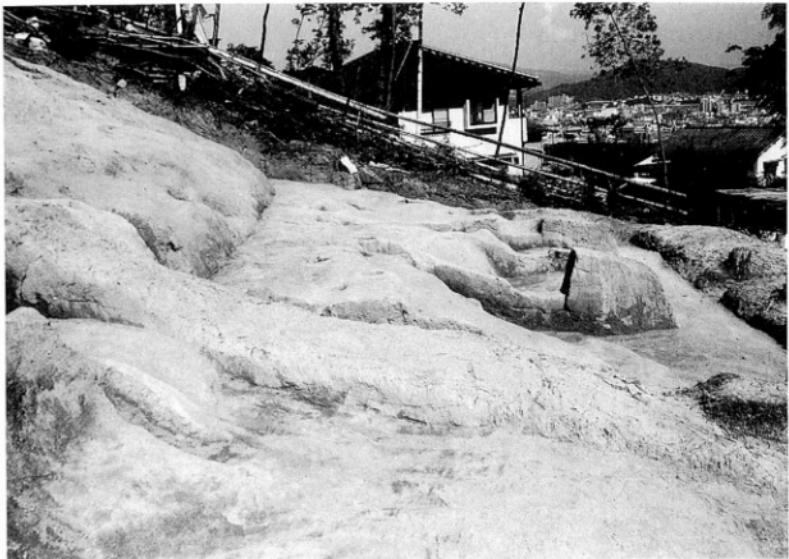
b 第2号土器棺墓検出状況
(南から)



c 第2号土器棺墓目張り
除去後 (南から)



図版11

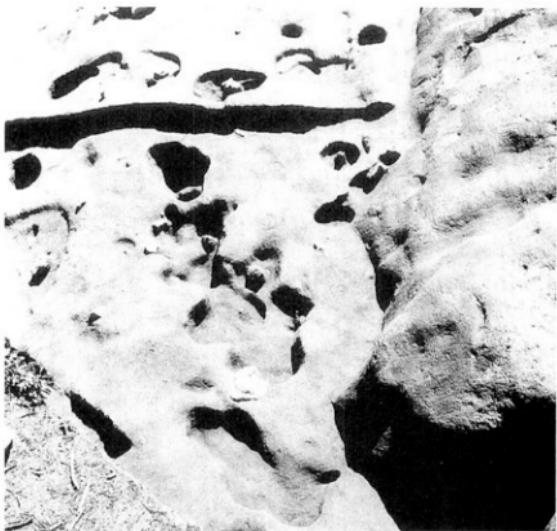


a 第1号テラス状遺構（西から）



b 第1号テラス状遺構（南から）

a 第2号テラス状遺構
(東から)



b 第2号テラス状遺構 (北から)



図版13



a 第3号テラス状遺構（西から）



b 第3号テラス状遺構（北から）



↑ a 第3号テラス状遺構土器出土状況
(西から)



↓ b 第3号テラス状遺構土器出土状況
(南から)

図版15



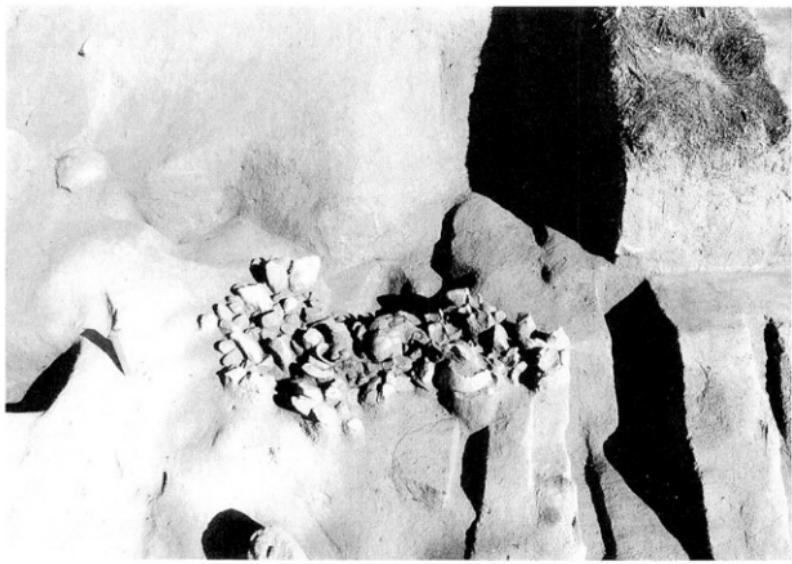
a 第4号テラス状造構（南から）



b 第4号テラス状造構土器出土状況（北から）



a 石敷状遺構（西から）



b 石敷状遺構上土器出土状況（南から）

図版17



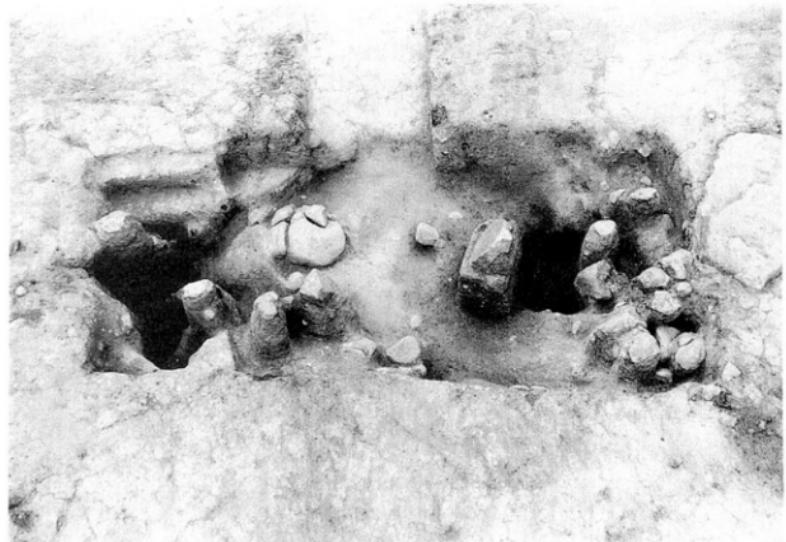
a 第1号古墳調査前近景（西から）



b 第1号古墳調査後（西から）



a 第1主体部完掘状況（北から）



b 第2主体部完掘状況（東から）

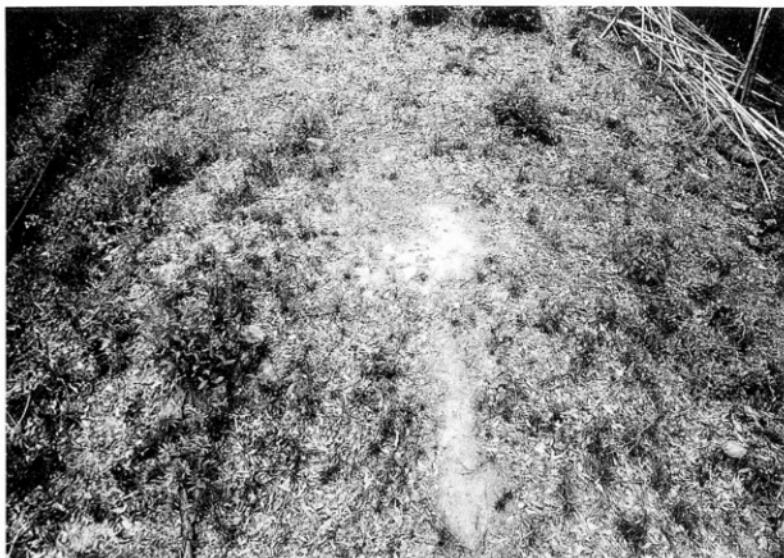
図版19



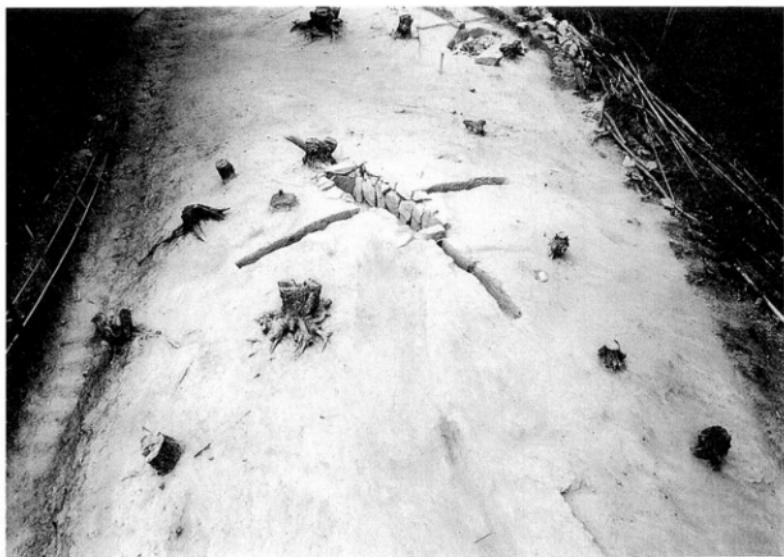
a 第2号古墳調査後（西から）



b 第2号古墳主体部完掘状況（西から）

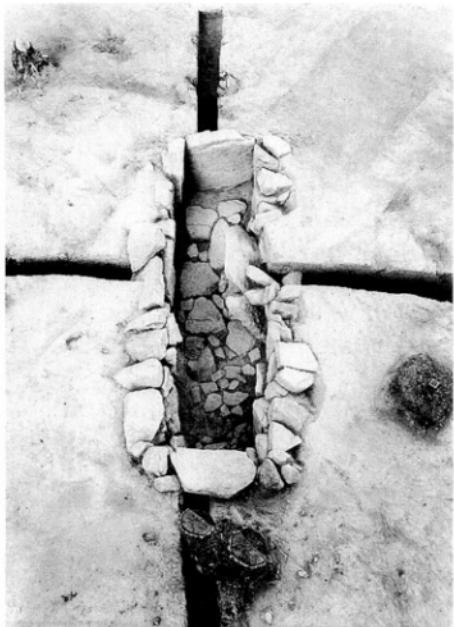


a 第3号古墳調査前（東から）

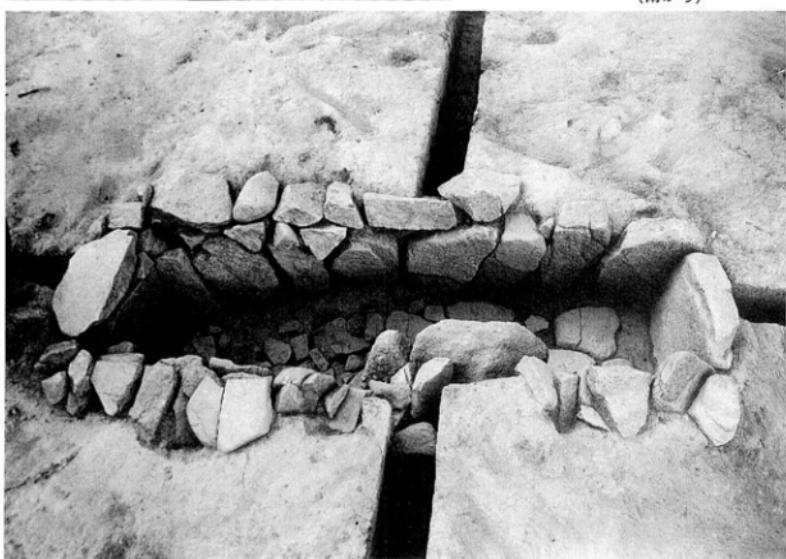


b 第3号古墳調査後（東から）

図版21



a 第3号古墳主体部完掘状況
(西から)



b 第3号古墳主体部完掘状況
(南から)

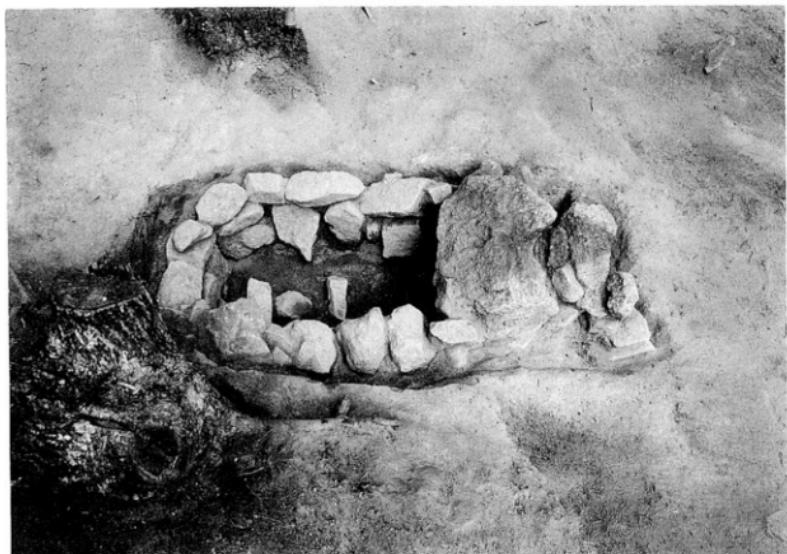
a 第3号古墳主体部内遺物出土状況
(東から)



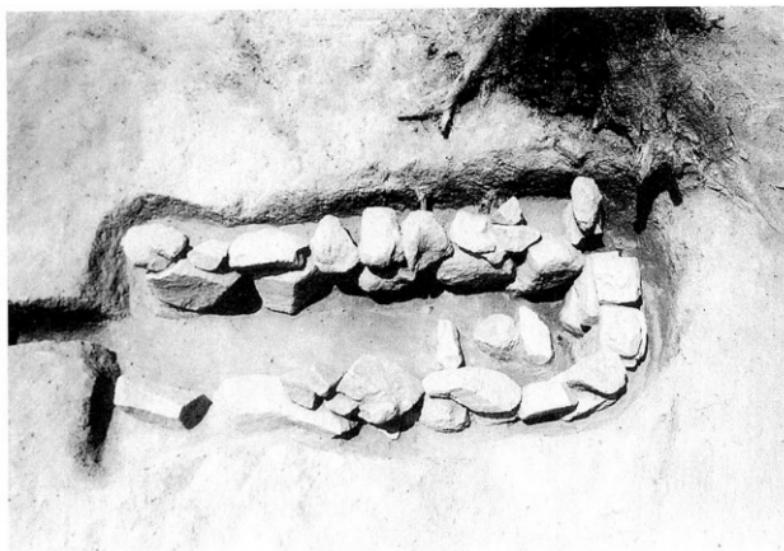
b 第3号古墳主体部内遺物出土状況
(北から)



図版23



a 第4号古墳主体部（西から）



b 第4号古墳主体部蓋石除去後（東から）

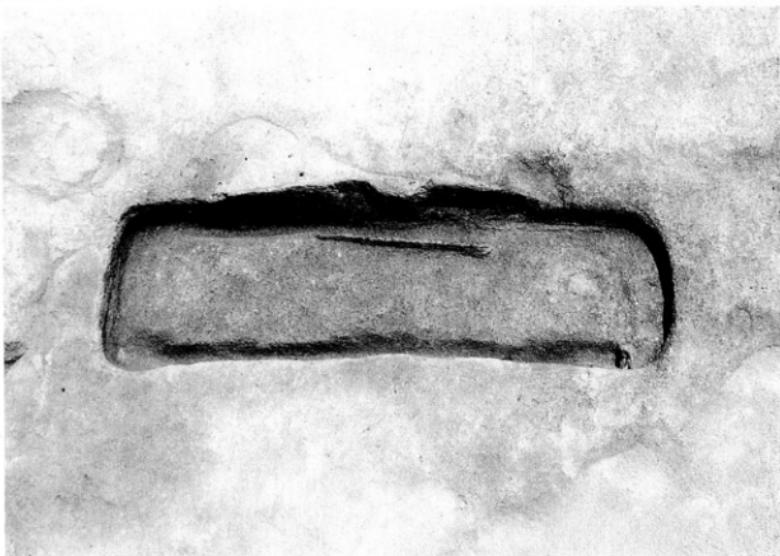


a 第5号古墳確認状況（西から）



b 第5号古墳完掘状況（西から）

図版25



a 第5号古墳主体部（西から）



b 第5号古墳主体部遺物検出状況（西から）



a 第6号古墳調査後（北から）



b 第6号古墳調査後（北東から）

図版27



a a 主体検出状況
(西から)



b a 主体蓋石検出状況
(南から)



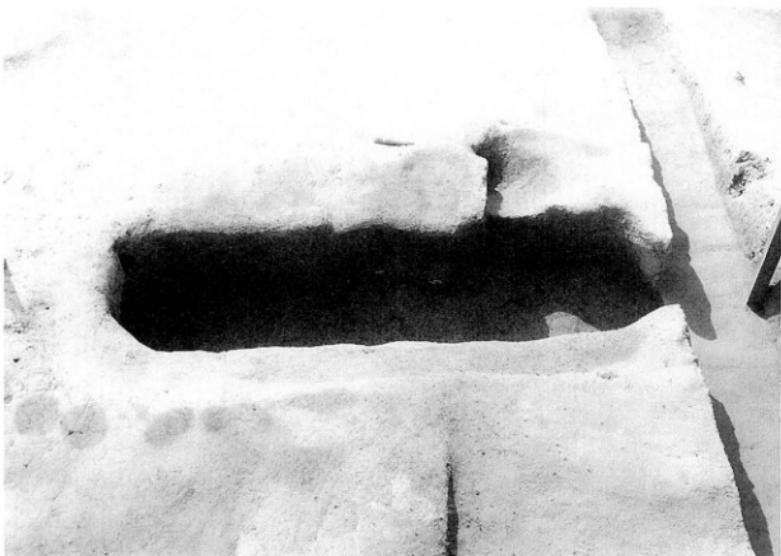
c a 主体蓋石除去後
(南から)



a b 主体検出状況（北から）



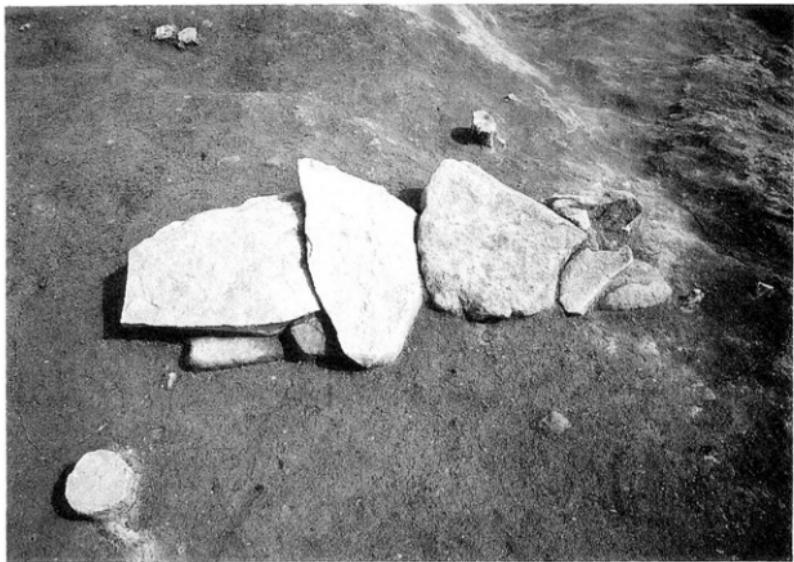
b b 主体検出状況（西から）



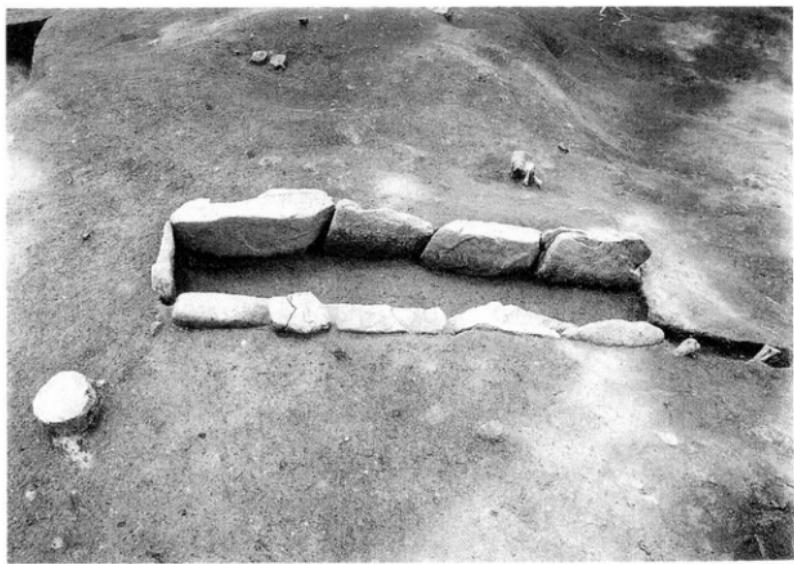
a c 主体検出状況（北から）



b c 主体直上須恵器窓より検出状況（北から）



a d 主体検出状況（西から）

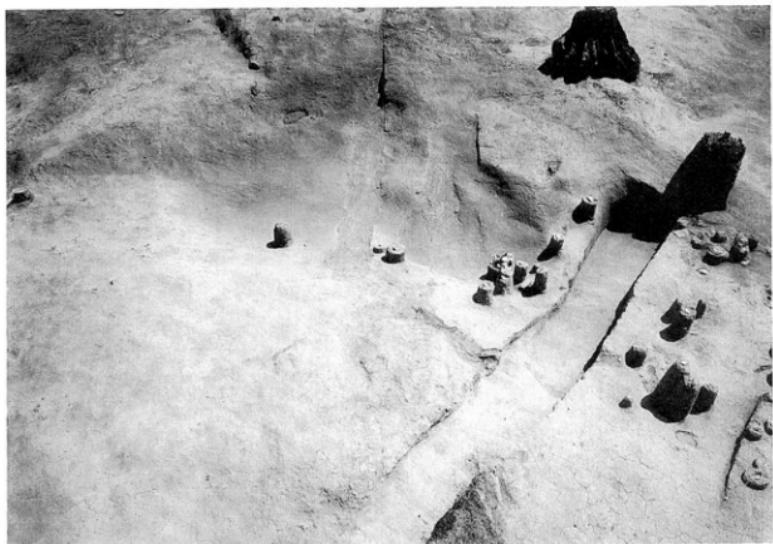


b d 主体遺物出土状況（西から）

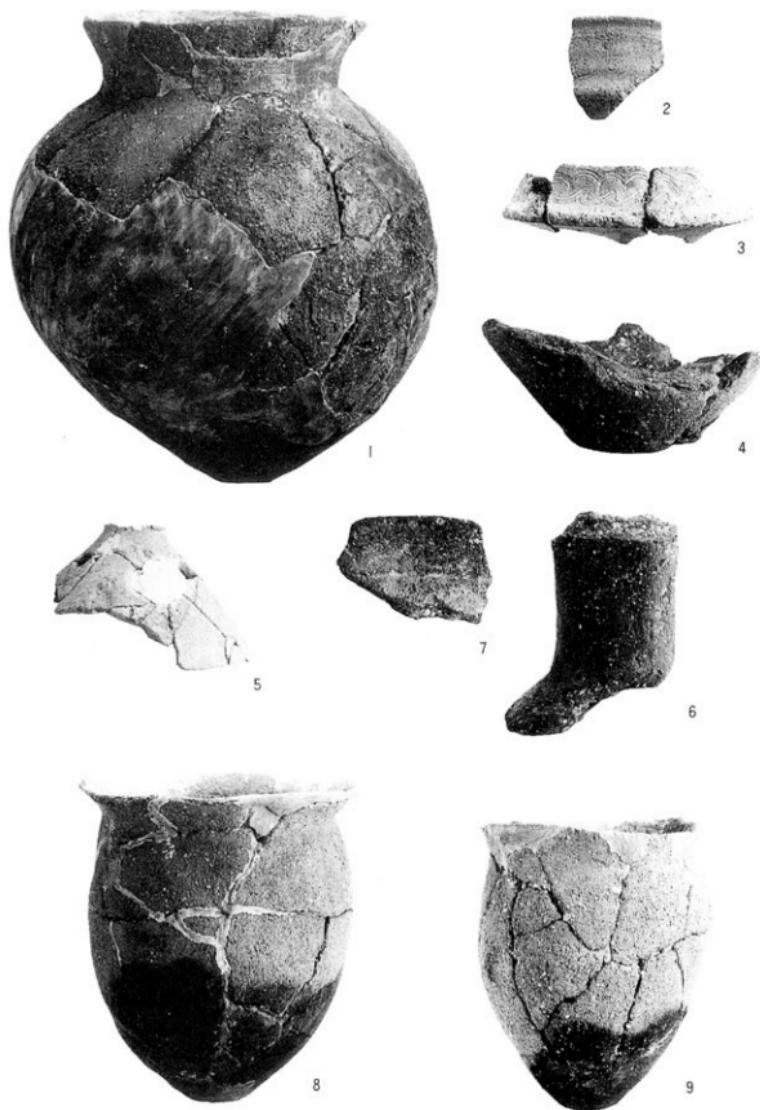
図版31



a e 主体検出状況（北から）



b 溝状造構内外遺物出土状況（北から）



遺跡内出土遺物(1)

図版33



10



11



13



14



15



16

遺跡内出土遺物(2)



17



19



18



20

遺跡内出土遺物(3)

図版35



21



22



23

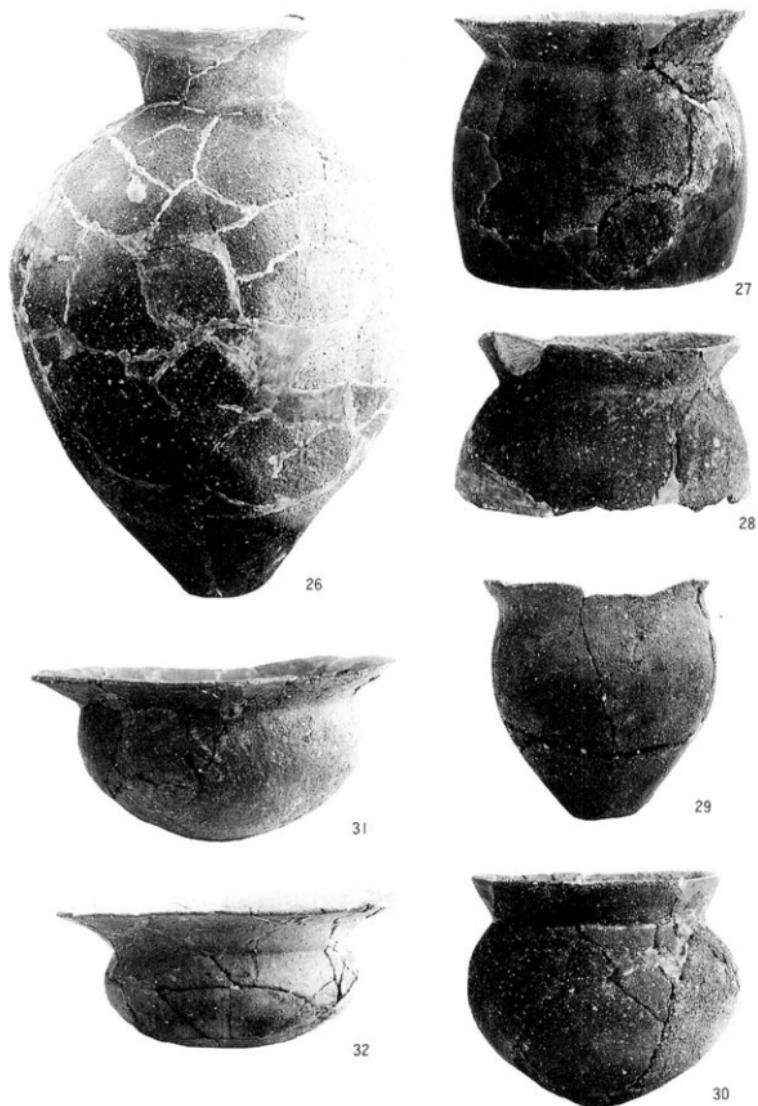


24



25

遺跡内出土遺物(4)



遺跡内出土遺物(5)

図版37



33



34



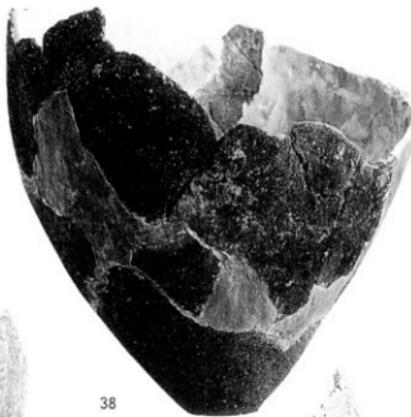
35



36



37



38



39



40

遺跡内出土遺物(6)



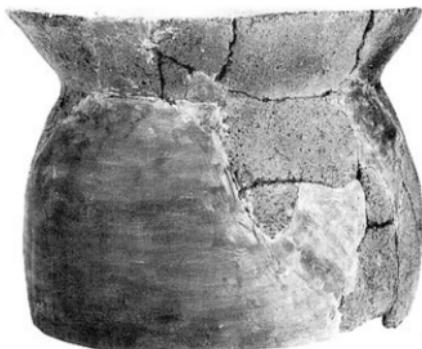
41



42



43



44



45



46



48



47

遺跡内出土遺物(7)

図版39



49



52



51



55



53



54



59

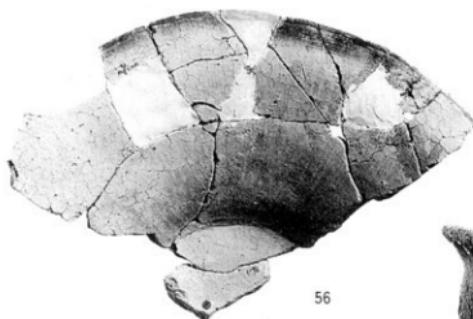


60



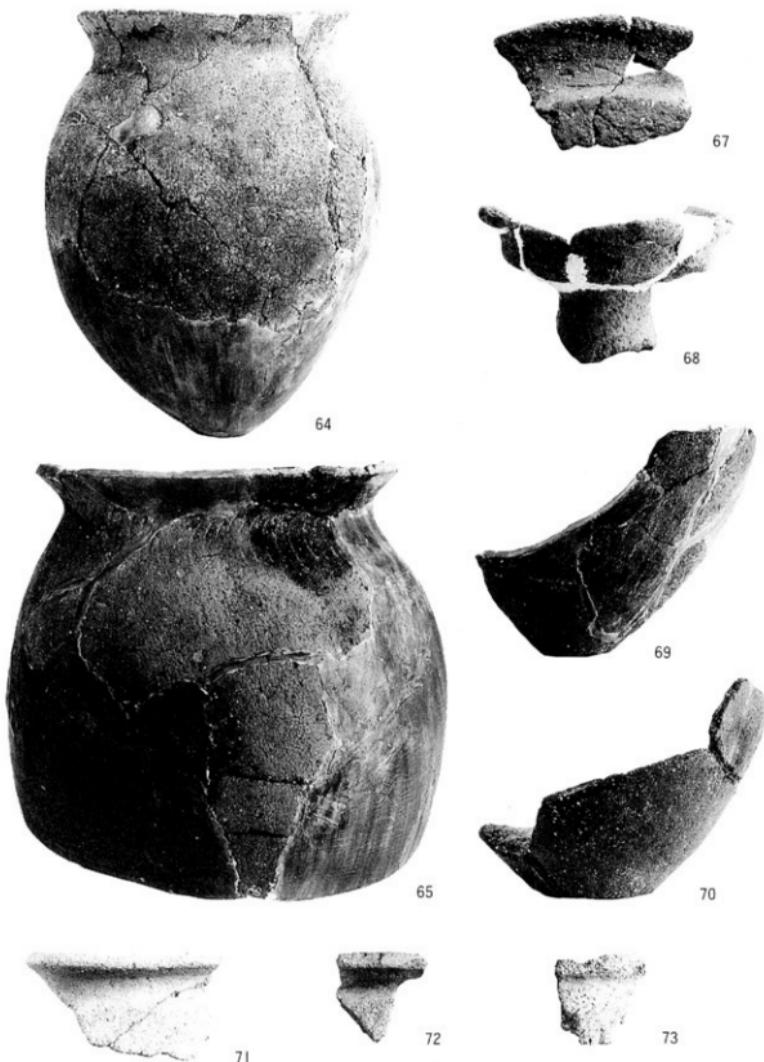
61

遺跡内出土遺物(8)



遺跡内出土遺物(9)

図版41



遺跡内出土遺物⑩



75



74



76



77



78



79



80



81

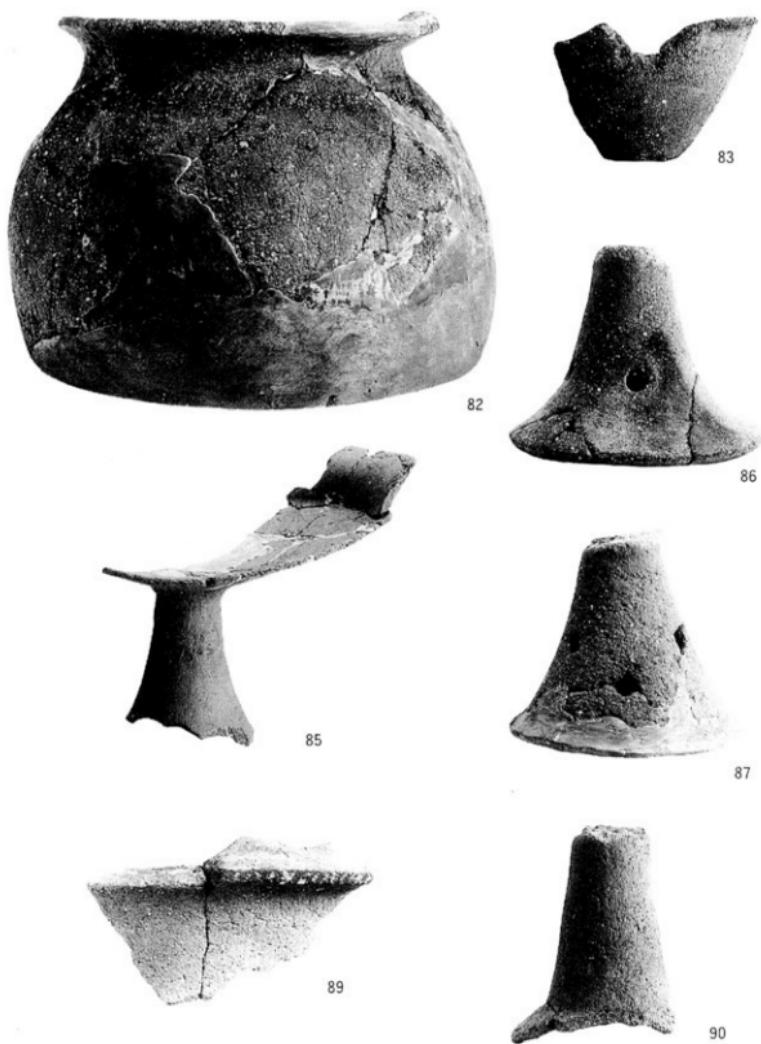


84

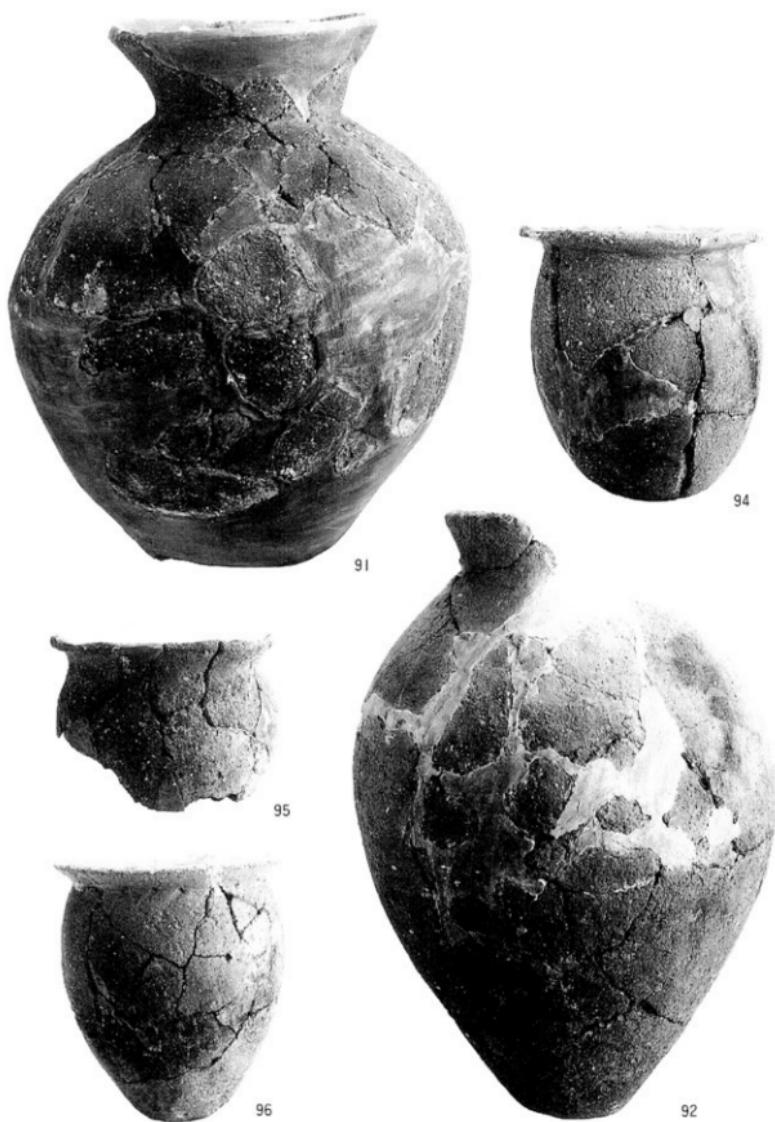


88

図版43

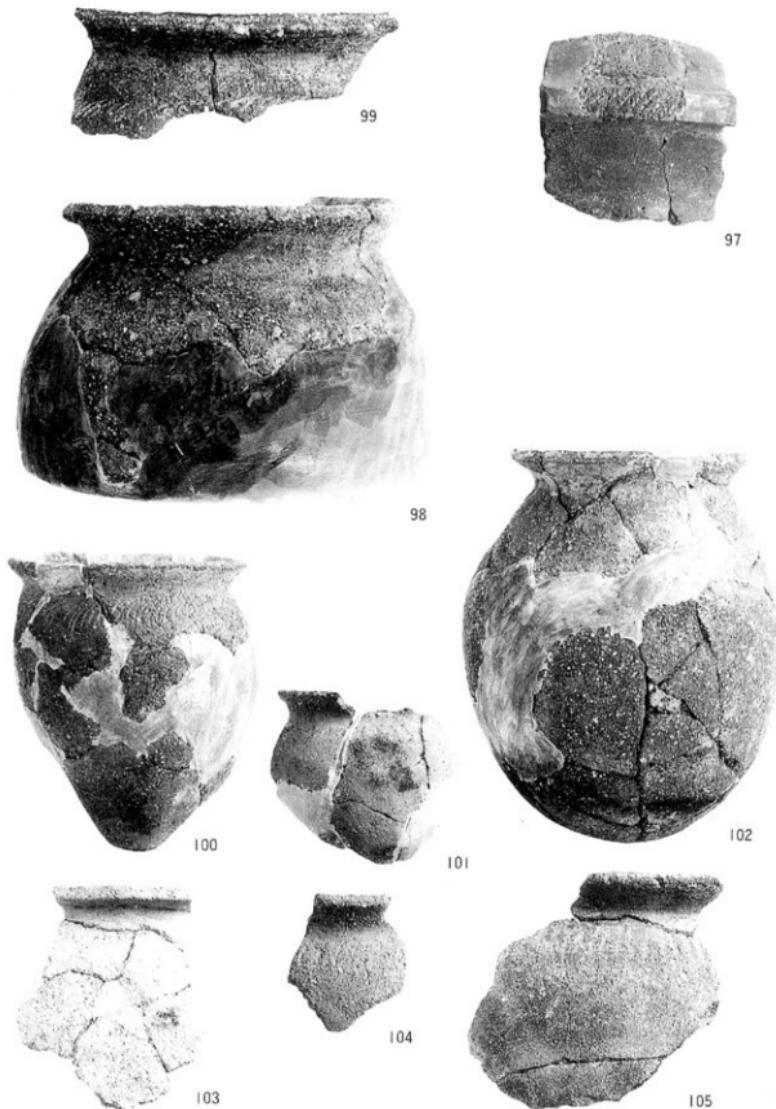


遺跡内出土遺物⑫

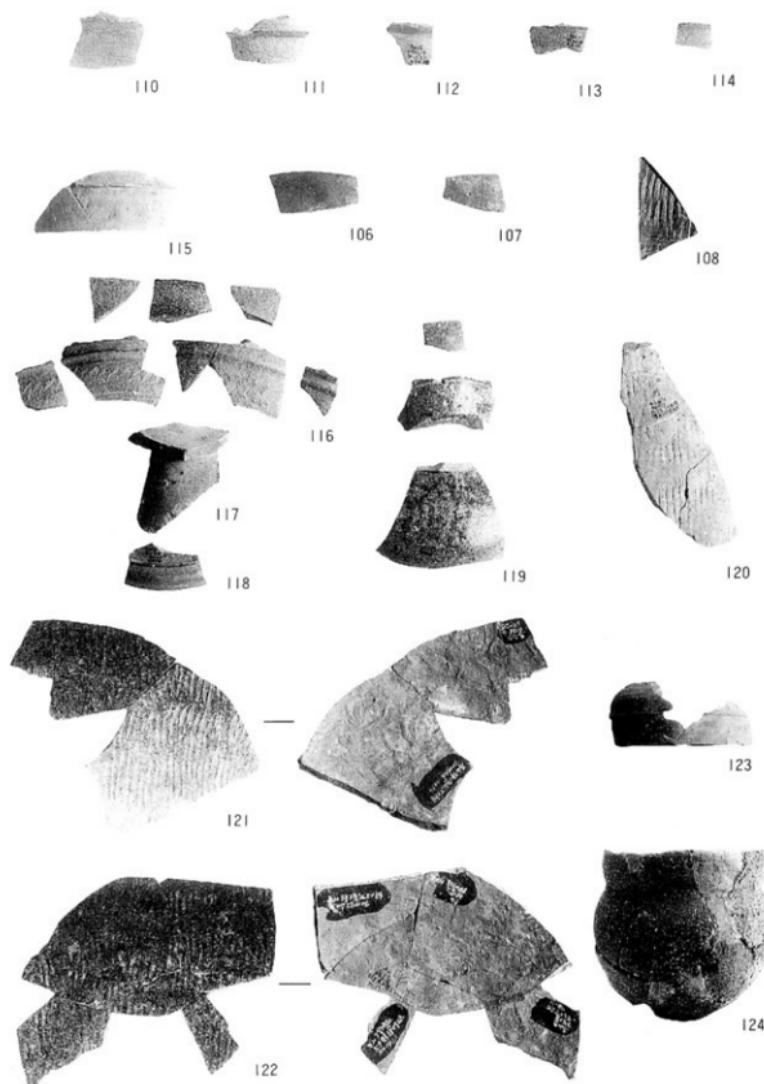


遺跡内出土遺物(1)

図版45

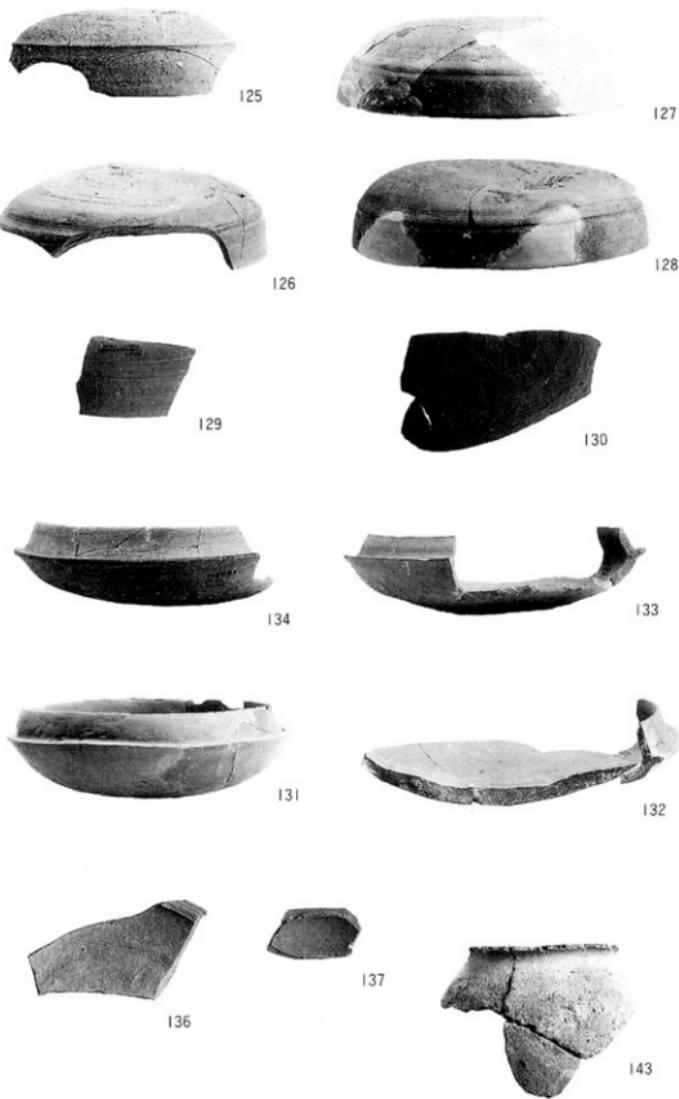


遺跡内出土遺物⑭



遺跡内出土遺物⑨

図版47



遺跡内出土遺物⑩



138



139



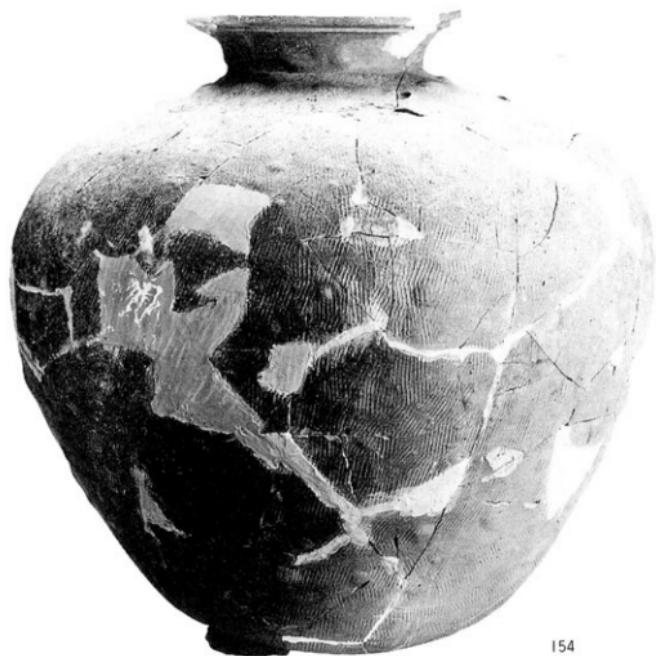
140



141



142



154



144



145



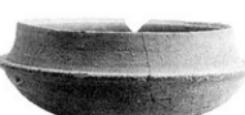
146



149



148



147



150



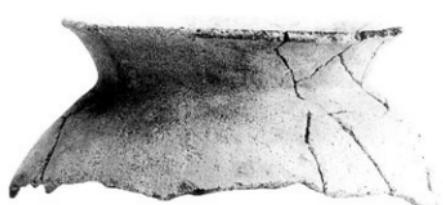
151



152



153



155



164



156

図版51



157



159



158



160



163



162



165



167



166



168

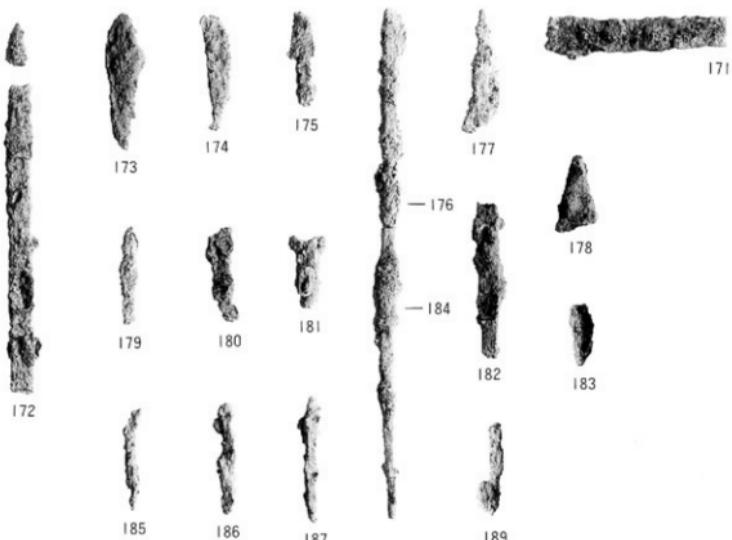


169



170

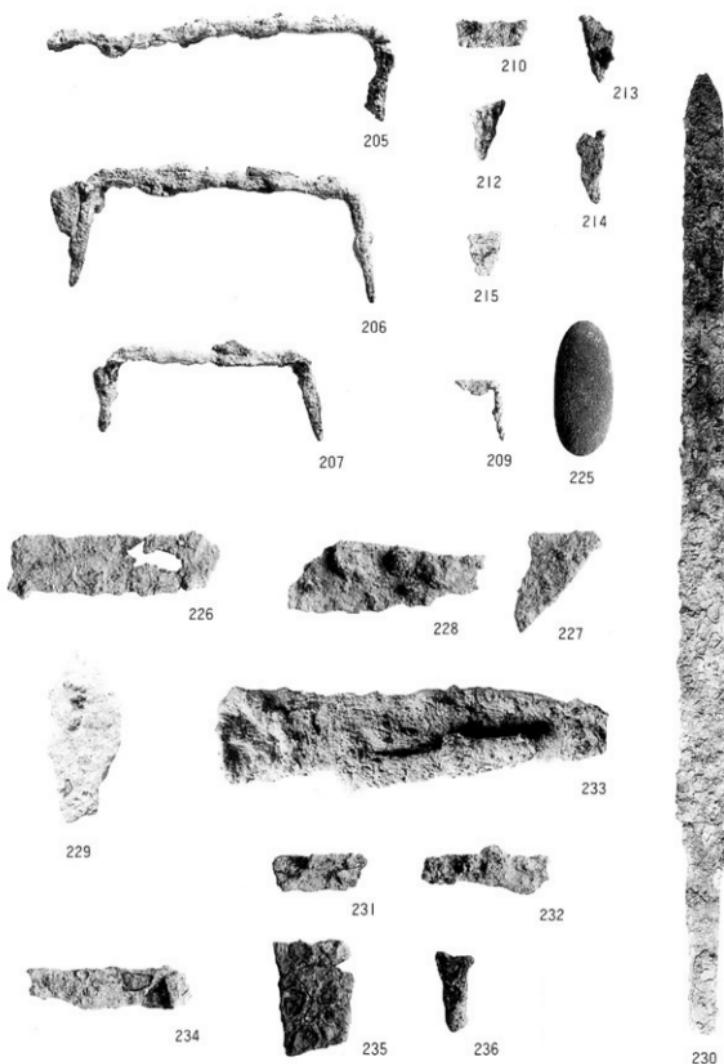
遺跡内出土遺物⑩



図版53



遺跡内出土遺物(2)



遺跡内出土遺物(3)

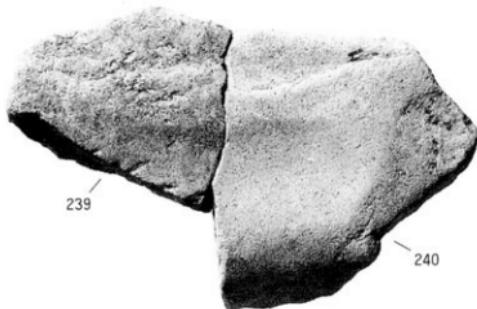
図版55



238



237



239

240

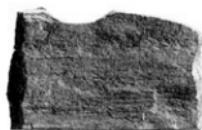


244 — 299

遺跡内出土遺物24



241



242



243



300



301



302



303



304



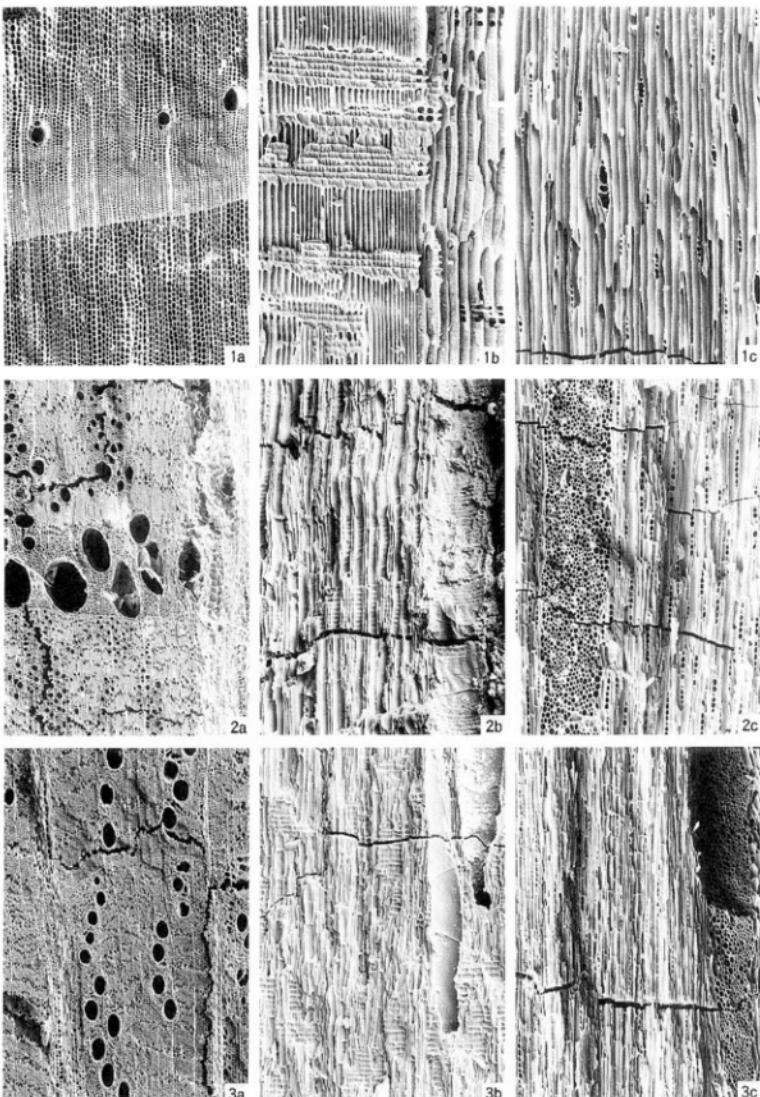
305



306

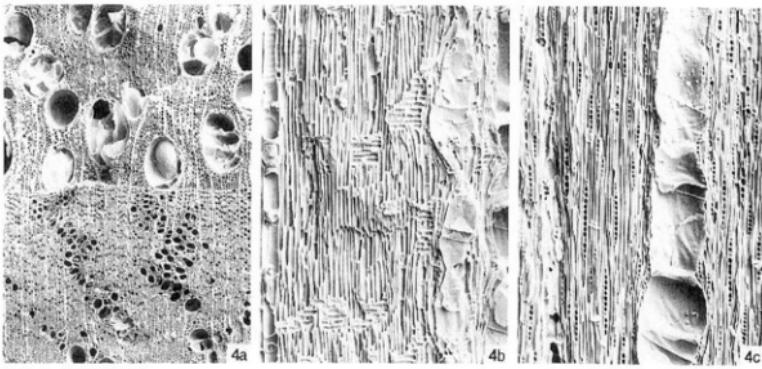
遺跡内出土遺物(25)

図版57 炭化材 1



1. マツ属複維管束亜属 (試料番号3)
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (試料番号23)
 3. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号24)
- a : 木口, b : 横目, c : 板目

図版 58 炭化材 2・植物珪酸体

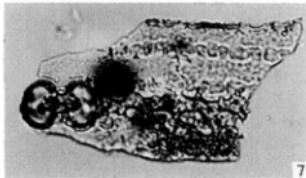
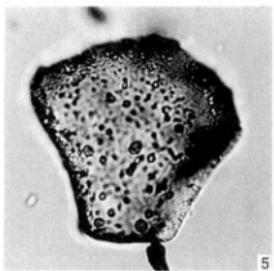


4. クリ（試料番号2）

a : 木口, b : 柱目, c : 板目

200 μm : a

200 μm : b, c



50 μm

(5-7)

5. タケ亜科機動細胞珪酸体(SH-1覆土)

7. ススキ属短細胞珪酸体(SH-1覆土)

6. タケ亜科短細胞珪酸体(SH-1覆土)

財団法人 広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第19集

広島市安佐南区山本七丁目所在

寺山遺跡発掘調査報告

1997年3月

編集行 財団法人 広島市歴史科学教育事業団

広島市中区国泰寺町一丁目4番15号
TEL (082) 248-0427

印刷 株式会社 中本本店
広島市中区東白島町13-15